2015年11月号(毎月20日発売)10月20日発売
第16巻 第11号 通巻182号

今年の秋は早起きと夜更かしをしてみませんか?

デジタルカメラマガジン

11 2015 November

[巻頭特別企画 02]

中井精也&魚住誠一が5軸手ブレ+高感度で撮る
ソニー α7S II

[特集 3]
ちょっぴりおしゃれで新鮮な世界が楽しめる
絶対に失敗しない
1:1 (ましかく) 写真の撮り方

[巻頭特別企画 01]
自撮りができる新エントリー
EOS Mの魅力
キヤノン
EOS M10

"早起き"と"夜更かし"がドラマチックな写真を撮るための基本!!

特集1
早朝と深夜に撮る写真

[特集 2]
仕上がりが変わるアイデア満載の
写真テクニック
ワンランク上の写真表現

[INTERVIEW]
誕生秘話、TAMRON新SPはこうして生まれた!!
タムロン 新SPシリーズ
開発者インタビュー

[REVIEW]
1型高倍率に待望の薄型モデル&EVF搭載モデル
キヤノン PowerShot G9X/G5X
カラーもモノクロも強いA3コンパクトプリンター
エプソン EP-10VA
カールツァイスと共同開発したデジタル時代のMFレンズ
コシナ ZEISS Milvusシリーズ
新型の裏面センサー搭載で画質が進化した360度カメラ
リコーイメージング RICOH THETA S

CONTENTS 1

2015年11月号（毎月20日発売）
10月20日発売

「デジタルカメラマガジンWeb」http://digitalcamera.impress.co.jp/

表紙撮影●岡嶋和幸　商品撮影●加藤丈博
表紙デザイン●平岡和之（ビーワークス）

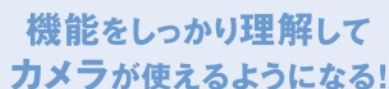
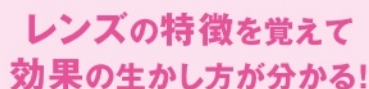
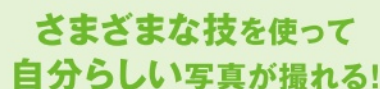
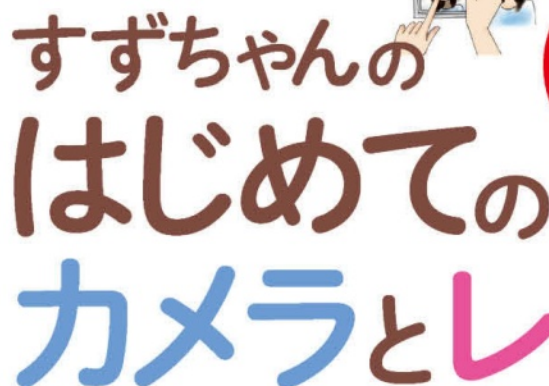
CONTENTS 2

2015年11月号（毎月20日発売）
10月20日発売

撮影情報の読み方

本誌の撮影情報は項目名を省略して以下の順番で記載しています。

カメラ名／レンズ名／焦点距離（35mm判換算）／露出モード（絞り、シャッター速度、露出補正）／ISO感度／ホワイトバランス／記録モード／撮影地

※本誌での実勢価格は、2015年10月上旬にすべて編集部で独自調査したものです。標準価格、実勢価格、定価など価格表記については、とくに断りのない限り、すべて税込の価格になっています。©®™など商標は省略しています。

The Theme
in
November

【表紙撮影】

岡嶋和幸――今日のはじまり

DATA
カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ
レンズ：EF24-70mm F2.8L USM
焦点距離：24mm
露出モード：プログラムAE
絞り：F3.2
シャッター速度：1/50秒
露出補正：±0EV
感度：100
ホワイトバランス：太陽光
撮影地：サントリーニ島（ギリシャ）

PROFILE
岡嶋和幸（おかじまかずゆき）
1967年、福岡県生まれ。東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）卒業。現在は日本写真学院にて講師をつとめる。写真展に「ディングルの光と風」「潮彩」「学校へ行こう!」「九十九里」など。写真集『DINGLEーディングルー』ほか著書多数
http://www.kazuyuki-okajima.com/

エーゲ海に浮かぶ島、ギリシャの「サントリーニ島」。断崖の上に白壁の家々が密集するイアの街は、カメラを手にした観光客でにぎわっていた。この場所らしい写真を撮るなら日中のコントラストの高い光がベストだが、日差しがとても強く、そして暑い。イヌは日陰でだらしない格好をして寝ていて、ネコの姿を目にすることはほとんどない。その気持ちはよくわかる。私も日中はホテルでのんびり過ごした。

日が暮れて涼しくなると、イヌやネコたちは活動を始める。人びともまだまだ活発だ。でも、早朝なら人影はほとんどなく、自分のペースで街歩きを楽しめる。ほんのりと色づいた光に照らされた風景はフォトジェニックで、日中の無色透明のそれとは印象が違う。とくに太陽が顔を出す前の柔らかい光は、街全体を優しく包み込むようで魅力的だ。

ある朝、太陽が昇る方角に向かって黄昏れているイヌに出合った。観光客を相手に撮られ慣れているのだろう。満足のいくカットが撮れるまで、じっとポーズを決めていてくれた。光といい、被写体といい、ロケーションといい、完全に「撮らされた」感が強いのだが、この旅の想い出の1枚になった。

撮影●ルーク・オザワ 1 2 撮影●ルーク・オザワ

Canon EF LENS

写真家7人の SEVEN SENSES 7

2nd SEASON

110 million EF

EFレンズは2015年6月22日に累計生産本数1億1千万本を達成致しました。

with EOS 7D Mark II

EFレンズを知り尽くした7人の写真家がレンズテクニックを解説

米屋こうじ　田中宣明　ルーク・オザワ

EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM

1 キヤノン EOS 7D Mark II／EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM／400mm（640mm相当）／絞り優先AE（F6.3、1/500秒、−0.3EV）／ISO 200／WB：オート

ボーイング777がテイクオフ。今まさに車輪が格納される瞬間。640mm相当の画角で機体前部を切り取ることで迫力を出してみた

2 キヤノン EOS 7D Mark II／EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM／263mm（421mm相当）／絞り優先AE（F5、1/80秒、−0.7EV）／ISO 3200／WB：オート

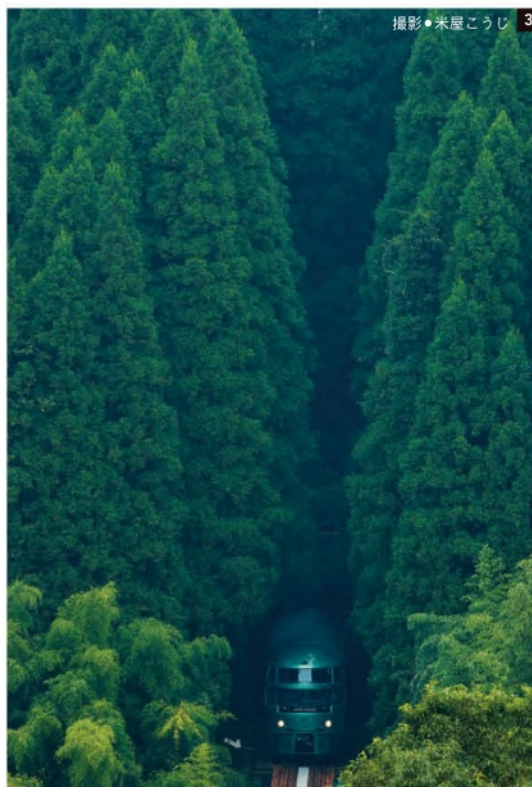
日没後、空港近くのホテルと滑走路に入ってくる飛行機を圧縮効果で表現してみた。ライトを直接画面に入れたが、ゴーストやフレアはまったく出なかった

3 キヤノン EOS 7D Mark II／EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM／241mm（386mm相当）／マニュアル露出（F8、1/800秒）／ISO 640／WB：くもり

森を抜けて走る観光特急「ゆふいんの森」。針葉樹の高さを表現したくて、列車は画面の下に配置している。周辺部までシャープに描写してくれた

4 キヤノン EOS 7D Mark II／EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM+EXTENDER EF1.4×III／560mm（896mm相当）／マニュアル露出（F8、1/640秒）／ISO 4000／WB：オート

ラグビー日本代表の五郎丸歩選手をエクステンダーを使用して超望遠でとらえた。最大の持ち味であるゴールキックを狙う彼の視線に意識を集中させた

撮影●米屋こうじ 3 4 撮影●田中宣明

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／
EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／
200mm（320mm相当）／
マニュアル露出（F5、1/800秒）／
ISO 1000／ WB：オート

S字カーブの出口、先頭を走る選手を狙った。選手の顔付近の測距点をあらかじめ選んでおき、少し斜めの構図にすることで躍動感を表現している

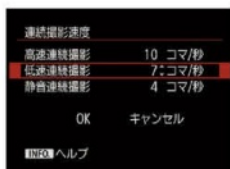
撮影●田中宣明

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／
EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／
153mm（245mm相当）／
マニュアル露出（F5、1/500秒）／
ISO 2000／ WB：くもり

夜明けとともにやって来た「ななつ星in九州」。露光量は不足気味だったが、開放付近の絞り値でもしっかりとした描写力で早朝の空気感まで写しとれた

撮影●米屋こうじ

ルーク・オザワ × EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM

連続撮影速度
高速連続撮影 10 コマ/秒
低速連続撮影 7：コマ/秒
静音連続撮影 4 コマ/秒
OK キャンセル
INFO. ヘルプ

低速連続撮影では、9～1コマ/秒の範囲内で設定が可能。シーンに応じて変更したい

機体全体を写すと小型機のようなイメージでとらえられる

主翼のみを切り取り胴体を入れたがやや窮屈な仕上がりに

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／400mm（640mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/1,000秒、−0.7EV）／ ISO 200／ WB：オート

車輪、主翼、後部胴体をカットして青空を多く取り入れたことで重量感が表現できた。構図の変化に素早く対応できるのがズームレンズの利点

TECHNIQUE 01 構図に変化をつけて迫力のある飛行機写真を狙う

着陸するためにこちら側に向かってくる飛行機をAIサーボAF＋ラージゾーンAFでとらえた。着陸といってもスピードは時速200kmにも及ぶ。背景がシンプルな青空のため、AFが迷うことは少ない。ここでは約10コマ/秒の高速連続撮影は必要ないので、カスタマイズで約7コマ/秒に設定している低速連続撮影で撮影した。この機体は小型機だが、フレーミングによって重量感のある機体のように見せることもできる。EF100-400mmはズーミングの幅が大きいため、機体全体を写した作品から車輪や主翼を大胆にカットした作品まで、構図の微調整を容易に行える。ズーミングすることで、自分の仕上がりイメージに近づけることができるのだ。

TECHNIQUE 02 疾走感を表現するため低速シャッターで流し撮り

日没後、残照の空や空港ターミナルを背景にして、スローシャッターを選択。流し撮りで離陸機の疾走感を表現してみた。測距エリア選択モードは飛行機を大きくキャッチできるラージゾーンAF、AFカスタム設定ガイド機能はCase 3に設定。また、手ブレ補正機構は流し撮りに最適化されたモード2に変更している。1/20秒というスローシャッターでも手持ちで流し撮り撮影が行えるEF100-400mmのIS機構は強い味方となる。

1/20秒

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／ 100mm（160mm相当）／シャッター優先AE（F5、1/20秒、±0EV）／ ISO 1000／ WB：オート

シャッター速度は1/20秒にセットして、カメラは右から左に振る。背景が傾かないよう水平に振ることを意識しよう

1/10秒

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／100mm（160mm相当）／シャッター優先AE（F7.1、1/10秒、±0EV）／ ISO 1000／ WB：オート

機体後方にピントは合っているが、前方部がぶれてしまった。飛行機写真的にはNGだ。後方がぶれてもコクピットに合っていればOK

TECHNIQUE 03 背景を吟味して機体をくっきりと浮かび上がらせる

大空に離陸する飛行機を狙った。離陸速度は時速300kmを超える。あっという間に空に上がってしまう。行先や乗客数によって変わる離陸重量。どこで離陸するかは分からないのだが、離陸する位置をある程度はイメージして、AIサーボAFで追い続けよう。今回は背景の山の形と飛行機がピタリと一致したことで白い機体が浮かび上がった。そのわずか1秒後には稜線を越えて中途半端な構図になってしまった。シャッターチャンスを連写でものにしよう。

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／ 200mm（320mm相当）／絞り優先AE（F7.1、1/800秒、−0.7EV）／ ISO 200／ WB：オート

滑走路を飛び立つ前からフレーミングして、機体をAIサーボAFで追いかける。自分の思い描いたところに来た瞬間に連写して切り取ろう

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／200mm（320mm相当）／絞り優先AE（F7.1、1/640秒、−0.7EV）／ ISO 200／ WB：オート

OKカットから1秒後、山の稜線を越えて主翼が空に溶け込んでしまった。山も機体で隠れてしまい中途半端な仕上がりになった

田中宣明 × EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM

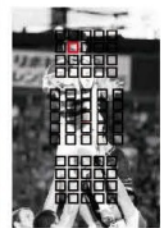
キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM／200mm(320mm相当)／マニュアル露出(F5、1/640秒)／ISO 5000／WB：オート

動きの速いラグビーの撮影では、もっとも高精度な中央の測距点を選択。どんな動きにも対応できるように準備をすることが大切だ

[TECHNIQUE] 動きが激しいスポーツはカスタマイズしたAFで対応

前後左右、動きの激しいスポーツを撮るときは、測距点をあらかじめ登録しておくと撮影時にあわてることがない。AF-ONボタンとAEロックボタンにそれぞれ異なる測距点を割り当て、さらに縦位置/横位置AFフレームの設定を組み合わせることで、シャッターボタンを含めると、合計6パターンのAF設定を利用できる。被写体との距離や構図の変化に幅広いズーム域で素早く対応し、余分な空間のないフレーミングで写しとることができるようになる。

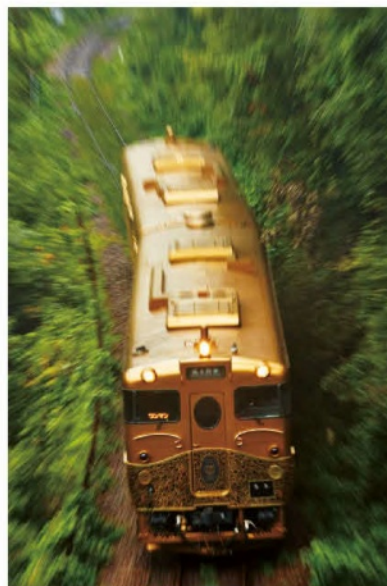
タッチラインからラインアウトでボールを取る選手を狙うため、顔の位置に合う測距点を登録しておく

横位置の構図は画面中央の測距点を選択。高精度なAFが激しい動きにもしっかり追従する

米屋こうじ × EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM／158mm(253mm相当)／マニュアル露出(F11、1/20秒)／ISO 200／WB：くもり

金色の外装が独特な「或る列車」を露光間ズームで撮影。AIサーボAF+1点AFで列車正面の測距点に設定。確実に追いかけてくれた

[TECHNIQUE] 露光間ズームを使って列車の躍動感を表現

「露光間ズーム」による流し撮りは、動感を表現するテクニックのひとつ。スローシャッターに設定して、列車の動きに合わせてズームリングを動かしながら撮影する。EF100-400mmはズーム方式が回転式に変更されたため、ズーム操作が行いやすい。三脚使用時は、手ブレ補正機構はオフが推奨されているが、ズーミングによる振動を抑制する目的で、モード1にセットして撮影している。

OKカットと同じ条件で三脚を使用して撮影。手ブレ補正機構をオフにしているので、ズーミングする際の振動を受けて画面全体がぶれてしまった

SEVEN 7 SENSES

EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM

希望小売価格 300,000円(ケース・フード付き、税別)

Specification

- レンズ構成：16群21枚
- 絞り羽根枚数：9枚
- 開放絞り：F4.5-5.6
- 最小絞り：F32-40
- 最短撮影距離：0.98m
- フィルター径：φ77mm
- 大きさ：約φ94×193mm
- 重さ：約1,570g
- 手ブレ補正効果：4段分(CIPA基準準拠)

3人のここがオススメ！

朝夕や夜間など低照度下のシーンでも開放絞りからシャープな描写力をもつEF100-400mmが1本あれば、多彩な表現を生かした撮影が楽しめる

フィールドが広いスポーツシーンを撮るには望遠ズームが必携だ。このレンズは動きの激しい競技でも自分の思うような画角で撮ることができる

とにかく描写力が素晴らしい。手ブレ補正機構の進化によって、手持ちでの流し撮りが簡単に行える。時には夜間の飛行機撮影にも使っている

自撮り対応のエントリーミラーレスの魅力

キヤノン

EOS M10

EOS Mの最新機種、EOS M10が発表された。
北欧テイストを取り入れたボディカラーをラインアップするなど、女性ユーザーを意識したカメラで、
フェイスジャケットなどのアクセサリーが豊富に用意されている。
今月は鶴巻育子氏が北欧で撮り下ろした写真とともに、EOS M10の魅力を紹介する。

写真・文●鶴巻育子

- 発売予定日2015年10月29月
- 予想実勢価格
  46,000円前後（ボディのみ）、62,000円前後（EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STMレンズキット）
  77,500円前後（EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STMとEF-M22mm F2 STMダブルレンズキット）、
  89,500円円前後（EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STMとEF-M55-200mm F4.5-6.3 IS STMダブルズームキット）

warm white
Black×Black
northern gray

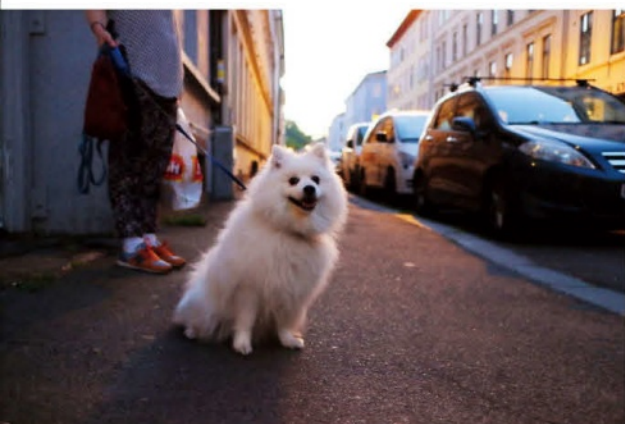
キヤノン EOS M10／EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STM／45mm（72mm相当）／絞り優先AE（F10、1/80秒、±0EV）／ISO 100／WB：オート

ノルウェーの首都オスロから電車でほんの30分ほど行くだけで、美しい自然に触れることができる。背の高い木の向こうには、湖が広がっている

※本企画は試作機を使用して制作しています。そのため実際の製品とは外観・画質などで結果が異なる場合があることをご了承ください。

1

キヤノン EOS M10／ EF-M22mm F2 STM ／ 22mm（35.2mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/15秒、−0.3EV）／ ISO 100／ WB：オート

森の中で出会った若い家族。小さなテントを張り、休日をこの場所で過ごすそうだ。22mmパンケーキレンズで、周囲の雰囲気も取り入れた構図を作った

2

キヤノン EOS M10／ EF-M22mm F2 STM ／ 22mm（35.2mm相当）／絞り優先AE（F2.2、1/80秒、−1.0EV）／ ISO 800／ WB：オート

夕暮れの街を散歩中に遭遇した真っ白な犬。おとなしくお座りをして、しっかりとカメラ目線をくれた。チルト式の背面液晶モニターはこのようなローアングルでは大活躍する

3

キヤノン EOS M10／ EF-M22mm F2 STM ／22mm（35.2mm相当）／絞り優先AE（F3.5、1/4,000秒、±0EV）／ ISO 400／ WB：オート

オスロにはお洒落ですてきなカフェがたくさんある。窓越しから外の風景を1枚撮影した。落ち着いた店内に対して、落書きされた建物のギャップを楽しむ

5

キヤノン EOS M10／ EF-M55-200mm F4.5-6.3 IS STM ／100mm（160mm相当）／絞り優先AE（F6.3、1/800秒、−0.3EV）／ ISO 100／ WB：オート

オスロの中央駅周辺の広場。かわいらしいドレスを着た少女が、ダンスをしながらうれしそうに歩いていた。ハイブリッドCMOS AF IIのおかげで、ほんの一瞬も逃さずにとらえることができた

4

キヤノン EOS M10／ EF-M22mm F2 STM ／22mm（35.2mm相当）／絞り優先AE（F3.2、1/400秒、−0.3EV）／ ISO 400／ WB：オート／クリエイティブフィルター：ラフモノクローム

ショーウィンドウに飾られたウエディングドレス。クリエイティブフィルターのラフモノクロームで撮影。色彩がなくなることで、レースのディテールが強調された

初心者ターゲットの新型EOS M

EOS M10はEOS M3の後継機ではなく、エントリークラスに位置づけられるカメラ。しかしスペックを見ると、エントリーと片づけてしまうにはもったいない数値が並ぶ。

撮像素子には1,800万画素のAPS-C CMOSセンサーを採用し、画像処理エンジンのDIGIC 6を搭載したことにより、高感度での撮影でも細部までコントラストがしっかりと表現される。なお、AFは位相差AFとコントラストAFを組み合わせたEOS M2と同等のハイブリッドCMOS AF Ⅱが搭載されている。AF測距点はM3と同じ49点のため、M2よりも広い範囲を測距することができる。また、ほとんどの操作はタッチパネルで行えるため、ボディ背面のボタン類は最小限に抑えられているのが特徴だ。そして一番斬新だと感じたのは、撮影モードの表示方法。縦に一覧で表示され、スマートフォンのように上下にスクロールして選択する。スマホといえば、ワンタッチスマホボタンを利用することで、撮影画像をすぐにSNSアップしたり、シェアができるのもうれしい機能だ。エントリーユーザーでも直感的に使いこなせる。

そして、今回のメイン機能ともいえるのが「自撮りモード」。今や女性がカメラを選択するときに自分撮りが簡単、かつきれいにできることは重要事項。3型で180度チルト式の背面液晶モニターを上部にアップして、自分の姿を確認しながら撮影できる。背景のぼかし具合と明るさ、美肌効果が調整でき、それぞれのアイコンをタッチして設定する。

女性ユーザーを意識したほんの少し丸みを帯びたシンプルなボディは、どんなシーンにも馴染む。カラーバリエーションはwarm white、Black×Black、northern grayの3色。中でも、北欧をイメージしたようなnorthern grayはほかのメーカーにはないかわいらしい色。そのほか、カラフルなボディジャケットなどがアクセサリーとして用意されていたり、自分らしくカスタマイズできる楽しいカメラの登場だ。

TOPIC 1 EOS M3と同じ画像処理エンジン DIGIC 6を搭載

最新の画像処理エンジンDIGIC 6の搭載により、EOS M10はディテールの表現力が高まった。DIGIC 5と比較すると、最大で細部のコントラストが30%アップしたという。高感度での夜間の撮影でも、美しい画像が得られる。また、ノイズリダクション性能の向上で、DIGIC 5よりもノイズ量は約1/4に削減された。

キヤノン EOS M10／EF-M22mm F2 STM／22mm(35.2mm相当)／絞り優先AE(F3.2、1/60秒、−0.7EV)／ISO 3200／WB：オート

おもなスペック比較

■は優位な点

	EOS M3	EOS M10	EOS M2
有効画素数	約2,420万画素	約1,800万画素	約1,800万画素
撮像素子	約22.3×14.9mmCMOS	約22.3×14.9mmCMOS	約22.3×14.9mmCMOS
画像処理エンジン	DIGIC 6	DIGIC 6	DIGIC 5
AF方式	ハイブリッドCMOS AF Ⅲ	ハイブリッドCMOS AF Ⅱ	ハイブリッドCMOS AF Ⅱ
測距点	49点	49点	31点
シャッター速度	1/4,000〜30秒	1/4,000〜30秒	1/4,000〜30秒
連写速度	約4.2コマ／秒	約4.6コマ／秒	約4.6コマ／秒
ISO感度	ISO 100〜12800 (拡張でISO 25600相当)	ISO 100〜12800 (拡張でISO 25600相当)	ISO 100〜12800 (拡張でISO 25600相当)
撮影モード	シャッター優先AE、絞り優先AE、マニュアル露出、プログラムAE(シーンインテリジェントオート、ポートレート、風景、クローズアップ、スポーツ、料理、手持ち夜景、プログラム)、クリエイティブアシスト	シャッター優先AE、絞り優先AE、マニュアル露出、プログラムAE(シーンインテリジェントオート、自分撮り、ポートレート、風景、クローズアップ、スポーツ、料理、手持ち夜景、プログラム)、クリエイティブアシスト	シャッター優先AE、絞り優先AE、マニュアル露出、プログラムAE(シーンインテリジェントオート、クリエイティブオート、ポートレート、風景、クローズアップ、スポーツ、キッズ、料理、夜景ポートレート、手持ち夜景、HDR 逆光補正、プログラム)
内蔵ストロボ	あり	あり	なし
背面液晶モニター	ワイド3.0型(3：2)／約104万ドット 180°チルトタッチパネル	ワイド3.0型(3：2)／約104万ドット 180°チルトタッチパネル	ワイド3.0型(3：2)／約104万ドット タッチパネル
大きさ	約110.9(W)×68.0(H)×44.4(D) mm	約110.8(W)×66.6(H)×35.0(D) mm	約104.9(W)×65.2(H)×31.6(D) mm
重さ	約366g(本体+バッテリーパック+カード含む)	約301g(本体+バッテリーパック+カード含む)	約274g(本体+バッテリーパック+カード含む)

TOPIC 2

EOSシリーズ初となる 自分撮りモード

背面液晶モニターを180度チルトすると、背面液晶モニターに自分撮りモードボタンが表示される。ボタンをタッチすると、自分撮りモードに切り替わる。各種調整のパラメーターを調整したら、効果を確認してシャッターボタンを押す。

上から3番目の美肌モードは＋にすると肌の色が明るくなり、ぼかしがかかる

キヤノン EOS M10／ EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STM ／15mm(24mm相当)／自分撮りモード(F3.5、1/40秒、±0EV)／ ISO 2000／ WB：オート

ショップのポスターのマネをして1枚。24mm相当の画角なら、ふたりでの撮影も余裕

TOPIC 3

入門者もワンランク上の表現に挑戦できる クリエイティブアシスト

絞りは「ぼかす」と「くっきり」ホワイトバランスは「寒色」と「暖色」など、エントリーユーザーにとって、難しい写真用語を分かりやすい言葉に置き換えている機能。誰でもボケや色を調整した写真を撮ることができる。

キヤノン EOS M10／ EF-M18-55mm F3.5-5.6 IS STM ／50mm(80mm相当)／クリエイティブアシスト(F5.6、1/50秒、±0EV)／ ISO 1600／ WB：オート

クリエイティブアシストで「ぼかす」と「寒色」を調整。全体的に青味がかって、色のイメージが強いスナップとなった

TOPIC 4

イメージを作る画像処理効果が楽しい クリエイティブフィルター

EOS M10にはラフモノクローム、油彩風、水彩風、ジオラマ風、魚眼風、トイカメラ風、ソフトフォーカスと、7種類のクリエイティブフィルターが用意されている。選択するだけでさまざまな表現を楽しめる。

キヤノン EOS M10／ EF-M55-200mm F4.5-6.3 IS STM ／135mm(216mm相当)／絞り優先AE(F5.6、1/100秒、±0EV)／ ISO 800／ WB：オート

「油彩風」のクリエイティブフィルターで撮影。カラフルな壁面がこってりとした色味で面白い表現になった

カスタマイズ用の別売アクセサリーが充実!

フェイスジャケット

3,800円／5,900円前後

EOS M10のボディにはめるタイプのジャケットは全7タイプで価格は2種類ある

グリップ

3,800円前後

フェイスジャケットやグリップはコインなどを使ってネジで装着する

EOS M10の右側に装着するタイプのグリップ。握ったときの安定感が増す

ボディジャケット&ネックストラップ

合成皮革素材のボディジャケットとネックストラップ。カラーはホワイトとブラウン

ネックストラップ 3,700円前後

ボディジャケット 5,300円前後

新レンズが同時発表!

EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STM

EOS M10のキットレンズとして発表されたEF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STMは、35mm判換算にすると約24〜70mmとなり、使いやすい万能な画角。STM(Stepping Motor)を採用しているので、スムーズなAFを実現している。EF-M18-55mm F3.5-5.6 IS STMと比較すると、全長は約26%小型化され、コンパクトで持ち運びも楽だ。2色のカラーバリエーションがあるので、カメラのボディカラーに合わせて選びたい。

- 予想実勢価格 35,000円前後
- 発売予定日 2015年10月

おもなスペック

レンズ構成：**9群10枚**／絞り羽根枚数：**7枚**／開放絞り：**F3.5〜6.3**／最小絞り：**F22〜40**／最短撮影距離：**0.25m**／フィルター径：**φ49mm**／大きさ：**約φ60.9×44.5mm**／重さ：**約130g**／手ブレ補正効果：**約3.5段分**／カラー：**グラファイト、シルバー**

キヤノン EOS M10／ EF-M15-45mm F3.5-6.3 IS STM ／ 20mm(32mm相当)／絞り優先AE(F4、1/50秒、−1.0EV)／ ISO 400／ WB：オート

標準ズームレンズの便利なところは、微妙な画角の調整が簡単にできること。肉眼に近い素直な描写で、建物が自然に表現できた

EOS M10発売キャンペーン

対象商品(EOS M10の全キットの中からいずれか)を購入した方、先着20,000名にお好きなフェイスジャケットorグリップを1つプレゼント。なくなりしだい終了。詳しくはhttp://canon.jp/を参照。「All Canonプラチナ・キャンペーン」はP.158を参照

赤城　最初に今回のSP 35mm F/1.8 Di VC USDとSP 45mm F/1.8 Di VC USDの開発コンセプトや商品企画は、どのぐらい前から考えられていたのでしょうか。一般的にタムロンといえば90mmマクロと高倍率ズームという印象が強いわけですが、突然の単焦点レンズの登場に僕も驚きました。

佐藤　単焦点レンズをやろうという話は、10年以上前から何度もありました。しかし、高倍率ズーム、大口径ズーム、マクロレンズを優先されることが多かったですね。実際に企画が進み始めたのが2012年の春ぐらいだったので、意外と長くかかったなという印象です。

赤城　以前から企画があったのに実現しなかったというのは、マーケティング部署から「売れないだろう」といった声があったのですか？

佐藤　売れないだろうという声より、いよいよ市場の要求が出てきたという部分があります。2010年の「SP 70-300mm F/4-5.6 Di VC USD」あたりからカメラの高画素化が進むなど、光学設計の基準自体を見直さねばという気持ちがありました。そして「SP 24-70mm F/2.8 Di VC USD」、「SP 70-200mm F/2.8 Di VC USD」、「SP 90mm F/2.8 Di MACRO 1:1 VC USD」などの新モデルを発売してきたことで、市場でも「最近のSPシリーズはいいよね」という評判が高まり、ユーザーからも「次は大口径単焦点レンズを」という声が出てきたのかなと認識しています

赤城　単焦点レンズはどうしても高倍率ズームよりも販売数は少なくなりますね。それでも市場からの要求が強くあったと。

佐藤　そうですね。弊社のSPシリーズの評判が良いこともあり、ここから光学設計の基準自体を見直そうということで、次は単焦点レンズというリクエストが出てきたのかなと。

赤城　海外の方からもリクエストが多かったんでしょうか。

佐藤　海外も国内も、両方です。弊社は単焦点レンズのラインアップがまったく手つかずという状況がありましたので、そのままにしておくのはやっぱりレンズメーカーとしてはバランスが悪いということで、単焦点もラインアップに入れようという事になりました。

赤城　そうですか。でも、意地悪なことを言えば、単焦点をラインアップしなくてもタムロンの売り上げとしてはさほど問題はないのではないかと思いますが……。

佐藤　そう言われてしまうと（笑）。ただ、レンズメーカーとしてタムロンがアイデンティティを出していくときに単焦点のラインアップは必要と判断しました。今回、SPシリーズを刷新するという意味もあり、新しいブランドを作っていくという意味においても、単焦点レンズをそろえることが必要だと判断しました。

赤城　後発だから新戦略が必要ですよね。目を惹くのは明るいF値だと思います。でも、あえてF1.8を選ばれたというのは、言葉は悪いですが、普及タイプのイメージがなきにしもあらずです。どうしてF1.8を選んだのか、それが謎なんですよ。

佐藤　実は最初に決めたのは焦点距離の方なんです。35mmと45mmという2本ですが、単焦点として一番層が厚いのが標準域。とくに35mmが最有力だろうという声が社内から出てきました。もちろん、お客様のリクエストに

誕生秘話、TAMRON新SPシリーズはこうして生まれた!!

巻頭特別企画◆SPECIAL INTERVIEW

画質とVCと最短距離、この3つを妥協することなく個性的な単焦点を作りたかった！

インタビュー●赤城耕一

SP 45mm F/1.8 Di VC USD

レンズ構成：8群10枚／
絞り羽根枚数：9枚（円形絞り）／
開放絞り：F1.8／
最小絞り：F16／
最短撮影距離：0.29m／
最大撮影倍率：0.29倍／
フィルター径：φ67mm／
大きさ：
φ80.4×91.7mm（キヤノン用）
φ80.4×89.2mm（ニコン用）／
重さ：約540g（キヤノン用）
約520g（ニコン用）

フロントレンズが凹レンズであることが特徴的なSP 45mm F/1.8 Di VC USD。リアのGMレンズ（ガラスモールド非球面）で非点収差、サジタルコマを補正する

も35mmという要望は強くありました。

赤城　2本同時というのは最初から決まっていたんですか。

佐藤　そうですね。遅まきながら単焦点レンズをやるにあたり、9月2日の発表会の時にも「原点に戻ります」と発表しました。弊社がレンズ専門メーカーとしてこれからブランドを作るにあたり、より趣味性の高い方々に提案していくには単焦点が不可欠だろうと考えました。より一般的な50mmという案もあったんですけれども。企画を進めていく中で、当社は最後発なのだから、より自然な画角で出したいという流れになって。そこから45mmという案が有力になってきました。標準イコール50mmだけではないという事を提案したかったのです。

赤城　それは面白いですね。でも、かつてはニッコールのパンケーキや、カールツァイスのテッサー、Gプラナーにも45mmはありました。しかし、標準レンズは激戦区ですから、ここにぶつけてくるには、何か個性が必要ですよね。

佐藤　ひとつが防振（手ブレ補正）を載せることです。現在のところ単焦点標準レンズで防振が内蔵されていて、F1台の大口径レンズはありません。もう1つは最短撮影距離、意外と標準レンズは近寄れないな、という感じがしていました。

赤城　F1.8という明るさを採用したのは光学性能面なのか防振のためなのか。それとも小型化するためなのか。光学設計の方にお聞きしたいのですが。

安藤　どちらかと言えば、後者の大きさですね。

赤城　営業からはF1.4にしてくださいとか言われなかったんですか。

安藤　それはあります。ただF1.4にすると口径が大きくなるのと、防振の機構も合わせて大きくなってしまいます。

赤城　大きさや重さを無視すれば技術的にはF1.4と防振の組み合わせは可能ということですよね。

安藤　それはもちろんできます。ただ商品として手軽にスナップなどで使ってもらいたいので大きさ重さは無視できない。そうするとF1.4はないよねという結論にかなり早い段階で至っていました。

赤城　価格よりもサイズ？

佐藤　サイズですね。

赤城　ただF1.8でも、ユーザー的にみますとそう小さくはないですよね。

戸谷　防振とフローティング内蔵のためです。そこに尽きます。防振がなければコンパクトにできますが、商品コンセプトとしても絶対的に防振は外したくありませんでした。さらに最短撮影距離も短く、しかもその性能にこだわりたかったわけです。それを両立するための結果だと思っていただけるとうれしいです。

安藤　フローティングで全域均一な性能を出すことを追求しました。画質を重視した結果、各群の移動量が大きくなってしまい、メカ設計の方にも負担をかけてしまいました。

赤城　つまり性能の保持と防振を内蔵した結果がこのサイズという訳ですね。こちらもあえて意地悪をして聞きますが、その2つがなければ、かなりコンパクトなレンズができる？

安藤　理論的には可能です。しかし、この2本は十分に高性能レンズです（笑）。設計性能だけでいえば防振のためにレンズを動かさない方が良いのですが、それが製品として使ってもらえるかというとまた別の話です。防振を入れて、ある程度の大きさで、気軽にたくさん撮影してもらいたいと考えています。

赤城　そうかもしれませんね。F1.4の大口径レンズよりも、今回のSPレンズは絶対に使いやすいと思います。VC（手ブレ補正機構）があるため、楽に撮れるという言い方も変ですが、ビギナーの人でも使いやすい。

佐藤　防振を搭載することによって画質への影響はどうなるのか、という話は絶対に出てきます。しかし、手ブレはそれ以前の問題です。画素数が多くなり最近は何億というセンサーも開発発表されました。光学性能を大切にしながら、しかし、ブレは大敵と考えました。今回のVCは極力、性能が劣化しないようにシミュレーションした結果、35mmが約3段、45mmで約3.5段としました。意外と少ないと思われるかもしれませんが、段数を抑えた理由は光学性能を維持することを最優先にした結果です。

赤城　開放値をF2にすればもう少し小さくなりそうですが、やはり営業的にはF2では厳しいという判断があったのでしょうか？

安藤　やはりF1台というスペックは譲れないと考えました。

赤城　最短撮影距離の画質への自信は並々ならぬものがありますね。

“フローティングで均一な性能を出すことを追求”

安藤　光学性能はフローティングにすればある程度解決しますが、それをメカの中にまとめることに一番苦労しました。

戸谷　外観からでは分からない部分なんです。

安藤　ほとんどズームみたいな感じですよね。

戸谷　他社のレンズですとリアフォーカスで後ろのレンズだけが動くタイプが多いのですが、たぶんそれだけだと、近接性能を維持することができないと思います。

安藤　近距離ですと湾曲が変動しますので。

戸谷　それでフローティングという考え方でないと性能が出ないという話になりました。そう

レンズキャップ（フロント）の変遷

昨今のトレンドである中央部をつまむことで着脱ができるレンズキャップを採用。試作版2ではデザイン重視でつまみ量が少なく、試作版1はロゴカラーとつまみのトルク（堅さ）を改善して製品版へと着地した

製品版　試作版1　試作版2

TAMRON　TAMRON　TAMRON

スイッチ部の変遷

製品版

試作版1

試作版2

VC（手ブレ補正機構）およびフォーカスのスイッチも細かく調整が行われた。製品版に対して試作版2では丸みを帯びたスイッチ、試作版1では細身のスイッチであることがわかる。このほかにも堅さや突起する量などが検討されたという

“ぜひ、素晴らしいスナップ写真をたくさん撮ってください”

株式会社タムロン
映像事業本部
商品企画部 部長
佐藤浩司氏

“身近なモノをアーティスティックに写してください”

株式会社タムロン
映像事業本部
設計技術部 技監
戸谷 聰氏

“お散歩レンズとして常に一緒に持ち歩いてください”

株式会社タムロン
光学開発本部
本部長 博士（理学）
安藤 稔氏

するとほとんどのレンズ群を動かさなくてはならなくなり、ズームレンズのような複雑さになってきます。しかも、防振群のレンズも背負って動かさなければいけない。そのあたりが一番つらかったです。それもサイズに影響した部分ですね。

赤城　AF性能はどうですか？

舘野　フローティングのためにメカの負担が高く、限られたモーターの推力で動かすとなると、めいっぱい背伸びをした状態です。速く動かしすぎるとAFの品位や信頼性を落とす要因になります。そうしたバランスをとって動かしているので、劇速とは言えませんが、スムーズなピント合わせを実現しています。

ブランドリングの変遷

新SPシリーズのデザイン特徴でもあるブランドリング。デザイナーが求めるルミナスゴールド（手前）にするために工場と何度もやりとりを行ったと戸谷（設計技術部技監）は苦労段を語った

赤城　そこは速いと言えばいいのに、真面目だなぁ（笑）。つまり、フローティングだからといって、AFが遅くなるという心配はないというわけですね。

舘野　そうですね。そこは安心してください。

赤城　超音波モーターを変えるという選択肢はなかったのですか？　もっとトルクのあるものに。そうするとサイズがさらに大きくなってしまうのですか。

戸谷　あくまでこのサイズがマストだというような考え方が設計側にありました。

赤城　決められたボディサイズに収めるという考え方があったのですね。

佐藤　そうですね。本来、目標としていたサイズはもう少し小さかったんですけどね（笑）。そこは画質とのトレードオフで予定よりも少しだけ大きくなりました。

赤城　機構設計もそうですが、とにかく画質面と性能面ともにトップクラスで試行錯誤した結果、このサイズになりましたということですね。

戸谷　言い方は悪いんですけれども、性能を出すためにはこれだけレンズが重くなるよ、これだけレンズを動かさなければいけないということで、こちらも騙された感じがなくもない（笑）。でもそれをクリアしないといけないので。

赤城　お互いケンカしたりしながら（笑）。

佐藤　それに近いものはありますね（笑）。

赤城　最短撮影距離は35mmが20cmで45mmが29cmが、最初から目標数値があったわけじゃなくて、それぞれが『いや、こうやればもうちょっといける。逆にそうやるとでかくなるからちょっとそこはなんとかしれくれ』というのでせめぎあった結果がその数値ですか。

佐藤　ある光学設計者が「最短域の1cmは血の1cm」と言っていました。今回の2本は最短撮影距離に強いこだわりを持って設計した結果、45mmで29cm、35mmは20cmを実現していますが、これも機構設計に相当に苦労させたと思っています。マクロレンズではありませんが、マクロ風にも使えます。

赤城　昔のレンズはマクロ領域では距離指標にラインを引いて、その位置で使うと性能が少し落ちますよという意味を示していました。私は中心が良ければいいというタイプです。画面中央にある虫や花がきちんと写っていれば周辺は少し悪くても大丈夫。少し真面目すぎたんじゃないですか。

佐藤　最近は高倍率ズームも寄れる方向に設計を変えていますが、こちらは主に中心性能の維持ですね。でも単焦点はそれとは違うものにしたいと考えています。

デザインの変遷

左が製品版（35mm）と右がデザインモック。ほとんど見た目では区別がつかないほど酷似している。デザインモックに対して、いかに忠実に製品版が再現されているのかがわかる

赤城　実際、最短の描写力はかなり良いですね。

安藤　こだわりのポイントですから。

佐藤　ぜひ、ユーザーにもアピールしたいと思っています。

赤城　大口径レンズですからボケ味の問題もありますね。今回の2本はボケ味もかなりよい印象です。

“最短撮影距離とボケ味　そのこだわりが武器”

佐藤　そう言って頂けるとうれしいですね。ボケ味も相当苦労しましたから。

赤城　今は特に実写しなくても、シミュレーションでボケの効果は分かるんですよね。

安藤　そうですね、ある程度は。でも、やっぱりボケ味は最終的には実物で写さないと分からないところがまだまだ残っています。

赤城　撮影条件とか距離とか光線とか被写体の形とかエッジとかでボケの見え方が違う。

安藤　そうでうね。

赤城　ボケ味で言うと、例えばF1.4の方が大きくぼけるわけですから、F1.4になんて意見も出てきませんか？　話を蒸し返すわけで恐縮ですが。

佐藤　確かにボケ味という意味では、F1.4という要望は非常に強かったですね。

赤城　でも最短撮影距離が短いから、ボケ効果はそれほど変わらない。

安藤　今回の2本は最短撮影距離が短いですから寄るとすごいボケが強くなります。料理やテーブルフォトを撮ってもらうと、その描写力というかボケ味を感じてもらえると思います。

赤城　僕も撮った感じではすごくバランスのいい、驚きの描写だと思いました。想像以上です。ヌケの良さを感じたし、ボケも重たい感じではないし、45mmはどこまでもシャープです。対して35mmはシャープなんだけど、開放では味わいがありますね。

佐藤　性格が違いますね。多分設計者の性格の違いかもしれません。

赤城　レンズ構成では、そのレンズがどの役割を示しているのか教えていただけますか。

安藤　LDやXLDは倍率の色収差を補正します。ガラスモールド非球面レンズのうち、絞りの近

“手ブレ補正が付いているので**キレイな夜景**をたくさん撮ってください”

株式会社タムロン
基礎開発本部
本部長代理
舘野登史邦氏

“気軽に**解像力**のある写真を楽しんでいただけたらうれしいです”

株式会社タムロン
映像事業本部
設計技術部 部長
鴨田征明氏

“ぜひ、被写体にどんどん寄って**近接による描写**を味わってみてください”

株式会社タムロン
光学開発本部
光学開発一部 部長）
仲澤公昭氏

くのものは球面収差、像面に近いものは像面湾曲を補正するためのものです。

赤城　周辺光量も十分に良好ですが、開口効率も開示しないんですか。

仲澤　数値としては公開していません。

赤城　もったいないですね。僕のイメージでは、40%ぐらいはありそうが、35mmにしては結構いい線ですよね。

仲澤　開発側も自信がある部分なのでうれしい評価です。

安藤　35mmは周辺光量の落ち方もすごく自然です。

赤城　実際、僕はどちらかといえば落ちている方が好きなんですけどね。

安藤　周辺光量の低下はレンズの味のひとつですよね。そういう意味ではいい味を出して落ちてくれます。45mmも同じような方向で仕上げています。

赤城　最近は画像処理やレンズ効果で意図的に周辺光量を落としたりするぐらいですからね。レンズ設計、全体の特徴という意味ではどうでしょうか。

安藤　35mmは基本的にダブルガウスが後ろにあって、それにワイドコンバーターがついているという感覚のレンズです。むしろ、例をみないほうは45mmですね。凹レンズ群が先行というレトロフォーカスタイプです。一般的には凹で始まるとディストーション補正には弱くなりますが、45mmの画角だと問題がなかった。しかも周辺域のMTFが結構高い。

赤城　これは標準レンズの仲間ですが、レトロフォーカスなんですね。

仲澤　変形ですが、レトロフォーカスです。

安藤　レンズ構成のどこの部分を使って防振をするのかという問題もあります。ガウスタイプだとそれを割り当てるところが難しいんです。

赤城　なるほど。防振のためにもレトロフォーカスにする意味があるんですね。

安藤　防振をどこにするか、あとはフローティングをどこに内蔵するのか。そこが一般的な50mmとは違う部分ですね。端的に言えば35mmがバランス型、45mmは高コントラスト型だと言っていいかもしれません。

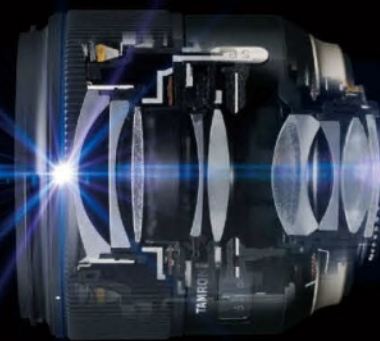
赤城　新SPはこれまでとまったくデザインが違います。実用的なレンズはデザインにこだわらなくていいという考え方もあります。デザインに凝るというのは、お金がかかることです。新製品は鏡胴部のリングが特徴ですね。やはりイメージを大きく変えたかったのですか。

佐藤　このリングは主張しながらもそんなに目立たない仕様を目指しました。

鴨田　デザイナーが目指した「ルミナスゴールド」という色に仕上げることにとても苦労しました。デザイナーから色見本が来るんですが、

SP 35mm F/1.8 Di VC USD

レンズ構成：9群10枚／
絞り羽根枚数：9枚（円形絞り）／開放絞り：F1.8／
最小絞り：F16／最短撮影距離：0.20m／
最大撮影倍率：0.4倍／フィルター径：φ67mm／
大きさ：φ80.4×80.8mm（キヤノン用）
78.3mm（ニコン用）／
重さ：約480g（キヤノン用）450g（ニコン用）

XLDとLDレンズで色収差を低減、中央部のGMレンズ（ガラスモールド非球面）で球面収差を、リアのGMレンズで像面湾曲をそれぞれを補正している

それを再現するために工場と何度もやり取りを行いました。

赤城　ご自身の満足度はいかがですか？

鴨田　自分でもお金を出して買いたいと思っています。久々にフィルム時代を思い出して、スナップをしながら散歩をしてみたいと思えるレンズに仕上げたつもりです。設計は最新のデジタルカメラに応えるものですが、外観からは古き良き時代のレンズの風合いを感じてもらえたらうれしいですね。

赤城　外装で驚いたのはTAMRONのブランドの文字が違うことです。

佐藤　そうですね。すべて大文字にしました。

赤城　今回は新SPシリーズのプロダクトロゴだと思いますが、今後は社名ロゴもこちらに変わっていくということではないのですか？

佐藤　これは、あくまでもプロダクトロゴです。新SPシリーズにはこのロゴが使われることになります。海外の意見を聞いたところ、全部大文字の方が読みやすいということがわかりました。今回、すべて大文字のロゴを採用したのは、海外の人にもタムロンという言葉がパッとロゴとして分かるということが一番の理由です。タムロンの新SPに対する一種の意思表明ですね。

赤城　今後、SPブランドに関しては、このレンズのコンセプトにおいてレンズ設計されていくことになるんですか。

佐藤　その通りです。

赤城　大口径レンズを開放絞りで使う場合、ミラーレス機のほうがフォーカスの精度に優れます。今回も絞り開放で撮影して、絶対にピントは外せないという場合は、ライブビューを活用しました。こうなるとミラーレス機を使うのと同じです。ミラーレス機用のレンズとしての要望はないんですか。

佐藤　現在はご要望をお聞きしているような段階です。SPシリーズをミラーレスで展開する可能性はもちろんあると思います。

赤城　最後に一言だけ。この単焦点シリーズは2本では終わりませんよね。

佐藤　終わるつもりはまったくありません。ぜひ、ご期待ください。

赤城　なるほど、楽しみにしておきます。

インタビュー取材を終えて

「飽食のズーム時代」だからこそ、大口径単焦点が再び脚光を浴びている

近年のレンズメーカーのラインアップをみると、単焦点レンズの拡充に力が入っているように感じる。カメラメーカーも単焦点レンズ、とくに大口径レンズは高性能の特別なものとして位置付けている。タムロンもこれに続き、今回、単焦点レンズ35mm F/1.8、45mm F/1.8で、この激戦区に勝負を挑む。正直に言ってしまえば、単焦点レンズは誰もが必要とするレンズではない。今回のタムロンの2本のレンズもそうだが、標準ズーム、高倍率ズームの焦点域と重複してしまうことがあるからだ。商売的にも大きな成果にはつながることは期待薄である。しかし、F1.8開放時の描写は被写界深度が浅く、F2.8の高級タイプのズームレンズでも得ることのできない個性的な効果が望める。まずはこのために大口径単焦点レンズの存在意義があると言っていいだろう。

本誌の読者には釈迦に説法かもしれないが、交換レンズの使いこなしのコツは、焦点距離別の画角と被写界深度効果を頭に入れ被写体に挑むことだと考えている。かつて交換レンズが高価でおいそれとは買えなかった時代。標準レンズは、絞りを絞りこめば広角風に、開けば望遠風にと、各自が工夫をこらしたものである。このため標準レンズの特性を研究したものだ。ひとつの画角のみで被写体に立ち向かう。つまり、固定した「目」で勝負をかける必要がある。これがレンズの特性を知ることになり、自分にとって本当に必要な次の1本のレンズへの見極めともなるのである。

ズームレンズがあたりまえ、「飽食のズーム時代」だからこそ、単焦点レンズの存在意義が再びクローズアップされるということも最近の傾向としてありそうだ。これはたいへん興味深い。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／タムロン SP 35mm F/1.8 Di VC USD ／35mm／絞り優先AE（F1.8、1/640秒、±0EV）／ISO 200／WB：晴天

開放F1.8によるスナップショット。光線状態は良くないが、コントラスト、シャープネスも良好で開放とは思えない良質な画像。歪みも少なく、シャドー部の階調再現も高い

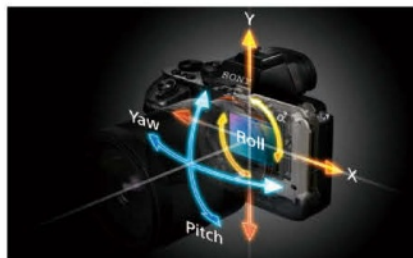
赤城耕一（あかぎこういち）
1961年東京都生まれ。東京工芸大学短期大学部写真技術科卒業。出版社勤務を経てフリーとなる。エディトリアル、広告での撮影のほか、各誌のカメラ雑誌でのメカニズム記事、ハウツー記事などを多数寄稿

TOPIC 01 広いダイナミックレンジ 14bit非圧縮RAW

広いダイナミックレンジが大きな特徴の1つであるα7S II。CMOSセンサーが持つダイナミックレンジを最大限生かすため、新たに14bit非圧縮RAWフォーマットに対応。豊かな階調再現と高画質にこだわる人にうれしい仕様だ。しかも有効約1,220万画素なので、ファイルサイズが大きくなる非圧縮RAWでも扱いやすい。従来からの圧縮RAWにも対応している。

メニュー画面で非圧縮RAWと圧縮RAWの選択ができる。画質重視は非圧縮RAW、連写重視は圧縮RAWなどと、用途で使い分けられる

TOPIC 02 約4.5段分の 5軸手ブレ補正

α7 IIやα7R IIと同じく、5軸ボディ内手ブレ補正を内蔵。ピッチとヨーの角度ブレ、X軸、Y軸のシフトブレ、そして回転ブレを補正する。Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZAを使用時、約4.5段分の効果が得られる。α7Sよりさらに暗所に強くなった。

TOPIC 03 より静かになった 高耐久シャッター

ブレーキ機構により、先幕と後幕、どちらもシャッターの振動を50%も低減。少ないシャッターショックと静音化により、静かな場所でも撮影しやすい。また電子先幕シャッターの使用で、シャッターの耐久性は約50万回を誇る。

驚異の5軸手ブレ補正＆ISO 409600の世界

ソニー

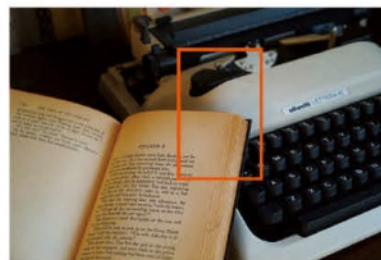
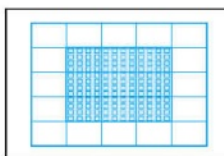
α7S II

● 発売日 2015年10月16日　● 実勢価格 452,000円前後

文•藤井智弘

TOPIC 04 拡張ISO 409600の 圧倒的高感度が 高画質に

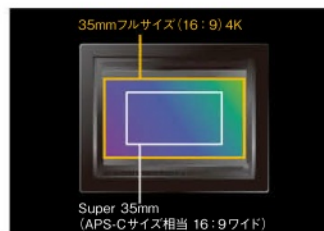
α7S IIはα7と画素数も最高感度も同じ。では実際撮影した結果はどうなのだろうか。α7S IIで作品を撮影した魚住氏が高感度テストをしてみた、というので見せていただいた。拡大してみると、ISO 3200まではまったくといって良いほど差がない。ISO 6400でわずかにα7S IIの方が滑らか。ISO 12800以降は明らかに差が出てくる。ISO 12800では約1段、ISO 51200を超えると1段以上の違いだ。また、α7SはISO 102400から色調が崩れてくるが、α7S IIはISO 409600まで安定感がある。やはり高感度特性は進化しているようだ。

TOPIC 05 −4EVの暗所でも利く 169点ファストインテリジェントAF

高感度での画質が向上し、5軸ボディ内手ブレ補正も搭載するα7S IIはより暗所に強くなった。それに加えて、AFも−4EVまで対応するファストインテリジェントAFに進化。α7Sでは25点だった測距点は中央部の9点を高密度化することで一気に169点まで増加。ますます夜間での撮影に強くなっている。

□コントラスト検出方式

α7Sでは25点だったが、α7S IIはそのうち9点を細分化して、合計169点測距を実現した。高速で高精度、しかもどこにピントを合わせているのか、しっかり確認しながら撮影できる

ISO 6400でF1.8、1/640秒という暗さ。背景には強い光もあり、AFが迷いそうな条件だ。しかし、しっかりピントが合っている。極端に暗くても快適なAFが期待でき、新たな表現が手に入るだろう

TOPIC 06 全画素読み出し 4K動画が本体記録に

α7Sはフルサイズ機で4K動画が撮れることで話題となったが、4Kの記録には外部レコーダーが必要だった。しかし、α7S IIはボディ単体で4K動画記録が可能だ。フルサイズ領域で画素加算のない、全画素読み出しを実現。S-Log3やS-Gamut3.Cineにも対応し、プロ仕様の動画記録機能も持つ。Super 35mm領域のフルHD動画や、フルHDで120fpsのスローモーションも可能だ。

黄色の枠は35mmフルサイズ領域。全画素読み出しにより、高精細で滑らかな高画質4K動画が可能だ。またフルHDは、フルサイズ画角だけでなく白い枠のSuper 35mmにも対応している

α7 II、α7R IIと2世代目に突入したα7シリーズ。超高感度を持つα7Sも2世代目のα7S IIが登場した。デザインはα7 II、α7R IIを踏襲。シリーズらしい一貫性を感じる。α7R IIでは、画素数、最高感度ともに前モデルから飛躍的にアップした。ところがα7S IIは、フルサイズ有効約1,220万画素、最高感度ISO 409600と、前モデルのα7Sと数字上の変化はない。しかし、画像処理アルゴリズムを進化させ、CMOSセンサーの性能をより引き出すことに成功。ダイナミックレンジのさらなる向上や、高感度特性の向上を実現した。そしてRAWは、新たに広いダイナミックレンジが生かせる14bit非圧縮RAWに対応。つまり、α7Sと数字上は同じでもさらに高画質になった仕様だ。

進化したのは画質だけではない。AFは25点から169点のファストインテリジェントAFになり、−4EVという暗さでも測距が可能。AF速度は約2倍も高速化された。そしてα7 II、α7R IIにも搭載されているボディ内5軸手ブレ補正を採用。約4.5段分という高い補正効果が得られる。

高感度画質に妥協する時代はついに終わった

ファインダーはα7R IIで好評の、倍率0.78倍のXGA OLED Tru-Finderを搭載。ツァイスT*コーティングが施され、クリアな視認性を誇る。さらに、フルマグネシウム合金ボディや約50万回のレリーズ耐久性を持つ低振動シャッターなど、α7Sから進化したところは多い。ボディ単体で記録可能な、全画素読み出しによる4K動画機能も見逃せない。

圧倒的に高感度に強く、強力な手ブレ補正を内蔵し、−4EV対応のAFを持つα7S II。これまで不可能だった写真表現ができる。ここではα7S IIの特徴をクローズアップするとともに、α7S IIで作品を撮影している魚住誠一氏の写真を参考に、その進化を検証する。

外観・操作系比較

α7S
94.4 mm
126.9mm

48.2 mm

■…2機種の比較で優れている項目

A USB給電に対応
USB給電はバッテリーを取り出す必要がなくて便利

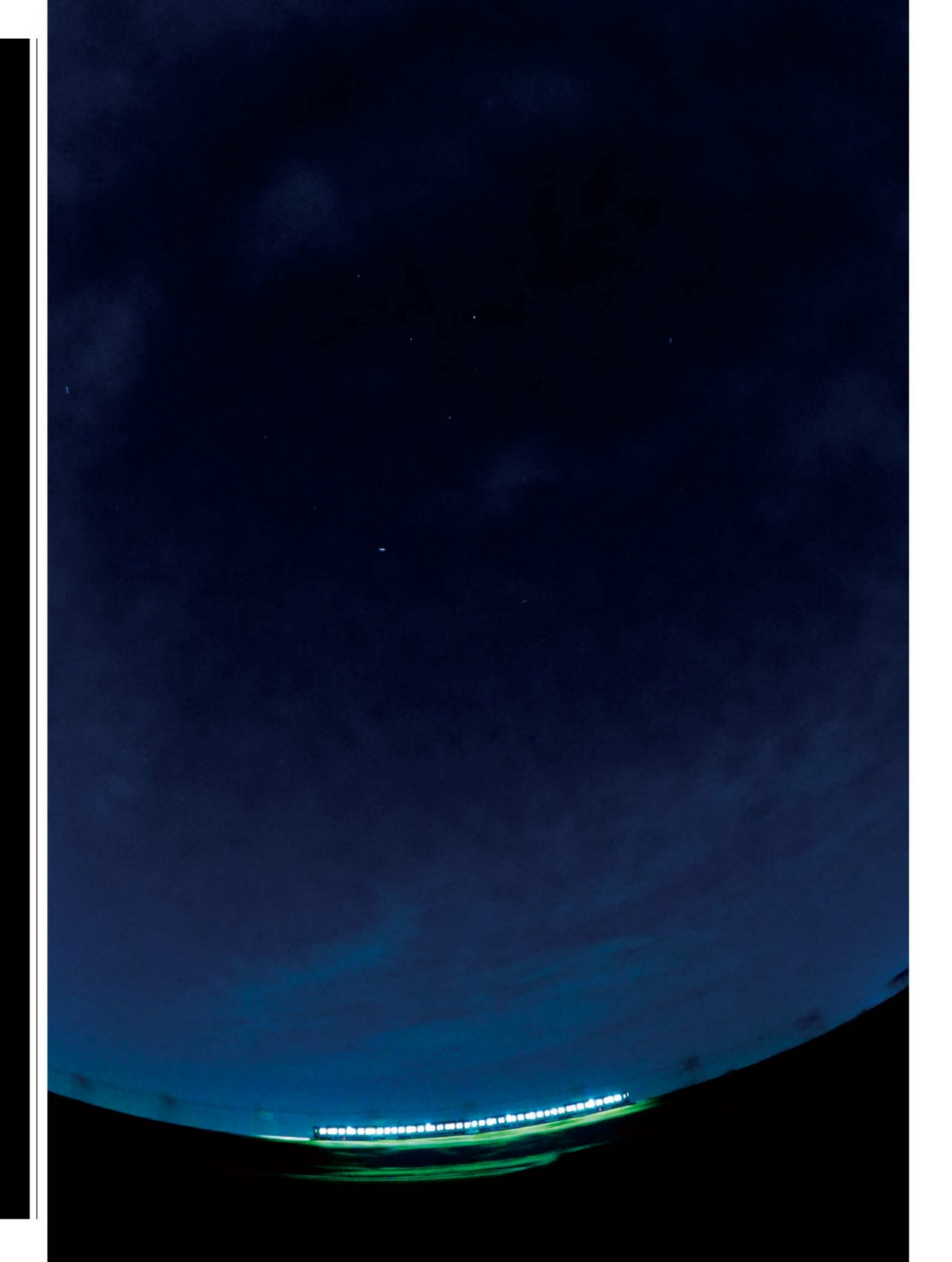
B マグネシウム合金採用
背面もマグネシウム合金で堅牢。重量級レンズでも安心

C 倍率0.78倍のEVF
一眼レフの光学ファインダーを凌駕する0.78倍の視野

D 3型約123万ドット液晶
明るい場所でも見やすいエクストラファイン液晶

E 握りやすいグリップ形状
重いAマウントレンズでもしっかり構えられる

F ダイヤルロック機構
不用意にモードダイヤルが回転するのを防ぐ

	α7S II	α7S
イメージセンサー	35mm判フルサイズCMOSセンサー	35mm判フルサイズCMOSセンサー
有効画素数	約1,220万画素	約1,220万画素
ボディ内手ブレ補正機構	5軸ボディ内手ブレ補正機構	非搭載
14bit RAW記録	非圧縮／圧縮	圧縮
ISO感度	ISO 100〜102400(拡張で ISO 50〜409600に対応)※高画質化	ISO 100〜102400(拡張で ISO 50〜409600に対応)
オートフォーカス	169点コントラスト検出方式	25点コントラスト検出方式
AF検出輝度範囲	EV−4〜20 (ISO 100相当、F2レンズ使用)	EV−4〜20 (ISO 100相当、F2レンズ使用)
シャッター速度	1/8,000〜30秒、バルブ	1/8,000〜30秒、バルブ
連続撮影速度	最高約5コマ／秒	最高約5コマ／秒
ファインダー	0.5型電子式ビューファインダー／約236万ドット／視野率100%／約0.78倍	0.5型電子式ビューファインダー／約236万ドット／視野率100%／約0.71倍
液晶モニター	3型TFT／約123万ドット	3型TFT／約92万ドット
動画	ファイル形式：XAVC S、AVCHD (Ver.2.0準拠)、MP4 画質：最大3,840×2,160／30p (XAVC S 4K)最大1,920×1,080／120p(XAVC S HD)	ファイル形式：XAVC S、AVCHD (Ver.2.0準拠)、MP4 画質：最大1,280×720／120p(XAVC S)最大1,920×1,080／60p(XAVC S、AVCHD)
重さ(記録メディア、バッテリーを含む)	約627g	約489g
実勢価格(ボディ単体)	452,000円前後	223,000円前後

1 ISO 25600

ソニー α7S II／FE 28mm F2＋フィッシュアイコンバーター／16mm／マニュアル露出（F3.5、1/6秒）／ISO 25600／WB：電球

α7S IIにとってISO 25600は、もはや非常用ではなく作品も狙える感度だ。これまでは光の線にするしかなかったシーンで、列車をしっかりと描写できたことに感動を覚えた。既存のカメラよりも暗部のノイズが圧倒的に少なく、コントラストがあり、鮮鋭度も高い

2 ISO 400

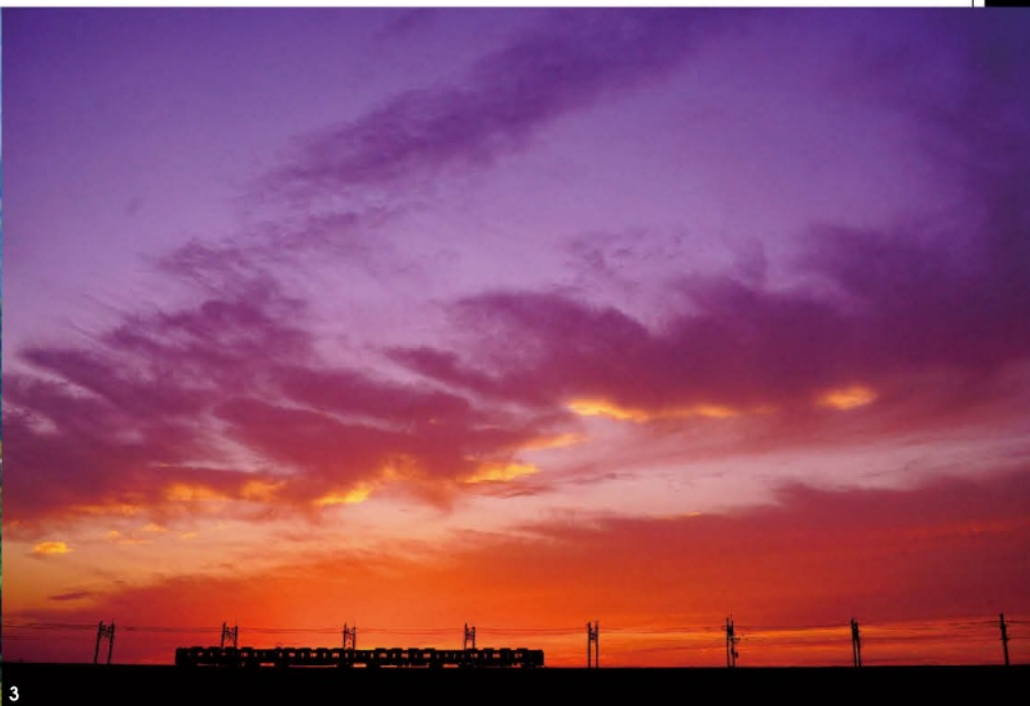
ソニー α7S II／500mm F4 G SSM／500mm／絞り優先AE（F4、1/2,000秒、－0.3EV）／ISO 400／WB：太陽光

Aマウント500mmで撮影。マウントアダプター LA-EA3を使えば、Aマウントレンズを装着し、169点のAF枠で撮影できる。約5コマ／秒の高速連写のほか、サイレント撮影も可能なので、動画と合わせて撮るときにも便利

3 ISO 400

ソニー α7S II／Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS／35mm／絞り優先AE（F8、1/400秒、－1.3EV）／ISO 400／WB：日陰

美しいのは高感度時だけではない。約1,220万画素に抑えたことで、1画素の面積は広がり、豊かなダイナミックレンジを誇っている。青空や夕焼けのような微妙なトーンも、なめらかな連続性とともに美しく表現できる

2 3

中井精也

1967年東京都生まれ。2004年春から毎日1枚必ず鉄道写真を撮影するブログ「1日1鉄!」を継続中。広告、雑誌の撮影のほか、講演やテレビ出演など幅広く活動中

ISO 25600で作品が狙えるこのカメラで想像を超える鉄道写真に挑戦したくなる

ソニーからα7S IIが衝撃的にデビューした。衝撃的なポイントはたくさんあるが、あえて5つに絞ると、超高感度域の圧倒的な美しさ、低照度時のAF性能、OVFを越えたといっても過言ではないEVF、そして約45万円という価格と、その値段にして画素数をα7Sと同じ約1,220万画素をキープしたところだ。読者的にも最後の2つのポイントは衝撃的だったと思う。素人の僕でも、α7Sから価格がここまで上がったら、同じ画素数では勝負できないのでは？ と思うのだから、ソニーのプロのマーケッターたちがそう考えないはずはない。つまり、現在の技術で、裏面照射ではない通常のセンサーで、高感度画質をここまで美しくするには、この画素数がベストということだろう。僕が開発部長だったら、「無意味でもいいから前モデルよりも画素数を上げろ!」なんて言いそうだけど（笑）、それをしないところが、今のソニーの強みなのではないかと思う。時勢に反応するように価格を抑えたモデルが各メーカーから発売されているが、それと逆行するように次々と技術革新を実現するソニーは、間違いなくカメラ界に新風を生み出している。

というわけで価格が高い（笑）このカメラだが、それはこのカメラの目的が明確な証拠でもある。例えば、300mmの望遠レンズは、数万円から60万円を超えるものまで存在する。でも必要な人は、たった2絞りの明るさと描写力のために、10倍近いお金を払う。つまり高感度撮影が多く、高画素を求められない人にとって、この価格は決して高いものではないのだ。

星空のもと、夜の築堤を走る列車が、光の線ではなくカタチとして写ったとき、鳥肌が立った。このカメラとともに、想像を超える夜の鉄道を撮ろうと、今、燃えている。

中井精也のイチオシ機能

測距点が169点に増えてAFは－4EVの低照度対応

AF枠が169点に増えた「ファストインテリジェントAF」はなんと－4EVの低照度環境下でも合焦可能。左ページの作品は完全に真っ暗な状態で撮影したが、空をバックにわずかに浮かび上がる程度の電柱に、AFでピントを合わせられたのには驚愕した。室内程度の暗いシーンなら、ストレスのないAF撮影が可能だ。

1 ISO 800 ソニー α7S II／Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA／55mm／マニュアル露出（F1.8、1/160秒）／ISO 800／WB：オート

日がかなり傾いてきた時間に屋外で撮影。上下をレフ板で挟むことで、夕方の柔らかい光を存分に使った。それほどISO感度はアップしていないものの、常用感度で撮影したように艶やかな肌が再現されている

魚住誠一

1963年愛知県生まれ。高校時代はインディーズロックバンドで活動。渡米を繰り返し、スタジオ・アシスタントを経て94年よりフリーに。98年より拠点を東京に移す

わずかな光をしっかりととらえて写真にする ポートレートが楽しくなる超高感度カメラ

ポートレート撮影の基本はライティングの良い条件で撮影することだ。太陽光をレフ板でコントロールしたり、ストロボによって光量をセッティングしたりして、被写体であるモデルを美しく撮影することが求められる。もちろん、ウオズミもそうした撮影を行うことも多々あるが、できることならば、より自然な光の条件で撮影したいと考えている。そんなウオズミの考え方に応えてくれるのがα7S IIだ。ソニー α7シリーズはノーマルモデルのα7に対して、高解像度タイプの「R」と、高感度タイプの「S」にシリーズ展開されている。さらにノーマルタイプとRタイプは5軸手ブレ補正という大きな武器を手にした2世代目へと進化を遂げ、α7SもII型に加わった。

今回、α7S IIのモデルとしてセレクトしたのは日テレジェニック2015に選出された大澤玲美ちゃん。1980年代を思わせるクラシカルなハウススタジオで撮影をした。与えられた時間は午後3時から午後7時までの約4時間。高感度を使って室内の窓辺からわずかに差し込む光で撮影したが、びっくりするぐらいノイズレスの写真が液晶に写し出された。初代α7Sとスペック上は変わらないが、その感度特性は明らかに異なる画質だ。夜、街灯で撮影したISO 25600の写真を見ても、高感度で撮影したことを感じさせないクオリティー。II型になったことによる5軸手ブレ補正や約0.78倍の視認性の高いファインダー、－4EVの暗所でもストレスなくピントが合うAF精度なども含めて、α7S IIによるローライトポートレートにウオズミはすっかり、はまってしまった。

モデル●大澤玲美（オスカープロモーション）

魚住誠一のイチオシ機能

約0.78倍のファインダー倍率でピントの山がつかみやすい

MFでピント合わせをすることが多いが、α7S IIのファインダーがとても見やすいと感じた。α7Sではファインダー倍率が約0.71倍だったが、α7S IIは約0.78倍を実現していることにより、細部の確認がしやすいのだ。今回はあえて暗いシーンを選んで撮影したが、夜の公園や低照度の路地でもピントの山はつかみやすく、ストレスは感じなかった。

2 ISO 25600

ソニー α7S II／ Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA ／55mm ／マニュアル露出（F1.8、1/125秒）／ ISO 25600／ WB：オート

遊んでいた子どもたちは家に帰り、誰もいなくなった夜の公園。街灯の明かりを利用して表情を明るく見せている。不自然なノイズの浮き上がりはない。今まで撮れなかったシーンで撮影できる楽しさを感じた

3 ISO 5000

ソニー α7S II／ Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA ／55mm ／マニュアル露出（F1.8、1/125秒）／ ISO 5000／ WB：オート

太陽が完全に沈んだ後、部屋の電球の照明を1つ点けて撮影。ウオズミの場合、手ブレを防止するためにも、1/125秒以上のシャッター速度が欲しい。暗くなった室内でも使える感度の上限が広がったのはうれしい

4 ISO 3200

ソニー α7S II／ Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA ／55mm ／マニュアル露出（F1.8、1/125秒）／ ISO 3200／ WB：オート

夕方の斜光になった光が差す窓辺で撮影。もはやISO 3200が低感度に思えてくるようなクリアな画質だ。窓の外に見えているグリーンの発色も鮮やかで、室内に居ながらにして爽やかなイメージが表現できた

“露出で伝わりやすくなる

朝靄にけむる森”

写真・鶴巻育子

早起きと夜更かしがドラマチック

早朝と

撮る写

Contents

“WBで色をつける

朝日を浴びて動き出す街”

写真・福井麻衣子

“ストロボで浮かび上がらせる
都会のポートレート”

写真●魚住誠一
モデル●池田ショコラ（オスカープロモーション）

な写真表現の基本!!

深夜に
真

写真表現において、時間の変化はとても重要である。
その変化が最もドラマチックだと言われるのが
光の強さや色が刻々と変わる日の出の前後。
また、街が寝静まった深夜の写真も昼間とは違う空気が漂う。
そこで今月は、一般的な「夜景」の撮り方ではなく
もっと時間にこだわったテクニックを紹介する。
早起きと夜更かしで、もっとドラマチックな1枚を撮影しよう。

“シャッター速度で
表現する満天の星空”

写真●米田 誠

早朝と深夜に撮る写真
本誌連動フォトコンテスト開催中！

今回の特集で解説する早朝と深夜に撮った写真を読者の皆さまから募集します。
応募方法、期間などの詳しい情報はGANREFをご覧ください。
http://ganref.jp/

Gallery

私が早朝に撮る理由

吉村和敏

08:45
イタリア サンタ・マッダレーナ

リコーイメージング PENTAX 645Z ／
HD PENTAX-DA645 28-45mmF4.5ED AW SR ／
39mm（30mm相当）／絞り優先AE
（F11、1/10秒、−0.7EV）／ ISO 100／ WB：オート

世界の「朝」をテーマに旅を続けている。朝に惹かれる理由、それは朝にはただ美しいだけではない、不思議な力が隠されているからだ。早朝、澄み切った大気の中で、地上のすべての生命が光の恵みとともに再生していく姿を見つめていると、たまらない愛おしさで心が満たされていく。同時に、昨晩まで感じていた心の悩みや戸惑いがフッと消え去り、今日も1日頑張って生きてみようという活力のようなものがみなぎってくる。

イタリア、ドロミテ地方、サンタ・マッダレーナに滞在していた私は、まだ薄暗い6時にホテルを出て、昨日の夕方に見つけた「教会と森と岩山のバランスが良い場所」に行ってみた。外気温は3℃。秋がはじまったばかりだというのに真冬並みの寒さだ。ブルブルと体を震わせながら待機していると、やがてガイスラーの荒々しい山容が朝日に照らされ、あたりが急速に明るくなっていった。ハイライト部の白飛びとシャドウ部の黒つぶれに注意しながら、露出を0.7EVずつ変えて5枚の写真を撮る。残念ながら、近くにある背の高い岩山に邪魔されて、集落と森に光が降り注ぐことはなかったが、イタリアの片田舎に潜む凛とした朝の空気感を作品にできた私は満足だった。

よしむらかずとし：1967年長野県生まれ。長野県立田川高校卒業後、東京の印刷会社で働く。退社後、1年間のカナダ暮らしをきっかけに写真家としてデビュー。以後、東京を拠点に世界各国、国内各地を巡る旅を続けながら、意欲的な撮影活動を行っている。2003年 カナダメディア賞大賞受賞。2007年日本写真協会賞 新人賞受賞。近著に『「イタリアの最も美しい村」全踏破の旅』（講談社）、『Moments on Earth—吉村和敏 初のベストショットアルバム1988-2015』（日本カメラ社）など。
http://www.kaz-yoshimura.com/

Gallery

私が深夜に撮る理由

丸田あつし

23:45
広島城

キヤノン EOS 5D Mark II／
EF24-105mm F4L IS USM ／24mm ／
絞り優先AE（F8、13秒、－0.7EV）／
ISO 400／ WB：オート

夜の入口ともいうべき黄昏時には、被写体が刻々とその姿を変えてゆく美しさがある。思い起こせば夜景を撮りはじめた頃は、いつも光だけを追い求めていた。しかし、たくさんの夜を経験し、さまざまな被写体にカメラを向けるうちに、いつしか闇の存在を意識するようになった。光と闇は表裏一体。夜景とは、光のみならず闇をもとらえることだと理解するようになったのだ。

街明かりが消えた後、抑制された視覚に変わって活性化するのは想像力である。僕がこの時間帯を好む理由は、沸き上がるイメージから、作品を生み出すインスピレーションを受けるからだ。“夜城”（やじょう）と名づけた深夜の城郭は、まさに闇と向き合うことで生まれたテーマ。ライトアップが消えた城と対峙すると、その城が隆盛を極めた時代に意識が誘われ、まるでタイムスリップしたような感覚に陥るから不思議だ。「対岸から何者かが天守をうかがう……」そんなストーリーを頭に描きながら、水辺の樹木を構図に取り込み、想像の世界が作り上げた「気配」を表現しようと試みた。しんと静まり返った真夜中の広島城。顔をのぞかせたおぼろ月を眺めながら、僕の意識はすでに数百年の時を超えていた。

まるたあつし：1968年生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業、同大学院中退。1994年にデザイン会社（有）マルタアドバタイジングに入社。グラフィックデザイナーに加え、夜景フォトグラファーとして本格的に活動をはじめる。現在“世界の夜”の撮影をライフワークに、企業カレンダー、写真雑誌・週刊誌グラビア、写真展などで活動中。実兄である夜景評論家・丸々もとおの夜景関連出版物の全撮影を担当。日本写真家協会会員。近著に『亜細亜ノ夜景』（河出書房新社）ほか。
http://www.nightonearth.jp/

Gallery

私が早朝に撮る理由

小林紀晴

06:00
インドネシア バリ島

インドネシア、バリ島で行われるムラスティという祭りの一場面。ニュピ（バリヒンドゥー教の新年）の直前に行われる祭祀で、村の神様を海まで運び、清める儀式だ。島の人にとってとても大切なもので、海岸にはまだ暗いうちから人々がぞろぞろと集まりはじめる。ニュピ当日は国際線、国内線問わず飛行機の発着も止まるほどだ。ニュピは新月と決まっているので、前日も月明かりはない。

この写真は儀式がはじまる直前の姿だ。日の出前、少しだけ海側の空が明るくなってきた時間帯。海が背景となるようにカメラを構えた。人々のシルエットをできるだけ出したいからだ。このとき、山側にカメラを向けるとまだ深い陰影で人の姿ははっきり見えなかった。だから意識して明るい部分を狙った。早朝は感度をかなり頻繁に変える。この時は感度をISO 2000に設定し直している。日の出前はかなりの速さで光の表情、露出が変わっていくので、撮りたいものを明確に決めて、そこだけを狙う。欲張ると撮り逃す確率が高い。実際に太陽が顔を出すと光は急に硬くなる。南国の場合、日差しが強く、写真にしたとき昼間と区別がつかないこともあるので、太陽が姿を現わすまでが勝負どころだ。

ニコン D4S ／
AF-S NIKKOR 58mm f/1.4G ／58mm ／
マニュアル露出（F3.5、1/200秒）／
ISO 2000／ WB：太陽光

こばやしきせい：1968年長野県生まれ。東京工芸大学短期学部写真科卒業後、新聞社にカメラマンとして入社。1995年『ASIAN JAPANESE』（新潮社）でデビュー。1997年『DAYS ASIA』（情報センター出版局）で日本写真協会新人賞受賞。『days new york』（平凡社）『SUWA』（アクセスパブリッシング）『父の感触』（文藝春秋）『十七歳』（日本放送出版協会）など著書多数。最新作に『メモワール 写真家・古屋誠一との二〇年』（集英社）、写真集『KEMONOMICHI』（冬青社）がある。
http://www.kobayashikisei.com/

Gallery

私が深夜に撮る理由

中井精也

23:45
武蔵野線 東川口～南越谷間

夜間に列車を撮影することは、とても難しい。かつてアメリカの写真家、O.ウイントン・リンクは、夜を走る蒸気機関車の姿を撮影したくて、膨大な光量のフラッシュを線路際に立て、4×5インチビューカメラで撮影した。そう、鉄道を撮る者にとって夜の列車を撮影することは、簡単には叶えることのできない夢だったのだ。時代は流れ、カメラは銀塩からデジタルに進化し、以前では考えられないほどの高感度撮影が実現した。それとともに、長年の夢であった夜の鉄道写真も可能になった。でも僕は、銀塩カメラで記録できなかったシーンを撮影できることだけに満足していてはダメだと思う。そこで進歩したのは撮り手ではなく、カメラの性能でしかない。高感度撮影は、鉄道写真に開かれた新たな扉だ。これまでイメージすらできなかった夜の鉄道風景を、想像力とともに表現していきたい。

この作品は森ごしに貨物列車を流し撮りしたもの。ISO 6400だからこそ、ギリギリ写し止められる1/5秒を選択できた。機関士の影が浮かび上がったのは、写真の神様からの粋なプレゼントか。絵画やイメージの世界でしか見ることのできなかった夜の鉄道の姿を具現化できたようで、とても気にいっている。

ソニー α7 Ⅱ／
Vario-Tessar T* FE 16-35mm F4 ZA OSS ／
16mm ／マニュアル露出(F4、1/5秒)／
ISO 6400／ WB：電球

なかいせいや：1967年東京都生まれ。鉄道の車両だけにこだわらず、鉄道にかかわるすべてのものを被写体として独自の視点で鉄道を撮影し、「1日1鉄!」や「ゆる鉄」など新しい鉄道写真のジャンルを生み出した。2004年春からブログ「1日1鉄!」を継続中。株式会社フォート ナカイ代表。写真集『1日1鉄!』（インプレス）で2015年講談社出版文化賞・写真賞受賞。2015年日本写真協会 新人賞受賞。甘党。近著に『世界一わかりやすいデジタル一眼レフカメラと写真の教科書』(インプレス)など。
http://railman.cocolog-nifty.com/

早朝と深夜は時間との勝負

基礎テクニック10

早朝と深夜の撮影は時間との勝負。光の条件が刻々と変化するため失敗は許されない。ここでは数少ないチャンスをモノにするための基礎知識を紹介する。

1 被写体選びで伝えたい時間が強調される

写真・文●鶴巻育子

早朝と深夜が伝わるシーン

早朝と深夜の撮影は、昼間に比べると限られた時間との勝負となる。時間を表現する際には、その時間特有の被写体やシーンを撮影すると、写真を見た人が撮影時間を想像しやすい。例えば、私たちがまだ眠っている早朝から働き出す人々。漁師やパン屋、豆腐屋、荷物の運搬で走るトラックなどがそうだ。薄暗い光がさらに早朝の雰囲気を強調してくれる。深夜は深夜独特のテンションの高い人々の様子が魅力的だ。そして、工事現場などは、昼間は埃っぽく労働者の姿があるが、真夜中には誰もいなくなり、まったく違う空気に包まれるのが面白い。

深夜の酒場

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF50mm F1.2L USM ／50mm ／絞り優先AE(F1.6、1/160秒、−0.3EV)／ ISO 6400／ WB：オート

あるホテルのラウンジでは、生バンドの演奏で人々がダンスを楽しんでいた。お酒が入り、テンションも高くなっている。真夜中ならではの人々の風景

深夜の工事現場

キヤノン EOS M3／ EF-M22mm F2 STM ／22mm ／絞り優先AE(F2.2、1/60秒、+0.3EV)／ISO 6400／ WB：オート

深夜の誰もいない工事現場。暗闇の中、そこだけがライトで照らされている風景。静まり返り恐い雰囲気もありながらも、人工物の塊が美しくも感じる瞬間だ

早朝の漁

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF50mm F1.2L USM ／50mm ／絞り優先AE(F2.5、1/40秒、±0EV)／ISO 320／ WB：オート

漁師の仕事姿は、早朝ならではの光景だ。漁をする真剣な姿に惚れ惚れする。青白いフラットな光はこの夜明け前だけの空気が感じられる

2 構図の作り方で時間の雰囲気を表現する

写真・文●大村祐里子

早朝らしい空間と被写体に迫る深夜

人間はたいてい早朝に起きて、それぞれの活動をはじめる。したがって「朝」と聞くと、人は「はじまり」や「広がり」といったイメージを持つ。このイメージを写真で表現すれば、よりダイレクトに時間のイメージが伝わる。「はじまり」や「広がり」は、引きの構図でダイナミックに表現をした方が伝わる。一方、深夜は人間が眠ったり、静かに過ごすことの多い時間帯である。したがって「夜」と聞くと、人は「静寂」のイメージを持つ。そういったイメージは、被写体に迫る「寄り」の構図で表現をした方が伝わりやすい。なぜなら、一般的に引きの構図は画面の中の情報量が多くなりすぎて、にぎやかさが出てしまうからだ。そういった意味では背景の整理もポイントとなる。

早朝は引きの構図

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ ZEISS Otus 1.4/55／55mm ／マニュアル露出(F8、1/1,600秒)／ISO 400／ WB：5,100K

モノレールの車内から橋の上に朝日が出るタイミングを狙って撮影した。太陽に街全体がダイナミックに照らされる様子は、「はじまり」と「広がり」を感じさせる「引き」の構図で早朝らしさが強調できた

深夜は寄りの構図

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ カールツァイス Makro-Planar T*2/50／50mm ／マニュアル露出(F2、1/40秒)／ ISO 800／ WB：2,600K

静寂を演出するため、被写体に寄ってシンプルな画面構成にした。背景を黒一色にすると深夜っぽさが増すが、さみしくなりすぎないよう、ネオンを差し色にした

朝の光の利用方法でイメージを膨らませる

写真・文●福井麻衣子

早朝は逆光と斜光を狙う

早朝 03

早朝のイメージといえば、澄んだ空気に光が降り注ぐ風景を思い浮かべるのではないだろうか。朝靄（もや）や、活動をはじめる前の街の雰囲気は1日のスタートにふさわしく、キラキラと輝いている。また、朝の空の色を残したロマンチックなシルエットの表現でも早朝の印象は強まる。そんな写真を撮るには順光以外、つまり逆光と斜光を利用すると良い。早朝は太陽がまだ低い位置にあるので、逆光や斜光になりやすく、そういった意味でも撮影しやすい。

逆光も斜光も露出補正が大きなポイントとなる。逆光で朝日の輝きを表現したい場合は、明るめに露出を補正し、シルエット表現の場合は暗部をしっかりと締める。斜光のまだらを生かすと、街を立体的に見せることもできる。立体感を出したい場合も明るめに補正すると良い。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／ EF70-200mm F4L USM ／200mm ／絞り優先AE(F5.6、1/500秒、+1.3EV)／ ISO 640／ WB：オート(G4)

爽やかな朝のイメージにするため、早朝の路地裏で太陽が逆光の位置になる方向から撮影した。逆光＋露出補正で朝靄を感じさせることができる

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／ EF16-35mm F2.8L USM ／16mm ／絞り優先AE(F5、1/500秒、+0.5EV)／ ISO 100／ WB：オート(M2、B2)

朝日による逆光でシルエットになった被写体の引き締め効果を生かし、切り絵のような余韻を感じる1枚に仕上げた

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／ EF16-35mm F2.8L USM ／ 16mm ／絞り優先AE(F5、1/500秒、+0.5EV)／ ISO 100／ WB：オート(M2、B2)

低い位置の光がサイドから建物に当たり、まだ太陽の光が届かない場所とのコントラストを利用して立体感を作った

照明の光で闇をドラマチックに演出するには

写真・文●中原一雄

ストロボ光を工夫して深夜を彩る

深夜 04

深夜の街は光が少ないため、表現が限られてしまうが、ストロボを使うことでドラマチックな表現が可能だ。深夜のスナップでストロボを使う場合、ただ正面から発光しただけでは面白くない。ストロボの特性を生かしてひと工夫してみよう。照射角を制御できるクリップオンストロボを持っているなら照射角を狭くして闇に浮かび上がるようにする表現がおすすめ。さらに応用テクニックとして、リモート発光すれば立体感豊かな表現ができる。ストロボをうまく使うコツはマニュアル露出で地明かりでの露出を先に決めておき、そこからストロボをONにして調光補正で全体の明るさを調整することだ。また、ストロボの発光面にカラーフィルターを付けると、色をかぶせる表現もできる。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF24-70mm F4L IS USM ／24mm ／マニュアル露出(F5.6、1/30秒)／ ISO 200／ WB：白熱電球

広角で撮影し、クリップオンストロボの照射角を意図的に狭くして被写体の中央にのみ照射。闇に光が浮き上がる効果を狙った

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF24-70mm F4L IS USM ／44mm ／マニュアル露出(F8、1/100秒)／ ISO 800／ WB：オート

正面から花に直接照射すると立体感がなくなってしまうが、リモートで斜め後ろから半逆光を意図的に作ることで立体感のあるドラマチックな写真になる

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF24-70mm F4L IS USM ／38mm ／マニュアル露出(F4、1/60秒)／ ISO 1250／ WB：オート

赤色灯を強調するため、全体に青い色を被せたい。そこで、青いカラーフィルターをストロボに装着した。青い光は夜の静けさを表現しやすい色だ

ストロボの前面に市販の青いセロファンを貼り付けている

早朝 深夜 05

露出補正で時間が持つ印象を強める

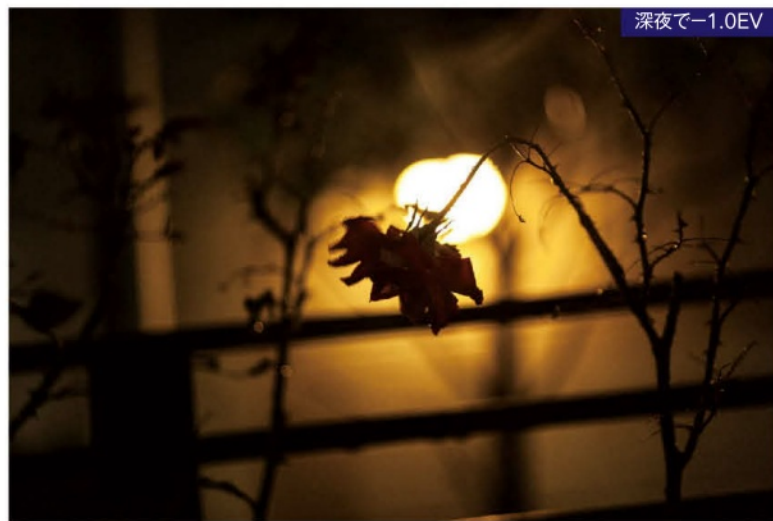
写真・文●大村祐里子

早朝の日差しと深夜の闇を作る

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ ZEISS Otus 1.4/55／55mm ／
絞り優先AE（F5.6、1/200秒、+1.0EV）／ ISO 125／ WB：4,400K

朝、離陸する前の飛行機をガラス越しに撮影した。露出をプラスに補正することで、海の青さや飛行機の白さが際立ち、爽やかな早朝らしさを表現することができた

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ ZEISS Otus 1.4/55／55mm ／
絞り優先AE（F4、1/400秒、+2.0EV）／ ISO 200／ WB：5,000K

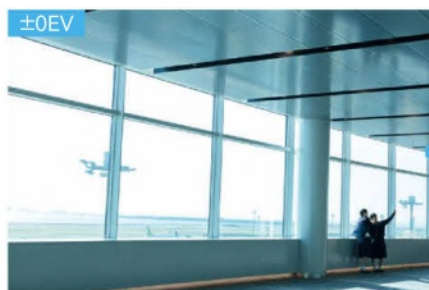
早朝、プールに反射する朝日を撮影した。逆光であるが、露出をプラスに補正することで木が黒っぽくなるのを防ぎ、朝の明るさを表現することができた

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／
コシナ ZEISS Makro-Planar T*2/50／50mm ／
絞り優先AE（F2、1/40秒、−1.0EV）／ ISO 800／ WB：4,800K

深夜、白熱灯に照らされる薔薇の花を撮影した。マイナス補正をして画面全体を暗くして深夜らしさを演出した。被写体の後ろに光源を配置することで、被写体が沈まないようにしている

早朝らしさを表現するためには、思い切って露出をプラスに補正して、明るく仕上げる。朝の柔らかく、包み込むような光は人間に早朝の明るい日差しを感じさせる。できるだけシャドウ部をなくすようなイメージで撮影し、さらにプラス補正をかけると良い。特に、逆光下では、被写体が黒っぽくなりがちなので、この手法は有効だ。あえてレンズフードを外して、フレアやゴーストを取り入れるのも手だ。

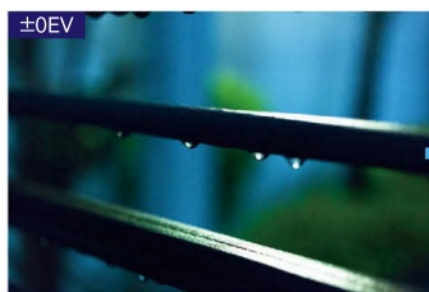
一方、深夜らしさを表現するためには、大胆に露出をマイナスに補正して、画面全体を暗く仕上げる。暗い露出は人間に闇と深夜を感じさせる。アンダーめに撮影をして、メインとなる被写体が沈まずに、背景が黒つぶれしない程度に補正すると良い。被写体と背景の明るさのバランスを見極めることが重要だ。撮影するシーンは被写体の背後に強い光源があるところが好ましい。光源としては、車やビルのネオンがおすすめ。そうすれば、画面全体を暗く調整した場合でも、ネオンがバックライトとなるので、メインの被写体がシルエットとなって浮き立ってくる。また、ネオンは差し色としても活躍する。暗く、平坦になりがちな深夜の写真に華やかさを添えることができるのだ。ただし、画面全体にキラキラしたネオンを入れてしまうと、にぎやかになりすぎて静寂が感じられず深夜のイメージから遠ざかってしまうので注意したい。

早朝はプラス補正で明るくする

早朝らしさを演出するときは、プラス補正をして明るく仕上げる。露出補正の値を考えるときは、画面全体を明るくするというよりも、シャドウ部を明るく持ち上げる、というイメージで調節すると良い。コントラストがつきにくいシーンを選ぶのがコツ。その方が、光が回り込んだ早朝らしい写真に仕上がる。白飛びしすぎると写真がつまらなくなるので要注意。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ ZEISS Otus 1.4/55／55mm ／絞り優先AE(F5.6、1/100秒、±0EV)／ ISO 125／ WB：3,900K

空港ではしゃぐ女子学生2人組を撮影した。+2.0EV露出をプラスに補正をすることで、人物の前面にまで光が回り込み「始まり」と「希望」を感じさせる朝らしい写真に仕上がった

深夜はマイナス補正で暗くする

深夜らしさを強調するときは、露出をマイナスに補正をして、アンダーめに調整する。補正するときは、背景が黒つぶれしない程度に暗くするのがポイント。そのためには、主題と背景の間に露出差があるシーンが良い。画面全体が暗めに仕上がるうえ、主題が何であるのかがはっきりと分かるからだ。その結果、静寂が感じられる「深夜らしい」写真に仕上がる。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ カールツァイス Makro-Planar T*2/50／50mm ／絞り優先AE(F2.8、1/30秒、±0EV)／ ISO 2000／ WB：2,500K

深夜、道端の柵についた水滴を撮影した。白い水滴が闇に包まれるような写真に仕上げたいと思ったので、背景が暗くなるように−2.0EV補正して、「深夜」らしさを感じさせた

COLUMN

朝焼けのグラデーションを美しく描く露出の決定

ブルーアワーともいわれる夜明けの空の色合いは、変わりゆくグラデーションが滑らかで、美しいトーンを見せてくれる。この微妙な色と明るさの変化を描くには、グラデーションのどの色を適正露出にするかがポイントになる。そのためには露出補正で調整する。空のブルーが黒くつぶれずに、かつ赤味の強い部分が適切に再現できるようにするためには、赤味の強い部分が適切な明るさとなるように露出を決定しよう。

写真・文•斎藤友覧

富士フイルム X-T1／XF10-24mmF4 R OIS／10mm(15mm相当)／絞り優先AE(F7.1、1秒、−0.7EV)／ISO 800／ WB：太陽光

オレンジ色が適正露出になるように、カメラの出た目から露出を−0.7EVして少しアンダーめに調整。ブルーからオレンジまでの朝焼けのグラデーションがきれいに表現できた

富士フイルム X-T1／XF10-24mmF4 R OIS／10mm(15mm相当)／絞り優先AE(F7.1、6秒、+1.0EV)／ISO 800／ WB：太陽光

明るくなってきた空の色が適正露出になるように、カメラの決定露出値から+1.0EV補正したところ、朝焼けのグラデーションがなくなってしまった

富士フイルム X-T1／XF10-24mmF4 R OIS／10mm(15mm相当)／絞り優先AE(F7.1、6秒、±0EV)／ISO 800／ WB：太陽光

カメラが決定した露出値の写真。白飛びが少なく、データとしては問題のない画像だが、黒つぶれが多く、赤味の印象が弱い写真となってしまった

06 早朝 深夜

WBで時間のイメージをはっきりさせる

WBで早朝と深夜の意味を表現

写真・文•茂手木秀行

WB：オート(A5 M2)

ニコン D700／Ai S Nikkor 24mm f/2.8／24mm／マニュアル露出（F4、5秒、−0.7EV）／ISO 800／WB：オート(A5 M2)

美しい星空を眺めた夜明け、そのまま散歩に出かけた。夢見る時間から覚めて、現実の時間がはじまる静かなイメージを、大きくアンバーに調整して表現した

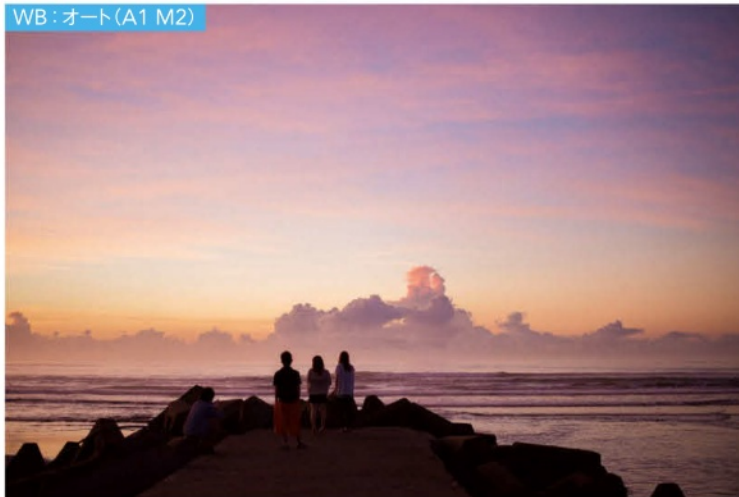
ニコン D600／AF-S NIKKOR 50mm f/1.8G／50mm／絞り優先AE（F1.8、1/640秒、+0.3EV）／ISO 800／WB：オート(A1 M2)

まさに今、日が昇ろうという頃。1日のはじまりを楽しみに思う時間を表現したい。アンバーとマゼンタ方向にWBを微調整することで赤味を足している

WB：電球

ニコン D600／AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED／26mm／マニュアル露出(F2.8、10秒)／ISO 6400／WB：電球

ガソリンスタンドの屋根が宇宙船のように見えた。そんな空想を楽しむ深夜の写真はWBを電球にして、全体に青味を足して宇宙を表現した

WB：オート(A1 M2)

写真の色再現には「測色的色再現」と「好ましい色再現」がある。「測色的色再現」は現物の色を再現することであるが、「好ましい色再現」とは多くの人が好ましいと感じる色を再現することだ。時間を写真で伝えるには「好ましい色再現」以上に意図的な色作りが重要である。色の好ましさにおいては、色そのものよりもまず被写体、表現したいものが何であるかがポイントとなる。早朝や深夜がこのような色であるというイメージだ。自分にとって早朝、もしくは深夜がどのような意味を持つのかを考えて色を調整したい。

一般的に、色の調整はWBの微調整で行う。これはRAW現像時に設定してもカメラで設定しても構わない。WBの設定はブルー（B）からアンバー（A）への色合いの変化と、グリーン（G）からマゼンタ（M）に色合いが変化する2軸の組み合わせによって調整する。例えば、早朝の暖かさを表現したいならアンバーの方向へ、深夜の寒さを伝えたいならブルーに動かすと覚えよう。グリーンとマゼンタはその際の補助として使う。被写体の色合いを強調するときは、同系色になるように、色味を抑えたいときは反対色に設定することが基本である。指標となる色再現があった方が色の補正は行いやすいので、オートWBで撮影してから微調整を行う。オートWBでは、さまざまな被写体やシーンを判別して正しく、かつ好ましい色再現になるよう設計されているからだ。

朝焼けはA5 M3で赤味を強調

朝焼けのシーンは上空の青い色合いを残しつつ、雲の赤味を強調するとエネルギッシュな印象となり、1日がはじまることを予感させるような色の表現となる。M方向の調整で青い色合いを調整し、A方向の調整で赤味を強調する。青から赤へのグラデーションの描写がポイントとなるので、美しいつながりとなるように調整したい。

ニコン D600／AF-S NIKKOR 50mm f/1.8G／50mm／マニュアル露出(F2.8、1/80秒)／ISO 100／WB：オート

オートWBは涼しい感じの色合いで、夜明けのドラマチックな印象は弱い

大きくアンバー方向に調整すると朝焼けの色合いが強調され、これから昇る太陽の強さを感じられる。マゼンタを加えて空を薄紫にし、夜が明け切らない感じを強調した

早朝のすがすがしさはB3 G2で作る

早朝のイメージといえば、澄んだきれいな空気。この空気感は、グリーンとブルーの調整で表現できる。すがすがしく爽やかな草原などの朝は、穏やかな青味がかぶった色味に調整すると良い。Bの調整で青味を足してから、G-M方向の色かぶり補正でG方向に調整すると、草原の緑色が強調されてしっとりとした色味になる。

ニコン D700／AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED／70mm／絞り優先AE(F4、1/30秒、−1.3EV)／ISO 200／WB：オート

空がグレーになり、朝の空気感は表現できていない

Bを3にしてブルーを強めることで、少し肌寒く涼やかな朝の空気が表現できた。草原の緑を強調するためにGも調整した。草がしっとりと生き生きした印象になった

人工光はB6 G5で色かぶりさせる

現代の蛍光灯や水銀灯は、かつてのそれらのように必ずしも緑色がかぶるわけではない。しかし、イメージする都会の夜景の色は、水銀灯で緑かぶりしたような色合いだ。Bで青味を足し、早朝を表現する色味よりもGを強くする(ここではG5)。人工光が緑かぶりすることで、冷たくて硬質な都会の夜の色合いになる。

ニコン D750／AF-S NIKKOR 300mm f/4E PF ED VR／300mm／絞り優先AE(F4、1/2秒、±0EV)／ISO 800／WB：オート

オートでは都会の夜の無機的なイメージにはならなかった

Bを最大値にして青味を加えるとともに、強いグリーンかぶりも与えた。全体的にシアン系のグリーンになり、無機質な夜景となった

星景は電球で青味を強める

星景写真の場合、青味は強めの方が宇宙のイメージを表現できる。WBを電球にして、全体を青く調整しよう。また、色モード(ニコンは「ピクチャーコントロール」)の彩度を少し下げて、全体を落ち着かせる。さらに色モードの詳細設定で明瞭度の設定ができるカメラでは、明瞭度を上げるとブルーの中で星がはっきりと浮き立つ。

ニコン D600／AF-S NIKKOR 28mm f/1.8G／28mm／マニュアル露出(F2、2秒)／ISO 6400／WB：オート

長秒ノイズの影響か、全体的に赤くなってしまっている

WBの詳細設定で補正すると、補正量が足りないので「電球」の設定した。ノイズの赤味が補正されて、青い星空が表現できた

07 深夜

ISO感度で深夜の微光を写し止める

写真・文●中原一雄

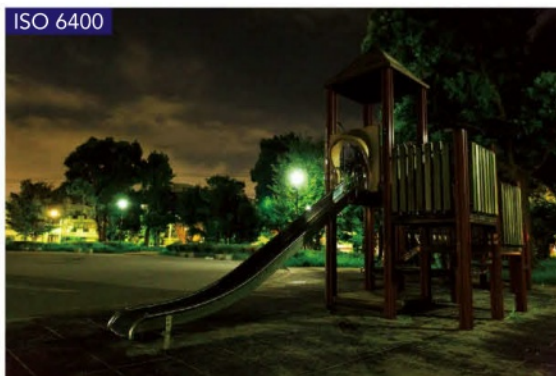
高感度を使った深夜のスナップ

暗い深夜は三脚を使わないと撮れないと思っている読者もいるかも知れないが、最近のカメラは高感度に強いため、手持ちでも十分に撮影が可能だ。撮影モードは日中と同じく絞り優先AEで良いが、F値は開放絞り付近にし、感度はISO 3200～6400くらいの間で調整する。手ブレ補正機能も積極的に活用したい。

また、夜間は絞り優先AEで撮ると黒が浮いてくる傾向があるため、撮影結果を見ながら露出をマイナスに補正してみることも大事だ。マイナスに補正すればシャッター速度が速くなるため、手ブレもしづらく一石二鳥だ。深夜の場合、街に存在する明かりは街灯や信号など限られたものしかない。これらのわずかな明かりをどう使うかを念頭に置きながら身軽なスナップを楽しみたい。

ISO 3200

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-70mm F4L IS USM ／40mm ／絞り優先AE(F2.8、1/80秒、−2.0EV)／ISO 3200／WB：太陽光

街灯が灯る歩道はISO 3200で撮影。マンホールへの街灯の反射と遠くの信号の玉ボケをアクセントに。−2.0EV補正して、光と闇のメリハリを出した

ISO 6400

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-70mm F4L IS USM ／27mm ／絞り優先AE(F2.8、1/20秒、±0EV)／ISO 6400／WB：4,200K

非常に暗い公園だったため、ISO 6400で撮影した。また、あえて露出を補正せず、水銀灯に照らされた闇を浮き上がらせてミステリアスな雰囲気にした

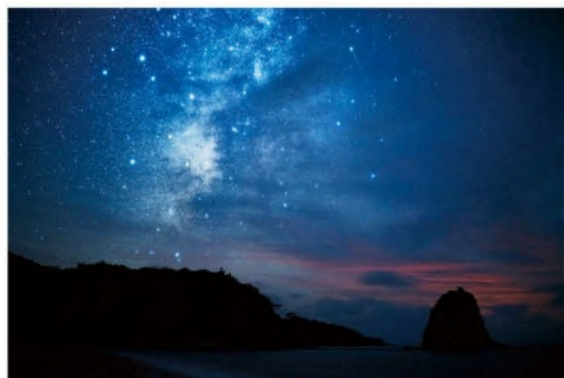
08 深夜

シャッター速度で星をはっきりと写す

写真・文●柏倉陽介

長時間露光による星景写真

星を点像でとらえるためのシャッター速度は、長年の経験から焦点距離ごとに決めている。16mmなら20秒、24mmなら15秒、35mmなら10秒という具合だ。それ以上のスローシャッターだと、わずかに光跡が流れていることが多く、もっと短い露光時間だと星の光が弱くなってしまう。撮影場所や天候によって撮影状況は変わってしまうので絶対とは言えないが、レンズの開放F値と「点像を保つためのギリギリのシャッター速度」を把握しておきたい。

また、逆にシャッター速度を遅くして星の光跡を長く描く表現もある。絞りはF2.8に設定、30秒のシャッター速度で50枚撮影し、画像処理ソフトで比較明合成すると、かなり光跡がはっきり写る。

ソニー α7 Ⅱ／Distagon T* FE 35mm F1.4 ZA ／35mm ／絞り優先AE(F1.4、10秒、+1.0EV)／ISO 3200／WB：オート

写真は沖縄の西表島で撮影した1枚。35mmの焦点距離のため10秒で撮影した。星の光をはっきりと写し止めることができた

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／20mm F1.8 EX DG ASPHERICAL RF ／20mm(32mm相当)／マニュアル露出(F2.8、30秒)／ISO 2500／WB：白熱電球／50枚を比較明合成

30秒の長時間露光で撮影した星の光跡を50枚つなげたもの。シャッター速度を遅くすることで、星の動きが表現できる(撮影：中原一雄)

シャッター速度で適正露出をコントロール

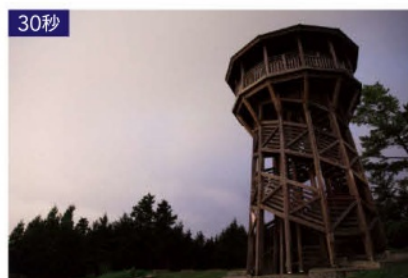
写真・文•中村勇太

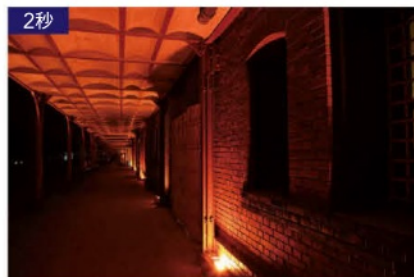
光源によるシャッター速度の違い

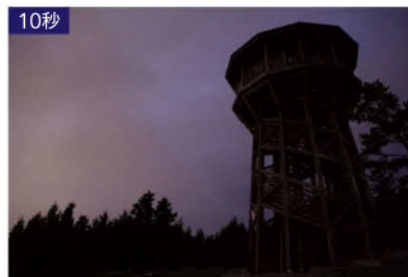
深夜の暗い場所において、適正露出を得ようとすると、明るいF値を使用したとしても、ある程度の露光時間が必要となる。また、光源の明るさの違いにより、適正露出を得るためのシャッター速度は違う。地明かり別に適切なシャッター速度の目安を知っておきたい。

街灯などの光源がある場所であれば、F8まで絞り込んでも10秒程度のシャッター速度で適正露出となるので、低感度での撮影が可能だ。光源がまったくない場所の場合はF4で30秒程度は必要となる。もちろん、シャッター速度と合わせて絞りとISO感度も適宜調整したい。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF24-105mm F4L IS USM ／24mm ／マニュアル露出（F8、10秒）／ISO 100／白色蛍光灯

蛍光灯が足元から照らしているシーン。道の奥まで見通せるほど明るい。10秒で適正露出となった

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF24-105mm F4L IS USM ／24mm ／マニュアル露出（F4、30秒）／ISO 1600／白色蛍光灯

山上に位置する公園を撮影。まったく街灯がなく真っ暗なシーンだ。30秒のシャッター速度で細部が見えてきた

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF24-105mm F4L IS USM ／24mm ／マニュアル露出（F8、2秒）／ISO 100／白色蛍光灯

光源付近は明るいものの、2秒ではだいぶ暗い印象となってしまった

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF24-105mm F4L IS USM ／24mm ／マニュアル露出（F4、10秒）／ISO 1600／白色蛍光灯

光源がまったくない場所のため10秒ではまだ暗く、黒つぶれが多い

時間の変化による色の違い

写真・文•中村勇太

早朝の空の変化を知っておく

1日の中で最も空の色に変化を感じることができるのが早朝と夕方だ。特に1日のはじまりを象徴する日の出の頃は、気温が低く、塵も少ないことから澄んだ風景が撮影できる。

早朝の空は日の出時刻の60分前から水平線上にうっすら赤味が現れる。その後の空の様子は目まぐるしく変化していく。40分前には空に赤から青にかけてのグラデーションが演出されて、日の出を迎えると、太陽近辺の赤色が一層濃くなる。日の出後の40分程度はグラデーションが美しいので、シャッターチャンスが続く。60分後には太陽は完全に上がる。

空の変化を日の出時刻の前後60分に渡り、とらえた写真。街の夜景と空のグラデーションを一緒に撮影するには日の出40分前から30分前がベストである。太陽が出てからは、空のグラデーションが急激に変化するため、シャッターチャンスを逃さないようにしたい

富士フイルム X-T10／ XF18-55mmF2.8-4 R LM OIS ／43mm（64mm相当）／絞り優先AE（F4.5、1/680秒、+2.0EV）／ ISO 200／ WB：オート（G+3）

逆光と露出補正プラスでキラキラとした朝の光をとらえる

福井麻衣子 Maiko Fukui

早朝を少し超えた時間帯、昇りかけた太陽の逆光の中に現れた猫をキラキラとした雰囲気を大事に切り取った。昇りかけの朝の早い時間の太陽は逆光を狙うチャンスだ。今回は日の当たる芝生を猫がウロウロしていたので、しゃがんだ低いアングルから、ちょうど木の陰に入る瞬間を狙った。露出をプラス補正しても、猫の白い毛並みが飛んでしまわないようにするためだ。おおよそ画面の左1/3あたりに猫を配置し、目線の先に白い空間を作り、猫の見つめる先を想像するようなイメージとした。動き回っている被写体なのでシャッター速度はやや速めになるように設定しているが、絞りを変えたくなかったので絞り優先AEでISO感度を調整することでシャッター速度をコントロールしている。

3STEPフォトテクニック

逆光の向きを探して葉の輝きを出す

今回の撮影現場はこのような場所である。画面左側の芝生がちょうど、芝生の中に撮影者が立ち入らず、逆光を狙える場所だったので、向かって左側に何か良い被写体がないか探した

2 露出 大胆にプラス補正して朝の爽やかさを演出

逆光では露出補正が重要だ。プラス側にしてキラキラ感を狙うかマイナス側にしてシルエット効果を狙うかで大きく印象が異なる。左上のような中途半端な露出補正は失敗写真に見えやすいので注意。白飛びが気になる場合は撮影時にある程度補正しておいてRAW現像で仕上げると安心だ

3 WB WB補正で緑を足して芝生を色乗り良く

逆光時にプラス補正するとふんわりした雰囲気やキラキラした光を得ることができるが、色がそのぶん薄く感じられることもある。その場合はWB補正で軽く色を乗せよう。今回は芝生に合わせて緑（G）をプラスしている

街路を広角で俯かんして都会に訪れる夜の静けさを伝える

鶴巻育子 Ikuko Tsurumaki

明るい時間帯は人々で賑わう街。それが深夜になるとまったく違う顔を見せる。その雰囲気を表現したかった。そのためには、レストランや飲み屋などの店も閉まり、人々が寝静まったころの深夜の0:00過ぎから明るくなる前の3:00ごろの時間帯に狙う。とにかく、街に動きがないことを伝えるのが目的のため、長時間露光で車のライトの軌跡を入れることもここでは避けたい。そしてハイアングルで撮影できる場所を探す。日中、人や車が行き交う道路を画面に多く取り入れ、それを深夜に撮って見る人に昼間とのギャップを感じでもらうわけだ。レンズは望遠で切り取ってしまうよりも広角を使う。家の窓を写すことで人々が眠っていると想像させ、街灯に照らされているひっそり静まりかえった道路がより際立つ。

3 STEPフォトテクニック

1 構図 高い場所を探して人気のなさを伝える

街の様子がよく見渡せる橋の上や、ホテルの部屋などの高い場所を探しておく。高い位置からハイアングルで撮影すると、道から撮影するよりも人気がないことが確認しやすくなるためだ

2 画角 広角で環境を入れてひっそり感を出す

焦点距離35mm相当でロータリーの丸い形の部分を切り取ったもの。道路ということは認識できるものの、深夜の人気のなさを表現するというよりは、形の面白さに着目したグラフィカルな表現になっている

3 WB 太陽光にすることで街灯の色味が忠実に

街灯の色は国によって異なる。ここではヨーロッパの街灯の色味を見たままの印象で再現するため、WBは太陽光に設定する。WBをオートや電球にしてしまうと、補正されてしまい赤味が薄れてしまう

キヤノン EOS M3／ EF-M11-22mm F4-5.6 IS STM ／13mm（21mm相当）／絞り優先AE（F10、1/6秒、－0.3EV）／ ISO 6400／ WB：太陽光

教会の十字架と星の3つの十字を写し込んで祈りの場所を表現する

船橋弘範 Hironori Funahashi

撮影地はニュージーランド南島にあるテカポ湖畔にある「善き羊飼いの教会」だ。祭壇の向こうにはサザンアルプスの山々とテカポ湖の美しい風景が広がっており、静かな時間が流れていく。その中で敬虔な信者が何かを祈っている。その思いを込めて、教会の屋根にある十字架とともに、天の川の中にある南十字星、ダイヤモンド十字、ニセ十字の4つの十字で構成した。撮影では星にピントを合わせることに注意を払っている。ISO感度を高くし、明るい星を中央に入れ、ライブビューを最大にして、星像が最もシャープに見えるようピントを合わせる。ピント位置が決まったらパーマセルテープでピントリングが動かないように固定しておく。気温は－10℃くらいまで下がり、湿度も高いので、ヒーターをレンズに巻く。

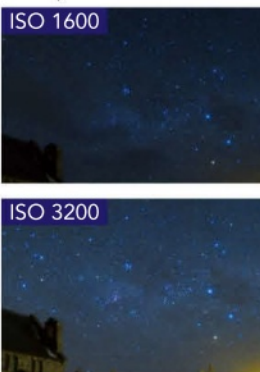
3 STEPフォトテクニック

1 時期 シミュレーションソフトで対象や時期を検討

ステラナビゲータというソフトを使う。21:00ごろに天の川が真上に屹立（きつりつ）し、2時間後に教会の十字架と天の川の中の3つの十字が良いバランスになると想定

2 画角 広角&ローアングルで星空と教会を入れる

ステラナビゲータは、カメラとレンズの焦点距離を指定すると、星空の写る範囲を教えてくれる。現場でも想定どおりの星空が入った。三脚を一番低くすることで、建物と十字架の両方がうまく収まった

3 ISO ISO 3200の高感度で星空をきれいに写す

ISO感度は星空がうまく写るように3200に。絞りは周辺の星像が歪むのを防ぐために開放から1絞りして、露光時間は星が流れないように20秒とした。WBは街灯のナトリウム灯対応にして、ピクチャーコントロールはニュートラルにした

ニコン D810A ／ AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED ／14mm ／マニュアル露出（F3.2、20秒）／ ISO 3200／ WB：蛍光灯（ナトリウム灯混合光）

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF24-105mm F4L IS USM ／47mm ／絞り優先AE（F16、1/20秒、+0.3EV）／ ISO 400／ WB：太陽光

光で刻々と変わる表情に着目して一面の霜に覆われた絶景をとらえる

金子美智子 Michiko Kaneko

小田代が原のカラマツが黄色く色づいたので、日の出前から撮影に臨んだ。「小田代が原の貴婦人」と呼ばれるダケカンバのを画面の真ん中にして、霜で真っ白になっている湿原と金屏風のように貴婦人の後ろに立つ黄色く色づいたカラマツ。そこに斜光が差し込み、光り輝く様子を広い構図でとらえている。時間を追うごとに刻々と被写体の表情が変わっていくため、2時間以上は粘って撮影を行いたい。小田代が原は広角でも望遠でも切り取れるので、持参するレンズは幅広い焦点域でそろえておこう。また、撮影では絞り優先AEを使用し、レンズ描写を生かして画面内の被写体をシャープに描写するため、ここではF16まで絞り込んでいる。ただ、それを超えると回折現象で描写が甘くなるので絞り過ぎないようにする。

3 STEPフォトテクニック

1 時刻 日の出前に赴き表情の変化を撮る

メインカットと同じ場所で1時間早い5:30に撮影したものだが、まったく異なる表情を見せている。山の裏に太陽があり、上空にある雲に朝焼けが反射して空が焼けている。日の出前の気温の変化で朝もやが現われて幻想的

2 構図 斜光と陰を入れてメリハリを出す

小田代が原の貴婦人を主役に画面を構成。その後ろにあるカラマツの黄色と右方向から差し込む斜光を強調して構図を整えた。人間は明るい方に目がいくため、手前に陰を入れて明るい主役の方に視線を誘導している

3 画角 主役の大きさで脇役を変える

メインカットは47mmで多くの要素を入れたものだが、上の写真のように、200mmの望遠で主役の小田代が原の貴婦人を大きく撮ると、霧氷に包まれ光り輝く様子をとらえられる。主役と脇役を意識して構図を決定しよう

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF24-70mm F2.8L Ⅱ USM ／35mm ／絞り優先AE（F2.8、1/100秒、+0.7EV）／ ISO 3200／ WB：オート（M+3）

3 STEP フォトテクニック

1 構図 額縁効果を生かして視線を奥に誘導する

手前のアーチを額縁のようにとらえ、抜ける橋の景色とともに、色のコントラストで引き立て合う構図を狙った。ほかの要素は構図から排除し、見ている人がここに立っている感じになればいいなと考えて、アングルは目線の高さに決定している

2 構図 要素を少なくして橋への期待感を強調

少し離れた位置から橋塔のアーチも含め横位置でとらえたカット。要素が多く何を撮りたいのか分からない。まずは自分が何を素敵と感じたかを言葉にしながら画面を整理していくと良いだろう。今回は「アーチの内側とつながる橋への期待感」だ

3 ISO ISO感度を上げて手ブレ対策を行う

薄暗い早朝に、手持ち撮影していたのでISO感度は手ブレしないようにISO 3200とした。せっかく撮影しても手ブレをしていてはもったいないので、早朝の撮影では高感度を使用したり、可能ならば三脚や一脚を持参するなど、自分なりの手ブレ対策をしておきたい

人気観光地を人の少ない早朝にしっとりと静かな雰囲気で仕上げる

福井麻衣子 Maiko Fukui

プラハの人気観光スポットであるカレル橋。昼も夜も魅力的だが、なるべく人を入れず静かに撮影するためには早朝がベストだ。日の出から日の出30分後くらいの明けて行く空と、まだ残る外灯の明かりを狙い、完全に日が昇ったら撮影終了という気持ちで暗いうちにスタンバイをした。橋を行き来しながらアングルを探し、橋の出入口の橋塔から、続く橋を眺めているような構図で切り取ることにした。朝の空の青さが感じられるように、橋塔のアーチは内側だけでなく手前の外側も少し入るように気をつけて、橋のセンターからまっすぐに切り取るように気をつけた。曇りの朝だったが、ライトアップされたアーチ内側のアンバーと、外の早朝のブルーが色のコントラストを生み、お互いを引き立て合っている。

人の気配を排除し眠らない都市をスローシャッターで表現する

中原一雄 Kazuo Nakahara

深夜の都市は眠ることがない。22:00を過ぎても街のシンボルにはライトが灯り、通りには車が行き交うため、一見すると時間の早い普通の夜と同じように思えるが、1つ大きな違いがある。それは人間の存在感だ。日没後の19:00や20:00といった時間帯は人間の活動の気配があるが、遅くなると繁華街を除いてそれが感じられなくなる。ここでは人間の気配が消えてもなお活動する都市の深夜を表現することを試みた。大都市では深夜に人が少なくなるビジネス街近くが狙い所だろう。スローシャッターで車の光跡を表現する場合、カメラの設定はマニュアル露出で、光源の光条が適度に出るF値を先に決め、次にシャッター速度を伸ばしていくと良いだろう。WBは白熱球など寒色系のものが深夜によくマッチする。

3STEPフォトテクニック

1 構図　光跡を入れて静と動を対比

深夜の街の活動を表現するため、低い位置から道路を積極的に入れて光跡がよく写る構図とし、街のシンボル（静）と車の光跡（動）を対比。街並みだけを意識していつもの目線に三脚を立てると街のダイナミズムがない

2 絞り　F値を調整して光条の長さを検討

街灯など強い点光源からはF値に応じて光条が発生する。これはF値に比例して大きくなるため適切なサイズを選択したい。F値がF4だと迫力がなくなり、大きすぎると光条がうるさくなるため、ここではF13を最適とした

3 露光　NDフィルターでスローシャッターに

時間帯や信号のタイミングなどもあるが、20秒では思うような光跡が得られないことがある。ここでは通りにまんべんなく車の光跡を配置するためND8フィルターを装着し、120秒の長時間露光を行った

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF16-35mm F2.8L Ⅱ USM ／21mm ／マニュアル露出（F13、121秒）／ ISO 50／ WB：3,000K（M+5）

真夜中の高速道路でとらえるドアミラーに映った疾走感の迫力

大村祐里子 Yuriko Ohmura

真夜中の高速道路にて、ドアミラーを利用して車の疾走感を表現した。まず時間帯は道路が空いている22:00以降がオススメ。助手席に座り、集中して、ひたすらドアミラーに映る景色を撮影していく。撮影時に注意すべきことは2点。1つめは色である。真夜中の写真はどうしても写真全体がアンダーめに沈みがちだ。画面全体が暗い印象になるのを防ぐため、差し色が画面に入ったときにシャッターを押す。この場合はオレンジ色を採用した。2つめは光である。真夜中の写真は、強い光源が1カ所に入るとそれがアクセントになり、画面全体にメリハリがつく。今回は、後続車のヘッドライトが強く光る瞬間を狙って撮影した。以上の2点を考慮して撮影すると、真夜中でもバランスの良い写真に仕上げられる。

3STEPフォトテクニック

1 構図 ミラーの中の被写体を主役にして視線誘導

絞りを浅くした状態で、ドアミラーの中に映った景色にピントを合わせ、ミラーの中の景色のみがはっきりと見えるような構図にした。ドアミラー後続の車がハッキリと映るので、高速道路を疾走している雰囲気を出せる

2 AF 鏡像の車にピントを合わせる

ミラーそのものにピントを合わせてしまった場合。高速道路上を走っているということが分かりづらく、ブレもないので疾走感も伝わりづらい。ミラーの中に映る被写体か、車の外側の背景どちらかにピントを合わせるべき

3 露出 疾走感とブレ感は1/50秒で両立できる

疾走感を出すためにはシャッター速度を遅くして、被写体をぶれさせた方が伝わりやすい。メインカットは、車の振動でややぶれる1/50秒で撮影している。ただし、1秒まで遅くすると、ぶれすぎて何が写っているのか分からなくなるので注意が必要だ

富士フイルム X100T ／23mm（35mm相当）／マニュアル露出（F2、1/50秒）／ ISO 800／ WB：4,200K

キヤノン EOS M3／ EF-M18-55mm F3.5-5.6 IS STM ／18mm（29mm相当）／絞り優先AE（F4、1/320秒、－0.7EV）／ ISO 160／ WB：くもり

太陽に延びる東への道を探して眠りから覚める街の様子を伝える

鶴巻育子 Ikuko Tsurumaki

早朝、空がだんだんと明るくなり始めたころ、活気のある昼間の街とは違った、眠りから覚めた街の様子は清々しい。その雰囲気を出したく、朝日が昇る時間帯を待つ。太陽が昇る位置は季節によって違うため、あらかじめ東の方向に抜けのある長い道路を探しておいた。トラムの線路がある場所は、朝も夕方もそこに光が当たるととても印象的な光景になる。それを狙い、太陽の光が道路に反射したところでシャッターを切った。街全体にはまだ光は回らなく、太陽が低いわずかな時間帯が、線路や車、雨上がりの道路の反射を美しく見せることができる。広角レンズで多く情報を入れることで、街の雰囲気を伝えるのと同時に、影の部分を画面内に多く入れ明暗互いの部分を強調し引き立て合っている。

3STEPフォトテクニック

1 構図 東向きの道を探して太陽に向かうように

偶然出合うこともあるが、ちょうど太陽が昇ってくる東向きの見通しの良い道を探しておく。最近は太陽の位置や日の出の時間を調べられるスマホアプリがあるので、それを活用しても良いだろう

2 画角 広角で周囲を入れて街の様子を伝える

広角レンズを使用して、太陽が当たる部分だけではなく、周囲の情報をたくさん入れる。道路の両脇にある建物や道路の端など、光の当たらない影の部分が画面内に入れることで、光の部分がより際立つことになる

3 露出 マイナス補正して暗部を締める

路面に当たっている光の部分を強調させるために、露出はアンダーめに設定する。それによって、暗い部分がより締まる。マイナスに振りすぎても良くない。光のグラデーションが美しく出る露出を決めるのがポイントだ

ソニー α7R II／ Distagon T* FE 35mm F1.4 ZA ／35mm ／プログラムAE（F2、1/5秒、±0EV）／ ISO 400／ WB：5,000K

太陽光が差し込む直前に撮って淡い青に包まれた池の鏡面風景に

柏倉陽介 Yosuke Kashiwakura

御射鹿池（長野県茅野市）は農業用のため池でありながら、日本を代表する画家・東山魁夷先生も作品に描いた有名な風景だ。風が止めば森が池に映り込み、美しい光景が現れる。撮影地に到着したのは深夜2:00。日の出前の薄明かりから池のほとりに待機した。日の出の斜光や昼間の日差しが入り込むよりも、全体的に均一な光で池を撮りたかった。太陽が昇る前であれば淡い青に統一され、写真全体が幻想的な色合いに染まると考えた。また、日の出前の薄明かりでWBをオートにすると暖かい色になるので、マニュアルで5,000Kに固定している。この日は運良く無風で鏡面にしやすかったが、水面にわずかなゆらめきがあったので、絞りを開け気味にしてシャッター速度を稼ぎ、水面の動きを止めている。

3STEPフォトテクニック

1 構図 池の鏡面を利用して上下のシンメトリーに

鏡面の映り込みによる不思議な風景を強調したかったので、上下に空を入れ込み、森が空間に浮かんでいるような立体感を狙った。写真の中央に水平線を配置し、上下に完璧なシンメトリーを作る

2 時刻 色合いを想像して日の出前を狙う

日の出前の青い時間帯を過ぎると、太陽光によって木々に本来の色が現れてくるため、目指す雰囲気から少し外れた色合いになってしまう。自分が何を撮りに来たのか、撮れる時間帯はいつなのかを事前に把握しよう

3 階調 階調補正機能で明暗差を均一化

階調補正機能はとりわけダイナミックな風景に多用する場合がほとんどだが、今回の撮影では明るい空と暗い森の明暗差を均一化するために使用。全体のトーンを整えてくれ、こうして落ち着いた景色にも効果を発揮する

背景に光跡を配置して華やかな夜のポートレートを撮る

魚住誠一 Seiichi Uozumi

夜のポートレート撮影は、いわずもがな暗いので、モデルの顔を明るく写すことがむずかしい。そこで手っ取り早いのがストロボを使った撮影なのだが、ただ正面から光を当てただけだと顔は明るくなるものの、今度は背景が真っ暗になり、面白みのない写真になってしまう。深夜ならではのポートレートで誰もがやってみたいと考えるのが、光跡を背景にした表現ではないだろうか。

後幕シャッターによるスローシンクロで撮影すると、モデルの顔は明るく、かつ背景の車の光跡を自然な状態で伸ばすことが可能だ。ストロボはモデルの斜め上から顔に当てて、影ができないように顔を明るくすると同時に、スローシャッターで車のテールライトから伸びる光跡のラインを作っている。

3 STEPフォトテクニック

1 照明 後幕シンクロにして後ろに光跡を伸ばす

後幕シンクロとはシャッターが閉じはじめる直前にストロボを発光する機能。スローシャッターによって光跡を写した後、モデルにストロボを照射するので、背景の車の光跡がライトから後ろに伸びるように表現できる。一般的にはストロボメニューの詳細設定で設定する。先幕シンクロの写真はライトよりも前に光跡が伸びて不自然だ

2 角度 レンズの真上から外部ストロボを発光

モデルの顔に不自然な影ができないように、レンズの正面斜め上からストロボ光を打ち下ろしている。内蔵ストロボでも可能だが、顔に影を作らないために、外部ストロボをワイヤレスで使用すれば照射角度の自由度が高まる

3 露光 1/15秒の露光だと車が止まってしまう

光跡を作るためと、車の像を消すためにスローシャッターにする。上の写真は1/15秒で撮影したもの。光跡の長さが短いし、車の像がしっかりと写し止められてしまった。1/2秒程度のスローシャッターで撮影する

キヤノン EOS-1D X ／タムロン SP 35mm F/1.8 Di VC USD ／35mm ／マニュアル露出（F4.5、1/2秒）／ ISO 200／ WB：オート

モデル●池田ショコラ（オスカープロモーション）

星の軌跡を画面に取り入れて絶景をより一層の異世界にする

米田 誠 Makoto Yoneda

写真の場所は説明の必要もないほど撮り尽くされた場所の1つであろう、茨城県の神磯である。海から突き出た岩場に鎮座する鳥居が、とても印象的だ。ここで撮影される写真の多くは日の出を狙ったものだが、今回は早く現地に入って真夜中の情景をとらえようと考えた。当日は星がたくさん輝いていており、この異質な世界感をより印象的に切り取るため、数十分という時間単位で星をとらえて時の流れを演出している。その際、シャッターを開けっ放しにする伝統的な撮影方法では、デジタルカメラの場合、空が明るくなりすぎてしまったり、イメージセンサーが長時間作動することによる熱の影響で、ノイズまみれになってしまうため、複数枚の写真を使った「比較明合成」という手法で仕上げている。

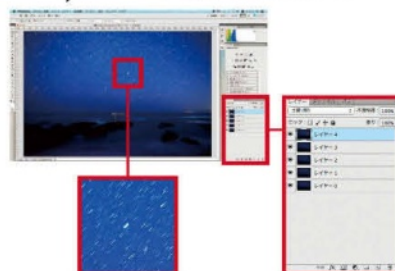
3STEPフォトテクニック

1 構図 完成をイメージして空の配分を検討

鳥居を主役に考えているが、その存在感が強いため、中央ど真ん中への配置は避けている。空の割合を大きくとることで鳥居と星のバランスに配慮。その際、星の軌跡が描かれた最終形をイメージすることが大切だ

2 撮影 マニュアル露出で99枚分撮る

F2.8、30秒のマニュアル露出で撮影。同一構図の写真を連続撮影していく。撮影方法としては、連写モードに設定の上、レリーズのシャッターをロックして連続撮影している。インターバル機能よりも撮影間隔が短い

3 合成 99枚の写真を比較明合成する

比較明合成はPhotoshopで行うのが一般的。ただ、この方法は処理に時間がかかるので、比較明合成に特化したフリーウェアを使うのも手だ。Webで代表的なものが見つかる。パソコンへの負荷も少なく使い方も簡単だ

ニコン D800E ／ AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED ／24mm ／マニュアル露出（F2.8、30秒）／ ISO 800／ WB：3,350K ／99枚を比較明合成

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／コシナ ZEISS Makro-Planar T* 2/50 ZE ／50mm ／マニュアル露出（F8、1/100秒）／ ISO 200／ WB：4,600K

早朝の飛行機の窓からとらえる朝もやに包まれた都市の非現実感

大村祐里子 Yuriko Ohmura

朝もやに包まれた都市の非現実感を表現するには、かなりの上空から俯かんで撮影をすべきだと考え、早朝6:00過ぎに飛行機に乗った際に窓から東京の街を撮影した。撮影時に最も気をつけるべきことは3つ。1つめは、シャッターチャンスを見逃さないこと。当たり前だが飛行機は勝手に進んでしまうので、自分の良いと思った場所で止まることはできない。集中して良いと思ったタイミングでひたすらシャッターを切ることが大切である。2つめは、窓の映り込みに注意することである。機内のライトなどが映り込まないように、窓にぴったりとレンズを付けて撮影をすべきである。3つめは、街全体を俯かんで収める場合は、絞って撮影をすること。絞った方がパースが際立ち、写真に奥行きが生まれる。

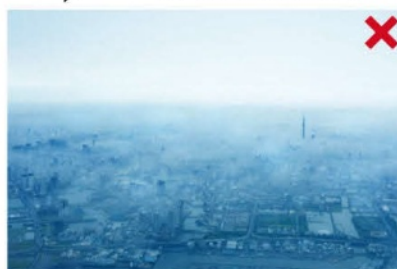
3 STEPフォトテクニック

1 構図 背の高い被写体で主役を明確にする

都市のすべてが朝もやに飲み込まれてしまうと何を伝えたいのか分からなくなってしまうので、主役として東京の象徴であるスカイツリーが目立つような構図にした。街の象徴であるビルが目立つような構図でも良い

2 構図 主役は1つに絞って浮遊感を強調

スカイツリーのほかに、川を大きく画面内に取り入れてみた。これではスカイツリーが主役なのか川が主役なのか分からなくなってしまう。できるだけ主役を1つに絞り、その浮遊感を出した方が意図が伝わりやすい

3 露出 +2.0EVのハイキーで非現実感を演出

朝もやの白さを際立たせ、スカイツリーを浮き立たせて非現実感を演出するには、ハイキーに仕上げた方が良い。適正露出で撮影をすると手前の街並みが目立ってしまい、現実的な雰囲気になってしまう

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／ EF17-40mm F4L USM ／17mm ／絞り優先AE（F8、1/350秒、±0EV）／ ISO 1600／ WB：4,800K

早朝の清涼感あふれる色彩と奥行き感が強調された構図を求めて

郡川正次 Masatsugu Korikawa

渋谷駅周辺の再開発で最後まで残ったJR渋谷駅も改修工事が始まった。そんな休日早朝の駅周辺はオールナイトをした若者たちで人波が途絶えることがないのだが、始発電車が出てしばらくの間ひとときの静かな時間帯が訪れる。遠からずして見ることができなくなってしまう風景。それをしっかり記録しておくことは写真というものが背負わなければならない使命だ。それも未来までも見通せるような良く晴れた日に、駅周辺の人波に惑わされない早朝を選んで撮りたいと思った。実際に撮影場所に選んだのは渋谷駅東口の歩道橋の上だが、この時間帯は人通りがほとんどなくてカメラアングルを変えたり、構図を工夫したりといったことが気兼ねせずにできる。カメラポジションを変えてじっくり撮ってみよう。

3STEPフォトテクニック

広角の遠近感で奥に延びる迫力を

同じ場所を時間帯（15時）と焦点距離（24mm）を変えて撮ったものだが印象は大きく変わる。通行人は画面のアクセントにできるが、焦点距離は24mmでは奥に突き抜けていくような遠近感が乏しくもの足りない

2 構図 手前の要素に近づき奥行きを強調

メインカットよりも撮影ポジションが左に寄り、少し高くなっている。右の案内板が寝てしまって遠近感が乏しくなる。また画面のアクセントとして重要な役割を果たしている歩道橋の手すりへの青空の映り込みが得られない

3 WB 4,800Kに設定して早朝の清涼感を出す

早朝の清涼感を出すために青味がかった色合いにしたかったのだが、カメラのWBを白熱電球に設定してしまうと青味が強くなりすぎてしまう。ここではWBを低めに設定して青味が強くなるようにした。オートWB（6,250K）だと左上の写真のようになる。これを4,800Kに調整している

上弦下弦の月の明かりを生かして星と地上の両方を幻想的にとらえる

茂手木秀行 Hideyuki Motegi

満月の夜には、ほとんどの星が写らない。満月が明るすぎるからだ。そこで、上弦の月か下弦の月を狙うと星も写り、地上の風景も明るく照らされて双方を写し取れる。さらには月が出てくる時間もしくは月が沈む時間を狙うと良い。月齢によって時間は前後するが、おおむね22:00～2:00の間だ。その時間、上弦の月では月が沈む時間、下弦の月では月が出てくる時間となる。逆光では星が写らないので、上弦の月では東の空、下弦の月では西の空を狙う。そのときに出ている星座や明るい星は季節ごとに違うので、事前に撮れる星空を調べておこう。月のない夜の星景写真では、地上の風景は影絵のようになるが、上弦あるいは下弦の月が適度な明るさの照明になり、星空も地上もしっかりと写し止められる。

3STEPフォトテクニック

1 月齢 月齢をWebで調べて上弦下弦の月を知る

月齢は事前にWebで調べると良い。『こよみのページ』の月齢カレンダーが便利だ。今年の11月の撮影に適した時期は11月3日前後、11月19日前後だ。その期間に空のきれいなところに行こう

『こよみのページ』URL：http://koyomi.vis.ne.jp/

2 構図 星座が引き立つ黄金バランスに

星景写真では星空と地上の景色を表現したいので、基本的に2分割構図もしくは3分割構図となる。さらに上部の縦中心線付近に明るい星や目立つ星座を配置すると、地上が暗くても視線を中央に誘導できる

3 WB RAW現像で青味を出す

撮影時はRAWでオートWBで撮影し、RAW現像で細やかな色調整を行う。この写真ではちょうど5,000Kを示した。色温度を青い方に動かしてイメージする色合いを作る。夜空は霞の度合いや遠くの市街光の影響を大きく受けるので、色合いが大きく変化することも覚えておこう

ニコン D700／ AI Nikkor 24mm f/2.8S ／24mm ／マニュアル露出（F2.8、30秒）／ ISO 1600／ WB：3,400K

北極星を正確にとらえて光跡の中心を山頂に合わせる

金子美智子 Michiko Kaneko

奥日光にある男体山と絡めて、北極星を中心に星がぐるぐる回る光跡の円周撮影をした。このような撮影は、やみくもにレンズを向けて撮れるものではなく、北極星がどこにあるかを正確に把握しつつ、ほかの被写体とどのように絡めるのかを考える必要がある。また、星の撮影ではできるだけ街明かりの少ないところを選ぶほか、月明かりの影響も受けるので、新月の日がベストだ。今回の場合では、中禅寺湖畔の街明かりが露出オーバーになるのを避けるため、街明かりが減る遅めの時間帯に撮影している。街明かりが山に反射することで、男体山をくっきりと撮影できた。北の空の星は1時間に15度移動するが、ここでは星を点でとらえるのではなく、線を引く光跡となるように、バルブで時間をかけて撮影している。

3STEPフォトテクニック

コンパスを使って北極星を見つける

北極星は2等星で比較的明るい星なので見つけることができる。北斗七星の柄の先端部分の星から数えて6番目と7番目の星を結び、そのまま5倍延ばした所にある。また、スマートフォンなどのコンパスを使って北を向き、例えば北緯36度であれば、地上から36度の高さの位置に北極星がある

2 MF

ライブビューで拡大して正確に

星をきれいに写すには精密なピント合わせが大切だ。MFにしてライブビューで星を拡大し、ピンボケの状態からなるべく小さな点になるようにピントをしっかり合わせる。ピクチャースタイルは、被写体そのものの色を再現できるスタンダード、または忠実設定にする

3 露光

バルブ機能で25分の長秒に

16mmで大きく空を入れ星の円周の動きを入れる。メインカットは、カメラのバルブ機能を使って時間をかけながら、星の円周の動きを撮影する方法をとっている。何枚もの写真を撮影してその写真をパソコンのソフトで合成させる方法は用いていない

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF16-35mm F2.8L Ⅱ USM ／16mm ／マニュアル露出(F9、25分)／ ISO 200／ WB：オート

3 STEPフォトテクニック

1 構図 副題の緑で主役の渓流を引き立てる

写真はメインカットとほぼ同じ撮影位置から狙ったものだが、同じ縦構図ながら渓流を主体に写している。渓流の様子はよく分かるものの、その深さや奥行きが分からず作品として面白味に欠ける。渓流に立体感が出るように周囲の緑を取り入れたい

2 画角 ズーミングで変わる表現の違いを撮る

広角で真下の渓流から奥の峡谷までをとらえると、レンズの描写特性によって遠近感が誇張される。手前に広がる流れの様子が鮮明に描かれ、広大な風景となる。一方、焦点距離を伸ばして奥の狭い部分を狙うと絶壁に囲まれた中を流れる急流を表現できる

3 WB 4,000Kにして記憶色に近づける

夜明け間近の神秘的なブルートーンを表現するために、WBをマニュアルで4,000Kにして青味を強調する。渓流の青や木々の緑の色合いが幻想的に仕上がる。一方、カメラ任せのオートではその印象が弱くなってしまう。RAWで撮影して現像時に微調整を行っても良い

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-105mm F4L IS USM／32mm／
絞り優先AE（F18、0.6秒、+0.7EV）／ISO 200／WB：4,000K

青味の強い時刻とハイアングルで渓流の静けさと立体感を生み出す

早朝 04:30

斎藤友覧 Tomomi Saito

夜明け間近の風景はブルートーンが強く表現されて静けさが漂い、神秘的な表情を見せてくれる。今回は神秘性をより強く描写するため深い峡谷を選んだ。手取渓谷（石川県白山市）は手取川の急流が岸壁を浸食して作り上げた峡谷で取り囲む新緑が美しく、黒々とした絶壁とのコントラストも魅力的だ。撮影は橋の上から行い、真下を流れる急流とともにさまざまなアングルでとらえられる。青味を記憶色に近づけるため色温度を4,000Kで撮影。カメラアングルを真下に向けるには大きく開脚できる三脚が有利だ。また、暗い時間帯の撮影はシャッター速度が遅く、カメラブレには細心の注意を払いたい。PLフィルターを使うと雪解け水独特の色合いや輝きが描写できないため使用は控えた方が良いだろう。

ROAD TO ALASKA

NORIO MATSUMOTO

松本紀生

ニコン D4／ Ai AF-S Zoom Nikkor ED 28-70mm F2.8D(IF)／70mm ／シャッター優先AE（F10、1/1,000秒、±0EV）／ISO 400／ WB：晴天

延々と続く原野の一角に数千頭のカリブーが集う。残雪が酷暑や蚊の大群から彼らを解放してくれる。天敵不在でも常に身の危険にさらされるカリブーたちの束の間の休息

何を撮ったかよりもどう撮ったのか－。そこにこだわってアラスカを撮り続けています。撮影を通して得られる“充足感”を大切にしたいからです。初めて彼の地を訪れてから今年で22年になりますが、この信条を貫き通す強さがほしいと、いつも願っています。

できるだけ人のいない原野で、長期間、一人でキャンプをしながら。これが僕の撮影スタイルです。この過程をおろそかにすると、いい写真が撮れたとしても心からの喜びは得られません。ただし、ヒグマを撮る場合に限っては、ガイドを雇います。やはり命あっての取り組みですからね。

カリブーや紅葉の撮影ではセスナで北極海沿岸まで運んでもらい、無人のツンドラでテント生活をします。クジラの旅の拠点は無人島。ゴムボートを運転しながら静かにシャッターを切ります。オーロラを撮るのは氷河の上。自作のかまくらで50日間ひたすら光の舞を待ちます。

“どう撮ったのか”が作品に現れるとは思いません。効率的に撮影をする方法もあるのですが、それはもっと年をとってからにしておくつもりです。アラスカを通して得られる充足感とは、僕にとって生きている証のようなものなのでしょう。

さあ、23年目のアラスカです。

写真展情報

松本紀生写真展

アラスカ原野行

場所：富士フイルムフォトサロン大阪
会期：2015年10月23日(金)～10月29日(木)
時間：10:00～19:00(※最終日は14:00まで)
※トークショー10月25日(日)14:00～15:30
(無料100名事前受付)
※フォトサロン札幌は2016年1月8日(水)～
1月13日(木)まで

❶ ニコン D4S ／ AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR ／400mm ／ シャッター優先AE（F5.6、1/2,500秒、±0EV）／ ISO 2800 ／ WB：オート

そのヒグマは10m先の川の浅瀬でベニザケを追い掛け回していた。追うも逃げるも必死。こちらの存在などお構いなしである。邪魔者でないことが何だか嬉しかった

❷ ニコン D4S ／ AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR ／400mm ／ シャッター優先AE（F6.3、1/5,000秒、−0.3EV）／ ISO 400 ／ WB：オート

ブリーチと呼ばれるザトウクジラの大ジャンプ。弾けるように海面を突き破り飛び上がる迫力に圧倒され、流れるように宙を舞う美しさに息を飲む。40トンの華麗なる舞踊

❸ ニコン D800 ／ Ai AF-S Zoom-Nikkor 17-35mm f/2.8D IF-ED ／30mm ／ 絞り優先AE（F11、1/200秒、−0.3EV）／ ISO 200 ／ WB：曇天

8月末の北極圏。地を這う広大な紅葉にシャッターを切るも、不意の雨に中止を余儀なくされた。だが、しばらくすると雲の切れ間から強烈な日差しによって虹が現れた

❹ ニコン D4S ／ AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR ／400mm ／ シャッター優先AE（F5.6、1/2,000秒、−0.3EV）／ ISO 1250 ／ WB：晴天

夕暮れ時のフィヨルドの海。シューという重低音とともに5mほどの霧柱が、森をバックに浮かび上がった。何度見ても飽きることのないザトウクジラの呼吸シーンだ

❺ ニコン D4 ／タムロン SP15-30mm F/2.8 Di VC USD ／24mm ／ シャッター優先AE（F4、1/1,000秒、−0.3EV）／ ISO 400 ／ WB：晴天

標高6,190m、北米大陸最高峰デナリの頂が紅く染まる。巨大な要塞が太陽の光を浴び、あたかも命を吹き込まれているようにも見える。そんな荘厳な瞬間である

❻ ニコン D810 ／ AF-S NIKKOR 24-120mm f/4G ED VR ／50mm ／ マニュアル露出（F6.3、4秒）／ ISO 800 ／ WB：晴天

厳冬期の日没直後。昼間の青と夜の黒とがせめぎ合うほんのひととき、辺りが紫に包まれる。画面右下にはキャンプが見える。ここで星空を愛で、オーロラに魅了された

❼ ニコン D810 ／ AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED ／14mm ／ マニュアル露出（F2.8、4秒）／ ISO 1600 ／ WB：晴天

西から伸びた一条の光が頭上を越えて東の地平線へ。形を変え、輝きを加減する姿は生き物のよう。月とのコラボに恵まれる機会はそうそうない。まさに宇宙からの贈り物だ

ニコン D800／ AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED ／14mm ／マニュアル露出（F2.8、4秒）／ISO 1600／ WB：晴天

画面左下に鎮座するのは北米大陸最高峰。だが地球を取り巻くオーロラのスケールにはかなわない。全天を覆う光の乱舞は数時間にも及んだ。氷点下−40℃も苦ではなかった

仕上がりが変わるアイデア満載の撮影テク

ワンランク上の写真表現

少しのアイデアと工夫で見慣れた景色を一変させるテクニックがあります。
ここではマンネリを打破できるワンランク上の撮影技を紹介します。

写真・文●鈴木知子　イラスト●ナカムラエコ

01 露光間カメラ回し

低速シャッターでカメラを回転させて動きを出す

ソニー α7 II／ FE 24-240mm F3.5-6.3／24mm ／シャッター優先AE（F10、1/15秒、+2.3EV）／ISO 100／ WB：太陽光

遊園地の回転木馬を主題に露光間カメラ回しで撮影。カメラ回しといってもグルグルと回すわけではない。中心軸を意識して素早くカメラを回転させよう

斜光　広角　水平アングル　アイレベル　閉じる　低速

回転させないと動きが出ない

回転木馬はカメラ回しをしないで撮ると、まったく動きが感じられない。実際は動いていない被写体でも回転が加わることで動いているかのように表現できる

SCENE 止まっている回転木馬に躍動感をプラスするテクニック

露光間カメラ回しは、露光中にカメラをグルッと回転させるテクニックです。露光間ズーミングはズームリングを回しますが、こちらはカメラを直接回します。撮り方はシャッター優先AEで遅めのシャッター速度に設定。あとは画面中央にメインの被写体を配置して、カメラを回転させながらシャッターボタンを押すだけです。ポイントはカメラの中心軸を意識して回すこと。同じシャッター速度でもカメラを回転する速度によってイメージは大きく変わります。シャッター速度は遅くしすぎると、手ブレを起こします。手ブレが発生すると中心軸がぶれてしまいます。はじめは、1/15秒くらいを目安に挑戦してみましょう。

青色強調

WBやケルビン値で作るクールな世界観

斜光
広角
ローアングル
アイレベル
開ける
高速

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF16-35mm F2.8L Ⅱ USM ／26mm ／絞り優先AE(F2.8、1/3,200秒、＋1.0EV)／ ISO 100／ WB：白熱電球

曇り空だったがホワイトバランスを白熱電球にして、青の世界を演出した。色が濃くなりすぎないよう、コントラストを少し強めている。緊張感を伝えるような静けさを表現した

SCENE

夢の中のような雰囲気にするには WBを白熱電球に変更

青色強調は、おもにWBの設定を変えて、青い世界を作り出す方法です。青を強調することで静寂や神秘的なイメージを写真に埋め込むことができます。屋外で風景を撮影する場合、WBは白熱電球や蛍光灯をセレクトすれば、青を強めることが可能です。ほかにもケルビン値を低くすればするほど、画面が青くなります。プリセットされたWBよりも微調整がしやすいので扱いやすい場合もあります。単純に青だけを強調すると、ベタッと重たい印象になることがあります。そんなときは露出を明るくしたり、コントラストを高くして、画面にメリハリを加えると良いでしょう。

WB：オートは見ためのイメージ

どんよりとした曇り空だったので、オートで撮影すると、ネムたい印象になっている。色が写真に与える影響は大きいのだ

シルエット

形のハッキリした被写体を影で表現

SCENE

背景の夕焼けに露出を合わせて形を狙う

逆光時に狙えるシルエット撮影は、形がハッキリした被写体を選ぶと意図が伝わりやすい写真になります。被写体をアップにしすぎると、分かりづらくなるので注意しましょう。この手法の最大の魅力は、被写体をシルエットにすることで、服や建物の色など、細かい要素が引き算されるという点です。逆光でないと撮れないので、太陽の位置が高い時間帯はシルエット撮影は難しくなります。太陽の位置が低い朝や夕方、室内の窓を利用するのがオススメです。シルエット撮影のポイントは露出補正をマイナス側に設定、少し暗めにすることで形がくっきりと浮かび上がります。

逆光

望遠

水平アングル

アイレベル

開ける

中速

望遠レンズで画面を整理

堺の上にあったシーサーをシルエットでとらえ、空を背景にしてシンプルな構図にした。望遠レンズで主題を大きくとらえ、背景を整理している

ソニー α7 Ⅱ／ FE 24-240mm F3.5-6.3 OSS ／115mm ／絞り優先AE(F6.3、1/125秒、－0.7EV)／ ISO 640／ WB：太陽光

日没時に富士山と人物をシルエットにして撮影した。シルエットで表現すると服の色が黒く表現されるため、余計な要素が排除され、スッキリした印象になる

04 玉ボケ

丸いボケを加えて画面を華やかに

SCENE 点光源をぼかして夜景に彩りを添える

キラキラとしたイメージの玉ボケはとても魅力的。この玉ボケの正体は点光源。点光源を大きくぼかすことで玉ボケを作ることができるのです。点光源というと電球のような照明をイメージするかも知れませんが、晴れた日の水辺の反射や木漏れ日も点光源になります。玉ボケの発生源は、光が反射している場所なので、逆光気味なところを探すようにします。カメラの基本設定は絞り優先AEにして開放F値で撮影します。また、望遠レンズを使えば、ボケをより大きく表現できます。カメラと被写体、背景までの距離も関係してくるので、シーンや被写体に応じて決定しましょう。

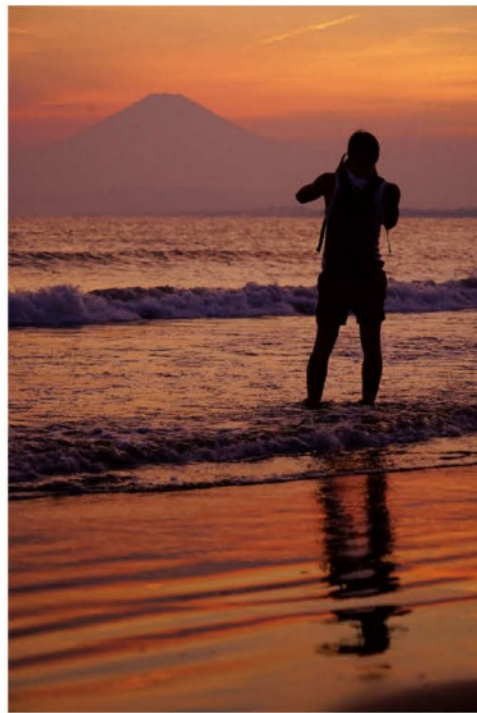
逆光

望遠

ローアングル

ローポジション

開ける

中速

ソニー α7 II／FE 70-200mm F4 G OSS／149mm／絞り優先AE（F4、1/160秒、+1.7EV）／ISO 2500／WB：太陽光

イルミネーションの電飾も点光源だ。ここでは星型のイルミネーションを主題にして、できるだけ近づき、背景にある電飾をキラキラとした玉ボケで表現した

画面端の点光源は歪む

画面端の玉ボケがレモンのような楕円形になっている。これは口径食と呼び、周辺光量の低下によって発生。開放F値の撮影で多く見られる

05 色相ずらし

色彩設定を微調整して非現実的な色に

斜光

望遠

ローアングル

ローポジション

開ける

中速

ソニー α7 II／FE 24-240mm F3.5-6.3 OSS／118mm／絞り優先AE（F6.3、1/320秒、+2.0EV）／ISO 100／WB：蛍光灯（温白色）

明るくさわやかなイメージにするため、ホワイトバランスは蛍光灯に設定。さらに微調整でグリーンを足している。色彩モードはライトにして、幻想的でやわらかい雰囲気を目指した

SCENE ホワイトバランス＋色彩モード＋プラス補正で涼やかな色を作る

色相ずらしは、カメラ内に搭載されている色彩モードやWBを調整して非現実的な色を演出することをいいます。写真は見たままを忠実に写す表現が一般的ですが、非現実的なイメージの世界を作り出すこともできます。いつもとは少し違った写真が撮りたいときにぜひ試してみてください。写真の色を劇的に変えるのは、WBです。暖色系にするか寒色系にするか、大きな選択はWBで、そのあとのトーン調整は色彩モードを使って色を作っていきましょう。さらに色には露出も大きくかかわってきます。露出補正で明るさのコントロールも忘れないようにしましょう。

普通に撮ると平凡な色に

現場の雰囲気を忠実に写しとるとおもしろみが感じられない仕上がりに。天気が悪い日は色で遊んでみよう

06 さかさま

上下左右を反転させて不可思議さをアップ

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／67mm ／絞り優先AE(F4、1/80秒、+2.0EV)／ISO 250／ WB：太陽光

この写真はレタッチソフトを利用して反転した。水たまりなどに風景を映した写真は、さかさまフォトに合わせやすい。空を写さないほうが不思議な効果が強調される

空をカットして現実感をなくす

映り込みとさかさま表現は相性がいい。現実感が感じられない構図を意識して撮影してみよう

SCENE 映り込んだ景色を上下反転させてみる

普段見ている景色をさかさまにしたら、どう見えるのかな？ そんな遊び心で挑戦したい表現です。撮影のときにカメラをさかさまにする、または撮影した画像をPhotoshopなどのレタッチソフトを使って上下、または左右を反転することもできます。どのような写真でも、さかさまにすればおもしろくなるわけではありません。さかさまにすることで、何かしらの意味が生まれるように撮影してみましょう。ここでは大きな水たまりに映り込んだ風景の画像を、180度上下反転させました。鏡の中に入り込んだような、不思議な世界感を表現できました。さかさまにしても違和感のない写真がこの表現には合っています。

N Rail
中井精也がニコンで撮る
ニッポン鉄道紀行
Rail.4
生駒鋼索線
（奈良県）

1 | 2 3 4 5

① ニコン D5500／ AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR ／400mm(600mm相当)／絞り優先AE(F5.6、1/180秒、−1.0EV)／ISO 800／ WB：晴天日陰／宝山寺線　宝山寺駅
強烈な坂道を登ってくる「ミケ」。間違いなく幼子は泣く。夜間も撮影したが、あまりにも車内が丸見えになるため、夕方のこのカットを採用

② ニコン Df ／ AF-S NIKKOR 16-35mm f/4G ED VR ／24mm ／絞り優先AE(F8、1/640秒、−0.7EV)／ISO 200／ WB：晴天日陰／宝山寺線　鳥居前〜宝山寺
日常の風景の中に、突然現れる「ブル」。このインパクト満点の風景を、地元のおばちゃんは華麗にスルー。踏切にケーブルがむき出しなのも驚愕

③ ニコン D5500／ AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR ／300mm(450mm相当)／マニュアル露出(F5.6、1/250秒)／ISO 400／ WB：晴天日陰／山上線　宝山寺〜梅屋敷
山上線は、その由緒ある風景とはまったく無関係に「音楽会」と「誕生会」がテーマ。これはオルガンを模した「ドレミ」号

④ ニコン Df ／ AF-S NIKKOR 16-35mm f/4G ED VR ／25mm ／絞り優先AE(F4.5、1/4,000秒、−1.3EV)／ISO 3200／ WB：晴天日陰／山上線　梅屋敷駅
さすがケーブルカーだけあり、信じられない急坂を登る。当然ホームも急坂。爽やかな風景の中を、苺ショートケーキが横切る

⑤ ニコン D5500／ AF DX Fisheye-Nikkor 10.5mm f/2.8G ED ／10.5mm(16mm相当)／絞り優先AE(F5.6、1/4,000秒、−0.5EV)／ISO 400／ WB：晴天日陰／宝山寺線
「ミケ」の窓から「ブル」を望む。間違いなく日本一インパクトのある列車交換風景だ。ほかの追随をゆるさない「ゆる鉄」、大好き!

犬と猫とオルガンとケーキとYシャツと私

日本はそれほど広くないが、関東と関西ではかなり感覚が違う。もしこの車両を関東の私鉄が採用しようとしたら、間違いなく不採用になるだろう。メルヘンなのか？ ネタなのか？ 本気と書いてマジなのか？ もしかしたらすべてが当てはまるかもしれないこのケーブルカーを、華麗に受け入れる関西人ってスゴいなと、真剣に思った精也であった。

前置きが長くなったが、ここは奈良県を走る生駒ケーブルで、正式には生駒鋼索線(いこまこうさく)という。生駒山といえば、春日山、奈良山とともに「平城京の三山」に挙げられる由緒ある山だし、日本初の営業用ケーブルカーという歴史があるにもかかわらず、まったく意に介さないぶっとんだ車両が運行されているのが、この路線の最大の魅力だろう。全長2kmという短い路線だが途中の宝山寺駅で線路は途切れており、麓側が宝山寺線、山頂側が山上線となる。宝山寺線を走るのは、犬を模した「ブル」、猫を模した「ミケ」。山上線ではオルガンを模した「ドレミ」とケーキを模した「スイート」が運行中。このベタ過ぎるがゆえにほかの追随を許さないインパクトのある車両と、由緒ある生駒山の風景とのハーモニーを狙ったが、ハーモニーするわけないのだった。

中井精也（なかいせいや）：1967年東京都生まれ。2004 年春から毎日1枚必ず鉄道写真を撮影するブログ「1日1鉄!」を継続中。広告、雑誌写真の撮影のほか、講演やテレビ出演など幅広く活動している。株式会社フォート ナカイ代表。著書に『世界一わかりやすいデジタル一眼レフカメラと写真の教科書』（インプレス）がある。http ：//railman.cocolog-nifty.com/

photo essay
米 美知子 from season to season
風と木と水が
教えてくれたこと

静かな晩秋の奥日光と秋真っ盛りの日光へ

日光東照宮へは東武日光駅からバスで10分。車の場合は日光I.C.から2km。小田代ヶ原は東武日光駅からバスで60分。三本松停留所下車、徒歩5分

(P.088)キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USM／70mm／マニュアル露出(F16、1/5秒)／ISO 400／ WB：太陽光

朝日が昇ると、森の霧はピンクに染まった。ワイドレンズに変えたかったが、このような色はすぐになくなるので、装着していたレンズの広角側で後ろに下がり、窮屈な画面にならないようにした

(P.090)キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-70mm F4L IS USM／44mm／マニュアル露出(F16、1/20秒)／ISO 400／ WB：太陽光

濃霧で何も見えなかった湿原が開けてきた。1本の木をポイントにしてフレーミング。ハーフNDフィルターを使って湿原と空の露出を整えて、霧を印象的に表現した

(P.091)キヤノン EOS Kiss X7i／EF-S18-55mm F3.5-5.6 IS Ⅱ／18mm(28.8mm相当)／マニュアル露出(F11、1/80秒)／ ISO 1600／ WB：太陽光

小さい渓谷だが、なかなか絵になる場所だった。かなりの急流だったので白飛びしないように感度をISO 1600に上げて、ある程度速いシャッター速度を確保した

昨年の11月、テレビ番組のロケで栃木県の日光へ向かった。まず訪れたのが、大きな杉が立ち並ぶ旧日光街道。カメラを肩に下げて、歴史家の方と会話しながら歩くのを撮られるのだが、やはり私は写真家の立場なので途中でカメラを構えることを期待される。とは言っても、普通であれば絶対にカメラを出さないような真っ昼間の街道で、無理やり撮らなくてはいけないのだから大変。私は自然風景以外はまったく撮らないので、ちょっとしたスナップはありえない。そして、ロケ中に撮った作品がテレビで映し出されるとなれば、そこそこの写真を撮らなくてはいけなくなる。番組の中心となる街道の歴史をひも解く場面は日中に撮影され、ストーリーにそってロケ場所も移動するので、その時間帯に本気の作品を作り上げるのはほぼ不可能。そうなると、共演者がまだ眠っている早朝の時間帯に自分で撮影をしなくてはいけなくなるのだ。

旧日光街道で2カットだけ撮影し、次に向かったのが日光東照宮。ここに来るのは小学校6年生の移動教室以来だが、欧米人が多いことに驚いた。巷では中国人の爆買いが話題になっているが、アジア系の観光客はほとんどいなかった。東照宮はちょうど紅葉の真っ盛りで赤い紅葉が美しく、欧米人はこの赤い紅葉に新鮮さを感じるのだと言っていた。次に訪れたのが憾満(かんまん)ヶ淵という急流の川だったが、私はいままでにこの川を訪れたことがなかった。そして川の横には、赤い帽子と前掛けを付けたお地蔵様が何十体も並び、不思議な光景だった。私にとって、お地蔵様は被写体外だがサービス精神で撮影することにした(笑)。

街道の歴史をひも解く番組のテレビロケでもやはり早朝は本気の撮影へ……

翌日の早朝は、この時期うまくいけば霧氷と霧のコラボレーションが期待できる小田代ヶ原に行った。着いた時は霧が多すぎて有名な貴婦人の木もまったく見えなかったので、森に入って朝日でピンク色に染まる霧を撮影した。やがて霧が薄くなってきたので車道に戻り、霧が漂う湿原を撮影。しばらくして日の出後に気温が下がってくると、木々に霧氷が付きはじめたが、ホテルに戻らなくてはいけない時間となり、ここで撮影は終了……。自分が計画したロケではない撮影は、いろいろなことがなかなか難しい。

ホテルに戻ると、共演者がテラスでゆっくり新聞を開いていた。一度でいいから早朝撮影のないテレビロケに出たいものだとその光景を見て思った。

Profile

米 美知子(よねみちこ)

1967年東京都生まれ。アマチュア時代には全国規模コンテストで数々の賞を受賞。「夢のある表情豊かな作品」をテーマに日本の森と色彩美を撮り続けている。写真集『森に流れる時間』(文一総合出版)など著書多数

さまざまなオート機能を使って撮る新機軸のフォトテクニック

プロフェッショナルのための プログラムAUTO

写真・文●
岡嶋和幸

PROGRAM AUTO P

日進月歩で進化しているカメラのさまざまなオート機能。これらの特徴を理解し上手に活用することで、シャッターチャンスに強くなったり、構図に集中できたりするのだ。今回はフルサイズ、APS-C、マイクロフォーサーズの被写界深度に着目。遠景、遠近、マクロにおいて、プログラムオートはどのようなF値を導き出すのか、検証・分析をしてみた。

第01回

3つのシーンで検証する被写界深度の傾向

いまの撮影スタイルにプログラムオートをはじめとするオート機能を上手に取り込むことで、より効率良く効果的に、そして快適に撮影が行えるようになって、しかも表現力アップにもつながるはず。その検証と実践的な使いこなしを提案するフォトレッスンの第1回のテーマは「被写界深度」だ。

露出モードは、露出を決める3要素「絞り」「シャッター速度」「ISO感度」をどのように設定するのかを選ぶ機能だ。ほとんどの機種で「プログラムオート」「絞り優先オート」「シャッター優先オート」「マニュアル露出」の4つの露出モードが用意されているが、いずれもカメラが制御するのは絞りとシャッター速度だけ。ISO感度も制御できる露出モードを備える機種はごく一部だ。

露出モードは状況などに応じて効果的に使い分けたい。ただ実際には、主に撮影する被写体やシーンが決まってきたり、撮影スタイルが確立していくに従って、どれか1つに絞り込まれていくケースがほとんどだろう。ところが、プログラムオートだけは最初からその選択肢に含まれないことが多いようだ。私自身、最も使用頻度の高い露出モードであるだけにこれはちょっと残念である。

露出モードの中では絞り優先オートが一番人気だ。ただ、表現などに応じて絞りを変えて被写界深度をコントロールするのではなく、とにかく開放絞りでアウトフォーカス、あるいは絞り込んでパンフォーカスといった具合に、絞りを固定するケースの方が多いようだ。ところが、それだとぼけすぎたり、中途半端なぼけ具合になったり、パンフォーカスにならなかったりなど、イメージどおりの結果が得られないことも。被写界深度は「焦点距離」「撮影距離」「前景距離（前景から被写体までの距離）」「背景距離（被写体から背景までの距離）」など条件や絵作りによって変化するからだ。

そこでプログラムオートの出番である。今回はプログラムオートで撮影するとどのようなF値に設定されて、被写界深度がどのように変わるのか、いくつかの条件で実際に検証してみたい。

被写界深度の特性を理解しよう

TEST 1 遠景 無限遠のシーンで導き出すF値の傾向

風景などの遠景を撮影するとき、画面全体を被写界深度内に収めて、できるだけパンフォーカスに仕上げようとするケースが多いだろう。その場合は必要に応じて絞りを絞り込むことになると思うが、どのF値が最適なのだろうか？ 実際のところ焦点距離や撮影距離などによって最良のF値が違ってくるわけだが、絞りとシャッター速度をカメラが自動で制御するプログラムオートではパンフォーカスが得られにくいということはあるのだろうか？

そこで、遠景撮影においてプログラムオートで設定されるF値の違いや被写界深度の変化について検証してみよう。3タイプの撮像素子サイズ、開放F値の明るいレンズと暗いレンズ、広角、標準、望遠のそれぞれの画角で撮影して、その結果を比較してみた。

		広角（24mm相当）	標準（50mm相当）	望遠（200mm相当）
フルサイズ	明るい	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF24mm F1.4L Ⅱ USM F8、1/320秒、−0.3EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF50mm F1.4 USM F7.1、1/250秒、±0EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF200mm F2L IS USM F5.6、1/640秒、−0.3EV
フルサイズ	暗い	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF24-105mm F4L IS USM F9、1/200秒、−0.3EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF24-105mm F4L IS USM F8、1/160秒、+0.3EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF70-200mm F4L IS USM F6.3、1/400秒、±0EV
APS-C	明るい	ソニー α6000 E16mm F2.8 F9、1/125秒、±0EV	リコーイメージング K-3 Ⅱ smc PENTAX-DA 35mmF2.4AL F8、1/160秒、−0.7EV	ソニー α77 Ⅱ Sonnar T* 135mm F1.8 ZA F5.6、1/500秒、±0EV
APS-C	暗い	ソニー α6000 Vario-Tessar T* E 16-70mm F4 ZA OSS F9、1/160秒、±0EV	リコーイメージング K-3 Ⅱ HD PENTAX-DA 16-85mm F3.5-5.6ED DC WR F8、1/200秒、−0.3EV	ソニー α77 Ⅱ DT 55-200mm F4-5.6 SAM F5.6、1/400秒、+0.3EV
マイクロフォーサーズ	明るい	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 F5、1/500秒、+0.3EV	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8 F5、1/640秒、−0.3EV	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 40-150mm F2.8 PRO F5.6、1/800秒、+0.7EV
マイクロフォーサーズ	暗い	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 12-50mm F3.5-6.3 EZ F7.1、1/320秒、+0.3EV	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 12-50mm F3.5-6.3 EZ F9、1/200秒、±0EV	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 75-300mm F4.8-6.7 Ⅱ F7.1、1/400秒、+0.7EV

撮影時の共通設定は、多分割測光、階調補正機能はオフ、WBは太陽光、仕上がり設定は初期設定（リコーイメージング K-3 Ⅱは鮮やかではなくナチュラル）、ISO感度は最低感度（オリンパス OM-D E-M1のみISO 200）、手ブレ補正機構はオフ、JPEG記録、三脚を使用。露出はブラケット撮影を行い、筆者が適正露出と判断したものを掲載している

プログラムオートの傾向 ▶ どの撮影条件でもパンフォーカスが得られる

テストを行った撮影現場の天候は晴れで順光、光量もたっぷりだ。撮影距離も十分に離れている。結果は、前景と背景のどちらも無限遠と、被写界深度内にほとんど収まっている。たとえ開放絞りでもほぼパンフォーカスの仕上がり。被写界深度が浅くなりやすい望遠を含めて、すべての組み合わせでパンフォーカスが得られた。

F値に注目してみよう。広角と標準はほとんどがF8前後で、マイクロフォーサーズは開放F値の明るいレンズだけがF5と開け気味の傾向。光量は十分なのに絞り込まないのは、レンズ性能と関係がありそうだ。撮像素子が小さいぶん、F5でもほかのフォーマットと同等の被写界深度を確保できている。望遠はF5.6〜7.1と、フォーマットやレンズに関係なく同様の結果だ。

露出補正をプラスにすると、広角と標準はある程度まではシャッター速度を下げてF値をキープしようとする。これに対して、手ブレ防止のためか、望遠は絞りを積極的に開ける傾向。逆にマイナス補正した場合は、広角と標準はF9〜11あたりまで絞り込まれたあと、シャッター速度を上げる。これは回折現象を避けるためだろう。これに対して、望遠は絞り込まれず、早い段階からシャッター速度を上げてくる。

TEST 2 遠近 被写体を同じサイズにした場合の背景のボケの違い

背景をぼかして被写体を浮き立たせたいことがある。その場合は絞り優先オートで開放絞りに設定というケースが多いと思うが、ボケ具合は焦点距離や撮影距離、背景距離などによって違ってくる。それにより背景がぼけすぎたり、中途半端なボケ具合になることもあるだろう。

プログラムオートではちょうど良いボケ具合は得られないのか。遠近のあるシーンにおいて、プログラムオートで設定されるF値の違いや被写界深度の変化について検証してみよう。3タイプの撮像素子サイズ、開放F値の明るいレンズと暗いレンズ、広角、中望遠、望遠のそれぞれの画角で撮影して、その結果を比較してみた。

ピントは木の幹の中央に合わせた。背景のボケ具合を比較するために、その一部を拡大している

		24mm相当	85mm相当	200mm相当
フルサイズ	明るい	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF24mm F1.4L Ⅱ USM F3.2、1/40秒、+0.7EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF85mm F1.8 USM F2.5、1/80秒、+0.7EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF200mm F2L IS USM F2、1/100秒、+0.7EV
フルサイズ	暗い	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF24-105mm F4L IS USM F4、1/20秒、+1.0EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF24-105mm F4L IS USM F4、1/25秒、+1.0EV	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ EF70-200mm F4L IS USM F4、1/30秒、+0.7EV
APS-C	明るい	ソニー α6000 E16mm F2.8 F2.8、1/50秒、+0.7EV	リコーイメージング K-3 Ⅱ smc PENTAX-DA★ 55mmF1.4 SDM F2、1/80秒、±0EV	ソニー α77 Ⅱ Sonnar T* 135mm F1.8 ZA F2、1/60秒、+0.7EV
APS-C	暗い	ソニー α6000 Vario-Tessar T* E 16-70mm F4 ZA OSS F4、1/25秒、+0.3EV	リコーイメージング K-3 Ⅱ HD PENTAX-DA 16-85mm F3.5-5.6ED DC WR F4.5、1/13秒、±0EV	ソニー α77 Ⅱ DT 55-200mm F4-5.6 SAM F4.5、1/15秒、+0.7EV
マイクロフォーサーズ	明るい	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 F2.5、1/100秒、±0EV	オリンパス OM-D E-M1 パナソニック LEICA DG NOCTICRON 42.5mm / F1.2 ASPH. / POWER O.I.S. F1.8、1/160秒、−0.3EV	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 40-150mm F2.8 PRO F2.8、1/100秒、±0EV
マイクロフォーサーズ	暗い	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 12-50mm F3.5-6.3 EZ F3.5、1/60秒、±0EV	オリンパス OM-D E-M1 パナソニック LUMIX G VARIO 14-45mm / F3.5-5.6 ASPH. / MEGA O.I.S. F5.6、1/20秒、±0EV	オリンパス OM-D E-M1 M.ZUIKO DIGITAL ED 75-300mm F4.8-6.7 Ⅱ F5.1、1/40秒、±0EV

撮影時の共通設定は、多分割測光、階調補正機能はオフ、WBは太陽光、仕上がり設定は初期設定（リコーイメージング K-3 Ⅱは鮮やかではなくナチュラル）、ISO感度は最低感度（オリンパス OM-D E-M1のみISO 200）、手ブレ補正機構はオフ、JPEG記録、三脚を使用。露出はブラケット撮影を行い、筆者が適正露出と判断したものを掲載している

プログラムオートの傾向 ▶ レンズの明るさにかかわらずほぼ開放付近を選択

日陰で光量が少なく、どの組み合わせも絞りは開放付近に。手ブレを軽減するために積極的に絞りを開けている。開放F2未満のレンズはそのような状況でも開放絞りにならないが、いずれも絞り優先オートで開放F値に設定した場合と結果はほぼ同じだ。画角とF値が同じ場合は、撮像素子サイズが大きい方がボケ量は多く、これは被写界深度のセオリーどおり。開放F値が暗めのレンズは、そのぶん被写界深度が深めになるためボケ量は少ない。

被写体がほぼ同じ大きさで写るように撮影距離を調整しているが、画角が異なるため画面に入る背景の範囲や大きさも異なる。撮像素子サイズとF値が同じ場合、広角、中望遠、望遠のボケ量に違いは見られない。焦点距離は異なるが、撮影距離の調整で被写界深度が相殺されるようだ。

TEST 3 マクロ ｜ 近接撮影時の背景のボケ具合

マクロレンズを使った撮影では、ピントは被写体の一部分だけで、そのほかは大きくぼかしたい場合と、被写体の全体をシャープに見せたい場合がある。いずれも絞り優先オートで絞りを開けるか、絞り込むかということになるが、被写体が小さくなるほど撮影距離が短くなり、そのぶん被写界深度も浅くなる。そのため前者は容易だが、後者を実現するのは難しい。

プログラムオートでマクロ撮影を行うと、前者と後者のどちら寄りの結果が得られるのか。小さい被写体を接写して、設定されるF値の違いや被写界深度の変化について、3タイプの撮像素子サイズで比較してみよう。

撮影時の共通設定は、多分割測光、階調補正機能はオフ、WBは太陽光、仕上がり設定は初期設定、ISO感度は最低感度（オリンパスのみISO 200）、手ブレ補正機構はオフ、JPEG記録、三脚を使用。露出補正値を変えて撮影を行い、その傾向を見るとともに、筆者が最良と考えた+0.3EVのみ掲載している

プログラムオートの傾向 ▶ 撮像素子のサイズにかかわらず開放絞りが選択される

室内での撮影で光量が少ないため、手ブレの軽減などできるだけ速いシャッター速度を確保しようと、いずれも開放絞りのF2.8に設定されている。とにかくぼかしたいからと、絞り優先オートで開放F値に設定した場合と結果は同じということになる。

撮像素子サイズ別に見ていくと、フルサイズが最もボケ量が多い。それに対してAPS-Cは被写界深度がほんの少し深めで、マイクロフォーサーズのボケ量もほとんどAPS-Cと同じに見える。これは焦点距離が若干異なるため、同じような画面構成にするために少し近づいたからだろう。マクロ撮影では撮影距離が被写界深度に顕著に影響することが分かる。

まとめ　F値はプログラムオートが導き出す値を参考にしよう

プログラムオートで狙いどおりの被写界深度は得られるのだろうか。これがこの連載でまず最初に検証してみたかったことなのだが、今回、遠景は光量たっぷりで絞り込まれやすく、遠近とマクロは光量が少ないため絞りが開けられやすい条件。絞り優先オートでF値を設定するまでもなく、いずれも通常設定するであろう絞りに近い値が選ばれていて、被写界深度も無難な結果が得られた。露出補正を行うと、F値とシャッター速度がどのように変化するのかもチェックしてみたが、今回の条件では選んだF値をできるだけキープするような傾向が見られた。

被写界深度についてはF値だけでなく、焦点距離や撮影距離との組み合わせで大きく変わる。絵作りを考えるとき、レンズワークやフットワークがポイントとなり、それらが変わるたびに絞りを絶妙に調整してイメージどおりの被写界深度を得るというのは、撮影する被写体やシーンによっては対応しきれない場合もある。そのようなとき、F値の設定は、まずはプログラムオートでカメラに任せてしまうというのも有効だろう。もちろん、幅広い被写体やシーンに対応するにはF値だけでなく、選ばれるシャッター速度にも意識を向けなければならない。

次回はいろいろな光の条件、被写体やシーンなど、より実践的に、プログラムオートで撮影すると設定されるF値や被写界深度がどのように変わるのかを検証してみよう。

岡嶋和幸（おかじまかずゆき）：1967年福岡県生まれ。東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）卒業。現在は日本写真学院にて講師をつとめる。写真展に「ディングルの光と風」「潮彩」「学校へ行こう!」「九十九里」など。写真集『ディングル』（ソフトバンククリエイティブ）ほか著書多数。http://www.kazuyuki-okajima.com/

キヤノン PowerShot G9X ／30.6mm（84mm相当）／マニュアル露出（F4.9、1/640秒）／ ISO 125／ WB：オート
望遠端で対岸から撮影。少し霞がかって色を出すのが難しい場面だったが、クリエイティブフィルター「極彩色」を使い夕暮れの時間帯をドラマチックに切りとることができた

1型CMOSの高倍率ズームに待望の薄型モデルが登場！

キヤノン PowerShot G9X

▶ 発売予定日 2015年10月22日 ▶ 予想実勢価格 64,500円前後

写真・文●中原一雄

人気のコンパクトカメラといえば、1型の撮像素子を搭載し、高倍率ズームレンズを搭載したモデル。4.2倍ズームを搭載したキヤノンのPowerShot G7Xの大ヒットは記憶に新しい。今月は光学3倍となりながらも、さらなる小型・軽量化に成功した新型のG9Xを紹介する。

ブラック

シルバー

おもなスペック

撮像素子：**1型CMOS**
有効画素数：**2,020万画素**
焦点距離：**10.2-30.6mm（28-84mm相当）**
開放F値：**F2～4.9**
連写速度：**6コマ/秒**
ISO感度：**ISO 125～12800**
背面液晶モニター：**3型104万ドット**
大きさ：**約98×57.9×30.8mm**
重さ：**約209g（バッテリー、記録メディア含む）**

G7Xよりも高さが約2.5mm低くなった。重さは約95g軽量化

❶ キヤノン PowerShot G9X／19.14mm（53mm相当）／プログラムAE（F4.5、1/640秒、±0EV）／ISO 125／WB：オート
ガラスへの映り込みのシーン。映った先の景色にしっかりピントが合った。手のひらに収まるサイズなので積極的にさまざまなアングルを狙いたくなる

❷ キヤノン PowerShot G9X／10.2mm（28mm相当）／プログラムAE（F5.6、1/500秒、±0EV）／ISO 125／WB：オート
クリエイティブフィルター「ジオラマ風」で撮影。高い所から見下ろして撮影するのがポイントだ。各種フィルターの切り替えはタッチパネルで簡単に行える

❸ キヤノン PowerShot G9X／13.76mm（38mm相当）／クリエイティブショット（F3.2、1/250秒、±0EV）／ISO 200／WB：オート
ピントが合った水滴部分はきれいに解像し、背景がきれいにぼけている。カメラが自動でさまざまなフィルターをかけてくれるクリエイティブショットで撮影

❹ キヤノン PowerShot G9X／30.6mm（84mm相当）／プログラムAE（F4.9、1/320秒、±0EV）／ISO 125／WB：オート
遠くに船が通りかかるのを見つけてとっさにカメラを構えて構図を作り、望遠端で撮影した。起動も速く、スムーズに撮影することができた

1型CMOSの2,020万画素という大型センサーを搭載しながら、よくぞ30.8mmの薄さを実現した！ というのがPowerShot G9Xをはじめて手にしたときの感想だ。

1型の撮像素子と言えば、これまで各社のプレミアムラインに位置する“ちょっと大きな”コンパクトデジカメに採用されてきた大型センサーだが、それが手のひらサイズどころではなく、名刺をひと回り大きくしたくらい小型･薄型のG9Xに搭載されたのだから、これはすごいことなのだ。このような極小ボディでありながら28-84mm相当の光学3倍ズームを搭載しており、さらに広角端の開放絞りはF2.0を実現。大型の撮像素子を搭載したコンパクトカメラにありがちなレンズの突出も最小限に抑えられている。そして重さは約209gとPowerShot G7Xよりも約95ｇ軽い。

実際に使ってみると、光学の3倍ズームは広角から標準の焦点域をほぼカバーするため使いやすく、AFの合焦スピードも十分な速さで快適だ。撮影モードはG7X同様に絞り優先AEやシャッター優先AEはもちろんのこと、マニュアル露出やバルブモードまでサポートされており抜かりない。シーンモードも「星空」や「手持ち夜景」など実用性の高いモードが多数用意されている。個人的に大好きなクリエイティブショットが搭載されているのもうれしい。この小さなボディで大抵の撮影はカバーできてしまうだろう。操作面ではボディが非常に小さいにもかかわらず、背面液晶モニターには上位機種と同じサイズである3.0型のタッチパネルを搭載している。代わりにボタンの数が減ってしまい、使う前までは操作面で不安も感じたが、タッチパネルの反応が良く、しばらく使っているとすっかり慣れてしまった。また、メニュー構成がEOSと同じUIとなっているため、EOSのサブ機として考えたときも違和感なく使えるだろう。カメラ内で絵作りを追い込むには少しもの足りないメニュー項目かなと感じる点もあるが、RAWもサポートされているため、こだわり派は後でじっくりとRAW現像で調整できる。

これまでのGシリーズにはなかったUSB充電に対応しているのもポイントだ。スマートフォンの充電にも使えるモバイルバッテリー（microUSB）を使えば外出先でいつでも充電できるため、安心して撮影に集中できる。薄型のボディに大型センサーと光学3倍ズームが搭載されたカメラが出てきたことは素直にうれしい。ポケットに入れて常に持ち歩きたい1台だ。

※本企画は試作機を使用して制作しています。そのため実際の製品とは外観･画質などで結果が異なる場合があることをご了承ください。

さまざまな被写体に対応できる
28-84mmの3倍ズーム

35mm判換算で28-84mm相当の光学3倍ズームが搭載されている。これは一眼レフ用のキットレンズに採用されている標準ズームレンズとほぼ同じ画角だ。広角ならではの開放感ある写真も楽しめるし、ズームすれば近づけない被写体を切り取ることができて幅広い被写体に対応可能だ。さらにデジタルズームを使うことで12倍（252mm相当）まで拡張することができる。

キヤノン PowerShot G9X ／10.2mm（28mm相当）／プログラムAE（F7.1、1/1,250秒、±0EV）／ ISO 125／ WB：オート

キヤノン PowerShot G9X ／30.6mm（84mm相当）／プログラムAE（F7.1、1/1,250秒、±0EV）／ ISO 125／ WB：オート

遥か彼方に見える煙突にズーム。84mm時の引き寄せ効果は申し分ない。焦点距離にとらわれない自由なスナップが楽しめる

望遠端時でもレンズの繰り出しは最小限に抑えられている。6群8枚の3倍ズームレンズを搭載

キヤノン PowerShot G9X ／10.2mm（28mm相当）／マニュアル露出（F2、1/1,000秒）／ ISO 125／ WB：オート

レンズは広角端でF2.0と明るく、5cmまで寄れる。大型センサーと相まってコンデジらしくない、たっぷりのボケが楽しめるのもG9Xでの撮影が楽しい理由のひとつだ

G7Xの長所を引き継ぐ
スタイリッシュボディ

G7Xと比べて横幅は5mmのダウンサイジング。厚さは9.6mmスリム化されている

メニューはEOSと同様の構成となっている。メニュータブはタッチパネルをスワイプして切り替えられる

内蔵ストロボの調光範囲は、28mm時で50cm ～6m、84mm時で50cm ～2.4m

バッテリーはG7Xと同じ専用リチウムイオン充電池のNB-13Lを採用している

シャッター速度を自在にコントロール
オートNDフィルターを搭載

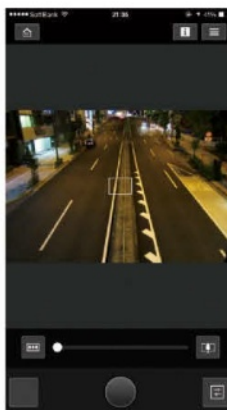
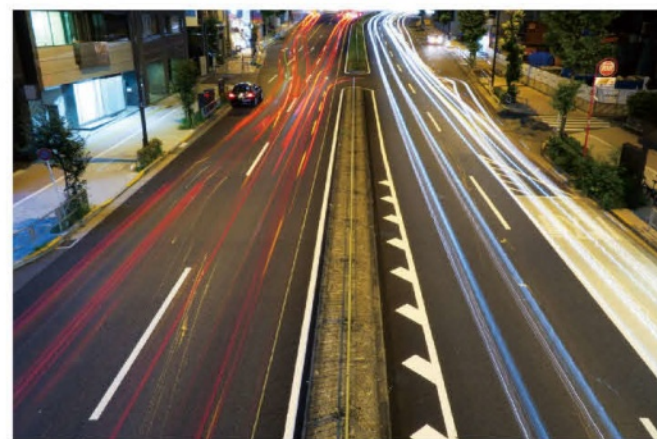
G9Xにはカメラ内に3段分相当のNDフィルターが内蔵されており、被写体の明るさに合わせて自動的に設定される。白飛びの恐れがある晴れた日の明るい場面でも安心して開放で撮影でき、スローシャッターが必要な場面でも有効だ。一眼レフカメラ並みに表現の幅を大きく広げてくれる機能だ。

キヤノン PowerShot G9X ／10.2mm（28m相当）／マニュアル露出（F2、1/800秒）／ ISO 125／ WB：オート

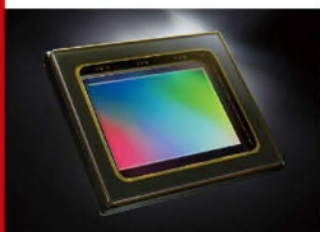
キヤノン PowerShot G9X ／10.2mm（28mm相当）／マニュアル露出（F2、1/2,000秒）／ ISO 125／ WB：オート

オートNDフィルター機能をオフにして開放絞りで撮影したところ、花が白飛びしてしまった。オンにするとシャッター速度が遅くなり、白飛びを防ぐことができた

光跡描写の調整がしやすい
リモートが可能なBULB撮影

G7Xにはなかった撮影モード「バルブ」が搭載された。シャッターボタンを押している間だけ露光され、さらにキヤノンのスマートフォンアプリCanon Camera Connectと連携すれば、リモートでのバルブ撮影が可能。カメラを直接操作しなくても撮影が可能なので、このアプリを使えばバルブ撮影も容易だ。夜間の車の光跡撮影やタイミングがむずかしい花火の撮影で便利だ。

キヤノンのスマートフォンアプリCanon Camera Connectを使用すると、バルブ撮影のときはシャッターボタンを押している間だけ露光される。光跡のタイミングが確認できるため、便利だ

キヤノン PowerShot G9X ／11.2mm（31mm相当）／マニュアル露出（F11、63秒）／ ISO 125／ WB：オート

4車線の道路を行き交う車のヘッドライトとテールライトの光跡を撮影した。スマートフォンでタイミングを合わせてラインのコラボレーションを表現した

POINT 1 » 1型CMOSセンサー

PowerShot G3Xと同等の2,020万画素1型のCMOSセンサーを搭載

POINT 2 » 24-100mm F1.8-2.8のレンズ

PowerShot G7Xと同様の9群11枚（両面非球面レンズ1枚、片面非球面UAレンズ1枚、片面非球面レンズ1枚、UDレンズ1枚）を搭載

POINT 3 » バリアングル液晶モニター

左右に約175度、上下に約270度回転するバリアングル液晶

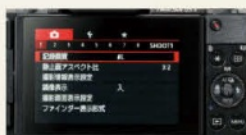
1型高級コンパクトにEVFモデルが登場！

キヤノン PowerShot G5X

◆ 発売予定日　2015年10月22日　◆ 予想実勢価格　99,000円前後

PowerShot G9Xと同時に発表されたPowerShot G5Xは、大ヒットしたPowerShot G7Xのズームレンズはそのままに、EVFを搭載した新モデル。今月は操作感とスペックを中心に最速レポートしたい。

文●中原一雄

PowerShotこだわりの操作系

メニュー構成はデジタル一眼のEOSシリーズと同等

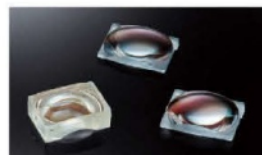
上部にはモードダイヤル、露出補正ダイヤル、ズームレバーを搭載

小型ながらストロボが内蔵されているうえ、ホットシューも搭載する

ボディ前面にも電子ダイヤルを搭載。各種機能が割り当てられる

おもなスペック

撮像素子：**1型CMOS**／有効画素数：**2,020万画素**／焦点距離：**8.8～36.8mm（24～100mm相当）**／開放F値：**F1.8～F2.8**／連写速度：**5.9コマ/秒**／ISO感度：**ISO 125～12800**／背面液晶モニター：**3型104万ドット**／大きさ：**約112.4×76.4×44.2mm**／重さ：**約377g（バッテリー、記録メディア含む）**

G7Xよりもひと回り大きいボディサイズ

（左）光軸の直線上に配置されているEVFは画面いっぱいにフルで表示が可能。カメラの縦位置と横位置に対応して表示され、表示情報もカスタマイズが可能（右）EVF用のレンズ

動体にも強い120fpsの高速表示EVFに驚き！

PowerShot Gシリーズに、待望のEVF内蔵モデルが登場した。G5Xという名前から考えればG7XとG3Xの中間に位置するモデルだが、単純に上位下位といった関係性ではなく、独自のコンセプトを持った新型モデルだと考えた方が良い。

スペックを見ると、2,020万画素の1型センサーを搭載し、レンズは24～100mm相当（F1.8～2.8）の明るい光学4.2倍ズームを採用。G7Xのスペックを引き継ぎつつ、0.39型236万ドットの有機EL内蔵EVFとバリアングル液晶を搭載しているのが特徴だ。

一番のポイントである内蔵EVFは広い色域を持ち、高いコントラストを実現している。一般的なEVFは解像度が高くても色再現性が肉眼とは異なり、違和感を感じるものもあったが、G5XのEVFを実際にのぞいてみると、肉眼にかなり近い見え方をする。EVFの弱点といえば、光学ファインダーに比べて動体に弱いというところだが、メニュー設定で「なめらかさ優先」の「高速」表示にすることで体感で120fpsの高速表示が可能だ。標準設定の60fpsでも十分になめらかだが「高速」は明らかに違いが分かるほど残像がなく、より自然な表示になる（ただし、通常は1,024×768pixelの表示解像度が1,024×384pixelになる）。また、背面液晶モニターがタッチパネル式のバリアングルとなったことも歓迎したい。チルト式では縦位置のときに不便を感じることがあるが、バリアングルならアグレッシブなアングルが狙いやすい。操作面ではボディ前面に右手の人差し指で操作が可能な電子ダイヤルが配置されており、ファインダーから目を離さずに操作できる。個人的に便利だと思ったのはサムグリップ横に付いている動画ボタンだ。普通にグリップしている間は反応しない絶妙な位置に配置されている。G9X同様USB充電にも対応しており、本格的な撮影から普段使いまで死角のない高バランスな仕上がりになっているカメラだと感じた。

※本企画は試作機を使用して制作しています。そのため実際の製品とは外観・画質などで結果が異なる場合があることをご了承ください。

ニコン D750／50mm／絞り優先AE(F1.4、1/4,000秒、+0.7EV)／ISO 100／WB:オート

1.4/50

Otusに肉薄する描写力を誇る標準レンズ

高精細ながら柔らかさがあり、美しいボケのグラデーションが得られる。開放絞りにおいてもフリンジが少なく、自然な描写に感じられるのが印象的だ。得られる像が明るく、思っていたよりもスムーズにピントを合わせられた。シンプルでソリッドな新デザインで非常に現代的なフォルムになっている

レンズ構成図
● 異常分散ガラス
● 非球面レンズ

Specification
希望小売価格：**160,380円**
絞り値：**F1.4〜16**／レンズ構成：**8群10枚**／最短撮影距離：**45cm**／最大撮影倍率：**約0.15倍**／フィルター径：**φ67mm**／大きさ：**約φ83×86.3mm(ZE)、約φ83×83.8mm(ZF.2)**／重さ：**840g(ZE)、790g(ZF.2)**

カールツァイスと共同開発したデジタル時代のMFレンズ

コシナ ZEISS Milvus

ミルバス

● 発売予定日
2015年冬から2016年春

● マウント
ZE(キヤノン用)
ZF.2(ニコン用)

写真・文● 大和田 良

▶ 洗練されたフード一体型デザイン

レンズからフードにかけてのデザインは流れるような一体感があり、機能性とデザイン性を両立している。フォントの視認性も高く、細部までこだわりを感じることができる

▶ マニュアル撮影に特化した設計

フォーカスリングは適度なトルク感があり微調整しやすく、ピントを固定後、誤って動くようなことも少ない。絞りリングはクリック感があり（切り替え可）、正確な設定が可能だ

▶ 防塵・防滴対応のシーリング

シーリングにはシンボリックなブルーを使用。レンズそのもののデザインとともにボディに装着した際の差し色としても非常に美しい。目につくような主張ではないところが良い

1.4/85

美しいボケが被写体を際立てる中望遠レンズ

ピント面から徐々にぼけていく様子が非常に美しい再現となっている。ポートレートや静物撮影において活躍するレンズだろう。被写界深度が浅く、精密なフォーカスコントロールが要求される。時にはライブビューで拡大しながらピントを合わせるなど、レンズの描写力を最大限に生かせる環境で使いたい

レンズ構成図
● 異常分散ガラス

Specification
希望小売価格：**221,400円**
絞り値：**F1.4〜16**／レンズ構成：**9群11枚**／最短撮影距離：**80cm**／最大撮影倍率：**約0.13倍**／フィルター径：**φ77mm**／大きさ：**約φ90.2×96.9mm(ZE)、約φ90.2×94.4mm(ZF.2)**／重さ：**1,160g(ZE)、1,120g(ZF.2)**

ニコン D750／85mm／絞り優先AE(F1.4、1/640秒、−1.3EV)／ISO 100／WB:オート

Specification
希望小売価格：133,920円／絞り値：F2〜22／レンズ構成：7群9枚／最短撮影距離：30cm／最大撮影倍率：約0.19倍／フィルター径：φ58mm／大きさ：約φ77.2×75.3mm（ZE）、約φ77.2×72.8mm（ZF.2）／重さ：625g（ZE）、580g（ZF.2）

ニコン D750／35mm／絞り優先AE（F2、1/4,000秒、−0.7EV）／ISO 100／WB:オート

2/35 滑らかなボケが魅力の携帯性の高い万能レンズ

適度に広い画角を持った標準レンズとして使いやすい35mm。人肌の質感再現も良く、前後のボケも滑らかだ。スナップや風景では絞り込んでフラットな描写を得ることもできる。シリーズ最軽量で携帯性も良く万能型のレンズだ

2/50M 近接からシャープかつ柔らかな標準マクロ

マクロレンズという使い方はもちろん、常用の単焦点レンズとして非常に有用な携帯性に優れたレンズだ。写りに関してもマクロレンズとして作られているため近接から非常にシャープかつ柔らかな印象で、スティルライフだけでなくスナップやポートレートにも役立つだろう

Specification
希望小売価格：163,080円／絞り値：F2〜22／レンズ構成：6群8枚／最短撮影距離：24cm／最大撮影倍率：約0.5倍／フィルター径：φ67mm／大きさ：約φ80.8×66.7mm（ZE）、約φ80.8×64.2mm（ZF.2）／重さ：640g（ZE）、570g（ZF.2）

ニコン D750／50mm／絞り優先AE（F2、1/250秒、+0.7EV）／ISO 1250／WB:オート

撮る喜び、見る喜び、持つ喜びをじっくりと味わえるレンズ群であるというのが、6本のレンズを持ち、撮り歩いた印象だ。

MFレンズは、高画素化された現在のデジカメにとって特別な機材選択になるであろうことは多くの方が感じているはずだ。特に被写界深度の浅い状態でポートレートなどの動体を撮影するのはなかなか難しい。しかしながらそれを含めて均質的な写真とは違う新たな、あるいは回帰的な映像を得られることがこのレンズの持つ可能性の1つだろうと考えると、撮影においてとたんに自由で挑戦的な思考を持てる。ピントを合わせるという行為が加わるだけで、身体性が飛躍的に高まることがその理由の1つだろう。撮る喜びというものを感じさせてくれるものでもある。

レンズの写りについてだが、新設計された50mmと85mmでは開放絞りによる撮影においても大変細やかで自然なコントラストが得られ、抜けの良さを感じるとともに豊かな立体感を表現可能だ。MTF上では判断できない部分が多々あり、設計者と製造者の理念と信条が詰め込まれていることが伝わる。画面に大きく写し出したときの、細部の「写っている」感触は見る喜びを存分に満たしてくれるだろう。

今回はD750を用いたが、デザインとしてもよく似合っていた。さらに良いファインダーを求めるならD4クラスを用いた方が良いかもしれないが、適度なトルク感のあるフォーカスリングによりピントの山はD750でも比較的確認しやすい。レンズそのものの存在感としては、ひと言で言えば工芸品のような佇まいであり持つ喜びは最上のものである。50mm、85mmは実質的にはOtusの弟分という位置づけだが、重量や全長などの機動性を考えれば、より実用的なレンズであるといえるだろう。

ニコン D750／100mm／絞り優先AE（F5.6、1/250秒、+0.7EV）／ISO 100／WB:オート

2/100M ボケも解像力も手に入る汎用性の高い中望遠マクロ

最短撮影距離で撮影した場合の撮影倍率が0.5倍となるマクロレンズだ。画面の隅々まで良く解像するためボケを生かした写真だけでなく、絞り込んだ写真でも有用だろう。100mmという中望遠域にあたる焦点距離なので、近接撮影だけでなくポートレートでも使いやすい

Specification
希望小売価格：231,660円／絞り値：F2〜22／レンズ構成：8群9枚／最短撮影距離：44cm／最大撮影倍率：約0.5倍／フィルター径：φ67mm／大きさ：約φ80.7×96.5mm（ZE）、約φ80.7×94mm（ZF.2）／重さ：766g（ZE）、725g（ZF.2）

Specification
希望小売価格：224,640円／絞り値：F2.8〜22／レンズ構成：13群16枚／最短撮影距離：22cm／最大撮影倍率：約0.2倍／フィルター径：φ82mm／大きさ：約φ95.4×87.3mm（ZE）、約φ95.4×84.8mm（ZF.2）／重さ：800g（ZE）、680g（ZF.2）

ニコン D750／21mm／絞り優先AE（F11、20秒、±0EV）／ISO 100／WB:オート

2.8/21 細い線まで精密に描かれる高画素時代の広角レンズ

細い線まで非常に精密に描かれているのが良く分かる広角レンズだ。この描写力があれば、超高画素機でも十分な画質を得ることができるだろう。自然や都市といった風景に限らずポートレートやスナップにも使いたくなる1本だ

薄くて丈夫で汚れにくい次世代の液晶保護グッズ

Zéta Super Slim 液晶保護ガラスの衝撃

Zéta Super Slimはカメラの液晶モニターを傷から守る保護ガラスだ。従来のフィルムタイプより薄くて丈夫。クリアで汚れにも強く、しかも貼りやすい。その特徴や効果、フィールドでの使用感を紹介しよう。

写真・文●高橋良輔

フィルムはもう古い！ 液晶保護はガラスがトレンド

ケンコー・トキナーから発売された「Zéta Super Slim」液晶保護ガラスは、デジタル一眼レフの液晶モニターを傷や汚れから守る画期的なプロテクターだ。最大の特徴はその素材にあり、最新スマートフォン用に開発された高強度薄型ガラスを薄く研磨して採用している。従来のフィルム製プロテクターもハードコートを施して表面強度を高めているが、そもそも硬度においてガラスを超えることはできない。しかもZéta Super Slimは表面鉛筆硬度「9H」という高いスペックで作られているため、爪の先で引っかく程度ではびくともしない。表面鉛筆硬度とは塗装面などの表面硬度を評価するJIS規格で、試験器を使い9Hの鉛筆で線を描いても傷がつかないことを意味する。ちなみに9Hは、三菱鉛筆「uni」の最高硬度である。その上で、0.15mmという圧倒的な薄さを実現していることから、バリアングル液晶の収納にも影響はない。主な特徴は下の解説のとおりだが、カメラ用としては色味への影響が気になるところ。しかし、本製品は一般的なソーダガラス（住宅・自動車用）のような青かぶりがなく、ニュートラルな発色で安心して使用できる。フィルム素材から強化ガラスへの進化は、もはや当然の成り行きと言える。

Zéta Super Slim の5つの特徴

POINT 1 目立たない薄さ0.15mm

製品の厚みは0.15mmときわめて薄く、貼り付けていることが分からないほどだ。また、エッジ部はラウンドエッジ加工を施し、安全性と耐久性についての対策が行われている。各機種に合わせて採寸されていることから、当初から装着されているかのような一体感がある。

使用時　未使用時

薄さはもちろんエッジ部の加工にも注目だ

POINT 2 フィルムより強いガラス製

Zéta Super Slimは、スマートフォンのディスプレイなどに使われている最新ガラス素材を採用。硬度が高いことに加えて曲げにも強く、液晶モニターに衝撃や圧力が加わっても本体そのものを保護する。表面を保護するだけのフィルム製とはコンセプトが異なる。

硬さに加えて多少の弾力も備える素材だ

POINT 3 気泡が入りにくいバブルレス加工

液晶モニターとの接触面は、伸縮性と弾力性に優れた特殊なシリコン層を形成。貼り付け時に気泡が入りにくく、細かい気泡が残ってしまっても時間が経過すると分散して見えなくなる。コツを必要とせず誰にでも簡単に施工でき、かつ仕上がりが美しいことが特徴だ。

POINT 4 反射を抑えるARコート

反射防止用のARコートには、撮影用レンズや光学フィルターにも採用されている真空蒸着技術が使われている。表面反射を防止することで、画面のギラツキを抑える効果があるとともに、画面への映り込みを低減して視認性も高めてくれる。

反射が少なく屋外でも見やすい

POINT 5 指紋が付きにくい防汚コート

最上層に採用されている防汚コートは指紋や汚れが付着しにくく、簡単に拭き取れることが特徴。皮脂汚れなどのほか、女性のファンデーションやマジックインキの塗料ですら弾くほど強力。ハードな環境での耐久性が高い。

指紋や鼻の脂が付きにくい

《 Zéta Super Slim の上手な貼り方 》

1 アルコール清掃紙で液晶の汚れを取る

アルコール清掃紙を取り出して液晶モニターの汚れを拭き取る。使用されているアルコールの成分は光学ドライブ用クリーナー液と同様

2 クリーニングクロスで拭きムラをなくす

アルコールでの清掃が終了したらクリーニングクロスを使って、表面のムラを拭き取る。指の腹でなでるようにすると作業が行いやすい

3 ホコリ取りシールでホコリを取り除く

ホコリ取りシールを台紙からはがし、粘着面を使ってしっかり液晶モニターに貼り付ける。ゆっくりはがしながら表面のゴミを取り除いていく

4 必要に応じてブロワーを吹く

ホコリ取りシールを使ってゴミを取り除いたあとに再度ゴミが付いてしまうこともあるので、ブロワーを使って確実にゴミを除去しておく

5 保護ガラスのシール1をはがす

赤いタブを引き上げて保護シールをはがし、貼り付けの準備を行う。赤いタブ①の面が、液晶モニターと貼り合わせられる面である

6 シール1側を下にして貼る位置を決める

保護シールをはがした面をカメラ側に向けて、正確に位置決めを行う。製品の縁を挟むように持ち裏面に指紋が付かないようにする

7 クリーニングクロスでゆっくり貼る

片手で製品をつまむように持ち上げて、端の部分から順に貼り付けていく。ガラス素材だが適度にしなるので貼り付けはとても容易だ

8 クリーニングクロスで気泡を押し出す

貼り終えたら気泡の有無をチェックする。気泡が入っていたならば、クリーニングクロスを使い表面に圧力をかけて画面外へ追い出す

9 保護ガラスのシール2をはがす

②と書かれた黒いタブを持ち上げて表面の保護シールをはがす。もし、細かい気泡が入っていてもバブルレス加工で自動的に消滅する

反射が少なくクリアでライブビュー撮影がしやすい

上記の手順でZéta Super Slimをカメラに貼り付け、さっそく屋外での撮影に持ち出してみた。第一印象で感じたことは“違和感のなさ”であり、フィルム素材に見られる“うねり”がないことから、斜めからのぞいても画質に変化はなく快適だ。透過率に関しても問題は感じられず、露出の判断に対してなんら影響はない。さらに色味への影響についても、撮影･再生時を通じて問題を感じなかった。特に、近年はライブビュー機能を使う機会が増えてきたが、屋外で使用しても反射が少ないので、フレーミングやピント合わせが正確に行えることもありがたい。また、筆者所有のキヤノン EOS 70Dでタッチ機能への影響も試してみたが、指の動きに問題なく対応。防汚コートのおかげで液晶モニター上にほとんど指紋が残らないことから、ライブビュー撮影時の視認性が未装着状態よりも向上するようだ。価格の高さを気にする人もいるだろうが、これまでのプロテクターとはまるで別物。「Zéta」の製品名が示すように、高機能なレンズフィルターが液晶モニターに装着されている感覚に近い。光学的なポイントをクリアした製品であり、これを取り付けない理由を探すことは難しい。筆者も所有するすべてのカメラに装着したいほどである。

ライブビューの視認性が向上

Zéta Super Slimを貼ったカメラで撮影したが、空のグラデーションの変化も的確に分かり、ホワイトバランスの決定にも支障はない。まさに、光学製品と呼べる高い性能を備えており、プロテクターの域を超えたクオリティがある

誰でもきれいに貼れる！お助けグッズが充実

ガラス本体、表示パネル用保護フィルム（機種による）、アルコール清掃紙、クリーニングクロス、ホコリ取りシールが付属。上手に貼るための配慮が感じられる至れり尽くせりの内容だ

対応機種（2015年9月末現在）

メーカー	機種
オリンパス	●OM-D E-M1 ●OM-D E-M10 ●PEN E-PL7
キヤノン	●EOS-1D X ●EOS 5Ds/5Ds R ●EOS 5D Mark Ⅲ ●EOS 6D ●EOS 7D Mark Ⅱ ●EOS 70D ●EOS Kiss X8i ●EOS Kiss X7i
ソニー	●α7R ●α7S ●α7 ●RX100 Ⅳ
ニコン	●D4S ●D4 ●D810 ●D750 ●D7200 ●D7100 ●D5500 ●D5300 ●D3300 ●D3200
富士フイルム	●X-T10
リコーイメージング	●K-3 Ⅱ ●K-3

希望小売価格：4,200円（税別）

新型のF2.0レンズ

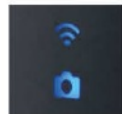
F2.0の円形魚眼レンズを前後に搭載。パンフォーカスで最短撮影距離は約10cm。前モデルよりもレンズは明るくなった。これを前後に2つ搭載して360度の画像を作り出す

1/2.3型の裏面センサー

新しく1,200万画素で1/2.3型のCMOSイメージセンサーを採用。感度も解像度も上がった。レンズに対してプリズムで90度曲げた状態で内蔵されるため、小さなボディに2つのセンサーを搭載できている

情報はイルミネーターで表示

中央のシャッターボタンは単体で撮影するときに使う。その下にWi-Fi、静止画・動画のイルミネーターがあり、現在の状況を確認できる。スマートフォンと接続しようとすると、Wi-Fiインジケータが点滅し、接続が完了すると点灯する

静止画

動画

Side

電源ボタン

無線ボタン

撮影モードボタン

電源ボタン・Wi-Fi・静止画／動画切り替えボタンが縦に並ぶ。静止画と動画の切り替えがワンタッチで可能になったのがうれしいところ

USB端子

HDMI端子

三脚穴の両側にmicroUSB端子とＨＤＭＩ端子がつく。microUSBは本体の充電とパソコンとの接続・充電用。HDMIを使えば全天球映像をスルー画で出せるので、全天球ライブ中継にも使える

新型の裏面センサー搭載で画質が進化した360度カメラ

リコーイメージング RICOH THETA S

●予想実勢価格 42,800円前後
●発売予定日 10月23日

写真・文●荻窪 圭

POINT 1 解像度が上がって緻密な描写が可能に

解像度が上がったことにより、細かい描写が可能になった。ダイナミックレンジも上がっており、階調性も豊かになった。全体的にm15に比べてワンクラス上の画質になった

THETA S

THETA m15

SPECIFICATION

撮像素子：1/2.3型裏面照射型CMOS×2／ISO感度：100〜1600／シャッター速度：60〜1/6,400秒（マニュアル時のみ）／内蔵メモリー：約8GB／静止画：5,376×2,688、動画1,920×1,080／サイズ：44（W）×130（H）×22.9（D）mm／重さ：約125g

POINT 3 マニュアルモード追加で夜景もキレイに撮影できる

シャッター速度とISO感度、ホワイトバランスを自分で選べるマニュアル露出モードが追加された。このモード時だけシャッター速度が1/8秒より遅くでき、最大で60秒まで設定できる

シャッター速度
絞りはF2.0固定だが、シャッター速度は1/6,400〜60秒までセット可能

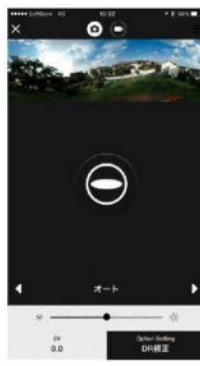
ISO
ISO感度はオートのほか、100から1600まで選ぶことができる

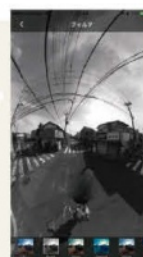
WB
WBはオートのほか、各種プリセットが用意されている。日陰が追加された

POINT 2 スマートフォン上でライブビューが可能に

新しくライブビュー機能を搭載。Wi-Fi経由なのでややタイムラグはあるが露出や構図の確認が可能になった。パノラマは全体を見て露出などをチェックしたいとき、全画面は撮影後のイメージを見ながら撮るのに良い

全画面表示

パノラマ表示

画像編集アプリTHETA+ も登場

THETA専用のアプリ「THETA+」が登場。撮った全天球パノラマを静止画としてシェアすることができる。フィルターをかけて色をつけたり、リトルプラネットやミラーボールなどさまざまな手法で360度画像を平面に展開することできる。任意のエリアをトリミングし、超広角写真として利用することも可能になった。特にリトルプラネットは近年注目されている表現手法で小さく凝縮した惑星のような写真にしてくれて面白い。

フィルター画面

リトルプラネット

天地を反転させる

空を基準に360度見せると大地が周りに、大地を基準に360度見せるとリトルプラネット風にすることができる

THETAは画期的なパノラマカメラである。片手で握れるスティック状の小さなボディながら全天球パノラマをワンショットで撮れる。片手で持ち、上にかかげてシャッターボタンを押せばピュッという音がしてもうそれでOK。史上もっとも手軽なパノラマカメラといっていい。

液晶モニターなどボディが大きくなるパーツをすべて捨て、そこをスマートフォンに任せることで、スリム化と低価格化を実現。スマートフォン上で360度くるくる回して再生を楽しめるというアイデアは素晴らしい。

ただ1つ、従来機のTHETA m15で難点があったのは画質。出力画像サイズが約600万画素相当と全天球を1枚で表現するにはいささか粗かったのである。新型のTHETA Sのもっとも大きな改善点はこの画質である。細くてスリムなボディに1/2.3型1,200万画素のセンサーと円形魚眼レンズのセットを2つ入れることに成功。撮影画素数も1,400万画素相当に上がった。具体的には2枚の魚眼画像から「正距円筒法」によって5,376×2,688ピクセルの静止画に変換して記録する。センサーも裏面照射型になり、解像感も格段に良くなったのみならず、暗所での撮影性能も改善された。さすがにデータ量が多いので転送に時間はかかるが得られるクオリティーは段違い。ディテールはしっかりしているしノイズも少ない。「THETA PRO」と呼んでいいレベルに達している。

内部のジャイロセンサーで水平を検知するのでカメラを斜めに持って撮影しても構わないのも良い点だ。ボディカラーをマット調のブラックに変更したのも良い。全方向を撮影する関係上、どうしても本体の一部が写っていたのだがマット調の黒ならそれが目立たず気にならない。

全天球パノラマ動画へのニーズにも答えるべく、静止画と動画の切り替えボタンが付き、フルHD動画での撮影時間も25分に延び、HDMIを使ったリアルタイムスルー画機能も搭載している。THETA SはユーザーのP声に応えて、正統進化したTHETAといえよう。

視点を下に移動させる

自撮り棒にTHETAを付け、手すりの隙間から差し出す

真下だって撮れる。THETAは垂直に持たなくてもOKだ

前側180度

後側180度

招き猫の中心にTHETAを置いて。振り返ると猫がこちらを、正面は猫の後ろ姿が。こんな写真も撮れる

カラーもモノクロも強いA3コンパクトプリンター

エプソン

EP-10VA

●発売予定日 2015年10月22日 ●予想実勢価格 49,000円前後

SPEC

印刷解像度：5,760×1,440dpi／最大対応用紙：A3／最大厚み：0.6mm／大きさ：479（W）×168（H）×395（D） mm（収納時）／重さ：9.5kg（インクカートリッジ、電源ケーブル含まず）

写真・文•佐々木啓太

精悍で引き締まった印象のこの黒いコンパクトプリンターがEP-10VAだ。ポイントは「新高画質」。コピーやスキャンなど日常使いから写真作品印刷までこなすカラリオの最上級モデルで、印刷クオリティーはプロセレクションにより近づいた印象だ。画質を支えるのが、グレーとレッドインクが追加された新6色「Epson ClearChrome K2インク」。グレーインクの採用でグレーバランスが向上し、染料インクプリンターが苦手としていたモノクロ印刷にも強くなった。レッドインクは、広い色域で鮮やかなカラー表現を可能にしてくれる。

プリンター単体で行えるダイレクトプリントも使いやすい。これまでのプリント作品作りはモニターもそろえてしっかりレタッチするというのが基本だったが、近年のカメラで撮影したデータならダイレクト印刷で十分なクオリティーのプリント作品が作れる。特にモノクロプリントが気になる人にはマストアイテムだ。グレーバランスに優れた染料インクプリンターという新しいジャンルで、写真プリントに対するイメージが大きく変わるかもしれないと感じた。

オリンパス OM-D E-M1／M.ZUIKO DIGITAL ED 75mm F1.8／75mm（150mm相当）／絞り優先AE（F2.5、1/640秒、−0.7EV）／ISO 200／WB：オート／写真用紙クリスピア<高光沢>

街で見かけたバイク。光の反射や少し角張った造形が光沢モノクロに最適だと感じて選んだ。光沢モノクロでは、その特徴が生きる被写体選びも大切だ

モノクロ

グレーインクが繊細なグラデーションを描き切る

緑やピンクの色の浮きを感じないニュートラルなモノクロプリントが可能。敷居の高さを感じるモノクロプリントだが、PCレスでも簡単に微調整できる。今回はプリンターで［明るさ +1／コントラスト +1］に調整してプリント。光の反射や金属部分の光沢感も強く染料インクを使った光沢モノクロというちょっと新しい表現の可能性を感じることができた。

PICK UP 淡いグラデーションに強くなった

グレーインクが、ハイライト部分の階調表現をより向上させている。微妙なグレートーンのつながりも見事だ。モノクロプリントでは黒の締まりを意識することが多いが、このトーンの再現力があってはじめて引き締まった黒の印象も強くなる

PCレスでハイクオリティーのモノクロ作品プリントが可能

［作品の印刷］→［モノクロ作品印刷］を選択してプリントするデータを選ぶとカラーデータも自動でモノクロに変換してプリントできる。プリンター内で、明るさとコントラストの調整が可能なので好みに合わせて調整しやすい。フチは黒と白を選べて、フチのサイズや画像の周りにフチと逆の色の枠をつけることもできるので、作品プリントとしてのクオリティーが上がる

❶SD、CFカードから読み込み

SDカードやUSBメモリーからのダイレクト印刷は、メディアをプリンターに差し込むと対応した機能のメニューが自動で表示される。モノクロ変換もプリンターがしてくれる

❷設定の比較シートを作成

コントラストや明るさを増減した一覧シートをプリントして、仕上がりを一覧で確認できる。本番プリントと同じ用紙でプリントするとその違いが分かりやすく簡単に好みの設定が選べる

❸好みの設定を入力

比較プリントをもとに明るさとコントラストを変更するのと失敗が少なく、用紙やインクの消費も抑えられてプリントが楽しくなる

POINT 1 作品プリントに強い新染料6色インク

新6色インクのポイントはグレーインク。モノクロプリント時に、グレーを再現するために掛け合わされるカラーインクの量が減り色転びを防げるほか、ハイライトの階調表現に優れている。さらに、グレーバランスの向上はカラープリントでの滑らかな色再現にも寄与する

エプソンの独自技術のLCCS（論理的色変換システム）によって、インク配分（LUT）が論理的に算出され、最適な階調性が選ばれる

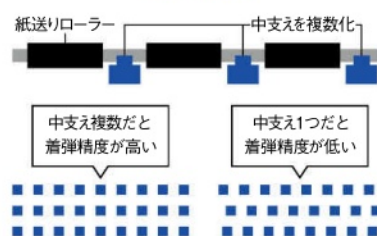
POINT 2 A3対応ながらコンパクトな床面積

印刷品質はプロセレクションに匹敵する高画質でA3まで印刷できるが、サイズはA4機並みで上から見るとA3用紙とほぼ同じサイズでスキャナーユニットがあるとは思えない薄型だ。新しくなった7VⅡと比較してもそのコンパクトさがよく分かる

POINT 3 A3も背面からの連続給紙に対応

A3サイズまで対応の背面トレイは、写真用紙5枚、普通紙10枚の連続給紙が可能になった。連続してプリントする際に、ストレスなく使用できる。また、背面トレイは収納時はコンパクトに収まってフタもついているのでホコリ等の心配も少ない。トレイは引き出しやすかった

POINT 4 複数の中支えで着弾精度を向上

紙送り部分の中支えを複数化することで、インクの着弾精度を向上させている。あまりピンとこないかもしれないが、中支えが増えることで紙送りが安定し、微妙なインク着弾位置のズレを防いでいるわけだ。より繊細な表現を実現し、妥協のない作品プリントが可能だ

オリンパス OM-D E-M10／M.ZUIKO DIGITAL 17mm F1.8／17mm（34mm相当）／絞り優先AE（F2.5、1/50秒、±0EV）／ISO 4000／WB：オート／写真用紙クリスピア<高光沢>

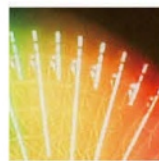
多重露光を使ってピントを合わせたものとピントを外したものを重ねた夜景。色のにじみがやわらかい印象になるが、そのグラデーションはプリンター泣かせの微妙さがある

カラー

レッドインクの追加で色再現性が大きく向上

レッドインクの効果を試すために赤系の多い写真を選んだ。妙な色の誇張を感じないプリント結果で、撮影時のイメージどおりの鮮やかな印象になった。赤以外の色の発色も良く、黒の締まりもあるので、高光沢用紙のクリスピアを使うと光沢感がより強くなって、ディスプレイで確認したときと同じように鮮やかな印象が強くなるのもうれしい。

PICK UP 赤の発色を中心に色再現精度が向上

レッドインクの追加で、カラープリントの色再現性が向上している。微妙な色のつながりもよく色の鮮やかさにも無理がない。グレーインクによりグレーバランスが良くなった効果もあって、誇張がなくそれぞれの色の発色がはっきりとした印象を受けた

光沢系顔料インク採用のA3ノビプリンターも新モデルが登場

エプソン
SC-PX7VⅡ

光沢系顔料インクプリンターの最上位モデル。今回のモデルチェンジは、新「オートフォトファイン！EX」の搭載と外観をブラックに統一して引き締った印象を強くしたことが主な変更点だ。大きな変更点はないが、ある程度完成されたパッケージともいえる。プロセレクションの安定感もあるので、光沢感を求めるレタッチ派ユーザーにはマストアイテムだ。

●発売日
2015年10月8日
●実勢価格
64,000円前後

印刷解像度：5,760×1,440dpi／最大対応用紙：A3ノビ／最大厚み：1.3mm／大きさ：622（W）×219（H）×324（D）mm（収納時）／重さ：12.3kg（インクカートリッジ、電源ケーブル含まず）

オリンパス OM-D E-M10 Mark Ⅱ／M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0／12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F2.5、1/10,000秒、±0EV）／ISO 200／WB：オート／ハーネミューレ フォトラグ

今回はモノクロ作品をプリント。グレー系インクを搭載していないがトーンの再現はなめらか。顔料インクらしい精細感のあるプリントで、光沢感が生み出すキレもあって好印象だった

美しき大自然の撮り方を学ぶ

四季の風景レッスン

北海道の景色は、雄大かつ繊細。ここでしか撮れない世界がある。
この連載では、富良野在住の写真家・高橋真澄に
四季折々の美しい風景写真の撮り方を教えてもらう。

写真・文•高橋真澄

朝日に照らされて輝く新雪の大地

9月下旬には山に初雪が降るのだが、平地に雪が降りはじめるのは10月中旬以降になる。そのまま根雪になるのではなく、積もって溶けてを繰り返し、11月中旬ごろから雪の季節へと変わっていく。新雪によって見え隠れする大地の色合いや文様など、移り変わる季節の変化が美しさを引き立てる。真っ白な静寂さの中、白い雪によって明暗差が生まれ、コントラストが高くなると、畝（うね）などの凹凸が強調されて、メリハリの効いた景色へと姿を変える。また、平らなところや木々などは雪でぼかし効果がかかり、階調豊かな景色が楽しめるようになる。光があるときは明暗差を利用した造形的な景色、そして光がないときは階調を生かした景色と、現場の状況に応じて、頭の中を切り替えることが重要になる。

新雪の景色は気温の上昇とともに急速に溶けて変化するため、撮影スピードが何よりも大切になってくる。また、同じ場所でも少しの時間差によって、まったく違う表情になる。撮影の目星を付けた場所は、何度でも様子を見るべきだろう。撮影前日の夜にしぐれて気温が下がる予報のときが狙い目だ。雪が多く残っている午前中に撮影を集中して、雪が溶けはじめて汚れてくる午後からは、影の部分など、ユニークな形に注目して撮影するのがオススメである。当然、白い景色が多いため、そのまま撮影すると露出はアンダーになる。プラス補正を活用して、色が濁らないようにすっきりとさせよう。

光がある場合は、日陰の青色を利用することで作品の幅が広がる。当然ホワイトバランスが大事な要素になってくる。雪の質感を意識する場合、太陽光で青みを強くしてすっきりさを生かすか、曇りなどで階調を生かすかは好みなのだが、変化が大きいので、常にホワイトバランスを意識しておきたい。雪の反射を制御するためのPLフィルターも準備したい。好みの反射を見つけて撮影することで表現の幅が広がるだろう。また、この時期は雪が降っても道路上の雪は溶けていることが多いが、朝夕に気温が下がると凍結する。早めにスタッドレスタイヤに交換して、安全運転を心がけたい。

北海道上川郡美瑛町
10月下旬、7時00分
望遠レンズ

カメラ：ソニー α7R
レンズ：70-200mm F2.8 G SSM Ⅱ
焦点距離：135mm
露出モード：絞り優先AE
絞り値：F16
シャッター速度：1/15秒
露出補正：+1.0EV
ISO感度：400
ホワイトバランス：太陽光

畑の畝の曲線と雄大な景色が交差する構図で広がりを意識した。雪が積もり畑の文様が分かりにくかったので、ほどよく溶けるタイミングまで待った。カラマツの黄金色と白い雪、そして秋まき小麦の緑色の対比が美しい

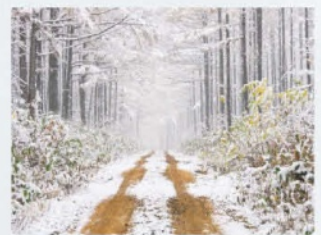
ワンポイントアドバイス

直線と曲線で構図を作る

初雪はほどよく平地の景色を消してくれ、形と色の階調を表現しやすい。それは日本画のような柔らかな印象をもち、鑑賞者の視線を容易に導くことができる。撮影時のポイントは、できるだけ不要なものをカットしてシンプルな構図にすることである。

畑の畝の曲線がとても心地良かった。これは意図的に作ったものではなく、曲がっている土地を効率良く耕していくと、必然的に現れてくる形なのだ

色を利用してメリハリをつける

雪は被写体の平らな部分に積もり、垂直面には積もらない。その作用をうまく利用することで、被写体本来がもつ色合いと雪の白色を対比させることができる。画面内の濃淡が明確になると、縦横などの形がはっきりして、メリハリを付けることが可能になる。

道の先に消失点を作り、三角形の構図で安定感を出した。画面奥の煙った様子からこの先にはいったい何があるんだろうという期待感をもたせた

絶景の星空風景

空に輝く満天の星空風景を美しく撮る

「昇るオリオン座をとらえる」

東の空に昇ってくるオリオン座は数ある星座の中でも別格の存在感を誇る。月光の下でも人工光の中でも、さまざまな手法でその美しさを表現してみよう。

写真・文●沼澤茂美

今回の星空

月光に照らされた風景の中で、オリオン座の存在感を保つために、各要素の明るさ・コントラスト調整を行う

沼澤茂美（ぬまざわしげみ）：1958年新潟県生まれ。天体写真、天文イラストを中心に活躍。多くのNHK科学番組プロジェクトに携わってきた。ナショナルジオグラフィックツアー専属写真家。おもな著書に『星座写真の写し方』『NGC/IC天体写真総カタログ』『星降る絶景』などがある。環境大臣賞受賞。http://www.jplnet.com/

Point 1 オリオン座の強さを生かして ランドマークと一緒に撮る

オリオン座は冬を代表する星座だ。1等星を2つ含み、均整のとれた形と相まってどのようなシチュエーションでも絵になる。今の季節なら夜半前にほぼ東南東の空に昇って見える。

日本は縦に長い国なので、緯度によって若干昇る位置と星座の傾きが変わってくる。ちなみに南半球ではオリオン座は逆さに昇ってくる。この画像は、この土地ではよく知られる川と、遠方にツインピークスを形作る地元のランドマークを月光の下に配置した。オリオン座は存在感が大きいので、さまざまなシチュエーションの中でも「星空」のイメージを保ってくれる。

Point 2 月明かりで照らされた地上と オリオン座のバランスを考える

この時はオリオン座の20～30度上に下弦の月（半月）があり、空全体を絹雲が覆い、月傘も見える状況だった。そのため、さまざまな要素が入り乱れ、全く異なるテーマをいくつか構築できる条件だった。そんな中で、絶妙な位置に輝くオリオン座が、幻想的な地上景色の中にとても美しく輝いて見えたため、その雰囲気をいかに再現するかに集中した。撮影場所を少しずつ移動したり、画角、縦横の構図などを試し、試写を繰り返して気に入った描写へ追い込んでいった。川面の描写は1枚ごとに変化するため、構図を決定したあとも多数撮影して良い状態を見つけ出す必要がある。

月を入れるとオリオン座の存在が弱まる

縦構図にして月を入れ込んだ写真だ。この状態では、オリオン座の存在感が薄れ、主題は完全に月に変わってしまう

Point 3 全体のトーンを調整して幻想的に仕上げる

複数の要素をまとめて明確に主題を持った作品に仕上げるためには、各要素の明るさやコントラストなどの調整がとても重要になってくる。今回の作品では、星空、月明かりの階調処理、遠景の山、川面の描写などを調整するため、それぞれの要素をマスクによって切り分けて別レイヤーで処理している。もちろん、加工はRAWデータから展開した16bitデータで行うのが良いだろう。明るさやコントラストなどの調整幅が広く、階調破綻がしにくく、ノイズの処理も格段に効果的に行うことができる。

最終的には各レイヤーを統合して、全体的なコントラストや明るさ、周辺光量などを調整して仕上げる。

撮影DATA

CAMERA	キヤノン EOS-1D X
LENS	EF24-70mm F2.8L Ⅱ USM
FOCUS LENGTH	26mm
EXPOSURE MODE	マニュアル
F-NO.	F2.8
SHUTTER SPEED	10秒
ISO	2000
WHITE BALANCE	撮影時：オート 現像時：3,900K
SETTING	高感度ノイズ軽減：ON［弱］ 長時間ノイズ軽減：OFF
CONDITION	固定撮影
ACCESSORY	ケンコー・トキナー プロソフトン［A］

+1 Technique 月のない夜では、人工光を効果的に利用する

オリオン座の描写だけを考えれば、暗夜の人工光のない郊外で撮影すれば、コントラストも高く、星の輝きもいっそう強く表現できる。しかし、星空風景としての叙情的な要素や季節感、また、人間の生活感などを表現する場合は、地上風景のディテールが欲しいところだ。月のない夜は、人工光や、LEDライトによる適度な照射で地上を照らすのが効果的だ。この画像は露光中にLEDライトを淡く照射している。

Photographer

魚住誠一×高田 秋

Model

ポートレートコラボレーション

Vol. 04

はしゃぐ彼女

秋めいてきた今月号のロケーションに秋ちゃんが選んだのは都内の公園。なんでもオーディションの帰りに見つけた場所なのだとか。閑静な住宅街の中にあるこの公園には、ブランコ、滑り台が設置されている。そして中央には、おそらくこの公園のメインであろう水があまり出ていない噴水が……。秋ちゃんが惹かれたというこのヘビ型の噴水を使って、楽しい雰囲気で撮りたいのだそうだ。なんの変哲もない公園で楽しいシーンは撮影できるのか、心配そうに「魚住さん、なんとかしてください」とお願いする秋ちゃん。

ロケ当日は平日ということもあり、子どもの姿はなく、近くの学生やサラリーマンがベンチで弁当を広げていた。魚住さんは公園を見渡して「公園だったら遊具を使って動きを作ることができるし、今月は小物を積極的に利用してみようよ」とのこと。はしゃいだような楽しい動きの表現には、連写機能とカメラのアングルがポイントになる。元気にブランコで遊ぶ姿をローアングルで狙い、水際でおどけながらはしゃぐ決定的瞬間を収めたい。そのほか、秋っぽい1枚を撮るために、秋ちゃんが用意したメガネの小物を使ってみる。

魚住誠一（うおずみせいいち）：1963年愛知県生まれ。大学卒業後に渡米し、1994年よりフリー。毎週月曜日にはWebにて新人モデルや女優を撮りおろしたModel Talksを更新中。http://www.zoomic.jp/

高田 秋（たかだしゅう）：1991年北海道生まれ。レプロエンタテインメント所属。雑誌『mina』のモデルをつとめながら、CMやラジオで活躍。TBS「ビジネスクリック」水曜日レギュラー。ソニー α7 IIで写真を勉強中! http://yaplog.jp/lp-shu_takada/

①-1

ソニー α7R II／Distagon T* FE 35mm F1.4 ZA／35mm／マニュアル露出（F2.2、1/500秒）／ISO 400／WB：オート

久しぶりにブランコを漕ぐ彼女、といったイメージ。前後の動きはピント合わせがむずかしいので、コンティニュアスAFで追いかける。連写した数枚の中から顔と足のバランスが良い1枚をチョイスした

Choice of Location by Shu♥

公園

ヘビをモチーフにした噴水がユニークな公園。秋めいてきた公園で、元気にはしゃぐイメージを撮りたいという秋ちゃん。水があまり目立たない噴水のようで、どこにでもある公園のような……。華がないともいえる普通の公園でどう撮るか!?

最近の秋ちゃんはAFロックを習得! 前ボケを入れた写真がお気に入りなのだそう

ソニー α7R II／Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA／55mm／マニュアル露出（F2.8、1/800秒）／ISO 400／WB：オート

水際ではしゃぐ秋ちゃん。自由に動いてもらって連写&コンティニュアスAFでピントを合わせ続けた。動きを止めないことで、自然な表情が撮影できる

ソニー α7R II／Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA／55mm／マニュアル露出（F1.8、1/800秒）／ISO 400／WB：オート

目ヂカラの強い1枚。片目だけにピントを合わせてほかは大きくぼかしているため、より瞳の印象が強まる

ソニー α7R II／Distagon T* FE 35mm F1.4 ZA／35mm／マニュアル露出（F3.2、1/400秒）／ISO 200／WB：オート

持参したメガネに手をかけて目線を外してもらった。小物によって知的な印象が強まって、いつもとは違う一面が表現できた

After Shooting

高田「今日もありがとうございました（笑）。あまり特徴のない場所かなと思ったんですが、うまく写真にしてくださって（笑）」

魚住「まだ紅葉には早くて、季節柄、色味のバリエーションを出すのがむずかしかったけれど、小物をうまく使うことでバリエーションは作れるよね」

高田「メガネ姿も初めて披露してみました」

魚住「秋の季節を表現するポートレートの小物アイテムとしては、メガネとかハットとかは良いよね。おしゃれだし、センスが問われるけれども、秋ちゃんはおしゃれだからねー」

高田「ふふふ」

魚住「今回は横への移動ではなく、前後への動きが多くて、ピント合わせがむずかしかったのだけれど、顔認識AFや連写機能を駆使して乗り切りました。これからおしゃれの季節がやってきますからね、ポートレート撮影がいちばん楽しい季節じゃないですか」

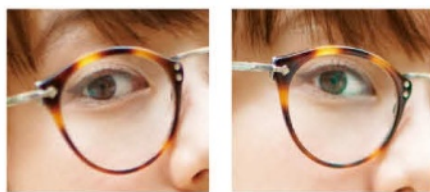
高田「モデルも自分で小物を用意すると、写真にバリエーションがでますね」

point 1 動きで楽しさを伝えるために連写機能を利用

ブランコを漕ぐシーンを撮影する。立ったままのアイレベルだと、動きが強調されずに面白味に欠ける。ブランコの下からライブビューを使い、ローアングルで構えることで、勢いが強調できる。フォーカスエリアを「ワイド」にして、AFモードは「AF-C」に。ピントは顔に合わせて連写する。

足よりも下の位置からカメラを構える。手ブレを防止するために、柵に手を固定している

point 2 メガネ女子の撮影はレンズではなく目にピントを合わせる

読書の秋。ということで、ちょっと知的なイメージを作るのに最適なのがメガネ。昨今のメガネ男子&女子ブームのおかげでメガネをかけたポートレートは人気だ。ピントは必ず目に合わせる。メガネにピントが合ってしまうと、表情の印象がぼやけてしまうからだ。AFで合わせたのち、MFにして微調整する。

目にピント

前ボケとなったべっ甲のフレームが目ヂカラを強調して、視線がはっきりしている

メガネにピント

メガネのフレームにピントが合ってしまうと表情の印象が弱くなってしまう

point 3 表情の撮影には遊具を柔軟に利用する

顔のアップで表情を切り取りたい。公園ならではの遊具、ベンチに寝てもらう。女の子は横になると、腹式呼吸になることが多いため、いつもとは違う表情が狙えるのだ。絞りはF1.8の開放にして、上になった片目（ここでは右目）にピントを合わせて、大きくぼかしたい。

上から狙うと、上目づかいの表情になる。撮影者の体勢が不安定になるので、ブレには十分注意したい

写真力がアップする

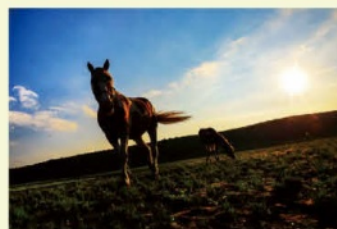
Photoshop レタッチ塾

お気に入りの写真をレタッチしても、なぜうまくいかないの? もしプロが自分の作品に手を入れたらどう仕上がるのだろうか? フォトグラファー・大和田 良がそんな疑問をスッキリ解決する。読者の皆さんから募集した作品を、実際に大和田先生がRAW現像&レタッチ! どんな仕上がりになるのか、ライブ感満点でお届けする。

写真・文•大和田 良

第4回 「光と影」を印象的に再現する

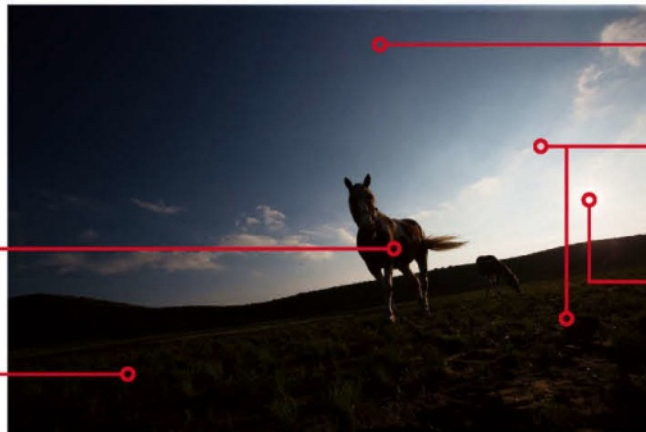
「光と影」というテーマでご応募いただいた今回は多くの作品が寄せられ、また良い写真も多かったように思う。特にシルエットを用いたものや強いコントラストで描かれた写真など、それぞれの表現を感じられた。どの写真を取り上げるかについてはずいぶん迷ったのだが、今回は逆光による雄大な光景が印象的であった悠々さんの写真に注目してみたい。熊本県阿蘇の草千里で出合った馬を撮影された写真だそうだ。作者のレタッチでも強いコントラストと色により印象的な作品になっているが、写真芸術にとって視覚的にも重要な役割を果たす「階調再現」をさらに豊かにするにはどうすれば良いかという点でレタッチを考えた。ハイライトからシャドウまでのグラデーションを感じさせつつ、光と影を感じさせるコントラストを両立してみよう。

オリジナル作品

カメラ:
キヤノン EOS-1D X
レンズ:
EF16-35mm
F2.8L II USM
撮影地:
熊本県 阿蘇山

作者:悠々さん

準備

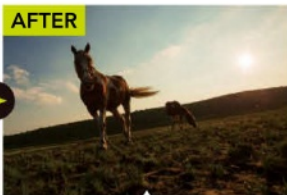
レタッチの方向性を検討する

基本的な絵作りは悠々さんの作品のコンセプトを引き継ぐが、階調の保持をより意識してグラデーションの再現と画面の立体感を強調していく。夕暮れの光の色再現や土の色、馬の質感再現などを見ながら細かく選択範囲を分け、それぞれ必要なコントラストをつけながら調整したい。

※本連載はAdobe Photoshop CCを例に手順を紹介しています

STEP 1 全体の階調を整える

Camera Raw

BEFORE

画面全体が暗めで硬い印象

暖色が強まり明るくなった

カラーバランスを整えて左上の空の青と地平線近くのオレンジの色の差をある程度出しておく

WBは曇天を選択して暖色系を強調。階調は柔らかめに

トリミングは2対3でオリジナル作品とほぼ同じにしながら、光の伸びて行く様子を出すため画面右下の土の部分などを少し足している。細部のコントラストはPhotoshop上で行うため現像時のパラメーター調整では全体的に柔らかめに階調を残すように意識した。また、カラーバランスを細かく調整して左上の青と地平線近くのオレンジを強調する。

大和田 良(おおわだりょう):1978年宮城県生まれ。東京工芸大学芸術学部写真学科卒業、同大学院メディアアート専攻修了。2005年スイスエリゼ美術館による「ReGeneration. 50 Photographers of Tomorrow」に選出され、以降国内外で作品を多数発表する。2011年日本写真協会新人賞受賞。著書に『prism』『ノーツ オン フォトグラフィー』『FORM』などがある

STEP 2 地面の明暗を強調する

Photo shop

画面の斜め下半分のコントラストを整える。選択範囲は山の稜線を目安に作り、境界線を150pixelぼかす。光と影のコントラストを生かすためトーンカーブでシャドウ部分にコントラストをつけ、ハイライトは明るくなりすぎないように元のカーブに近いポイントに設定した。シャドウが完全につぶれないように意識する。

下半分を多角形選択ツールで選択。馬の体に効果がかかりすぎないように境界線は大きめにぼかす

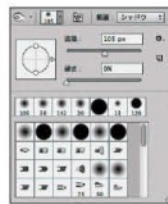
光が当たった土や草の輝きを意識しつつ、影の部分がより濃くなるように最小限のトーンカーブを作っていく

地面にコントラストがついた

STEP 3 馬のコントラストを整える

焼き込み／覆い焼きツールを用いて馬の再現を整え、細かいコントラスト調整を行う。暗い部分は範囲をシャドウに設定して露光量は3〜5%で行い、ある程度明るい部分は範囲を中間調に、露光量は7〜10%に設定すると良い。拡大して小さなブラシで細かく調整していくと細部まで整えることができる。

焼き込みツールで暗くしたい部分を暗く、覆い焼きツールで明るくしたい部分を明るく

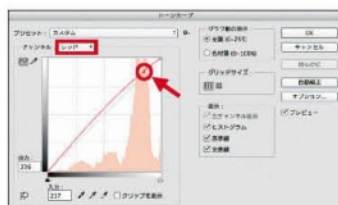
露光量と範囲、ブラシの大きさを調整して細部まで細かく調整していくことで立体感のある仕上がりになる

馬の顔にメリハリがない

コントラストがついた

STEP 4 青と赤を強調して鮮やかに

Photo shop

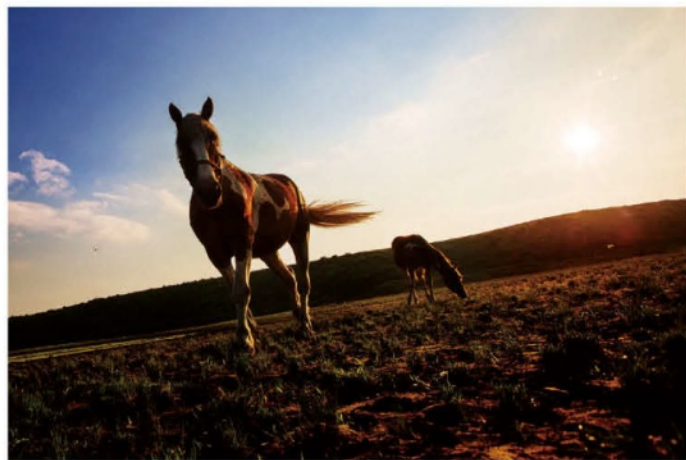
画面左上を選択し、トーンカーブで青味を強くする。また、地平線に近い部分と逆光部分には逆に赤と黄色を強くして空の色合いを整え夕暮れのイメージを強調させた。雲の明瞭感を高めるためには部分的に選択してコントラストを強くすると良い。その後全体の明るさとコントラストを微調整し、画面周辺部分は少し暗くした。

左上の空の青を整えるためトーンカーブのブルーチャンネルを使い整える

オレンジを強調したい部分にはトーンカーブのレッドチャンネルを用い、ブルーチャンネルは下げて黄色を足していく

全体的に色味がくすんでいる

青と赤が強調されて鮮やかに

レタッチ後

全体の色やコントラストは悠々さんの作品に近い印象に仕上げつつ、階調を残したことで画面に立体感が生まれた。また、逆光のイメージもハイライトに階調を持たせたため光芒の再現が柔らかく、光が長く伸びてくるように感じられる。構図としてはトリミングの違いにより右下に明るく反射した土の輝きが見え、光の強さや夕暮れの影の長さを強調することができた。

読者の皆さんの作品を募集します！

この連載では、読者の皆さんの作品を実際に大和田先生がRAW現像とレタッチを行い、その手順を誌面で再現します。毎月テーマを変えて作品を募集し、1〜2作品を誌面でご紹介する予定です。ご自身の作品がどのように変わるのか試してみたいという方のご応募を心よりお待ちしています！

1月号のテーマ
「私の幸せ」
応募締切：2015年11月10日

応募方法

1. GANREFにログインし、応募受付中のコンテストにアクセス http://ganref.jp/photo_contests
2. 「デジタルカメラマガジン Photoshopレタッチ塾 2016年1月号選考（お題：「私の幸せ」）」をクリック
3. 応募要項をご確認の上ご応募ください
4. 大和田先生による選定後、編集部よりメールにてRAWデータご提供のご相談をさせていただきます

OLYMPUS PRESENTS

写真で伝えたいこと

http://www.olympus.co.jp/jp/interview-photographers/

写真家はなぜ写真を撮るのか？
まだ見ぬ誰かに、自分が感じたことを知ってほしいから
写真だからこそ伝わる思いがある

Vol. 01 — 海野和男

昆虫の造形や色彩はとても美しい。小さい頃、やっと捕まえたクワガタやカミキリにじっと見入ったり、鮮やかなチョウをじっくり見たくて虫捕り網を振り回した思い出がある大人は多いだろう。

写真は、そんな昆虫をじっくりと見せてくれるありがたい手段だ。ところが、頭からお尻の先までしっかりピントを合わせて昆虫の形態を写し止めるのは、意外なほどの難事らしい。

昆虫写真家・海野和男は、4年ほど前から「深度合成」という技術を使って、この難題に取り組んでいる。いったいどんな技術なのか、写真で伝えることがどう変わるのか、お話を聞く機会を得た。

先ほど、ピント合わせが難しいと書いた。それは、被写体である昆虫が小さいからだ。テントウムシほどの大きさの昆虫をマクロレンズで近接して画面いっぱいに撮ろうと思ったら、とても全体にピントを合わせることなどできない。

では、どうするか。まず考えられるのが、生きている虫ではなく、標本を撮影するというやり方だ。標本なら動かないので、被写界深度をコントロールしやすい。実際に、チョウや甲

シロスジカミキリ（Batocera lineolata）

オリンパス OM-D E-M10 Mark Ⅱ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro ／60mm（120mm相当）／絞り優先AE（F5、1/100秒、±0EV）／ ISO 400／ WB：オート／フォーカスブラケット撮影後に深度合成

虫を図鑑に収めるときは、この方法がよく使われるという。

しかし、その手法に海野はまったく魅力を感じない。「僕は地球上に生きている虫の、生命体としての魅力を伝えたいのです。死骸を撮ったって、その魅力は伝えられないですよ」と語る。

海野は、生きた昆虫を写し撮るために、2つの手法を駆使する。1つめはストロボの使用。被写界深度を深くするために、絞りをF16かF22まで絞り込み、ストロボで昆虫の動きを止めて撮影する。ここ1年ほどは、LEDライトでのライティングを試みるなど手法を進化させてきた。しかし、絞り込むことで画質が落ちるのだけはどうしようもない。

そこで、ここ数年、熱心に取り組んでいるのが深度合成だ。これは、ピントが合う場所を少しずつずらした写真を何枚か撮り、ピントが合った部分を合成して1枚の写真に仕上げるというテクニックだ。

実は、コンパクトカメラの分野では、この機能を搭載した製品が昨年登場している※1。海野自身も、とりわけ野外の撮影ではこの機能を楽しみながら使ってきた。しかし、画質の点では物足りなさが残る。だから、特に昆虫の造形を精緻に写したいときは、一眼レフやミラーレス一眼でフォーカスを変えて撮影し、それをパソコンで合成するという。近著『世界のカマキリ観察図鑑』では、この手法で撮った写真が多い。

ところが、この作業がかなり厄介なのだという。その撮影の手順を聞いて驚いた。まずは、白バックの撮影装置にカマキリを入れる。そして、カマキリにポーズを取らせる。指を使ってカマキリと対話しながら、向きを変えたり、カマを持ち上げさせたりするのだ。カマキリは怒りやすく、そんな挑発によく乗ってくれる。

そして、撮影。マニュアルで少しずつフォーカスを動かしながら、シャッターを切る。しかし、熟練の腕を持ってしても、1枚の写真に2秒はかかる。10枚なら20秒だ。その間、カマキリがじっとポーズを保ってくれるとは限らない。少しでもカマキリが動けばやり直しだ。首尾よく撮影できても、パソコンでの合成作業にまた時間がかかる。こんなふうに撮影するので、1枚の作品を仕上げるのに、1日か2日かかるのだという。

そんな海野にとって、強い味方が登場した。フォーカスブラケット機能を搭載したミラーレス一眼機だ※2。このカメラを使うと、一度シャッターボタンを押すだけで、フォーカス位置を変えた写真が連写される。普段使っているカメラも、新しいファームウェアでこの機能を搭載する※3。

海野は、試作機の段階でテストした。あまりの楽しさに、ほぼ1カ月、ほかの仕事が手に着かなかったほどだという。「こんなに簡単に撮れるのに、画質は素晴らしい。これなら、1メートルぐらいに引き延ばしても問題ありません。そういう写真で構成した写真展をやってみたいと思いますね」。そう語る海野の表情は熱意に満ちていた。

“昆虫が持つ形態の妙を精緻な映像で見てほしい”

文●岡野幸治

カステルナウディツヤクワガタ（Odontolabis castelnaudi）
オリンパス OM-D E-M10 Mark Ⅱ／M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro ／60mm（120mm相当）／絞り優先AE（F13、1/80秒、+1.3EV）／ ISO 200／ WB：オート／フォーカスブラケット撮影後に深度合成

シロコブゾウムシ（Episomus turritus）
オリンパス OM-D E-M10 Mark Ⅱ/M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro ／60mm（120mm相当）／絞り優先AE（F5、1/200秒、+1.3EV）／ISO 200／ WB：オート／フォーカスブラケット撮影後に深度合成

マメコガネ（Popillia japonica）
オリンパス OM-D E-M10 Mark Ⅱ／M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro ／60mm（120mm相当）／絞り優先AE（F8、1/80秒、+1.7EV）／ISO 200／ WB：オート／フォーカスブラケット撮影後に深度合成

PROFILE

海野和男

うんのかずお：1947年東京都生まれ。昆虫を中心とする自然写真家。東京農工大学で昆虫行動学を学び、撮影した写真が雑誌に掲載されたのを機にフリーの写真家の道を歩む。アジアやアメリカの熱帯雨林地域で昆虫の擬態を長年撮影。著書、テレビ出演多数
http://www.goo.ne.jp/green/life/unno/

被写体全体をシャープに写せる深度合成機能

マクロレンズによる近接撮影や望遠レンズでの撮影では、ピントが合ってみえる範囲である被写界深度が極端に浅くなる。そこで、フォーカス位置を少しずつずらして撮影し合成する手法が深度合成だ。オリンパス OM-D E-M1には11月公開予定のファームウェア4.0へのアップデートで深度合成機能があらたに搭載される。

深度合成なし

近接撮影では極端に被写界深度が浅くなるため、昆虫全体にピントを合わせにくい

深度合成あり

少しずつフォーカスをずらし撮影した写真を合成することで、昆虫全体をシャープに写せる

※1 オリンパス STYLUS TG-3 Tough。現行機はSTYLUS TG-4 Tough
※2 オリンパス OM-D E-M10 Mark Ⅱ
※3 オリンパス OM-D E-M1 Ver. 4.0とOM-D E-M5 Mark Ⅱ Ver. 2.0。E-M1はカメラ内での深度合成が可能

HARUKI
遠い記憶。
memories

Canon EOS 5D Mark Ⅱ／
EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／
300mm ／ F8、1/2,000sec ／
ISO 400／ WB : Auto

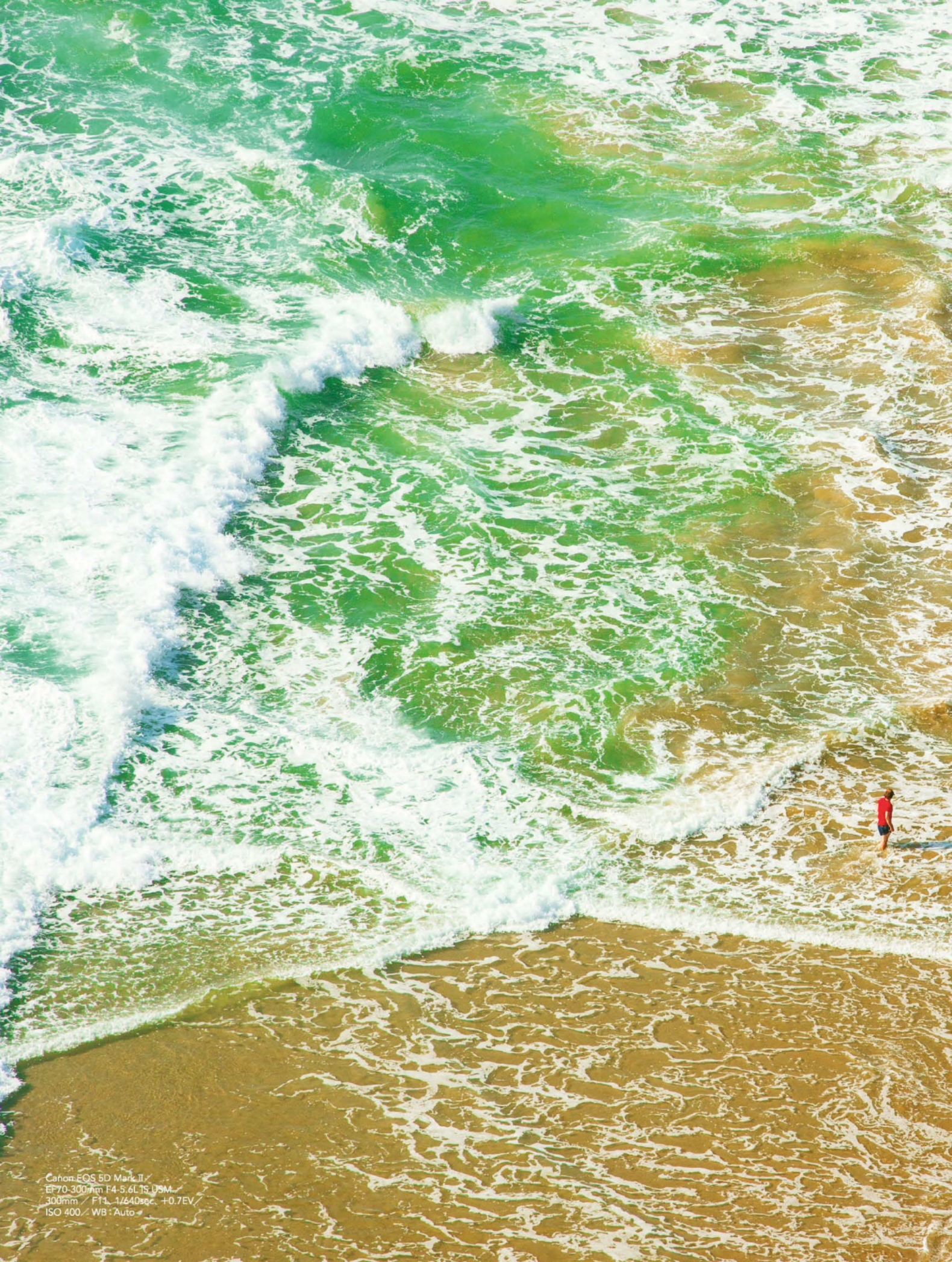
Canon EOS 5Ds R／
EF100-400mm
F4.5-5.6L IS Ⅱ USM／
400m／
F8、1/1,000sec／
ISO 400／ WB：Auto

Canon
EOS 5D Mark Ⅱ／
EF70-300mm
F4-5.6L IS USM／
300mm／
F6.3、1/640sec／
ISO 400／ WB：Auto

Canon EOS 5Ds／
EF16-35mm
F4L IS USM／
16mm／
F7.1、1/1,250sec／
ISO 400／ WB：Auto

Canon EOS 5Ds／
EF70-300mm
F4-5.6L IS USM／
135mm／
F4.5、1/40sec／
ISO 400／WB：Auto

Canon
EOS 5D Mark Ⅱ／
EF70-300mm
F4-5.6L IS USM／
300mm／F8、
1/6,400sec、＋0.7EV／
ISO 400／WB：Auto

Canon EOS 5Ds／
EF70-300mm F4-5.6L
IS USM／135mm／
F6.3、1/8,000sec、
－0.7EV／
ISO 1600／WB：Auto

Canon EOS 5D Mark II／
EF70-300mm F4-5.6L IS USM／
300mm ／ F11、1/640sec.、+0.7EV／
ISO 400／ WB：Auto

それが例え日常と変わらぬほんの些細な行為であっても、旅に出るとそのすべてが非日常へと化学変化を起こしてしまいます。自らの肉眼で直接見るという行為はとても克明でそれが現実でもある訳なのですが、ファインダーを通して見る行為は時として曖昧かつ不確かな映像を脳裏へと刻むことがあるのです。もちろん実際にはカメラという装置を使ってできあがった写真というものもリアル以外の何ものでもありません。

旅を終えた後日、旅先で見た光景は現実にあった光景だったのだろうか、出会った人たちは現実に存在した人たちだったのだろうか？ と記憶の糸を手繰り寄せながら自分自身の記憶に翻弄されることがよくあります。

果たしてどちらが本当なのか、それはわからないけれどボクの記憶の扉の奥の方では、目覚めたばかりの時の夢の名残りみたいにボンヤリとしてはいるのだけれど心地良さを感じてしまうフィクションとリアルの境界線のような瞬間があるのです。

写真展情報

HARUKI写真展

遠い記憶。

場所：キヤノンギャラリー銀座
会期：2015年10月22日（木）〜10月28日（水）※日曜休館
時間：10:30〜18:30 ※最終日は15:00まで
※10月24日（土）17:00から「トーク笑・怪しい記憶」を開催
出演：坂本直樹、石田立雄、伏見行介、HARUKI
※キヤノンギャラリー仙台は2015年11月12日〜11月24日まで
キヤノンギャラリー梅田は2015年12月17日〜12月25日まで
キヤノンギャラリー福岡は2016年1月14日〜1月26日まで

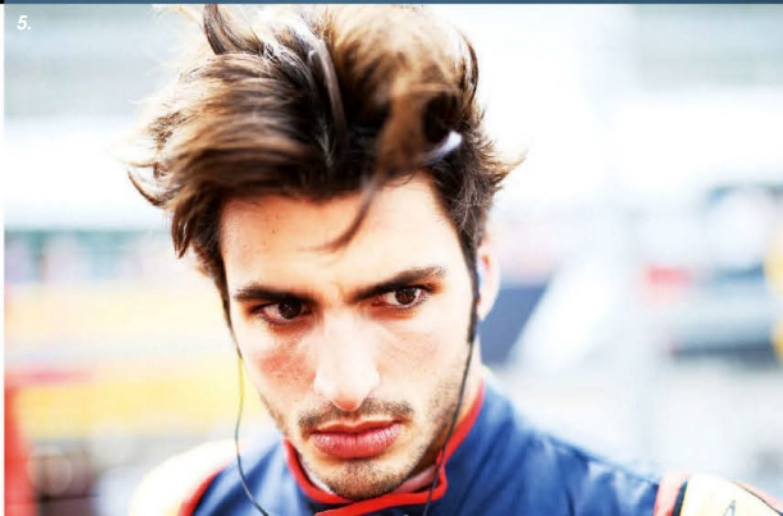
SPECIAL GALLERY Formula 1

SUZUKA-9.24・25・26・27

Photographer= 熱田 護

1. キヤノン EOS-1D X ／ EF11-24mm F4L USM ／11mm ／絞り優先AE（F5.6、1/500秒、+0.3EV）／ ISO 200／ WB：太陽光
2. キヤノン EOS-1D X ／ EF400mm F2.8L IS II USM ／400mm ／マニュアル露出（F9.1、1/800秒）／ ISO 500／ WB：太陽光
3. キヤノン EOS-1D X ／ EF70-200 F2.8L IS II USM ／123mm ／絞り優先AE（F5.6、1/1,250秒、+1.0EV）／ ISO 500／ WB：太陽光
4. キヤノン EOS-1D X ／シグマ 50mm F1.4 DG HSM | Art ／50mm ／マニュアル露出（F22.6、1/12秒）／ ISO 100／ WB：太陽光
5. キヤノン EOS-1D X ／シグマ 50mm F1.4 DG HSM | Art ／50mm ／絞り優先AE（F1.4、1/1,000秒、+1.0EV）／ ISO 250／ WB：太陽光

Mamoru Atsuta

1963年、三重県鈴鹿市生まれ。東京工芸大学短期大学部写真技術科卒業。1985年、ヴェガインターナショナル入社。坪内隆直氏に師事し、2輪世界GPを転戦。92年よりフリーランスとしてF1をはじめとするモータースポーツや市販車の撮影を行う。日本レース写真家協会（JRPA）会員、日本スポーツプレス協会（AJPS）会員

6. キヤノン EOS-1D X ／シグマ 50mm F1.4 DG HSM | Art ／50mm ／マニュアル露出（F8、1/15秒）／ ISO 200／ WB：太陽光

7. キヤノン EOS-1D X ／ EF70-200 F2.8L IS II USM ／200mm ／絞り優先AE（F5.6、1/400秒、＋1.0EV）／ ISO 500／ WB：太陽光

8. キヤノン EOS-1D X ／ EF400mm F2.8L IS II USM ／400mm ／絞り優先AE（F2.8、1/1,250秒、+0.7EV）／ ISO 500／ WB：太陽光

9. キヤノン EOS-1D X ／ EF11-24mm F4L USM ／11mm ／マニュアル露出（F6.4、1/5,000秒）／ ISO 500／ WB：太陽光

F1 日本GP

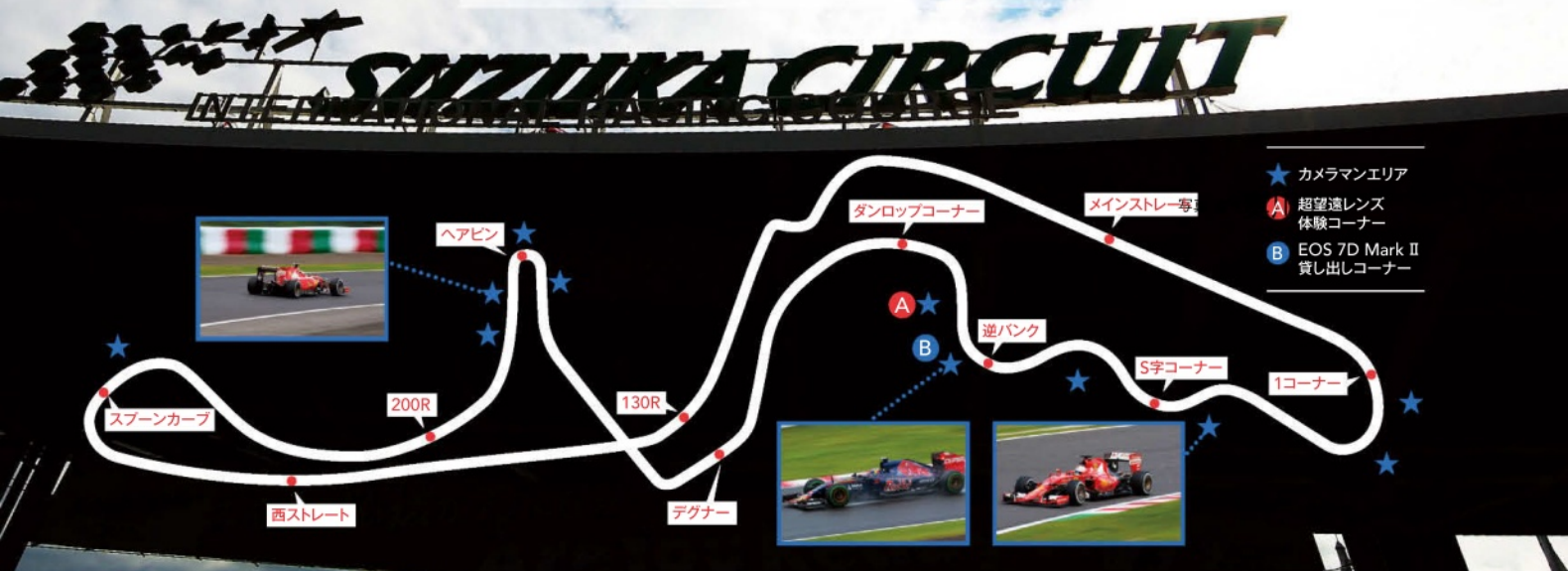
SPECIAL イベントレポート

写真・文●奥川浩彦

いつかは撮ってみたい夢の超望遠レンズ&
EOS 7D Mark Ⅱ＋EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USMセットモデル

鈴鹿サーキットを撮る

今年も鈴鹿サーキットでF1日本グランプリが開催された。F1日本GPでは通常の観客席とは別にカメラマンエリアチケットが販売され、コース各所のカメラマンエリアには望遠レンズを持ったアマチュアカメラマンが数多く集まり、F1マシンを人気の撮影ポイントから撮影することができた。F1日本GPでカメラマン向けに提供されたのは撮影ポイントだけではない。超望遠レンズ体験コーナーではキヤノンのEF600mm F4L IS Ⅱ USMなど憧れの超望遠レンズを試写体験することができた。またEOS 7D Mark Ⅱ とEF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USMの貸し出しも実施された。

さらに原 富治雄氏、熱田 護氏によるスペシャルセミナー、夜はカメラマンミーティングとF1を撮影しにきたアマチュアカメラマンには盛りだくさんの内容。私も体験し参加してきたので、その様子をレポートしよう。

400、500、600mmの超望遠を体験

超望遠レンズ実写体験会コーナー

EF400mm F2.8L IS Ⅱ USM / EF500mm F4L IS Ⅱ USM / EF600mm F4L IS Ⅱ USM / EF200-400mm F4L IS USM エクステンダー 1.4×

超望遠レンズ体験コーナーに用意されたレンズはキヤノンのEF400mm F2.8L IS Ⅱ USM、EF500mm F4L IS Ⅱ USM、EF600mm F4L IS Ⅱ USM、EF200-400mm F4L IS USM エクステンダー 1.4×の4本。この憧れの超望遠レンズとEOS 7D Mark Ⅱ、さらにマンフロットまたはジッツオの一脚をセットで試写を体験することができた。

撮影場所は逆バンクコーナーの立ち上がり側となるE-2席の最上段。ここは逆バンクのクリッピングポイントをマシン正面から撮ることや、ダンロップコーナーへ加速するマシンを流し撮りすることができる。

E-2席の最上段はコースから少し離れた撮影ポイントだが、用意された超望遠レンズを使用したのでF1マシンをフレームいっぱいに撮ることができた。

写真●奥川浩彦

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF400mm F2.8L IS Ⅱ USM ／400mm(640mm相当)／シャッター優先AE(F16、1/160秒、−0.3EV)／ ISO 100／ WB：オート

超望遠レンズ実写体験会 受付・会場

約15分という短い時間ながら、皆さん普段体験できない超望遠レンズでの撮影を堪能していた

カメラを借りて好きな場所から撮影できる

EOS 7D Mark Ⅱ 貸し出しコーナー

サーキット撮影だけでなく、鉄道や航空機を撮るカメラマンも注目しているのがEOS 7D Mark Ⅱと EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USMだ。F1日本GPでは、この注目のボディとレンズをセットで貸し出しを実施。貸し出し時間はなんと1セッション。1時間から1時間半のセッションをずっと注目の機材で撮影可能なのだ。カメラマンエリアであれば撮影場所の制約はなくS字、逆バンクなど自分の撮りたい場所で撮影することができる。今回はヘアピン、逆バンク、S字のカメラマンエリアで撮影を行った。160-640mm相当の焦点距離はサーキット撮影に最適で、このセットではほとんどの撮影ポイントはカバーできた。

写真●奥川浩彦

大人気だった貸し出しコーナー。使い方セミナーでは基本的な使い方をレクチャーしてくれる

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／400mm (640mm相当)／シャッター優先AE(F5.6、1/400秒、−0.3EV)／ ISO 100／ WB：オート

EF100-400mmは少し広めもアップも撮れるというサーキットで使いやすい焦点距離のレンズ

レース写真家のリアルな使い方が学べる

原 富治雄氏、熱田 護氏による スペシャルミーティング

キヤノンブースではレース終了後に9月25日は原 富治雄さん、26日は熱田 護さんによるセミナーが行われた。このセミナーは誰でも参加でき、ブースがいっぱいになるほどの人数で埋め尽くされていた。原さんはデジタル化される前の撮影環境について。熱田さんは作品ごとに使用した機材を紹介しつつ、細かく撮り方や狙いなどを解説。お2人とも最後に質問コーナーがあり、参加者の皆さんは「鈴鹿での狙い所」「一脚の使い方」などここぞとばかりに沢山の質問していた。

原さんは過去の経験を交えて鈴鹿サーキットの撮りやすい場所などを説明されていた

熱田さんの質問コーナーは大盛りあがり。終了時間を大幅にオーバーし、周囲が真っ暗になるまで続いた

スペシャルゲストも登場

カメラマンミーティング

9月25日のフリー走行後、S-PLAZAにて原 富治雄さんをお迎えしてカメラマンミーティングが行われた。これは6年前から行われているファンと原さんが交流する会で、毎回スペシャルなゲストが飛び入り参加することで有名。以前は元F1ドライバーの佐藤琢磨さんがゲストで招かれたこともあるミーティングである。今回はスペシャルゲストとしてF1の解説で有名な今宮 純さんが登場。今年のF1の見所、どうなるホンダ？ など皆さんが知りたい話題に触れていた。後半パートでは熱田 護さんが登場。昔からのお知り合いとあって、レース写真にまつわる濃い内容で、終始楽しい会であった。

今宮さん（左）と原さん（右）

熱田さん

原さん

写真●原 富治雄

原 富治雄 PHOTO

写真を撮ることで分かる 見るだけではないF1の楽しみ方

モータースポーツの頂点であるF1を思う存分撮影してもらおう、そんな思いから始まったカメラマンエリアの企画。今回で6年目を迎え、新しい試みとして、短い時間でしたがキヤノンさんのご協力を得て、写真講座と撮影機材の貸出などを開催しました。また、今年のレースウィークは、雨の走行から始まり秋晴れの決勝日、さまざまな魅力的なシーンの撮影ができたのではないかと思っています。今回参加いただいた皆さんがカメラを通して、モータースポーツをより楽しんでいただければと思います。　（原 富治雄）

キヤノン EOS-1D X ／ EF500mm F4L IS Ⅱ USM ／500mm ／絞り優先AE(F5、1/40秒、±0EV)／ ISO 1000／ WB：オート

DIGITAL CAMERA MAGAZINE PHOTO CONTEST

［2015年11月号選考］

デジタルフォト部門 ── 選者・ハービー・山口

「jump」

作者・富久浩二（東京都）

カメラ：ソニー α77
レンズ：シグマ 8-16mm F4.5-5.6 DC HSM
レタッチ：カメラのミニチュアモードで撮影
撮影地：埼玉県日高市 巾着田

【講評】

どこか演劇性を感じさせる不思議な構成です。スナップとも風景とも違う、演出された独特の雰囲気が目に留まりました。遠くにジャンプしているふたりの姿が特に印象的ですが、この姿と動きが別空間から飛来してきたかのようなミステリアスさがあり、感情をあおります。手前はただのコンクリートの駐車場で、ここに水をまいて反射させるところから始めたということです。この水の反射がなかったらここまでの強さは出なかったでしょう。さらに桜がまだ開花していないので、画像をぼかすことによって寂しさを救っているわけです。かなり綿密に計算された演出力に感心しました。

【アドバイス】

アイデアだけでこれだけの演出写真ができるなら、徹底的に仮想空間を日常の中から作り出す作業をしたら、おそらく立派な作品集ができるのではないかと想像します。日常をどれだけドラマ化できるかの遊びです。

応募はGANREFから！

GANREF

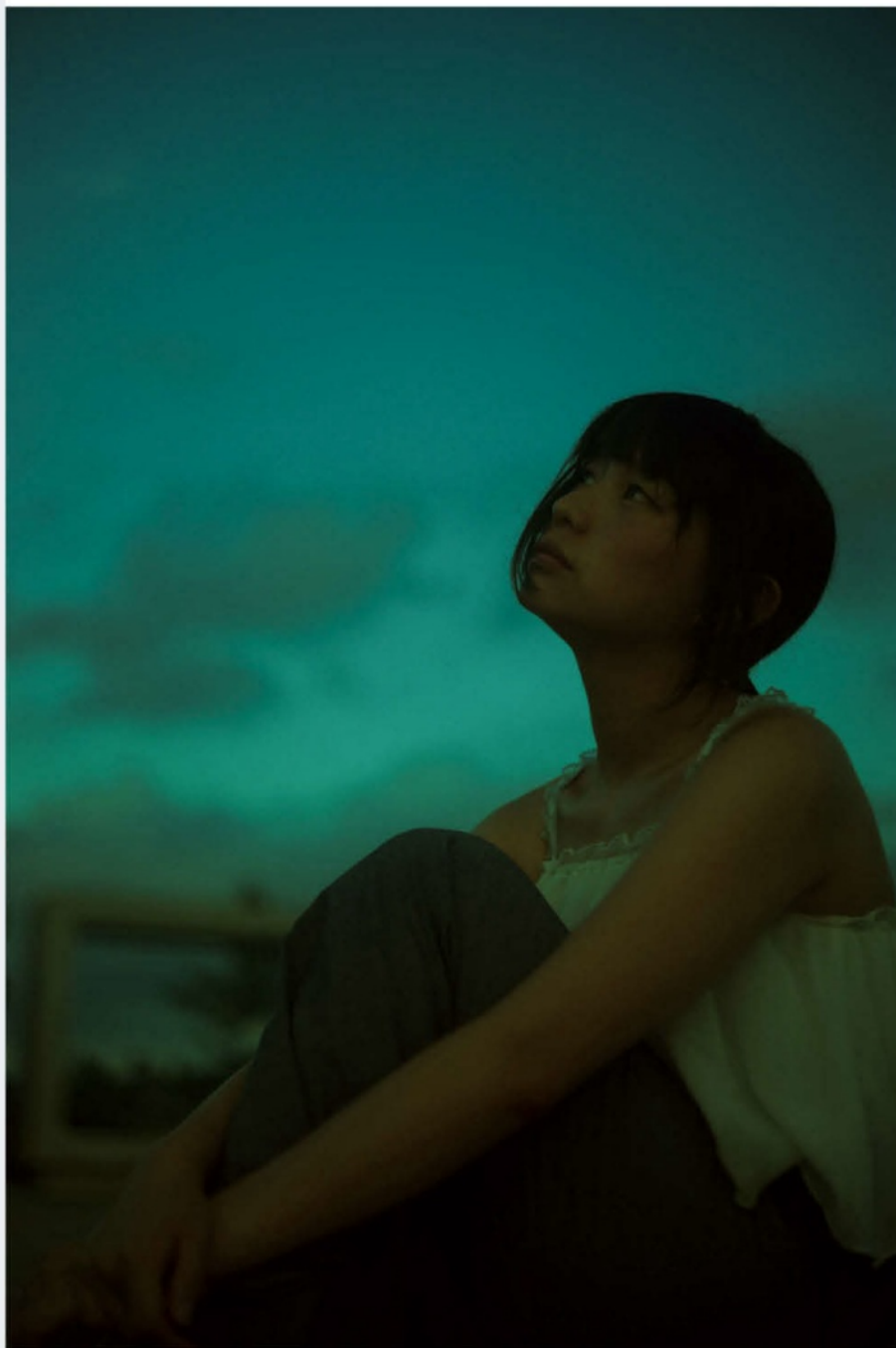
フォトコンテストの結果は、
下記URLでも
ご覧いただくことができます。

http://ganref.jp/photo_contests

フォトコンテストは
すべての部門が
Webからの投稿となります。
詳しくは上記URLをご覧ください

INFORMATION

- 2015年度DCM フォトコンテスト応募要項　P.168
- 2015年度DCM フォトコンテスト累計ポイント　P.169

サンディスク
エクストリーム プロ SDHCカード16GB
提供：サンディスク

「暮れゆく」

作者 ● tanpopo（愛知県）

カメラ：ソニー α7　レンズ：カールツァイス Jena Pancolar50mmF1.8
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にてRAW現像、トーンカーブ調整、色調整　撮影地：愛知県長久手市 愛地球博記念公園

【講評】

辛うじて女性の表情が判別できるギリギリまでアンダーにしたひとつの冒険が功を奏しました。背景の暮れなずむブルーの空や浮かぶ雲の表情と相まって、1日の終わりの切なさを感じさせます。快活な表情を撮るのもポートレートの面白さですが、その逆で、このように、もの思いにふける心模様を撮るのもまた味わい深い作品につながります。彼女は目線の先に何を見つめているのか、ものうげな表情が全体のトーンに溶け込んでいます。闇に浮いてるブラウスの白も効果的です。

【アドバイス】

タレントさんを撮影する時に、ペンライトの光を顔に軽く当てるなどのテクニックを使ったことがありますが、こうした思い切ったアンダー露出もドラマを生みます。写真の狙いにもよりますが、被写体である人物の良さを引き出すのは、笑顔なのか寂しげな表情なのかを観察することが大切だとわかる作品です。

「きみはぼくで ぼくはきみ」

作者 ● Akira（福岡県）

カメラ：キヤノン EOS 70D
レンズ：タムロン 18-270mm F/3.5-6.3 Di II VC PZD
レタッチ：Photoshop CS6にて彩度、カラーバランス、トーンカーブ、コントラストを調整
撮影地：福岡県八女市

【講評】

恋人同士かなと思いましたが、娘さんと息子さんだということです。本当に仲が良いのですね。太陽の光芒が印象的です。楽しげな心模様がストレートに伝わってきます。

【アドバイス】

太陽を使った似たカットが何種類かありましたが、このカットが一番強いですね。思い切って、耳がギリギリ見える位まで横顔のアップにすると、さらにインパクトある写真になります。

「待ち切れない思い」

作者 ● 相賀望弘（岡山県）

カメラ：ニコン D800E
レンズ：タムロン 28-300mm F/3.5-6.3 Di VC PZD
撮影地：岡山県玉野市

【講評】

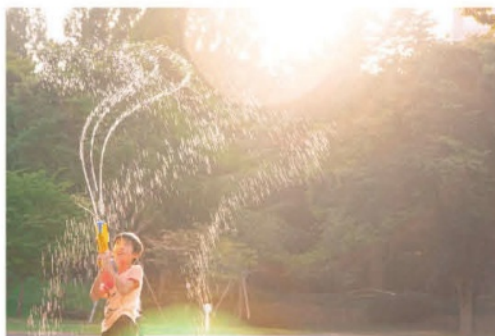
自転車のライトが点灯したままで倒れているのですが、これをモチーフにするセンスがユニークです。しかもタイトルを見ることで、自転車の持ち主が抱いている夏祭りへの興奮が理解でき、この写真がさらに楽しくなりました。

【アドバイス】

このタイトルを見れば、作者の文学的センスや人柄が想像できます。自転車のライトを消し忘れるほど、早く祭りに参加したい子どもの心をうまく読んでいて、人情のある方だと推察しました。

「Billy the kid」

作者 ● 宮崎勝宏（神奈川県）

カメラ：キヤノン EOS Kiss X4
レンズ：シグマ 17-70mm F2.8-4 DC MACRO OS HSM | Contemporary
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にて彩度を調整
撮影地：神奈川県横浜市

【講評】

夏休みにお子さんと水鉄砲で遊んだときのカットだそうです。ご自身もお子さんも、時間を忘れて水をかけ合った興奮が、このフレーミングから感じられます。太陽のゴーストが良い意味で破綻してますし、ぶれた水の軌跡が非常にきれいで、心中を表しています。

【アドバイス】

逆光により浮き上がった水の描写が大きな魅力です。はじけたりぶれたり、あるいはくねくねと変化する水の動きをさらに強調するためには、もっと羽目を外しても良いかも知れません。例えば撮影レンズにも水滴が付いているなどです。

「カポエイラ ナチーヴァ」

作者 ● ムラカミイズミ（広島県）

カメラ：キヤノン EOS 40D
レンズ：トキナー AT-X 535 PRO DX
レタッチ：Photoshop Elements 6.0にてライテングを調整
撮影地：広島県安芸郡

【講評】

5人の登場人物が無駄なく画面に配置され、引き締まった気持ちを抱かせ、かつ真剣さが画面からあふれ出てきそうです。垂直な線も効果的です。宙に浮いた中央の女性が極めてシャープにとらえられていて、画面を一層引き締めています。

【アドバイス】

カポエイラとはブラジルに伝わるスポーツで、舞踊に見せかけた格闘技だそうです。流麗な動きの中に相手を倒したり、自分を防御したりする動きもあるそうです。魅力的な動きを写真作品に仕上げるのもおもしろいものです。皆さんもトライしてみてください。

「君と赤い落下傘に乗って」

作者 ● 03（東京都）

カメラ：ニコン Nikon 1 V3
レンズ：1 NIKKOR VR 10-100mm f/4-5.6
レタッチ：View NX 2にてRAW現像　撮影地：東京都文京区

【講評】

遊園地というと、良い天気と人混み、そこに子どもの歓声と遊具の音が入り交じるという印象があります。しかし、夕方に差し掛かり、人の波が一段落した後にまた違った光景が広がります。夕景の中にポツリと中空に浮かぶカップル。その姿の美しさに驚きました。寂しさの中にカップルの将来をも感じさせます。撮影地は東京ドームシティだということですが、都会の中の青春像が浮き彫りになっていて、テレビドラマのような刹那の美しさが漂っています。シンプルな構図に切り取ったフレーミングが良いですね。

【アドバイス】

暮れなずむ都会の青春像、素晴らしいじゃないですか。ふと気づくと目の前に美しいドラマが見えた。それを発見した時の喜びは写真に携わる者にとっては格別です。とっさのことでも冷静に作画されましたね。小さなドラマをこれからも探してください。

「語り合って」

作者 ● 鈴木公太（神奈川県）

カメラ：ニコン D700
レンズ：フォクトレンダー NOKTON 58mm F1.4 SL Ⅱ
レタッチ：Photoshop Lightroom 3にてトリミング、SilverEfexにてモノクロ化　撮影地：神奈川県川崎市

【講評】
後ろ姿ですが、定年を迎えた後の男性ふたりです。ボートに乗ったしぐさがかわいいというのか、少年心が表れているところが決め手になりました。夕方から夜にかけての闇迫る状況と、遠方の光のにじみがドラマチックです。人生をふと感じさせます。

【アドバイス】
被写体のしぐさは、その写真の決定的な要素になります。ボートに乗っていることでこの写真の魅力の7割が作られています。残りの3割はすてきな光です。子どもでも恋人たちがボートに乗っていても絵になるので挑戦してください。

「銅山の涙」

佳作

作者 ● seinin（埼玉県）

カメラ：キヤノン EOS 5D MarkⅡ
レンズ：EF50mm F1.4 USM　撮影地：栃木県日光市

【講評】
雨が降りしきる足尾銅山です。撮影は大変だったと思います。雨の中に寂しそうにたたずむ住宅が、必死に何かと戦っているようです。時の流れや風雨に耐え抜きながら、われわれに多くのことを物語っています。

【アドバイス】
木村伊兵衛さんを撮影のために案内した方が、「木村さんは新しいものは見向きもせず、消えゆくものにレンズを向けていた」とおっしゃっていました。作者もその感覚を大切に撮り続けていただきたいです。

「青と春の間」

作者 ● 和田全美（大阪府）

カメラ：パナソニック DMC-TZ55
撮影地：兵庫県明石市 大蔵海岸

【講評】
ユニークなフレーミングが目を引きました。人物写真は顔を撮らなければならないという固定観念を持っていると、なかなか思いつかない構成です。ふたりの関係を表現するのであれば、こうしたカットでも成立するわけです。

【アドバイス】
コメントにふたりの瞳には青空が映っているとありますが、とてもロマンチックです。こうしたフレーミングの写真にふたりの会話を想像させる要素を足すと、良いポートフォリオができるのではないでしょうか。

PICK UP

トリミングでもっと主被写体に視線を導きたい

左側をトリミングして視線を画面の中心にしたい

顔に見えるユーモアと色合いが◎

「Voice」

作者 ● 渡辺英也（千葉県）

カメラ：キヤノン EOS 7D
レンズ：EF-S10-22mm F3.5-4.5 USM
レタッチ：Photoshop 7.0にてトリミング、色調を調整
撮影地：東京都港区

【講評】
車のシュールームで発見したユニークなアングルです。ウインドーの反射を利用して車のフロント周りを顔に見立てたユーモアある写真に好感を持ちました。黄色のボディーカラーは、周囲がモノトーンだけに良いアクセントになっています。

【アドバイス】
良いモチーフを発見しました。物に対し、既成の解釈と違う一面を発見することはとても楽しく、また意義あることです。この場合は反射による形を利用して、車をユニークな顔として提示したわけですが、画面の左端のウインドーを多少トリミングすると、見る物の視線を画面中心に導け、さらに強い写真になるのではないでしょうか。左右対称にし過ぎるとありきたりになってしまいます。

「boring night」

作者 ● 櫛田雄一郎（インド）

カメラ：ニコン D700　レンズ：AF-S NIKKOR 18-35mm f/3.5-4.5G ED
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にてコントラスト、WBを調整
撮影地：インド デリー

【講評】
デリーの理髪店。日本とは全く違う街の人間模様です。退屈そうな子どもの表情と、楽しげな大人たちの表情が好対照です。こうした人の良い大人たちに囲まれた子どもは幸せだと思います。

【アドバイス】
オープンな人たちを見ると、何か懐かしいような、うらやましいような気持ちになります。粗末な建物が伺えますが、精神は豊かなのではないでしょうか。そうした精神性まで表現できています。

入選 Winning work

「激走！」

作者 ● 竹原敬修（長野県）

カメラ：ソニー α77 Ⅱ　レンズ：Vario-Sonnar T* 24-70mm F2.8 ZA SSM　レタッチ：Photoshop Elements 13にてTopaz Adjustを使用、ディテール、色調、彩度、コントラスト、レベル補正等を調整
撮影地：長野県塩尻市 高ボッチ高原

【講評】
多少のぶれも手伝った、とても迫力のある草競馬の1シーンです。モノクロに変換したのも大正解です。縦位置の構図も、遠近感と走り迫ってくる状況を表すのに的確でした。女性騎手もいらっしゃるのですか？良い題材ですね。

【アドバイス】
後ろにピントが来ているのが気になりました。動きが激しいものをとらえるには、いかにフォーカスが追いつくかが問われます。あらかじめ特定の距離に合わせておき、被写体を待つ「置きピン」を使うのもおすすめです。

「ど真ん中！」

作者 ● momo-taro（埼玉県）

カメラ：ソニー α700
レンズ：DT 16-105mm F3.5-5.6
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にて彩度を調整
撮影地：北海道帯広市

【講評】
飛行機が着陸する時の光の軌跡を写しました。一直線に近づいてくる飛行機のシンプルなラインと、うっすらと夜空に浮かぶ星の軌跡の重なりが美しいです。シンメトリーな構図が単刀直入で気持ち良い写真です。

【アドバイス】
作者は合成なしを徹底しているということで、すばらしいと思いました。地方空港では便数が少ないので撮影のチャンスはごく限られる。その上での一発撮りですから、まさに千載一遇、気合の1枚です。

「流れ千畳の緑」

作者 ● 林田考生（岡山県）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ
レンズ：EF24-105mm F4L IS USM
撮影地：広島県廿日市市 厳島神社

【講評】
床の木目を緑の流れに見立てた解釈は美しいですね。外と床一面に広がるこの緑色は、誰の目にも美しく映えます。ふたりの後ろ姿と手前のシルエットをうまく取り入れています。

【アドバイス】
床の中央部分に浅いフォーカスがピタッと来ていて爽やかな写真です。ぶらさずに、かつフォーカスを合わせるのが基本ではありますが、逆にぶらしてみて、流れを強調するような撮り方を探してみてください

「Sunrise」

作者 ● 池田耕一郎<IKEIKECYAN>（福岡県）

カメラ：ニコン D810　レンズ：AF-S NIKKOR 16-35mm f/4G ED VR
レタッチ：Photoshop Lightroom 6にて彩度、コントラストを調整
撮影地：熊本県阿蘇市

【講評】
ご家族で朝日を見に行ったとのことです。そのご家族を画面手前に配しながら朝日をとらえた作画は素晴らしいと思いました。帽子をかぶった奥さまの後ろ姿や、カメラを持つ娘さんのしぐさも最高ですね。このテーマの場合、画面全体に適正露出なのが爽やかです。

【アドバイス】
朝日に集中するあまりに、手前には何も入れずに風景だけを撮ってしまいがちですが、常にご家族を登場させるセンスが素晴らしいですね。将来このカットを見返したとき、きっと幸せな感動がよみがえるはずです。

「展示模様」

作者 ● 大野彰久（埼玉県）

カメラ：パナソニック LUMIX DMC-LX100
撮影地：東京都千代田区 東京国際フォーラム

【講評】

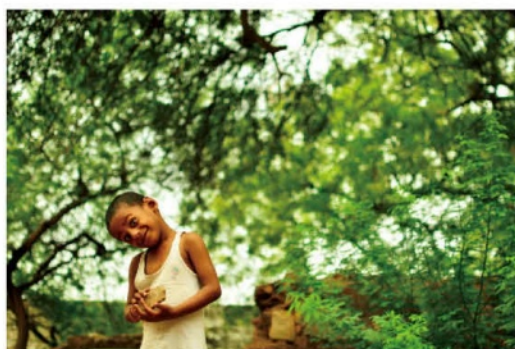
アングルを変えてみると、まったく違うものが見えてくることがあります。色も鮮やかで、展示用の造作が作る造形をよくとらえています。ふかんすることで、照明の妙味や人物の位置の面白さが秀逸です。

【アドバイス】

われわれは、常に同じ目線でしか物を見ていないことを気づかせてくれました。自分特有の視点を提示することは意味あることです。何気ない物の別の顔を発見する好奇心を持ちたいものです。

「in my world…」

作者 ● 太田聖児（インド）

カメラ：ニコン D7000
レンズ：AF-S DX NIKKOR 16-85mm f/3.5-5.6G ED VR
撮影地：インド グルガーオン

【講評】

緑一面をバックにして、少年をぽつんと配置した構図が新鮮です。それに増して、なんてすてきな表情を見せてくれているのでしょうか。ひとりで遊んでいるところだそうですが、良い瞬間をとらえました。

【アドバイス】

日本の子どもからは、こうした表情をなかなか引き出せません。インドにお住まいですか! ぜひ、多くの表情を撮っていただきたいですね。望遠側のボケ味には好き嫌いがあります。標準相当でも撮ってください。

PICK UP

構図に優れた街スナップだからこそ、横位置で街の状況を広くとらえては?

「夏 常清寺 跡地にて」

作者 ● まかだみ庵☆古写堂（神奈川県）

カメラ：ペンタックス K-5　レンズ：DA35mmF2.8 Macro Limited
レタッチ：paint.netにて彩度、コントラストを調整　撮影地：神奈川県横浜市

【講評】

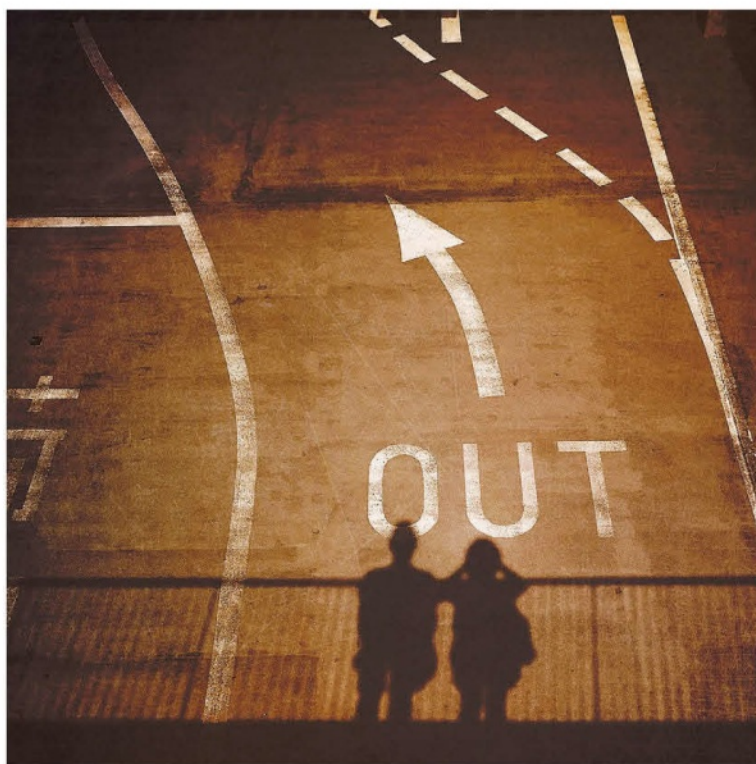
街のふとした瞬間をとらえています。スケボーの少女の姿を遠慮がちに写し込んでいる点が、現代の光景としてすてきな1枚です。遠くに道路の奥行きまでもが写っているのも構図として優れています。

【アドバイス】

少女がもっと近くだと良いなと思いましたが、コメントを見ると、テーマは少女ではなく、「若い世代はこの場所が以前は寺だったことを知らないだろう」ということでした。良いテーマです。それで少女が小さく写っているのですね。この作品で言えば、横位置にすると状況が写り、縦位置にすると少女の本質に迫る構図になります。この場合は、横位置でこの街の状況を広くとらえた方が、作者の意図に近づけるのではないでしょうか。

「Endroit de l'amour」

作者 ● 小向朋恵（東京都）

カメラ：キヤノン PowerShot G7 X
レタッチ：Photoshop CS6にて色彩、コントラストを調節
撮影地：神奈川県川崎市

【講評】

歩道橋の上から、文字や矢印などの道路表示とご自分の影を使い作画しました。その道路上の線と人物の影を組み合わせたグラフィックな要素がとてもすてきです。それに加えて、画面の中に現在と未来の思いが詰まっていて、その思いが十分に伝わってきました。

【アドバイス】

タイトルは「愛の行方」という意味になりますか。愛の物語をご自身の中で十分作り上げて撮影すると、大きな意味が生まれますね。ご自分の姿そのものを常に画面にあしらうのも一手です。

入選 Winning work

「散歩道」

作者 ● 西川 浩（大阪府）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ
レンズ：EF24-105mm F4L IS USM
レタッチ：Photoshop Lightroom 6にて彩度、コントラストを調整
撮影地：奈良県橿原市 本薬師寺跡

【講評】
朝日を浴びたホテイアオイの輝きがなんと美しいことでしょうか。このみずみずしい光景の中に、散歩をする人物を取り入れています。絞りを開け、望遠側の焦点距離で、さらに手前にピントを置き遠景をボカしたことで、朝の空気感がさらに美しく強調されました。

【アドバイス】
似たカットが何枚かありましたが、このカットが一番まとまっていました。人物の有る無し、または人物の位置や人数で写真の雰囲気はガラッと変わります。どんな構成が最適かを瞬時に判断できるようになると、さらに自信がつくでしょう。

佳作

「googling now...」

作者 ● 本田厚子（栃木県）

カメラ：オリンパス OM-D E-M1
レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にてモノクロ化、コントラストを調整
撮影地：ベトナム社会主義共和国 ハノイ

【講評】
ハノイでの1枚。テーマとしては「海外の交通事情への驚き」なのですが、バイクのライトのにじみが素晴らしいです。モノクロ表現により、このにじみがなおのこと美しく、また列をなす無数のバイクに騒音までもが迫ってきます。

【アドバイス】
それぞれの国にはそれぞれのルールと慣習があります。それを楽しむのも海外旅行の魅力です。道路の消失点がかなたに見えますが、こうした構図は写真の風通りを良くします。

佳作

「蝶観図」

作者 ● BlackTiger（神奈川県）

カメラ：キヤノン EOS 7D MarkⅡ
レンズ：EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM
撮影地：神奈川県

【講評】
アオバスクの幼鳥が、近くに飛んできたオオアゲハを夢中で見ているところです。なんとかわいい表情でしょうか。動物の赤ちゃんも人間と同じで、動くものには興味を示します。素晴らしい一瞬です。

【アドバイス】
こうして人間との共通点を見つけると、人間も動物も心は同じだなと思います。知り合いの昆虫写真家は、「地球は人間だけのものじゃないんだ!」とおっしゃっていました。今後もこんな自然に心ひかれる一瞬を撮り続けてください。

ハービー・山口先生の今月のひとこと

今月もたくさんのご応募をいただき、ありがとうございました。人それぞれの好奇心、美意識に従い、多種多様な作品が寄せられました。優秀賞の「jump」は演劇性を発揮し、独特の世界観を見せてくれました。逆に準優秀賞の「君と赤い落下傘に乗って」は、演出することなしに、都会の素敵なドラマを発見しました。対照的な写真の撮り方です。

人にはそれぞれ向き不向きがあり、自分に向いた撮り方を見つけると、気持ち的には楽になります。写真を長く続ける原動力は、やはり「撮りたいものを撮る」ことではないでしょうか。自身の心に忠実であることが一番です。しかし、さまざまな理由で、忠実であることが難しいのも事実です。そこで、時間がかかっても良いのです。一歩一歩自分の理想に近付く努力を惜しまず続けてください。やはり人生も写真も、続ける限りは挑戦の連続です。その中で自分に向いた、あるいは得意な方法を探っていくのですが、「ちゃっかり楽をしちゃった」、より「少し汗をかいた」方が良いようです。

季節は秋に向かい、爽快で美しい日差しがあります。来月の選考も楽しみにしております。

※予選通過作品をEPUBマガジン「Weekly GANREF」（http://ganref.jp/weekly/）にて公開! ぜひご確認ください
※作者名の< >内はGANREFネームを表します。
応募に関する詳しい説明は、http://ganref.jp/photo_contestsをご覧ください

DIGITAL CAMERA MAGAZINE PHOTO CONTEST

［2015年11月号選考］

組写真部門

選者 • 小林紀晴

「Shyness」

作者 • 中本則昭（兵庫県）

カメラ：ニコン D300S
レンズ：AF-S NIKKOR 28-300mm f/3.5-5.6G ED VR
撮影地：兵庫県神戸市

【講評】

コモリンザルという種類の猿のようです。3匹が寄り添っています。全体の動きがほとんどないのに、顔だけが入れ替わり立ち代わり、カメラを向いていることに驚きます。コメントにもありましたが、確かに「見ざる、聞かざる、言わざる」を連想させるから不思議です。手持ち撮影なのか、三脚を使用しての撮影なのかはわかりませんが、構図がほぼ一定なのが見事です。きっと、かなり意識されたはずです。そのことにより、より組写真としての完成度が上がりました。変化している箇所、していない箇所がくっきりわかるからです。欲を言えば、左端の猿にもぜひともこちらを向いてもらいたかったものです（笑）

【アドバイス】

完成度を高めた要素として、背景の処理が挙げられます。実際は背景となっている地面の調子がもっと出ていたはずです。それを白く飛ばすことにより、主題が強調されました。ぜひ、みなさんも参考になさってください。

1

2

「六本木マトリックス」

作者 ● 野村 謙（千葉県）

カメラ：キヤノン EOS 6D　レンズ：シグマ 15mm F2.8 EX DG DIAGONAL FISHEYE
撮影地：東京都港区六本木

【講評】
こんな種類の写真、なかなかありません。実に積極的、活動的な写真です。このコミットしていく感じ、気持ちいいです。誰もが汗をかきながら作っています。だから演出型体育会系写真とでも名付けたくなります。極端な加工もこの場合違和感がありません。

【アドバイス】
この行動力、発想力、演出力でさらなる作品を期待しています。見る者があっと驚くような、誰も見たことのない作品を、ぜひ見せてください。期待しています。

1

2

3

4

5

6

3

4

「樹霊千年」

作者 ● 高瀬広之
<ina-bou>
（千葉県）

カメラ：オリンパス OM-D E-M1
レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED
12-40mm F2.8 PRO
撮影地：1・4枚目：千葉県市川市、
2枚目：千葉県匝瑳市、
3枚目：千葉県君津市

【講評】

私事ですが、つい先日までカンボジアの遺跡群を巡っていました。そこで木々が遺跡を締め付けていく様を見ていたからでしょうか、この作品の撮影地ももしやカンボジア？ などと想像してしまいました。コメントには地元千葉でとありました。逆に日本でもこんなに濃縮された木の姿が撮れるものなのか！ と驚きました。目からウロコです。長辺が短くトリミングされているところもしっくりきます。ぎゅっと詰まった感じがするからです。かつてのインスタントフィルムを連想させる周辺の処理などもうまく決まっています。

【アドバイス】

ハレーションがかったような画像処理が少し気になりました。枚数が増えていくにしたがって、次第にうるさく感じられる可能性があります。現在始めたばかりのシリーズとのことですので、撮影がさらに進んだところで、処理を再考されてもいいと思います。

1

2

3

4

1

2

3

「小さな教会」

作者 ● 船橋弘範（岡山県）

カメラ：
1枚目：ニコン D700、
2枚目：D750、
3枚目：D810A
レンズ：1・3枚目：AF-S NIKKOR
14-24mm f/2.8G ED、
2枚目：AF-S NIKKOR
24-120mm f/4G ED VR
撮影地：ニュージーランド
南島 テカポ

【講評】

撮影地はニュージーランド。思わず行きたくなってしまう圧倒的な風景です。1枚1枚、とてもていねいに撮られています。風景、人に対する愛情が伝わってきます。静かに淡々ととらえているからこそ、逆に強さと、揺るぎない視線といったものが見る側の胸に迫ってくるようです。

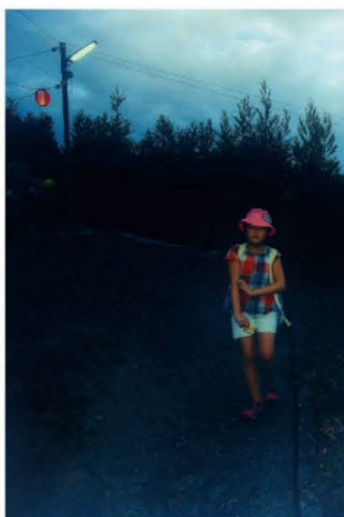
【アドバイス】

1枚目の写真が室内の写真から始まるのが少し気になりました。現在、2枚目に入っている全景の写真と交換することで、全体に強弱とリズムがつきながら、自然な流れになると思うのですが、いかがでしょうか。

1

2

3

4

5

6

「夏の果て」

作者 ● 石川賢一（高知県）

カメラ：キヤノン EOS 6D
レンズ：EF24-105mm F4L IS USM
撮影地：1･4･6枚目：高知県高知市、2･5枚目：高知県香南市、3枚目：高知県須崎市

【講評】

濃厚な組写真です。きっとこの夏に撮られたのでしょう。1枚目と2枚目がバラバラなようでいて、全体が並んだ時に妙な統一感と説得力があります。誰にでもまねできるものではありません。感性が伝わります。すべて縦位置なので、安定感が消えて、いい意味で人を不安をさせます。

【アドバイス】

注意深く拝見すると、1枚の写真の中に2つの要素が入っていることがわかります。それらは直接関係のないものだったりします。バラバラです。きっと無意識でしょうが、スナップを撮る上でのヒントがここに隠されています。

1

2

3

「これは落書きではない」

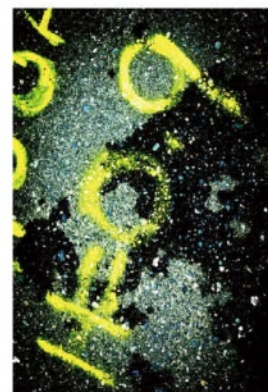
作者 ● 岸 一也（岡山県）

カメラ：パナソニック LUMIX DMC-G1　レンズ：LUMIX G VARIO 14-45mm/F3.5-5.6 ASPH./MEGA O.I.S.
撮影地：岡山県岡山市北区津倉町

【講評】

路上の工事のための書き込みです。それがアートのように見えてくるから不思議です。書き入れた方はまったく意識していないはずなのに、ここには機能美に似た美しさがあります。本来の美しさとは、時にこんなところに潜んでいることに気付かされます。地中深く埋まったものも連想させます。

【アドバイス】

これまで撮られていそうでいて、意外と撮られていない種類の写真だと思います。さらに続けることで、まだまだ面白いものが撮れそうな予感がします。ぜひ、続けてください。画像処理も程よく、効果的です。

PICK UP

坂の上が見えないようにトリミングして枚数も増やしたい

1

2

「それぞれの坂道」

作者 ● Girard Inoue（愛知県）

カメラ：ニコン D800
レンズ：AF-S VR Zoom-Nikkor 70-300mm f/4.5-5.6G IF-ED
撮影地：愛知県名古屋市

【講評】

かなりの急坂です。よく見ると、2枚とも同じ場所で撮っていることがわかります。定点観測の一種と考えて良いでしょう。なにより、それぞれの人の姿が効いています。何気なく、多くのことを語っています。望遠レンズでとらえているので圧縮効果が出て、迫力につながっています。

【アドバイス】

モノクロでの処理がいいです。無機的なアスファルト、コンクリートの質感がより強調されました。2枚目の自転車の立ちこぎ、その姿から坂の急さがわかります。若者には登れても、私にはとても無理でしょう（笑）。ただ、もったいないなと思うのは、2枚目に坂の上が写ってしまっていることです。車の下あたりで切るべきでした。すると延々と坂が続いているようにも思え、画面もシンプルに整理されます。ここでしばらく粘って、組写真の枚数を増やしてみることをお勧めします。

1

2

3

4

5

6

「優しい時間」

作者 ● 本田勝彦（北海道）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ レンズ：carl zeiss distagon T* 35mm/F2.8 撮影地：1枚目：北海道岩見沢市、2〜6枚目：北海道樺戸郡

【講評】

北海道ならではの広々とした風景です。いわゆる日本的な小屋とは違います。容易に和を感じさせない、独特の抜け感があります。何気なく撮っているようでいて、かなり計算されているのがわかります。建物に正面に対してカメラを構え、水平、垂直がキレイに出ています。

【アドバイス】

6枚とも見事です。ただ、さらに枚数を増やして、例えば個展を目標とした場合、このままではどうしても単調になりがちです。次のステージとして、時間帯、季節の変化を取り入れることなどを考えると、世界が広がります。

PICK UP

目の付け所がいい作品。名作を参考にさらに質を高めよう

1

2

3

4

5

「旧時代のドルメン」

作者 ● 石井大地（福岡県）

カメラ：リコーイメージング GR
撮影地：長崎県

【講評】

「ドルメン」とは、石器時代に石で作られた巨大なテーブル型の古墳の意味だそうです。一方、この被写体は現在忘れ去られ、遺構になりつつある建物と言えます。目の付け所がいいです ね。撮り方にも統一感があり、その効果でまったく別なもの、種類の違うものが共通項をもって見えてきます。

【アドバイス】

拝見して頭にまず浮かんだのは、ドイツのベッヒャー夫妻の「給水塔」のシリーズです。タイポロジー写真の元祖的作品でもあります。それらの写真がすべて曇りの日だけに撮られたことは有名な話です。空の表情、明るさをできるだけ均一にすることで、給水塔が等質に見えることを狙ってのことです。この作品にも同じことが言えます。ぜひ、ベッヒャー夫妻の「給水塔」を見てみてください。最高の教科書です。そして、さらに質を高めてください。

小林紀晴先生の今月のひとこと

9月に、10日間ほどカンボジアに撮影旅行に行ってきました。古い遺跡を有名、無名問わずに歩いていました。まだまだ密林の奥に人知れずに遺跡が眠っていることを知って、人類の営みの長さや伝承、断絶といったものを考えさせられる旅となりました。発表の場は未定ですが、来年あたり、どこかで展示ができればと考えています。

今月、優秀賞に選ばせていただいたのは、中本則昭さんの「Shyness」という作品です。動物園の猿を被写体にした作品ですが、インパクトがあります。普段から動物園の動物を撮った作品はよく投稿されますが、この作品はそれらとはかなり趣が違います。連続性、表情、しぐさが目を引きました。きっと短い時間に次々と撮っていったのでしょう。その場でのひらめき、反射神経のようなものが働いたようにも感じられます。相手が動物だけに、演出したり、コントロールしたりするのは無理なはずです。背景を消して影だけを残し、全体的にハイキーに調整するといった思い切った後処理の効果も加わり、見事、優秀賞に輝きました。この作品から学ぶべきことはたくさんあります。

※予選通過作品をEPUBマガジン「Weekly GANREF」（http://ganref.jp/weekly/）にて公開！ ぜひご確認ください　※応募に関する詳しい説明は、http://ganref.jp/photo_contests/ をご覧ください

斎藤先生に聞く

目からうろこの写真術

写真のいろは

オリンパス OM-D E-M1／ZUIKO DIGITAL ED 12-60mm F2.8-4.0 SWD／21mm（42mm相当）／絞り優先AE（F4、1/8,000秒、+0.3EV）／ISO 1600／WB：オート

第5回 シャッター速度を変えた写真ならではの表現

これから写真を始める人も、初心に帰りたい人も、知っておいた方が良いことがある! 本連載では、写真家の斎藤巧一郎さんを先生に迎え、基本的な写真の撮り方と自分だけの写真表現を楽しむためのとっておきの秘訣を編集部員が伝授してもらう模様をお届けします。今回は、シャッター速度を生かして表現の幅を広げます。

シャッター速度で1枚の写真に閉じ込める時間を変えてみましょう!

斎藤巧一郎
（さいとうこういちろう）

1968年鹿児島県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。広告写真家としてカタい撮影をしているものの、本当はほにゃほにゃ。口癖は「明日もう少し写真が上手になれれば!」。好物はちくわ。
http://momojiro.s1.bindsite.jp/

ぶれるのは必ずしもNGではない

先生：写真というと一瞬を切り取るような印象が強いので、ぶれてしまうと、「ああ失敗だ」となりますよね。

編集部：決定的瞬間だ! とシャッターを切ったらブレブレでがっかりした経験が何度もあります。

でも、ぶらすことで生まれる効果もあります。シャッター速度を遅くすれば、写真に閉じ込められる時間も長くなるので。

そういえば、絞りは意識しますが、シャッター速度はあまり意識をしていませんでした。

写真に閉じ込める時間の長さをシャッター速度で決める

シャッター速度が速い

シャッター速度が速いと、歩いている間の一瞬の姿が完全に止まって写る。その瞬間の体勢はよく分かるが、時が止まってしまったかのように、動きが感じられない写真になる

シャッター速度が遅い

シャッター速度が遅いと、歩いている人物が少しぶれて写る。シルエットのディテールは失われるが、歩くという動作そのものの印象は強くなる

カメラと肉眼では見えている光景が違うことを知ろう

そこにあるものが写らなくなる!?

ちょっとした実験をしましょう。人通りの多い商店街で、NDフィルターを使って、シャッター速度を極端に遅くしてみます。

あれだけいた通行人が全然写真に写っていませんね。不思議な感じです。

シャッター速度を遅くするとき、カメラはじっくり光をとらえる設定になります。動いているものは写真に残らないんです。

まさに光を操っている感じですね。肉眼とカメラで見ている光景が違うのが分かります。

シャッター速度を意識することで、写真にしかできない表現が生まれるわけです。

シャッター速度と光の関係性を知る

シャッターを開けている時間がどれだけ長くても、できあがるのは1枚の写真です。その間、肉眼では連続して変化していく光景が見えているわけですから、シャッター速度を極端に変化させると、カメラにしか撮れない世界が表れるわけです。シャッターは単に集める光量を調節する機能だけにとどまりません。シャッターを開けている間に、カメラの前に存在する光景と時間をどう1枚の写真として凝縮するのかを考えてシャッター速度を意識しましょう。

お客さんであふれる商店街を撮影

混み合う商店街をシャッター速度を極端に変えて撮影してみる。どう変化するのだろうか

NDフィルターで光の強さを調節

長いシャッター速度にしたいときは、カメラが光をとらえる力を弱くする必要がある。そこで、NDフィルターの出番。光をとらえる力が弱まり、シャッター速度を長く設定できる

通常のシャッター速度で撮影。大勢の人であふれる商店街の様子がそのままに写る。人の目でとらえた光景と同じだ。明るい条件でシャッターを切ると基本的には見た目通りに写る

シャッター速度を遅くして撮影。4秒間に行き交う人たちが残像のように流れて写っている。長時間が1枚に凝縮されたような人の目でとらえられる光景とは違う表現となった

強力なNDフィルターで極端に遅いシャッター速度に設定。じっくりと光をとらえる状態なので、動いている被写体は写真に写らない。止まった被写体だけが写真に写っている

一瞬の姿形（すがたかたち）をあぶりだすハイスピードシャッター

見えるようで見えない一瞬の姿!

シャッター速度の重要性は分かりましたね。では、具体的にシャッター速度を変えた撮影アイデアを考えましょう。まずは、速いシャッター速度を生かした写真です。

肉眼では見えない一瞬の形や姿も、写真ならとらえられそうですね。光を一瞬で集めるので明るくないとダメですが。

刻々と形を変える水流などは代表的です。水しぶきの粒は速いシャッター速度で撮らないと認識できません。絞りを開けたり、感度を上げて、シャッター速度を上げてみましょう。

肉眼では見えているようで見えていないものがカメラを通してあぶりだされているみたいで面白いですね。

一瞬の姿と形を写真に残せる

シャッター速度を上げていくと、カメラが切り取る時間が極端に短くなるので、より一瞬の姿や形がピタッと写るようになります。例えば、1/4,000秒で噴水を撮影すると、水しぶきが粒として写ります。科学の本で見るような、動きの詳細がはっきりとした写真が撮れるわけです。スポーツなど動きのあるものの撮影に有効ですが、それだけでなく、普段見ている何か動きがあるものに目を向けることで、面白い写真表現が見いだせることでしょう。

噴水の水しぶきを止める

シャッター速度が遅いと、噴水は水は流れて写る。水しぶきは認識できず、かたまりとなって写る

シャッター速度を上げると、水しぶきの一粒一粒が止まって写り、迫力ある表現となる

鳥の羽ばたく姿をとらえる

羽ばたく瞬間の羽の形がビシッと写る。見慣れた鳩も羽ばたく瞬間は意外な迫力があるものだ

スローシャッターで光の動きを写真に描く

カメラだけが知っている幻想的な世界

光を操っているような感覚になれるのがスローシャッターによる表現です。画面内で強い光を放ちながら動くものを遅いシャッター速度でとらえるとどうなるでしょう?

そこだけが光跡となって写りますよね。ペンライトで空中に文字を描いたりする写真も人気がありますね。

長いシャッター速度で撮ることで、光が時間をかけて描く光景を1枚の写真に収められるわけです。画面内の光の強弱と動きを計算して撮ります。

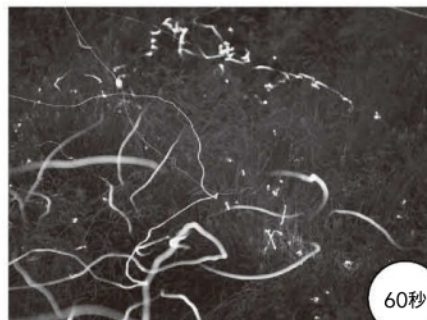
スローといっても、さまざまなシャッター速度が考えられますし、奥が深そうですね。

光の動きを光跡として写す

左ページの商店街の例とは逆に、シャッター速度が遅いときに、動いているものが強い光を放っているとどうなるのでしょうか？ 例えば、夜に走る車を長いシャッター速度で撮ると、テールライトが光跡として残ります。当然、シャッターを開けている時間が長いほど、光跡も長くなるわけです。このように、暗い中で、明るいものが動くと、写真に光跡が描き出されます。スローシャッターによる写真は、肉眼では見えない光景を写すことになるので、想像力をふくらませながら、撮影現場をよく観察してみることがコツですね。

車のテールライトを光跡とする

夜間にスローシャッターで車をとらえると、暗い車体は写らず、明るいライトだけが光跡となって浮かび上がる。車の動きを予測して、光跡の長さを決めよう

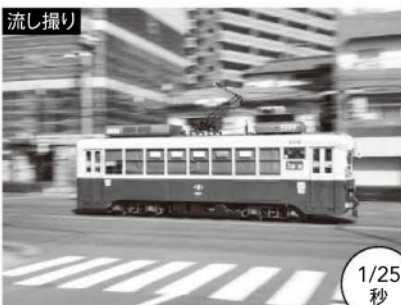
蛍が飛ぶ軌跡を写真にとらえる

シャッターを開けている間に飛び回る蛍の動きが、そのまま光の筋となって写真に現れる。不規則に飛ぶ蛍が描き出す、幻想的な表現だ

StepUp写真術

シャッターを開けながらカメラを動かす流し撮り

さて、ここまではカメラを固定した状態を想定して話を進めてきましたが、シャッター速度が遅いと、撮影中にカメラを動かすこともできるわけです。それを生かしたテクニックの1つが流し撮り。動く被写体に躍動感を足す表現手法です。例えば、走行中の電車。速いシャッター速度では電車がピタッと止まってしまい、躍動感は表現できません。かといって、シャッター速度を遅くしすぎると、ぶれてしまって電車の様子が伝わりません。そこで、動く電車のスピードにシンクロさせるようにカメラを振ってみましょう。すると、電車はぶれずに、背景だけが流れて写ります。シャッター速度を遅くすれば、もっと背景を流すことも可能です。このテクニックも、シャッターが開いている時間をすべて1枚の写真として残せる写真ならではの表現。シャッター速度ひとつで、撮影のアイデアはどんどん広がっていくのです。

普通に撮影すると躍動感が出ない

速いシャッター速度で普通に撮影すると、電車は止まるが走行する躍動感は出ない。とはいえ、単純にシャッター速度を遅くすると、電車がぶれて認識できない

流し撮りすることでスピード感が出る

シャッター速度を遅くして、電車の速度に合わせてカメラを振るように撮ると、電車はしっかり写しつつ、背景は流れて写り、スピード感ある写真となる

光と時間が作りあげるのが写真

シャッター速度だけで、こんなにも写せる光景が変わるんですね。

まさに、光と時間が描き出す光景を探すのがシャッター速度を意識した撮影の醍醐味なんです。

シャッター速度を遅くして、被写体をトレースするようにカメラを振るのが流し撮りのコツ。シャッター速度が遅いほどスピード感は出るが、成功率も下がるので注意しよう

写真家に聞きました

最近買って良かったモノ

第5回 | 山﨑友也さん

一年中、鉄道を求めてロケをしている山﨑さん。ロケが多いゆえの必需品、一瞬の出合いを逃さないアイテム、鉄道カメラマンならではのグッズを紹介する。

最強スペックを誇る
フォトグラファー向けのタブレットPC

VAIO

VAIO Z Canvas

発売日 2015年8月　ソニーストア価格 399,800円前後

OS：Windows 8.1 Pro 64ビット／CPU：Core i7-4770HQ 2.20GHz／メモリー：16GB／ディスプレイ：12.3型／解像度：2,560×1,704／SSD：1TB／インターフェイス：USB 3.0×2、1000BASE-T×1、HDMI×1、Mini DisplayPort×1、SDスロット×1／無線LAN：IEEE 802.11a/b/g/n/ac準拠／サイズ：301（W）×13.6（H）×213（D）mm（本体）／重さ：約1.21kg（本体）、約0.34kg（キーボード）

ロケが多い鉄道カメラマンにとっては、ノートPCは必需品だ。撮影したデータをすぐさま車の中で加工してクライアントに納品することも多々ある。ところがノートPCはディスプレイのキャリブレーションが取れていないものが多く、ノートPCでの画像処理に不安があった。そんなときに注目したのがVAIO Z Canvas。Adobe RGBの色域を95％カバーするディスプレイを採用しているので、安心してロケ先でも画像処理をすることができる。

キーボードとディスプレイが分割しているため、キーボードをディスプレイの横や膝の上など自由な場所においてタイピングできるのもありがたい。ディスプレイはタッチパネルなのでタブレットのような使い方もできるうえ、タッチペンも付属しておりペンタブレットとしても利用できる。スペック的には第二世代のSSDを搭載しており、容量の重いデータでもサクサク動くところも良い。

VAIO Z Canvasは行動派クリエイターにとって、もっとも信頼できるパートナーといえるだろう。

どうして、買ったの？

ノートPCでAdobe RGBの色域を再現できるというのが一番の理由。またセミナーなどで発表するときには今まで重いノートPCを持参していたが、VAIOは軽量コンパクトな上にハイスペックなので、移動も苦にならない。

ここがいい！ ロケ先でも安心して画像処理ができる

締め切りギリギリまで粘って、撮れたデータを即納品ということも数多い。そんなときに車中など、自宅以外でも適正な色再現ができるディスプレイでデータを確認できるというのは大変助かる

ここがいい！ ハイスペックなのでEOS 5Dsの画像も楽々処理

高画素のカメラが増えているなか、パソコンもハイスペックでないと作業にストレスを感じてしまう。VAIOは第二世代のSSDを搭載しメモリーも16GBあるので、EOS 5Dsのデータでもサクサク動く

ここがいい！ 自由な角度に調整できるディスプレイスタンド

フリースタイルのスタンドも特筆すべき点。好みの角度に調節でき、その角度をしっかりと保てるので、ペンで強く描いてもずれることがない。角度を片手で起こせるのは驚きだ

ここがいい！ 写真のマスク処理もペンで直感的に行える

タブレット型端末ではなくれっきとしたパソコンなので、さまざまなソフトを使用して作業ができる。特にPhotoshopを使って画像処理をするときにペンタブとして使えるというのは非常に便利だ

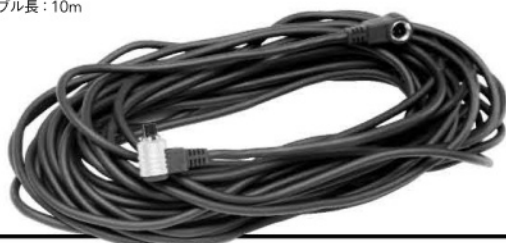
ここがいい！ 軽いので電車や飛行機の移動でもつらくない

重量はわずか1,550g。サイズもA4で、カメラバッグに入れても重さを感じない。またアルミニウム合金の切削ボディとモニターは6面強化ガラスなので衝撃にも強く、液晶を傷つける心配もない

同じ電車を複数枚撮影できる

キヤノン

エクステンションコード

発売日 1998年11月 実勢価格 8,200円前後
ケーブル長：10m

手前のカメラで撮影

奥のカメラで撮影

ここがいい！ 移動しなくても離れた場所の撮影ができる

エクステンションコードを2本つなげると、約20m離れたところから同じ列車を別アングルで撮影できる

どうして、買ったの？

鉄道写真はワンチャンスなので、カメラ2台を異なる構図で撮影するのが常である。ワイヤレスのコントローラーが主流のなか、確実性を求めるのであればやっぱり有線。混線したり電池切れの心配も不要で安心して撮影できる。

メーカー開発者直撃インタビュー

なぜLUMIX GX8は フラッグシップ機へと 進化を遂げたのか?

インタビューの注目トピック

機能や操作系をブラッシュアップ GH4と並ぶツートップ体制に

——LUMIX GX8のコンセプトについてお伺いしたいと思います。これまでのGXシリーズよりも、かなり上を狙ってきたように見えますが……。

角　LUMIX Gシリーズには、シューティングスタイルのGH4※1やG7がありますが、そちらは"ハイブリッドフォトグラフィ"ということで、静止画と動画の融合を重視したシリーズです。一方、フラットタイプのGXシリーズは、静止画、特にストリートフォト的な使い方を想定したモデルで、従来のGX7も、サイズ感やデザイン、ファインダーのチルト機構など高い評価をいただきましたが、他社のフラッグシップと比較すると、操作感やグリップ感にもの足りなさを感じる方もいらっしゃいました。そこで、ストリートフォトのフラッグシップとして、従来のGX7よりも1段上の風格や操作性を追求したのがGX8です。

——マイクロフォーサーズ規格のLUMIXで、空間認識AFや4K動画/フォトに対応しているのは、GH4、G7に続き、今回のGX8を加えて3機種あります。動体も追える速いAFと、4Kフォトに魅力を感じて、従来機種から買い替え、買い足しを考えているユーザーにとっては、選択に迷ってしまいます。まさに、今の僕がその状況に陥っているのですが(笑)、どの機種がどう優れていて、どの部分は同等なのでしょうか?

角　GH4は動画のプロにも使っていただける機能を備えています。例えば、カメラで動画を録画しながらHDMIスルー表示が可能なので、外部レコーダーとカメラ本体で同時記録が行えますし、用途に応じてフレームレートを可変することができるのもGH4だけの機能です。また、有償オプションとなりますが、より滑らかな階調の映像表現を可能にするLog撮影機能「V-Log L※2」にも対応しています。一方、静止画は、20メガピクセルCMOSセンサーを搭載するGX8が有利です。

——空間認識AF※3の性能は同等ですか?

福川　空間認識AFの速さは3機種とも同等の性能です。ただ、G7とGX8には、新たに星空AFが搭載され、追尾AFについても、被写体判別の技術進化と被写体の動きを予測する機能を追加し、比較的動きの速い被写体であっても被写体をロストしにくく、タイミングがずれることなく、被写体を追尾できるようになりました。また、GX8は、画素数が20メガピクセルに増えたことで、より高いAF精度が求められますが、専用のチューニングを行うことで20メガピクセルに耐える精度を確保しています。

——ますますG7も選択肢として捨てがたくなってきました(笑)。フラッグシップのGH4とGX8は予算的に厳しいが、G7だったらなんとか手が届くのに、と思っている人は僕を含め多いと思いますが、フラッグシップの2機種と比べ、機能的にG7が及ばないのはどのような部分ですか?

角　まず、防塵・防滴はGH4とGX8だけです。次に、ファインダーの倍率は、GX8が0.77倍、G7は0.7倍、GH4は0.67倍と、GX8がファインダー像がもっとも大きく見やすくなっています。さらにGX8は、レンズ内手ブレ補正(O.I.S.)とボディ内手ブレ補正(B.I.S.)を同時に動かす6コントロールの「Dual I.S.」を搭載していますので、手

今月のプロダクト　パナソニック LUMIX GX8

レンジファインダーカメラ的なフラットデザイン採用のストリートフォトのフラッグシップモデル。マイクロフォーサーズ機としては初となる2,030万画素のLiveMOSセンサーを採用し、空間認識AFや、4K動画/4Kフォトにも対応。レンズ内手ブレ補正とボディ内手ブレ補正を協調動作させる世界初の「6コントロールのDUAL I.S.」も搭載し、手ブレ補正非搭載のレンズでも手ブレ補正が効くほか、より大きなブレも補正できるのが特徴だ。また、大きく見やすいチルト式EVFやバリアングル液晶モニター、ダイヤルによる直感操作など、見やすさと使いやすさにとことんこだわったモデルだ。

発売日　2015年8月20日
実勢価格　144,000円前後(ボディ単体)

イメージセンサー:4/3型Live MOS センサー 有効約2,030万画素/EVF:約236万ドット有機EL/常用ISO感度:200~25600/シャッター速度:1/8,000~60秒、1~1/16,000秒(電子シャッター)、バルブ/背面液晶モニター:約104万ドット有機EL/Wi-Fi:対応/大きさ:約133.2(幅)×約77.9mm(高さ)×約63.1(奥行)mm/重さ:約487g(バッテリー、メモリーカード含む)

デジカメWatchでインタビューの全文が読める!
http://dc.watch.impress.co.jp/

誌面の都合で本連載に掲載できなかった記事を含めたインタビューの全文をインプレスのニュースサイト「デジカメWatch」で公開しています。ちょっとマニアックなネタやこぼれ話も要チェック!

（写真左から）

岡本晃宏氏　パナソニック株式会社
AVCネットワークス社
イメージングネットワーク事業部
イメージング開発センター
カメラ開発部 制御設計1課 主任技師

宮崎隆治氏　パナソニック株式会社
AVCネットワークス社
イメージングネットワーク事業部
イメージングプロダクツビジネスユニット
商品設計総括 電気設計部
電気設計3課 課長

天野康生氏　パナソニック株式会社
AVCネットワークス社
イメージングネットワーク事業部
イメージング開発センター
光学システム開発部 開発四課
主任技師

山本修作氏　パナソニック株式会社
AVCネットワークス社
イメージングネットワーク事業部
イメージングプロダクツビジネスユニット
外装部 外装設計2課 主任技師

福川浩平氏　パナソニック株式会社
AVCネットワークス社
イメージングネットワーク事業部
イメージング開発センター
カメラ開発部 要素開発3課
主任技師

角 和憲氏　パナソニック株式会社
AVCネットワークス社
イメージングネットワーク事業部
イメージングプロダクツビジネスユニット
商品企画部 第1商品企画課 主務

GX8とGX7のファインダー像の比較

35mm判換算のファインダー倍率は、従来のGX7（写真右）は約0.7倍なのに対し、GX8（写真左）は約0.77倍に向上。数値では約1割大きくなっているだけだが、実際にファインダーをのぞくと、GX8の方がかなり像が大きく見やすい

ファインダー部の構造

収納時の見映えを考慮し、チルト・スライドロック式機構を採用。EVFパネルもアイピース光学系もより大きくなっている

ブレ補正を搭載していないレンズでも、手ブレ補正が効くのが大きな特徴です。

——静止画重視の人にとっては、ボディ内手ブレ補正の有無は大きな違いですよね。ところで、“6コントロール”というのはどういう意味ですか？ 他社で採用されている5軸のボディ内手ブレ補正とどこが違うのでしょう？

天野　GX7のボディ内手ブレ補正は、レンズ内手ブレ補正搭載のレンズを装着したときは、ボディ内手ブレ補正は一切動かない仕様になっています。これに対して、GX8では、せっかく2つも手ブレ補正があるなら片方しか使わないのはもったいないよね、ということで、レンズ内とボディ内の手ブレ補正を両方活用することはできないかと考えその技術を開発しました。レンズ内手ブレ補正2軸、ボディ内手ブレ補正4軸を、協調動作させて、より大きなブレにも対応できるようにしたのが、GX8のDual I.S.です。以前はカメラをしっかり構えて撮影するのが当たり前でしたが、デジタルになって写真撮影を楽しむ人が増え、ラフなスタイルで撮影したり、チルト式やバリアングル液晶モニターの普及でハイアングルやローアングルなどやや不安定な構えで撮影することも多くなってきました。また、長時間露出のように手ブレそのものが大きくなるような撮影シーンでは、より大きな補正能力が必要です。それらを解決するために開発したのがDual I.S.で、レンズ内手ブレ補正搭載レンズを装着した際には、レンズ側で角度ブレ、ボディ側で角度ブレとシフトブレの補正を行い、手ブレ補正を搭載していないレンズを装着した場合は、ボディ側のみで角度ブレとシフトブレの補正を行う仕様です。

Dual I.S.はボディ側とレンズ側の補正度合いを高速処理して実現

——レンズ内とボディ内を両方動かせるなんて、これまで考えたことはあってもとても実現できるとは思わなかったので驚きました。

天野　ボディ側とレンズ側の制御をどうやって同期するのかが非常に難しかったのですが、ボディとレンズの通信の高速化を図り、ボディとレンズの情報のやり取りを速くすることで実現できました。現在はDual I.S.で制御を行うのは撮影時のみですが、撮影時にボディとレンズで手ブレ情報のやり取りを行い、レンズ側とボディ側の手ブレ補正も両方動かすことで、より大きな手ブレまで補正できるようになりました。

——ボディ側とレンズ側にそれぞれ手ブレを検知するセンサーが搭載されているわけですが、これだけセンサーの位置が違っていて、正しくブレを検知できるのですか？

天野　シフトブレはボディのセンサーで検出した情報を使い、角度ブレについては、レンズ側のセンサーで検出した情報を使います。レンズとボディでそれぞれどれだけ補正を行うのかを計算し、その結果をボディ側と高速でやり取りし、ボディ側の手ブレ補正も同時に動かしています。ちなみに、手ブレ補正を搭載していないレンズは、角度ブレもシフトブレもボディ側のセンサーで検出した情報を使い、ボディ内手ブレ補正で、角度ブレ、シフトブレを補正します。ボディ内手ブレ補正の効果もGX7より向上しており、焦点距離の短いレンズであれば、レンズ内手ブレ補正のPOWER O.I.S.※4に近い補正効果が得られます。

——Dual I.S.対応レンズ装着時は、常にレンズとボディの両方で手ブレ補正を行うのですか？

天野　レンズだけでなくボディ側の手ブレ補正も動かさなければ有効にブレを補正できないと判断したときだけ両方動かし、レンズ内手ブレ補正だけでも十分と判断したときはレンズ内手ブレ補正のみを行っています。また、シフトブレに関しては、レンズ側にシフトブレを検出するセンサーがないので、ボディ側でシフトブレ補正を行います。

——ボディでシフトブレを検出できるのであれば、それをレンズ側に伝えて、レンズ内手ブレ補正でシフトブレも補正できないのでしょうか？

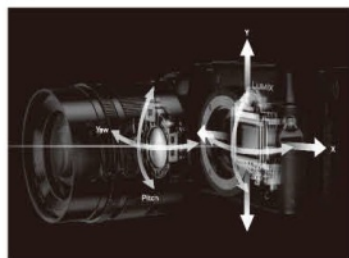
天野　原理的には可能ですが、現状はボディでシフトブレを検出し、ボディ内手ブレ補正でシフトブレを補正しています。

——回転ブレに対応していないのはなぜですか？

天野　GX8のボディ内手ブレ補正ユニットは、X-Y軸に動くガイドレール方式を採用しているので、センサーを回転させることができません。回転ブレに対応できる手ブレ補正も検討はしたのですが、今よりもユニットが大きくなってしまうため、今回は回転ブレの補正は見送りました。

※1
LUMIX GH4
GX8やG7の登場でその優位性が揺るぎ始めたGH4だが、動画撮影機能はプロユースにも耐えるこだわりの仕様で、動画に関するさまざまな設定、チューニングを変えられるのが特徴。センサーやボディメカも、より過酷な環境での使用も考慮された設計だ

※2
V-Log L
動画編集用の素材として適した軟調な階調再現で動画を記録できる機能で、V-Log Lは、フィルム素材をデジタル化する際に規格化された“10-bit Cineon”と同じ思想で開発されたV-Logを、マイクロフォーサーズセンサー用として最適化したもの

6コントロール手ブレ補正機構

DUAL I.S.対応レンズ装着時には、レンズ内ISで角度ブレを、ボディ内ISで角度ブレ（レンズ内ISと協調動作）とシフトブレを補正する

レール式の手ブレ補正ユニット

小型化を優先して今回は回転ブレへの対応は見送り、縦横のガイドレールに沿ってセンサーを動かす、GX7と同タイプの手ブレ補正ユニットを採用

――三脚撮影や流し撮りには対応していますか？

天野　対応しています。ただ、三脚撮影時には、念のため手ブレ補正オフを推奨しています。

――カメラを縦位置に構えて横方向に流し撮りしたり、斜め方向に流し撮りしても、有効に制御されますか？

天野　横方向（長辺方向）の流し撮り時に短辺方向のブレを抑える制御のみの対応です。

――ところで、ボディ内手ブレ補正を採用すると、熱を逃がす導線が限られてくるので、4K動画や4Kフォトを実現するのが難しかったと思うのですが、4K動画の連続撮影時間は短くなっていないのでしょうか？

天野　GX8のボディ内手ブレ補正は、動画や4Kフォト撮影中には動かさない仕組みにしていますので、ボディ内手ブレ補正が4Kに対して悪影響を及ぼすことはありません。

――具体的には、どのくらい4K動画を連続記録できるのでしょうか？

宮崎　外気温や使用条件にもよりますが、SDカード容量がなくなるまでもしくは内蔵バッテリーがなくなるまで4K動画を連続撮影できます。

――GX1からGX7、GX7からGX8と、同じシリーズとは思えないほど、ボディが肥大化してきましたね。今回、GX8でボディが大きくなった要因はどこにあるでしょうか？

山本　大きく3つの要因があります。1点目は、GX8のファインダーです。のぞいてみるとお分かりいただけると思いますが、ファインダーを見やすくするには、デバイス（有機ELパネル）を大きくし、アイピースも大きくして、高倍率でありながら、周辺までケラレなくクッキリ見えるように、非常にファインダーにはこだわっています。そのぶん、横幅が大きくなっています。2点目は、液晶モニターを横開きの2軸バリアングルにしていますので、ヒンジを取り付けるスペースが増えています。3点目は、撮影時間を長くするために、GX7より大容量のバッテリーパックを採用したこともボディが大きくなった要因です。結果的には、ボディが大きくなった理由の大半は外装設計にありますが、サイズが大きくなったぶん、使う楽しさも大きくなったと思います（笑）。

――これまで発売したマイクロフォーサーズ規格のLUMIX G O.I.S.搭載レンズは、すべてDual I.S.に対応させていく予定なのでしょうか？

天野　基本的には、優先順位を考え、順次ファームウェアのアップデートを行ってDual I.S.に対応させていく計画をしています。ただ、一番最初に発売したLUMIX G VARIO 14-45mm/F3.5-5.6 ASPH./MEGA O.I.S.とLUMIX G VARIO 45-200mm/F4.0-5.6/MEGA O.I.S.はシステムの制約上、Dual I.S.には対応させることができませんでした。あと、LUMIX G VARIO 100-300mm/F4.0-5.6/MEGA O.I.S.もなんとかDual I.S.に対応させる方法はないのか、社内でもさまざまな検討を行ったのですが、現時点でDual I.S.には対応できないという判断です。

――100-300mmが非対応というのは、正直ショックですね。Dual I.S.の効果を一番感じられるのではないかと、ファームウェアの更新を期待していたのですが……。

角　開発発表段階ですが、LEICA DG 100-400mm F4-6.3を楽しみにしていてください。

――でも、お高いんでしょう？（笑）最近発売したレンズでは、LUMIX G 42.5mm/F1.7 ASPH./POWER O.I.S. よりも先に、LUMIX G MACRO 30mm/F2.8 ASPH./MEGA O.I.S.の方がDual I.S.に対応しましたが、これはどういう判断からですか？

天野　近接撮影時ほど、ボディ内手ブレ補正によるシフトブレ補正が有効になるからです。

――LUMIX G7はUHS-Ⅱ※5対応ですが、GX8はUHS-Ⅱに対応していますか？

宮崎　対応していません。ただ、G7にUHS-Ⅱ対応のSDXCカードを使った際の優位性は、RAW＋JPEG記録でバッファフルになったときにリサイクリングタイムが速いことですが、GX8はバッファメモリの容量も増やしていますので、RAW＋JPEGの連続撮影枚数もG7よりも多くなっています。そういう意味では、GX8での機能向上の側面から言えば、高価なUHS-Ⅱカードを使っただけの効果が望めるのは、ごくわずかなシーンに限られる、と言えると考えております。

――LUMIX GH2以降、画素数を16メガピクセルに抑えてきましたが、GX8で20メガピクセルに増やしたのはなぜですか？

岡本　画素数が増えれば、それだけ写真は高精細な仕上がりになるので、被写体のディテールであるとか質感を表現しやすくなります。進化の方向性としては自然な流れだと考えています。その一方で、画素数が増えるということは、セルサイズが小さくなるということでもあるので、一番懸念されるのは高感度撮影時のノイズです。しかし、センサーの特性も向上し、GX8の画像処理エンジンは、GH4にも搭載している最新のもので、ノイズの特性に応じてノイズリダクションのコントロールができますので、20メガピクセルの新センサーと新エンジンの組み合わせであれば、従来の16メガピクセル機と同等以上の高感度画質を達成できると判断しました。

――ローパスフィルターレス仕様ですか？

岡本　ローパスフィルターは搭載しています。

――同じマイクロフォーサーズ規格のオリンパスは、16メガピクセルでローパスフィルターレス仕様を採用し、より高い解像感を追求しています。画素数が20メガピクセルになって、より画素ピッチが狭くなっていても、まだローパスフィルターは必要ですか？

岡本　ローパスフィルターを外せば解像感を高めることは可能ですが、当然、偽色やモアレのリスクは高まります。開発段階でもローパスフィルターの有無について検討を重ねましたが、現時点では、ローパスフィルターを外してしまう副作用の方が大きいという結論に至りました。画素数を16メガから20メガピクセルに増やしたことで、自ずと解像は高まりますし、エンジンも高い解像描写性能を持っていますので、ローパスフィルターを搭載していても高い解像力を実現しています。

――画素数が16メガから20メガピクセルになっ

※3
空間認識AF
ピント位置の異なる2枚のライブビュー画像から被写体までの距離を演算し、ムダな動きを極限まで排除。動体にも高速にピントを合わせられる。レンズごとにボケ特性を把握する必要があるので、純正レンズのみの対応だ

※4
POWER O.I.S.
パナソニックのレンズ内手ブレ補正には、MEGA O.I.S.とPOWER O.I.S. の2タイプがあるが、POWER O.I.S.の方がより高性能なジャイロセンサーと制御アルゴリズムを採用し、約1～2段分補正能力が強化されている

※5
UHS-Ⅱ
SDHC/SDXCメモリーカードの規格で、従来のSDカードよりも接続端子が1列多く、転送速度（理論値）もUHS-Iが104MB/sなのに対し、UHS-Ⅱは312MB/sと3倍近く高速なのが特徴

GX8とGX7のボディサイズ比較

GX8

77.9 mm

133.2mm

GX7

EVF内蔵でGX1よりも肥大化したGX7だが、今回のGX8は、EVFの高倍率化、グリップの大型化、バッテリーの大容量化、バリアングルモニター採用で、さらにひと回り大きくなり、特に厚みが増している

て、4Kフォトの画質は向上していますか？

岡本　G7は16メガピクセル、GX8は20メガピクセルですが、4Kフォトや4K動画を生成するために使っている画素数は同じです。20メガピクセルのGX8の方が、G7よりもセンサーの狭い範囲を読み出していますので、同じ焦点距離で撮影してもGX8の4Kフォトの方が少し撮像範囲(画角)は狭くなります。厳密に言いますと、レンズの解像性能的には、撮像範囲が狭くなるGX8の方が厳しいとは言えますが、十分な解像性能がありますので問題ありません。なお、FHD、HD撮影時には、16:9に合わせて画面の上下がカットされますが、静止画撮影時と同じ水平画角で撮影できます。ちなみに4Kフォトの3:2設定時の水平画角は、GX7が82%、GX8が73%になります。

――4Kフォトで撮影したMP4と4K動画を切り出した静止画とでは、画質に差はありますか？

岡本　4Kフォトの基本技術は4K動画ですので、ベースの部分での画質は同じです。ただ、動画モードでは輝度レベル設定を6～255などに設定できますが、4Kフォトは静止画ですので、輝度レベルは0～255に固定され、プログラムオートや絞り優先オート時には、シャッター速度をより高速にして被写体の動きを止めるような制御にしています。その2点が大きく違っています。

――圧縮率に違いはないのですか？ 4K動画よりも4Kフォトの方がMP4の圧縮率を低くして、画質の劣化を抑えているとか、キーフレームの間隔を短めにしているとか？

岡本　基本的に4K動画も4Kフォトも共通です。H.264の規格に則った設定になっていますが、エンジンの圧縮性能が高く、静止画としても十分な画質を確保しています。

今後の高解像度化を考慮すると空間認識AF+コントラストAFが最良

――ところで、今回、GX8をお借りして、空間認識AF※2なるものをようやく体験することができたのですが、確かに動く被写体を連写してもしっかりピントが合い続けることに驚きました。レンズが14-140mmなので、駅のホームから通過する電車を連写する、という単純な動体テストしかできませんでしたが、それでも電車の運転手がアップになるまで、ほぼピントを外さないのは見事だと思います。高速連写に強い一眼レフでも、これほど至近に被写体が迫ってくると、フォーカスレンズの動きが追いつかず、ピンボケになってしまうのが当たり前のシーンでも、しっかりフォーカスが追いついてくれました。ただ、ペットやマクロ撮影など比較的動きが少ないシーンをAF-Cで狙っていると、やはりウォブリングによるピントの微動が気になります。像面位相差画素を搭載したミラーレスカメラであれば、AF-Cでも被写体の動きがなければフォーカスもピタリと止まってくれます。なぜ、パナソニックは像面位相差AFの採用に否定的なのでしょうか？

福川　弊社が像面位相差AFではなく、空間認識AF＋コントラストAFを採用するのは、コントラストAFの方がピントの精度が高いと考えているからです。それと、像面位相差AFは像面位相差画素の画素補間が必要になりますので、補間処理を行っているとはいえ、画質への影響は皆無ではありません。さらに、像面位相差画素の補間処理も、これから先の高解像度化、高フレームレート化を考えますと、時間的に処理が厳しくなってくる可能性があるので、次の世代を見据えると、コントラストAFの弱点を空間認識AFで補う形がベストだと考えています。また、空間認識AFの利点として、センサーを選ばないので、フルサイズのセンサーでもより小サイズのセンサーにも、空間認識AFの技術を適用できます。

――ただし、レンズの特性が分かっていないと空間認識AFは使えませんよね？

福川　そうですね。弊社の空間認識AFも、レンズごとにボケの特性の膨大なデータがボディやレンズに格納されていて、そのデータを用いて、空間認識AFの制御を行っています。マイクロフォーサーズ規格のLUMIXレンズであれば、空間認識AFにほとんどのレンズが対応しています。また、G7からですが空間認識AFの技術を応用して、他社製のマイクロフォーサーズレンズ使用時でも、よりスムーズで高速なAFを実現しています。

▶実写ミニレビュー　高精度に測距してくれる空間認識AFと4Kフォトの性能に驚く

お恥ずかしい話だが、パナソニックの空間認識AFや4Kフォトを体験するのは、実は今回が初めてだ。というのも、GH1/GH2の売りだったマルチアスペクト(ひと回り大きなセンサーを搭載することでアスペクト比を変えても対角線画角が変わらない機能)が好きだったので、GH3以降のGHシリーズに買い替えることができずにいた。しかし、LUMIX G7やGX8にも、空間認識AFや4Kフォトが搭載され、GM1以来、久々に物欲を掻き立てられるLUMIXの登場で、遅ればせながらようやく空間認識AFや4Kフォトを試してみることにした。

通過する特急電車を高速連写するという、動体としては動きが単純で難易度が低いシーンではあるが、運転手がアップになるまで、大きくピントを外すことなく追従してくれた。一眼レフと望遠ズームの組み合わせでも、至近まで近づいてくると、ピントの追従が追いつかなくなってピンボケになることが多いだけに、想像以上の性能だ。

4Kフォトは、4K動画の1コマを切り出すことで、約800万画素で30コマ／秒の超高速連写を実現する機能だ。そのため、写真というよりビデオキャプチャーという意識が働いてしまうが、使ってみるとなかなか楽しい。惜しむらくは、通常は240fpsでコントラストAFを行うのに対し、4Kフォト時は30fpsになるので、そのぶんAFの動きは通常よりもやや緩慢になる。そのため、向かってくる被写体を超高速連写するのには適さないが、横方向に動く被写体や位置が決まっている被写体を狙うには非常に重宝する。

意図的に高速シャッターを選択することで被写体ブレを軽減。こうした撮影者の意思が反映されることで、単なる動画からの切り出しではなくなる。ローリングシャッター歪みも少なめだ

使用レンズは14-140mm/F3.5-5.6 ASPH./POWER O.I.S.。1カット目と16コマ目と27コマ目を抜粋。わずかなピン甘は2～3カットあるものの、大ボケはなくすべて実用になる

伊達淳一（だてじゅんいち）：1962年広島県生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒。写真誌などでカメラマンとして活動する一方、専門知識を生かしてライターとしても活躍。黎明期からデジカメに強く、カメラマンよりライター業が多くなる

2015年 10月20日発行

ふくだくん通信

第5回「白いサルの赤ちゃんが!!!!!」

動物写真家の福田幸広は、国内外を問わず、さまざまな動物たちの愛くるしい姿を撮影している。
この連載では、今取り組んでいる動物撮影の舞台裏を紹介。撮影機材や日々の苦労、楽しさについて語ってもらう。

写真・文●福田幸広

Wanted

ニホンザル's Data

- 分類 サル目オナガザル科マカク属
- 体長 オス54～61cm、メス47～60cm
- 生態 昼行性、群れで遊動生活
- 分布 北海道、琉球列島を除く日本列島

ニホンザルは森の恵みを利用して生きています。今回撮影した8月上旬は山でオニグルミが実をつける季節です。サルたちは目覚めるとクルミの木へと移動し、木に登って食べはじめます。深い緑に覆われた森でも「カキッ、カキッ」という音が響くのでサルの存在が分かります。おなかが満たされれば、あとは日陰でごろりと横になって昼寝の時間。大人のサルはほとんど動こうとしません。春に生まれた赤ちゃんたちが集まって遊びはじめるのはこのころからです

地獄谷野猿公苑51年の歴史で初めて真っ白な毛で覆われたサルの赤ちゃんが誕生し、それを撮影に行ったのは6月下旬でした。苑内で初めて見た白い赤ちゃんは「超」がつくほどかわいいだけでなく、その毛色は光の角度や時間帯によって金色や銀色に見えて、神々しささえ感じました。夕方、母ザルに連れられ苑を出て山へ帰る姿を見たら、思わず追いかけて行きたくなってしまいました。

日に日に思いは強くなり、白い赤ちゃんの暮らしを撮影する計画を立てたのです。計画は1カ月後の7月下旬から。今度は知人宅を借りて、早朝からじっくりと山へ入ることにしました。ベース基地となる家は、毎日山中を歩いて出る洗濯物の処理や弁当の準備、そして早朝や深夜でも時間を気にせず出発できるなど、大きなアドバンテージがある場所です。最近は1カ所で長期滞在する撮影が中心になっているので現場での家探しの成否がポイントとなります。準備万端、地獄谷取材へ出発したのは「日本列島猛暑続く」のニュースが飛び交っているときでした。地獄谷は標高800m付近に位置し、都心と比べれば涼しいはずです。しかし、到着してみると都心と変わらぬ暑さ。山へ出発する前の早朝ですらまとわりつくような湿気を感じます。意を決してサルがいる山へ入ると、案の定少し斜面を登っただけで汗が噴き出てきます。サルたちのかすかな鳴き声やクルミを割る音が聞こえないか集中するのですが、滝のような汗にブヨがまとわりついてなかなか集中できません。葉の生い茂った森でサルの群れを探すのは大変なのです。やっと発見しても群れのサルたちは、かたまっているわけではありません。お互いの存在が分かる距離で広く散らばっています。少し離れただけでヤブに隠れて姿が見えなくなり、白い赤ちゃんは思うようには見つけられません。

結局、このとき山中で白い赤ちゃんを撮影することはできませんでした。しかし、苑内で過ごしている姿を見ると……。頭の真ん中に茶色の毛が生えている！ 産毛が抜けはじめた赤ちゃんから生えてきたのは普通のサルの毛でした。このまま全身に広がってしまうのか、伝説の白いサルになるのかはもう少し先のお話です。

明るい単焦点レンズが私の秘密兵器

撮影距離の調整がしやすい地獄谷のサル。私がよく使うのがキヤノンEF50mm F1.4 USM。最近のズームレンズにはない柔らかなボケ味があり、絞りを開けて撮影すると一味違った雰囲気の作品が撮れます

福田幸広（ふくだゆきひろ）：1965年東京都生まれ。日本大学農獣医学部卒。タンチョウに憧れ北海道の地を訪れたことがきっかけで動物写真家の道を志す。現在は野生動物、水中、風景の3本柱で取材を進めている。「山もいいけど、海もいい」がモットー。http://www.fukudayukihiro.com/

気になるポイントをユーザー目線でチェック!! ・編集部発

デジカメNEWS調査隊

デジタルカメラ関連の新製品情報や編集部員による試用レポート、そしてお得なキャンペーンやイベント情報など。
今月も新レンズの発表など旬のトピックが満載。内容盛りだくさんでお届けします!

11月 November

写真・文●榊 信康、編集部

銘玉は開けても絞っても楽しい TOMINON 55mm F1.2復刻モデル

CHECK

木下光学研究所は、富岡光学が1970年代に発売した「TOMINON 55mm F1.2」を現代技術を用いて復刻した「KISTAR 55mm F1.2」を発売した。オリジナルはM42マウントだったが、KISTAR 55mm F1.2はヤシカコンタックスマウントを採用している。価格は134,000円前後。木下光学の創業者である木下三郎氏が光学設計を担当したレンズの復刻モデルだけあって、単純に光学・機構面をなぞるだけでなく、開発思想も含めた当時の描写の再現をこそ主眼にしたという。レンズも当時と同じラップ研磨を採用。ヘリコイドの作動感もピッチ仕上げにより再現している。

▶木下光学研究所 KISTAR 55mm F1.2

◎発売日：2015年9月30日 ◎実勢価格：134,000円前後

●マウントタイプ：ヤシカコンタックスマウント
●レンズ構成：6群7枚 ●画角：43° ●最小絞り：F16
●絞り羽根枚数：8枚 ●最短撮影距離：0.5m
●フィルター径：φ55mm
●最大径×全長：約φ64.5×56mm ●重さ：約310g

レンズキャップは金属製でねじ込み式を採用

ソニー α7 IIとmuk YC-NEX RJに装着。金属製の鏡筒はとても味わい深い

参考URL 木下光学研究所 http://www.kinoshita-optical.com/

検証

α7 IIでKISTAR 55mm F1.2の描写を味わう

KISTAR 55mm F1.2の最大の特徴は開放時のボケ。ソフトフォーカスのような幻想的な描写を楽しめた。逆光時のフレアも面白いだろう。一方で絞ったときのシャープ感も秀逸で、絞り操作でさまざまな表現が楽しめる

おすすめ
マウントアダプター
muk YC-NEX RJ

ヤシカコンタックスマウントのレンズをソニー Eマウントに装着できるマウントアダプター（お問い合わせ：エムユーケイカメラサービス横浜関内 045-228-7744）

ソフトフォーカスのような味わい！

F値を変えて撮ってみた

F1.2 F1.4 F2 F2.8 F4 F5.6 F8 F11 F16

開放時の独特のボケはF1.2～1.4。F4ぐらいからシャープ感が出てくる印象だ

フルサイズ対応の標準ズームが登場 デジタル対応FAレンズの開発が進む

CHECK

リコーイメージングは、Kマウントの標準ズームレンズ「HD PENTAX-D FA 24-70mmF2.8ED SDM WR」を発売した。35mm判フルサイズデジタル一眼レフカメラ（現在開発中）に対応した大口径標準ズームで、新型の超音波モーター（SDM）を搭載することで高速かつ静粛なAF駆動が可能。

▶リコーイメージング HD PENTAX-D FA 24-70mm F2.8ED SDM WR

◎発売日：2015年10月16日
◎実勢価格：181,000円前後

●焦点距離：24～70mm（APS-Cは37～107mm相当） ●レンズ構成：12群17枚
●画角：84°～34.5° ●最小絞り：F22 ●絞り羽根枚数：9枚（円形絞り）
●最短撮影距離：0.38m ●最大撮影倍率：0.2倍 ●フィルター径：φ82mm
●最大径×全長：約φ88.5×109.5mm ●重さ：約787g

参考URL リコーイメージング http://www.ricoh-imaging.co.jp/

水中写真をより美しく撮れる 防水タフネスコンパクトカメラ新モデル

CHECK

リコーイメージングは、アウトドア向けのコンパクトカメラ「WG-40」とWi-Fi対応モデル「WG-40W」を発売する。従来機との差異はホワイトバランスの最適化、マーメードモード専用のフラッシュ撮影モードの追加など。14m防水、耐落下衝撃1.6mの性能を備える。

※写真はWG-40W

▶リコーイメージング RICOH WG-40 RICOH WG-40W

◎発売予定日：2015年10月23日
◎予想実勢価格：35,000円（WG-40）、37,000円（WG-40W）

●イメージセンサー：約1,600万画素 1/2.3型CMOS ●レンズ構成：9群11枚
●焦点距離：5～25mm（約28～140mm相当） ●最小絞り：F3.5 ●液晶モニター：2.7型ワイド
●記録メディア：SD/SDHC/SDXC ●大きさ：約122.5（W）×61.5（H）×29.5（D）mm
●重さ：約192g（WG-40）、約194g（WG-40W）

参考URL リコーイメージング http://www.ricoh-imaging.co.jp/

※デジカメNEWS調査隊で気になる情報を見つけたら「デジカメWatch」（http://dc.watch.impress.co.jp/）のトップページ「デジタルカメラマガジン11月号 デジカメNEWS調査隊連動企画」をクリック! 本記事で掲載した情報をデジカメWatchでさらに詳しく読めます。

マップカメラは中古製品1年保証 スマートフォンサイトもリニューアル

CHECK

シュッピン株式会社は、同社が運営するカメラ専門店「Map Camera」で取り扱う中古商品の保証期間を従来の6カ月から1年に延長することを発表。対象は7月11日以降に店頭あるいはWebサイトにて購入した2万円（税込）以上の中古カメラボディ、交換レンズ、アクセサリーなどとなる。自然故障の場合に限るが、販売価格（税込）の3%の掛金で加入できる「安心サービス」を併用すれば、落下や水濡れなどによる故障に対しても1年間の補償が受けられる。また、同社スマートフォンサイトもリニューアルされ、PCサイトと同じ使い勝手での製品購入が可能となっている。

中古製品1年保証の注目ポイント

1 徹底した品質管理

専門スタッフによる徹底した製品の点検と清掃で、中古製品の品質を管理している。高次元の品質管理が1年保証を実現できた理由だ

2 オンライン販売でも変わらず1年保証

実店舗を訪問できなくても、Webサイトからの通信販売も可能だ。商品ページには保証期間や製品の状態が明記されているので、不安なく購入できる

［ 保証期間 ］

従来　6カ月

変更後　1年

2倍の保証期間で安心して購入可能！

マップカメラに聞いた

Q 1年保証に変更した評判は？

A お客さまには、他店では真似できない「中古保証1年」を最後の決め手として当店をお選びいただいており、対象商品であればメーカーでの生産終了品でも保証1年という点が、特に好評のようです。

注目

スマートフォンサイトもリニューアル

スマートフォンサイトも大幅にリニューアルされ、PCサイトと変わらない使い勝手を実現。特に検索機能が強化され、詳細なスペックを選んで、欲しい製品を絞り込める

参考URL マップカメラ https://www.mapcamera.com/html/used/1year.html

PLフィルターの効果が分かりにくい EVFやライブビューで便利な撮影グッズ

CHECK

ケンコー・トキナーは、PL効果を確認する「PLファインダー［R］Mミラーレスパッケージ」を発売する。PL効果が把握しにくいときでも、PLファインダーで効果を確認し、ファインダーとフィルターのマークを一致させることで同じ効果が得られる。サーキュラーPL（W）バーニアに対応した目盛りも装備。

▶ ケンコー・トキナー PLファインダー［R］Mミラーレスパッケージ

◎発売予定日：2015年10月23日　◎予想実勢価格：4,000円前後

●大きさ：約34（W）×39.8（H）×15（D）mm　●重量：約16g

ソニー α77に装着

マークを合わせて同じ角度だけ回す

PLファインダーをカメラのホットシューに装着し、三角形のマークが真上にくるように調節する。PLフィルターも同様にマークを合わせる。PLファインダーで効果を確認したら、同じ角度だけフィルターも回して設定するという要領だ

参考URL ケンコー・トキナー　http://www.kenko-tokina.co.jp/

スマートフォンの補助光になる 超コンパクトなLEDライト

CHECK

LPLはスマートフォンなど携帯端末用の小型LEDライト「VL-210M」を発売する。バッテリーを内蔵しているため、ホスト機器の電力を消費することなく使用できる。機器への取り付けはカメラシューまたはヘッドホン端子用の3.5mmアダプターを用いる。充電は付属のUSBアダプターで行う。

▶ LPL　VL-210M

◎発売予定日：2015年11月中旬 ◎標準価格：4,644円

●光源：白色LED21個
●照度：約600Lx/50cm
●色温度：6,500K
●点灯時間：約60分
●充電時間：約60分（Mini-USB）
●大きさ：46（W）×46（H）×18（D）mm
●重さ：約20g

参考URL LPL　http://www.lpl-web.co.jp/

Summilux 35mm F1.4の思想を元に マップカメラがオリジナルレンズを開発

CHECK

マップカメラを運営するシュッピンは、MS-Optics社と共同制作のオリジナルレンズ「玲瓏35/1.4」を100本限定で発売。Leica Summilux 35mm F1.4の設計思想を基にしつつ、メーカー製のレンズにはない味わいを目指したという。開放での存在感と絞りで大きく変わる描写が特徴とのこと。

▶ シュッピン　玲瓏35/1.4

◎発売予定日：2015年11月初旬
◎予想実勢価格：160,000円前後

●マウント：ライカMバヨネット　●レンズ構成：4群6枚
●画角：62°　●最短撮影距離：0.85m
●フィルター径：φ39mm
●絞り羽根枚数：12枚（円形絞り）　●重さ：約90g

参考URL マップカメラ　https://www.mapcamera.com/

マンフロットから街で使いたいストリートコレクションが登場

CHECK

マンフロットのカメラバッグに新シリーズ「ストリートコレクション」が加わった。カーキのナイロンを基調にデニムをあしらい、インナーは迷彩柄、ジッパーはオレンジというデザインでアーバンスタイルが意識されている。

▶ マンフロット Street メッセンジャー

◎発売日：2015年10月1日
◎実勢価格：13,000円前後

●外寸：370(W)×280(H)×180(D)mm
●内寸：360(W)×260(H)×160(D)mm
●重さ：0.8kg

カメラも日用品も収納できる

半分は撮影機材、半分は日用品を入れられる構成。着脱可能なインナーケースにはレンズ付きのミラーレス機にレンズ1～2本程度を収納可能。PCの収納スペースもある

天面からのクイックアクセスが可能

天面をジッパーで開けられるので、いちいちフラップを開閉することなく、スムーズにカメラを取り出せる。街のスナップ撮影などに便利だ

▶ Street バックパック

◎発売日：2015年10月1日
◎実勢価格：18,000円前後

●外寸：280(W)×460(H)×150(D)mm
●内寸：275(W)×450(H)×100(D)mm
●重さ：1kg

豊富な収納力が魅力

下部の気室がカメラの収納スペースとなっている。レンズ付きのミラーレス機に望遠ズーム、さらにレンズ2～3本が収納可能。見た目以上に収納できる

上部気室に日用品を収納

上部気室には日用品を収納できる。下部気室との敷居は外せるので、撮影時以外はインナーケースを外して通常のバックパックとしても利用可能だ

参考URL マンフロット http://www.manfrotto.jp/

マンフロットのトラベルバックパックに新カラーが追加

CHECK

マンフロットのアドバンスコレクション トラベルバックパックに従来のブラックに加えて、ネイビー、ブラウン、グレーの新カラーが加わった。伸縮収納部を持ち、同社のbefree三脚を収納できるのが特徴だ。

▶ マンフロット MA トラベル バックパック

◎発売日：2015年10月15日
◎実勢価格：20,000円前後

●外寸：300(W)×480(H)×230(D)mm
●内寸：280(W)×450(H)×160(D)mm
●重さ：1.42kg

撮影機材も旅行アイテムも欲張れる収納

ズームレンズ付きのデジタル一眼レフに望遠ズームレンズ1本を収納できる。カメラ以外のスペースには着替えなども入れられる。ノートPCの収納スペースもある

トラベル三脚をすっぽり入れられる伸縮収納部

同社トラベル三脚のbefreeを伸縮収納部にすっぽりと収められる。外に取り付けるタイプとは違い、安心して持ち運べるのがうれしい

参考URL マンフロット http://www.manfrotto.jp/

耐久性を重視したGW-PROシリーズにショルダーバッグとバックパックの新モデル

CHECK

ハクバは、GW-PROの新モデルとして「GW-PRO SHOULDER BAG M G2」と「同 BACKPACK M G2」を発売した。GW-PROの耐久性を継承しつつ機動性・速写性を重視しており、望遠レンズを付けた状態の一眼レフカメラが収納可能。今回はSHOULDER BAG M G2を紹介する。

▶ ハクバ写真産業 GW-PRO SHOULDER BAG M G2

◎発売日：2015年10月9日
◎実勢価格：25,000円前後

●外寸：480(W)×210(H)×260(D)mm
●内寸：360(W)×140(H)×210(D)mm
●重さ：約2.1kg

堅牢性の高い素材による信頼感

堅牢な素材で作られた内部には、レンズを装着したデジタル一眼レフ機に4～5本程度のレンズを収納可能だ

内部ポケットは上下どちらからでも開けられる

内部ポケットは上下にジッパーを装備。フラップを下げているときと上げているとき両方で中のものを取り出しやすい

収納量に比べてコンパクト

収納量に比べてかさばらない。堅牢性の高さと相まって、ギュッと凝縮されたような感覚だ

収納できるペットボトル用ポケット

サイドポケットの内部にはペットボトルなどを入れられるサブポケットも収納されている

参考URL ハクバ写真産業 http://www.hakubaphoto.jp/news/487

フラップとショルダーパッドに本革を採用スタイリッシュなショルダーカメラバッグ

CHECK

銀一は、シンクタンクフォトのカメラバッグ「レトロスペクティブレザー5」「同7」「同30」を発売した。デザインはパインストーンを基調とし、フラップとショルダーパッドに本革の茶をあしらった落ち着いた風合い。バッグ前面にはバックルを装備しセキュリティ性を高めている。

▶シンクタンクフォト レトロスペクティブレザー

◎発売日：2015年9月20日 ◎実勢価格：38,000円前後(レトロスペクティブレザー30)

●外寸：約406(W)×267(H)×1,900(D)mm
●内寸：約380(W)×240(H)×1,520(D)mm ●重さ：約1.7kg

参考URL シンクタンクフォト http://www.thinktankphoto.jp/

丈夫でデザイン性にも優れた帆布製おしゃれなインナーケースが新発売

CHECK

山田屋写真用品はカメラ用インナーケースを16モデル発売する。強度に優れ、使い続けるほど味が出る帆布(11号)を表面素材に使用しているのが特徴。サイズと中仕切りが異なる4種それぞれに、カラーはダークネイビー、チョコ、キャメル、オリーブのバリエーションを用意する。

▶ 山田屋写真用品 帆布インナーケース

◎発売予定日：2015年11月20日
◎標準価格：2,000～3,000円

参考URL 山田屋写真用品 http://www.yamadaya-daishi.com/

※写真はDタイプ

Aタイプ(中仕切り1枚) ●重さ：約95g
●内寸：約120(W)×110(H)×110(D)mm
Bタイプ(中仕切り2枚) ●重さ：約120g
●内寸：約190(W)×110(H)×110(D)mm
Cタイプ(中仕切り2枚) ●重さ：約155g
●内寸：約170(W)×140(H)×140(D)mm
Dタイプ(中仕切り2枚) ●重さ：約215g
●内寸：約270(W)×140(H)×140(D)mm

フォトグラファーズセッションに先立ち フォトレビューとトークイベントを開催

CHECK

来年開催の第5回キヤノンフォトグラファーズセッションに先立ち、講師を担当するハービー・山口氏と瀬戸正人氏によるフォトレビューとトークイベントが10月3日に開催された。総勢18名、4時間に及ぶフォトレビューとその後のトークイベントは、セッションの盛り上がりを予感させる内容だった。

瀬戸正人氏

写真は撮った人のものじゃない。写真を見て何かを感じとった瞬間に写真を見た人のものになる

ハービー・山口氏

10人いたら10人の視点がある。それが自分らしさであって、自分らしさが写るのが写真の面白さだ

両講師に分かれマンツーマンのフォトレビュー

1対1のフォトレビュー。参加者は作品のテーマや想いを語り、テーマの持ち方から写真のセレクトまで幅広くアドバイスを受ける。見学者も熱心に耳を傾けていた

見る人の側に立った写真の撮り方や、テーマにそった写真のセレクトなど、作品として完成させていく過程についてアドバイスする瀬戸正人氏

自分だけが見つけた光、自分らしさが伝わる写真が撮れているか、撮影者の姿勢についてあつく想いを語るハービー・山口氏

写真家への道を志した理由が語られたトークイベント

フォトレビュー後は対談形式のトークイベントが開催。ハービー・山口氏は初めて渡ったロンドンでの出来事、瀬戸正人氏は森山大道氏との出会いなど、それぞれが写真家を志した頃のエピソードについて語られた

注目 まだギリギリ間に合う！ 第5回の参加者募集中

第5回のフォトグラファーズセッション参加者の募集締め切りは10月31日まで。40歳以下なら誰でも応募可能だ。全3回のワークショップの中で、写真と向き合える

募集〆切：2015年10月31日

第4回フォトグラファーズセッションの最終セッションの模様。作り上げた作品をプレゼンする

参考URL **キヤノンフォトグラファーズセッション　http://canon.jp/event/photo/pg-session/**

専用トランクケースに純正グッズが満載 GRファン垂涎の1,200台限定セット

CHECK

リコーイメージングは、同社のハイエンドコンパクトカメラ「GRシリーズ」の誕生10年を記念したプレミアムキットを限定1,200セット発売する。専用のアルミトランクケースにGR Ⅱ本体、各種純正アクセサリー、特別仕様の記念ピンバッジとリングキャップを同梱している。

▶リコー　GR Ⅱ Premium Kit

◎発売予定日：2015年10月23日　◎予想実勢価格：165,000円前後

キット内容
- ●GR Ⅱ　本体　●アルミトランクケース O-AT146
- ●外部ファインダー GV-1
- ●ワイドコンバージョンレンズ GW-3
- ●フード&アダプター GH-3
- ●リングキャップ3種（グリーン、ゴールド、ガンメタル）
- ●ジャケット GC-6（オレンジ）
- ●ネックストラップ GS-3（オレンジ）
- ●GR 10周年記念ピンバッジ

参考URL **リコーイメージング　http://www.ricoh-imaging.co.jp/**

スリックの軽量三脚Eシリーズに 価格を抑えた新製品が登場

CHECK

ケンコー・トキナーは価格を抑えたライトカーボンシリーズの新製品としてライトカーボンE83、E84、E73、E74の4モデルを発売する。E83とE84は中級デジタル一眼レフ用（エイブル 300DX 雲台）、E73とE74は軽量デジタル一眼レフ用（SH-705E雲台）となる。ここではE83を紹介する。

▶ケンコー・トキナー　スリック ライトカーボンE83

◎発売予定日：2015年10月23日　◎予想実勢価格：45,000円前後

- ●全高：1,795mm
- ●エレベータ下げ全高：1,475mm
- ●縮長：675mm
- ●地上最低高：330mm
- ●最大パイプ径：28mm
- ●段数：3段
- ●最大搭載重量：5kg
- ●重さ：2,075g

ローアングル対応のカーボン三脚が価格を抑えて登場

参考URL **ケンコー・トキナー http://www.kenko-tokina.co.jp/**

超望遠レンズを装着したまま カメラを収納できるaosta トレジャーズ

CHECK

ケンコー・トキナーは600mm F4クラスの超望遠レンズを装着したままカメラを収納できるカメラバッグ「aosta トレジャーズ」を発売する。衝撃・摩擦に強い1680デニールナイロンをメイン材とし、底部にはEVAでクッション性を確保。天面にも2重のフラップを装備し、機材をしっかり保護する。

▶ケンコー・トキナー　aosta トレジャーズ

◎発売予定日：2015年10月27日 ◎予想実勢価格：31,000円前後

- ●外寸：250（W）×540（H）×280（D）mm　●重さ：約1.6kg
- ●内寸：195（W）×500（H）×220（D）mm

600mmF4クラスの超望遠レンズをカメラに付けたまま入れられる

参考URL **ケンコー・トキナー http://www.kenko-tokina.co.jp/**

ベルボンのハイエンドカーボン三脚に 石突を交換できる後継モデル

CHECK

ベルボンはハイエンド向け三脚「Geo Carmagne M」シリーズを刷新。新たに「Geo Carmagne M Ⅱ」として発売した。カーボンパイプとマグネシウムボディによる軽量・高剛性はそのままに、シーンに応じてゴム、スパイク、可変石突に交換できる。ここでは、Geo Carmagne N635M Ⅱを紹介する。

▶ベルボン　Geo Carmagne N635M Ⅱ

◎発売日：2015年9月11日
◎実勢価格：60,000円前後

- ●全高：1,870mm
- ●エレベータースライド：424mm
- ●縮長：686mm
- ●脚径：28mm
- ●段数：3段
- ●推奨搭載重量：4kg
- ●重さ：2,300g

石突を交換できる新機構

別売のスパイク石突、可変石突に交換できるので、使用するフィールドを問わない

参考URL **ベルボン　http://www.velbon.com/jp/**

編集部 耳より情報

デジカメ関連の新情報はこのほかにもまだまだ紹介しきれないほど発表されている。
ここではその中から、特に耳よりな情報をピックアップしてお届けしよう。

キヤノンのさまざまな製品が対象となる All Canonプラチナ・キャンペーン

●キャンペーン期間：2015年10月10日〜2016年1月12日

キヤノンは各製品を購入し応募することで、抽選で300名に豪華プレゼントが当選するキャンペーンを開始した。EOSシリーズ、EFレンズ、PowerShotシリーズ、IXYシリーズ、PIXUSシリーズなどの購入金額が税込4,000円以上の製品が対象だ。目玉プレゼントは国内有数の絶景地のホテルペア宿泊券。また、各製品ごとのキャッシュバックやプレゼントキャンペーンも行われるので、キヤノン製品の購入を検討しているなら絶対に見逃せないキャンペーンとなる。対象製品や応募の詳細は下記URLを参照してほしい。

▲All Canon プラチナ・キャンペーンのロゴ

参考URL **All Canon プラチナ・キャンペーン**
http://cweb.canon.jp/platinum/

創立100周年を記念して品川に ニコンミュージアムがオープン

●オープン日：2015年10月17日

ニコンは創立100周年を記念して、同社の事業の歴史、製品、技術を一堂に展示した施設「ニコンミュージアム」をオープンした。展示スペースは約580平米。ニコンカメラの初号機「ニコンI型」から最新機まで約450点の歴代カメラや、顕微鏡、測定機、縮小投影型露光装置「NSR-1505G2A」など貴重な製品も展示される。館内ショップでは、お馴染みニコンようかんをはじめとするさまざまなアイテムも用意される。

▲ニコンミュージアム内部イメージ

参考URL **ニコンミュージアム**
http://www.nikon.co.jp/profile/museum/

OM-D E-M1とE-M5 Mark Ⅱに 新ファームウェアが配布予定

●公開予定日：2015年11月下旬

オリンパスは、OM-D E-M1とOM-D E-M5 Mark Ⅱの機能拡張ファームウェアを11月下旬に公開する。今回のアップデートではフォーカスブラケットなど最新モデルのOM-D E-M10 Mark Ⅱに搭載された機能の一部を追加するもの。合わせてE-M1には「深度合成」、E-M5 Mark Ⅱには動画撮影時にピクチャーモード「Flat」の追加もおこなう。同時期にOLYMPUS Captureと一部レンズのファームウェアもアップデートされる予定だ。

◀OM-D E-M1

▶OM-D E-M5 Mark Ⅱ

参考URL **オリンパス　http://olympus-imaging.jp/**

販売一時休止中のOM-D E-M10 Mark Ⅱ 販売再開時期と購入者への無償修理を決定

●販売再開時期：2015年11月中

カメラにプラスチックマウントの交換レンズを取り付けた際に、ロックが外れやすいものがあったため販売を一時休止していたOM-D E-M10 Mark Ⅱだが、11月中の販売再開を発表した。レンズロック部のバラツキによりレンズがしっかり固定できないことが原因だったため、部品の加工方法の見直したとのこと。すでに購入されたE-M10 Mark Ⅱに対しては、10月下旬から無償での修理を予定している。

▲OM-D E-M10 Mark Ⅱ

参考URL **オリンパス　http://olympus-imaging.jp/**

GRの10周年記念イベントが ラフォーレミュージアム原宿にて開催

●イベント開催日：2015年10月24日

リコーイメージングから発売されたハイエンドコンパクトデジタルカメラGRシリーズが今年で誕生から10周年を迎える。この節目に、ラフォーレミュージアム原宿にてイベントが開催される。会場では、写真家によるトークショーやワークショップが開催されるほか、オリジナルグッズの販売や、10周年限定ファームウェアの配布なども行われる。イベントの詳細は下記URLをチェックしてほしい。

▲GR 10th Anniversary "10th GReeting"のロゴ

参考URL **GR スペシャルサイト　http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/gr_special/**

シグマ dp2 Quattroのdp3 Quattroに AF精度を向上させる新ファームウェア

●公開日：2015年9月18日

シグマはdp2 Quattroおよびdp3 Quattro用ファームウェアの新バージョンを発表。ダウンロードサービスを開始した。本バージョンでは、AF合焦精度を向上させるとともに、AF補助光発光時の不具合を修正している。また、dp3ではMF時のフォーカスリング制御を改善して、ピントを調整しやすくしたとのこと。ファームウェアのアップデート後はRAW現像ソフトSIGMA Photo ProもVer.6.3.0に更新する必要がある。

▼シグマ dp2 Quattro

▶シグマ dp3 Quattro

参考URL **シグマ　https://www.sigma-photo.co.jp/**

第11回名取洋之助写真賞の受賞者が決定! 受賞作品の写真展も開催予定

公益社団法人「日本写真家協会」が、ドキュメンタリー分野で活躍している35歳までの写真家を対象として開催する2015年第11回名取洋之助写真賞の選考が終了した。プロから学生までの応募作品の中から選ばれたのは鳥飼祥恵氏がアンプティサッカーに打ち込む少年の姿と彼を支える人たちを撮影した作品「amputee boy -けんちゃん-」だ。奨励賞として増田貴大氏の「終わりの気配」も選ばれている。受賞作品展は富士フイルムフォトサロンで開催。東京では2016年1月29日〜2月4日、大阪では2月19日〜25日予定。

▲受賞作
「amputee boy ーけんちゃんー」
鳥飼祥恵さん

参考URL **JPS 名取洋之助賞　http://www.jps.gr.jp/natori/**

マップカメラフォトコンテスト 2015夏「ナツモノ」結果発表

マップカメラが今夏開催した「マップカメラフォトコンテスト2015夏」の入賞作品が決定した。「ナツモノ」をテーマとした本コンテストには1,544点の作品が応募された。この中からハービー・山口氏とマップカメラスタッフが大賞として選出したのは、ひがしさんの「大人の夏休み」。夕景の中、水分補給する男性のシルエットで躍動感を表現した印象深い作品だ。その他、マップカメラ賞として2作品、入賞作品10点が選出された。いずれの作品も下記URLで閲覧できる。

▲大賞受賞作
「大人の夏休み」ひがしさん

参考URL **マップカメラフォトコンテスト　https://www.mapcamera.com/html/20150711_21th/natsumono/results.html**

今売れているカメラや交換レンズはこれだ！

売れ筋カメラ・レンズ通信

今人気のカメラやレンズは何だろう? 毎月ヨドバシカメラとフジヤカメラに突撃取材を敢行! 気になる売れ筋情報をランキング形式で紹介する。現在人気の製品がひとめで分かるので、カメラやレンズを購入する際の参考にしていただきたい。

文●編集部

ヨドバシカメラ

取材協力：新宿西口本店 カメラ総合館 東京都西新宿1-16-13桑原ビル1F
担当：阿部淳一さん

新製品 カメラランキング

α7R Ⅱが2連覇! 高価格ながら確かなスペックが人気

順位	動向	製品	価格
1	STAY	ソニー α7R Ⅱ	450,840円
2	UP	ニコン D750 24-120 VR レンズキット	307,800円
3	UP	ニコン D5500 ダブルズームキット	118,250円
4	UP	キヤノン EOS Kiss X8i ダブルズームキット	109,770円
5	UP	ニコン D810	348,300円
6	UP	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ	327,240円
7	DOWN	キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ	183,380円
8	DOWN	キヤノン EOS Kiss X7 ダブルズームキット	60,880円
9	UP	ソニー α7 Ⅱ	187,930円
10	DOWN	キヤノン EOS 70D EF-S18-135 IS STM レンズキット	162,540円

先月に続きα7R Ⅱが首位をキープ。「高価格ですがよく売れています。高い解像力は圧倒的で、市販の大容量バッテリーでUSB給電しながら撮影できる点も良く、5年後を見据えた未来のカメラだと思います」。2位以降は僅差の勝負となったが、注目なのはダブルズームキットが多いこと。「運動会需要で手頃なキットがよく売れましたね」。5位のD810は、40万円超えの製品と比べた相対的な割安感があるようだ。「7位のEOS 7D Mark Ⅱはメーカーのキャッシュバックの追い込み需要で、レンズやグリップなどとセットで買われています」

新製品 レンズランキング

超望遠ズームの真打ちが予想通りの新登場第1位!

順位	動向	製品	価格
1	NEW	ニコン AF-S NIKKOR 200-500mm f/5.6E ED VR	170,100円
2	UP	キヤノン EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM	291,600円
3	DOWN	キヤノン EF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USM	253,800円
4	DOWN	キヤノン EF24-70mm F2.8L Ⅱ USM	215,520円
5	NEW	キヤノン EF35mm F1.4L Ⅱ USM	268,680円

今年は超望遠レンズの大ブレイクの年だ。「首位の200-500mmは象徴的な製品ですね。価格以上の高い性能が評価され、予約待ちの状態が続いています」。2位の100-400mmは依然抜群の安定感を誇る。「今年のベストオブレンズではないでしょうか。入荷すればすぐに売れる人気レンズです」。以下、大三元レンズが安定した売れ行きを示す一方、5位に35mm F1.4のⅡ型が初登場。「BRレンズに注目ですね。長らく待っていた方が発売と同時に買われた結果だと思います」

ヨドバシカメラ 今月の注目はこれ!

超クリアなOtusの画質にどこまで近づけるかが楽しみ

コシナ ZEISS Milvus 1.4/50
販売価格 未定

コシナ ZEISS Milvusシリーズが6本同時発売され、Otusを彷彿とさせる未来指向のデザインが採用されました。特に50mmと85mmは、レンズ構成が従来のプラナーからディスタゴンにリニューアルされたことで、画質面でも注目です。Otusのクリアな描写にどこまで近づけるのか、とても楽しみです

焦点距離：50mm ／絞り値：F2～22 ／レンズ構成：6群8枚 ／最短撮影距離：24cm ／最大撮影倍率：約0.5倍 ／フィルター径：φ67mm ／大きさ：約φ80.8×66.7mm（ZE）、約φ80.8×64.2mm（ZF.2）／重さ：640g（ZE）、570g（ZF.2）

ヨドバシカメラ
新宿西口本店
カメラ専門チーム
マーケットイノベーター
阿部淳一さん

フジヤカメラ

取材協力：フジヤカメラ 東京都中野区中野5-61-1
担当：横田善男さん

中古製品 カメラランキング

安定のEOS 5D、EOS 7Dを強力な人気モデルが追随

順位	動向	製品	価格
1	STAY	キヤノン EOS 7D	62,640円
2	STAY	ニコン D5300	39,960円
3	STAY	キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ	120,960円
4	UP	キヤノン EOS 5D	48,600円
5	UP	富士フイルム X-T1	97,200円
6	UP	ニコン D750	164,160円
7	UP	パナソニック LUMIX GX7	36,720円
8	UP	キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ	240,840円
9	UP	キヤノン EOS M3	35,640円
10	DOWN	ニコン D700	98,280円

※フジヤカメラはボディのみの販売です

EOS 7Dが6カ月連続首位を獲得。相変わらず好調で今月もダントツの1位だ。「EOS 7D Mark Ⅱの値下がりやキャッシュバックで、買い替えが進んでいますね」。2位のD5300も先月に引き続きランクイン。流通在庫が一時的に多くなったためと思われる。そしてEOS 5Dシリーズは全種類ランクイン。シリーズの人気を裏付けている。「フルサイズへの買い替えが進む中、予算と相談の上、EOS 5Dシリーズのいずれかを選んでいるようです」。D750のランクインも見逃せない。「市場在庫が少しずつ増えて、カメラとしての完成度の高さから今後も人気が続きそうです」

中古製品 レンズランキング

ニコン 24-70mmが上昇 お買い得な大三元に

順位	動向	製品	価格
1	UP	キヤノン EF50mm F1.8 Ⅱ	7,560円
2	DOWN	キヤノン EF17-40mm F4L USM	56,160円
3	UP	ニコン AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED	124,200円
4	UP	キヤノン EF24-105mm F4L IS USM	63,720円
5	DOWN	キヤノン EF50mm F1.4 USM	28,080円

EF50mm F1.8 Ⅱが初の首位。「生産完了で新品の流通在庫が減ってきたため、中古購入に流れてきていると思われます」。2位のEF17-40mm F4L USMはEF16-35mm F4L IS USMとの買い替えが進んでいる印象だ。AF-S 24-70mm f/2.8G EDもランクアップ。「新型への買い替えで、中古の在庫も増えてきています。新型の約半額ですから、VRが必要ではない方にはお買い得です」。そしてEF24-105mm F4L IS USMが返り咲きの4位。相変わらず標準Lズームの定番として人気が高い

フジヤカメラ 今月の注目はこれ!

動画メインのユーザーにオススメの正常進化モデル

ソニー α7S Ⅱ
販売価格（新品）
407,160円

α7Sの正常進化版。有効画素数やイメージセンサーなどの仕様は変わりませんが、AFや操作性、4Kのメディア記録など、α7Sの不満点がしっかり改良されています。45万円という価格がネックですが、動画メインのユーザーにはすばらしいカメラになると思います

イメージセンサー：約1,220万画素フルサイズCMOS ／5軸ボディ内手ブレ補正機構 ／ISO感度：100～102400（拡張でISO 50～409600に対応）／AF：169点コントラスト検出方式 ／AF検出輝度範囲：EV－4～20 ／ファインダー：0.5型約236万ドット ／液晶モニター：3型TFT約123万ドット ／動画：4K記録対応 ／Wi-Fi：搭載 ／大きさ（幅×高さ×奥行き）：約126.9×95.7×60.3mm ／重さ：約627g（記録メディア、バッテリーを含む）

フジヤカメラ
営業部
商品企画室 課長
横田善男さん

掲載している販売価格は9月30日現在の価格（税込）です。店頭販売価格は変動するため、掲載価格と実際の販売価格は違う場合があります。フジヤカメラの中古カメラ・レンズはすべてA（最高）ランクの販売価格です。

気になるアイテムをチェック!

NEWPRODUCT REPORT

カメラやレンズ以外にも撮影時に役立つ製品はたくさんある。この連載では、街角写真家の佐々木啓太氏が気になる製品をピックアップ。実際にフィールドで使用した感想をレポートしていく。

第29回

キヤノン

ミニプロジェクター C-5

オススメポイント
1 胸ポケットに入る**小型・軽量ボディ**
2 電源不要の**バッテリー駆動**を実現
3 **HDMI/MHLケーブル**で簡単接続

同梱品は上段左から❶本体、❷三脚、❸取扱説明書。下段左から❹ACアダプター、❺変換コネクタ(5to11pin)、❻HDMIケーブル、❼MHLケーブル

端子類は投写レンズの反対側に集中している。左から❶オーディオ出力端子/ヘッドホン接続端子、❷HDMI/MHL端子、❸初期化ボタン、❹電源入力端子、❺充電表示灯

投影した映像を叩くほど興奮していた。大画面の液晶テレビやプリントもいいが、映像に向かって何をしても許されるのは子どもにとっては最高の喜びだろう

スタジオ内の壁面に投影。壁までは約1mでA4程度の大きさになる。コントラストが高く鮮やかな印象だった

ピント調整は本体側面のレバーで行う。本体の電源を入れたときに出る「mini projector C-5」の文字を使ってピントを合わせるといい

Data

(ミニプロジェクター C-5) 実勢価格:29,000円前後／解像度:640×480(VGA)／光源:(R/G/B) LED ／インチ数:10〜90インチ／バッテリー容量:12.58Wh(7.4V、1,700mAh)／大きさ:71(W)×124(D)×20(H) mm ／重さ:169g

問い合わせ先

キヤノン
お客様相談センター
☎050-555-90071

Profile

佐々木啓太

(ささきけいた):1969年兵庫県生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、貸スタジオ勤務、写真家のアシスタント生活を経て独立。「写真はモノクロに限る」が口癖で、写真学校卒業以来の暗室オタクも、デジタルでカラーにシフト。フィルムでも、デジタルでも、写真で楽しく遊べる世界を目指す。「街角写真家」として活動中。http://www.facebook.com/KeitaPage2

今回紹介するのは、キヤノンから発売された「ミニプロジェクター C-5(以下、C-5)」。プロジェクターといえば会議やプレゼン会場で使うというイメージが強く、家庭ではホームシアターなどを楽しむ趣味性の高い製品というイメージがある。確かに、最近は小型化をうたう製品も増えているが、大型液晶テレビほどは普及していない。個人的には設置などに手間がかかる印象があった。しかし、今回のC-5は、そんなイメージを払拭するほどの超小型サイズ。しかも簡単に映像を楽しめる製品になっている。

サイズは4.7インチのスマートフォンを2台重ねた程度の大きさだ。バッテリーは内蔵式(充電・約3時間／駆動時間・約2.5時間)で、本体の電源スイッチを入れて、HDMI/MHLに対応した機器に接続すれば、どこでも映像を鑑賞できる。スピーカー(モノラル)も内蔵式で、オーディオ出力(3.5mmジャック)にも対応している。暗い場所のほうが映像がより鮮やかになるが、明るい場所でも十分に楽しめるLED光源が使われている。アスペクト比は4:3、解像度は640×480(VGA)で、約2m離れると62インチのサイズで楽しめる。焦点調整は手動で行い、傾き補正などの機能は搭載していない。C-5を固定するときは、本体底面にある三脚取り付け穴に付属の小型三脚を装着する。傾きが気になる場合は投影する面とC-5を平行にする必要があるが、電源ケーブルも必要ないため、イスやテーブルの上に置くだけですぐに使える。少しの時間なら手に持って使うのもありだと感じた。

実際、我が家でも撮影前のテストで iPod touch(別途アダプターが必要)と接続して、ふすまに写真や動画を投影すると、子どもたちがすぐに反応していた。ふすまに映し出される自分たちの映像を叩いたりしながら、まるで画面の中の自分たちと一緒に遊んでいるようだった。そのまま天井に投影すると寝転がって鑑賞。この鑑賞スタイルが最も気に入ったようで、毎日のようにリクエストされた。超小型ながら明るさも十分にあるので、気軽に見られる新しい視聴アイテムだと感じた。なお、C-5は家電量販店やアマゾンなどで購入できる。

写真・文●佐々木啓太

温泉地の若女将に聞いた絶景ポイントを巡る

ゆきぴゅ〜の めざせ! 温泉カメラマン

第5回 大町温泉郷（長野県）

温泉地に出向き、その地の隠れた撮影スポットや、絶景ポイントを撮る人を『温泉カメラマン』と呼ぶ（らしい）。そんな温泉カメラマンを目指してゆきぴゅーが毎回各地の温泉地に出没します!

絶景☆一面真っ白なそばの花を撮る!の巻

※大町スキー場は2008年に80年の歴史に幕を下ろし閉鎖しました

オススメ食事処

『農園カフェ ラビット』

サラダ・ドリンク付きの日替りランチ（1,200円）を注文。ジビエ料理がウリということでこの日は鹿カレー! そばの花を鑑賞した観光客が続々と来店していました。

今回ゆきぴゅーがお世話になったお宿

北アルプス山麓を背景に十数軒立ち並ぶ大町温泉郷の宿の中でもひときわ大きく品格のある宿。立山黒部アルペンルートはもちろん、安曇野や善光寺方面への観光拠点にも最適です

緑翠亭 景水

長野県大町市平2884-13
電話0261-22-5501
http://www.keisui.jp/

若女将
碓井道乃さん

松林に囲まれたせせらぎの宿です

宿のココがウリ!

縁側に腰を下ろして楽しむ足湯

露天風呂を備えた庭園大浴場も素晴らしいのですが、私が感動したのは1階にある足湯『楽座の湯』。落ち着ける和モダンな雰囲気でなんとも贅沢な空間!

大町市のご当地グルメ

「黒部ダムカレー」は扇沢レストハウスで販売されてきた“アーチカレー”が元祖。モチーフはもちろん黒部ダム! ライスを“えん堤”に、ルーを“ダム湖”に見立てたカレー、市内約20店舗の加盟店で食べることができます

ぜひ立ち寄ってほしいおすすめのカフェ。周りに農園カフェラビットとココくらいしかないです

40mmマクロで可憐なそばの花のアップに挑戦。絞りを調整して背景の見え方を変えたりと悪戦苦闘

美麻珈琲

中山高原キャンプ場

雪解けのころに突如出現するらしい

幻の池

至新行

P

県道長野大町線

農園カフェラビットの庭にはヤギが3匹暮らしています。名前は定番のユキちゃん。癒やされます

ときおり日が差して、そばの白い花がより一層美しく見えた瞬間

この1本桜が咲く頃にまた行きたいな〜

一本桜

白樺の木がいい感じ〜

あれが鹿島槍ヶ岳かな?

懐しいなぁ〜

農園カフェラビット

31

P

菜の花のころまた来たいな

至大町市街(温泉郷)

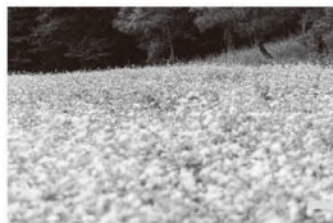
中山高原メモ

- 例年そばの花の見頃は8月末〜9月中旬。花の色がだんだん茶色っぽくなってくるので9月5日前後がベスト
- 晴れていれば北アルプスを背景に感動モノの風景が広がる
- NHK連続テレビ小説「おひさま」のロケ地。そば畑の向こうに雄大な山を望めるこの場所に監督さんが感動して決めたんだとか
- GW明けは菜の花が一面に咲いてこれまたキレイらしい
- 人工物がほとんど写り込まない素晴らしいロケーション
- 温泉カメラマンゆきぴゅーが自信をもってオススメする撮影スポット!

手前の花をぼかして前ボケに挑戦。白樺の木が良いアクセントになってくれます

翌日5時に起きて一か八か車を走らせました。朝もやがみるみるうちに取れていって念願の北アルプスが顔を出した瞬間

温泉カメラマン ミッション 5 『中山高原でそばの花』を撮ってみた!

ステップ1 横のラインを意識して撮る

群生しているそばの花の横のラインに気を使って撮っていたこの日。このカットは直線が微妙にゆがんでいてベストではない

ステップ2 斜めのラインが交差する構図

手前の斜めのラインと、背景にも逆向きのラインを持ってきてリズムを。ほんわかした雰囲気はいいんだけどイマイチ奥行き感が伝わらない

ステップ3 メリハリのある背景をチョイス

ステップ2と同じような構図で、次は濃い背景が来る場所を選んでみました。メリハリがついて"見渡す限り一面のそばの花"を表現できたかな。暗くなりすぎないようにこの日の露出は常にプラス気味で撮影していました

ニコン D5500／AF-S DX NIKKOR 55-300mm f/4.5-5.6G ED VR／240mm (360mm相当)／絞り優先AE(F5.3、1/125秒、+1.7EV)／ISO 100／WB：オート

期待して行った撮影場所が思っていたほどでもなかったときのショックったらありませんよね。今回はその逆! 正直ここまで素敵なところだとは思っていませんでした。一面に真っ白なそばの花、白樺の木、そしてダイナミックな北アルプスの山並み。これらを貸し切り状態で、幸せを感じながらシャッターを切っていたのでした。

県道31号線を1km北上したところにある「蕎麦の里」で有名な新行地区。ここの水車小屋前もオススメです

右脳を刺激される360度写真の奥深さを堪能

制限された画角で何を表現するかは写真の醍醐味の1つだが、そんな画角という空間概念を取っ払ってしまったカメラがRICOH THETAだ。前後に2つ搭載された魚眼レンズで、1度シャッターを切るだけで、360度周囲のすべてを写せる。

友人の結婚式に出席するため、THETAを持参し大阪に向かった。THETAが何より実用的に役立つのはパーティー会場。友人と一緒に記念撮影するにも、手を伸ばしてシャッターを切ればすべてが写る。誰かに撮影をお願いしたり、画角に収まらず見切れてしまったりといった心配は皆無だ。挙式では風船を飛ばして新郎新婦を祝福。空一面に舞う色とりどりの風船と、それを見上げる新郎新婦と出席者たち、そのすべてを1枚に写せた。

翌日は、奈良で鹿の撮影に挑戦。東大寺周辺の鹿は、苛烈な鹿せんべい争奪戦にさらされているせいか、THETAすら餌と勘違いして突撃してくるので、若草山の山頂に移動。山頂の鹿はのんきに草を食んでいて実に穏やかだ。THETAの使いこなしで意識したいのが被写体との距離感。魚眼レンズは強烈なパースがつくので、ちょっと離れると被写体が思いのほか小さく写る。奈良の街を一望できる開けた場所だったので、最初はTHETAを高く掲げて撮影してみたが、結果的に、鹿も街並みも小さく写り味気ない写真に。そこで、ミニ三脚にTHETAをすえて、そっと鹿の隣においてリモート撮影してみた。鹿と自分との間にほどよい遠近感がついて、今度は臨場感のある360度写真になった。

右脳を刺激される感覚でいろいろ試したくなるTHETAは、実に楽しいカメラだ。

編集部員が気になるアイテムを実写レポート!!

Editor's Choice

写真・文●
牧浦裕介（編集部）

舞い上がる風船の下 幸福感に包まれた空間

空を埋め尽くす色とりどりの風船、たくさんの友人・知人に祝福される新郎新婦。360度すべてが見どころで臨場感ある写真が撮れた。挙式の記念写真として本人たちにも喜んでもらえた

リコー

THETA

▶ THETA Sの詳細やスペックは104ページをチェック

THETA m15
スタンダードモデル
実勢価格
34,000円前後

THETA S
ハイスペックモデル
実勢価格
43,000円前後

今回持参したのはTHETA m15。このアイデアが詰まった製品で画質を語るのはナンセンスだが、撮影した写真はスマートフォンで見るのが基本スタイルなので、タッチパネルで容易に拡大縮小できるぶん、意外と画質が気になる。そこで注目なのが、センサーが大きくなり画質が大幅に向上したTHETA Sだ。この秋に買いたいものがまた1つ増えてしまった

大阪の名物看板に逆光を添えて

道頓堀のかに道楽本店の巨大看板の下で撮影。通りは差し込む逆光が印象的。2つの要素を丸ごと写せるのもTHETAの魅力だ。360度中に見どころが複数あると見て楽しい写真になる

ミニ三脚を使って鹿の隣でそっと撮影

鹿に逃げられないようにミニ三脚に取り付けたTHETAをそっと置いてリモート撮影。天を見上げるようなアングルで切り出して、鹿と自分だけの不思議な世界を演出。リモート撮影を使えば一気に撮れる世界が広がる

看板がそびえたつリトルプラネット表現

THETA写真で人気なのがリトルプラネットと呼ばれる写真。天空から見下ろすようなアングルにして切り出すと、小さな星のようになる。グリコ看板が有名な戎橋の真ん中で撮影して、さまざまな看板を立ち上げた

01 マンフロット
Street メッセンジャー

1名様

カーキとデニムが個性的!
スタイリッシュなカメラバッグ

外寸：約280×370×180mm
内寸：約260×360×160mm
重さ：約0.8kg

提供：マンフロット株式会社　http://www.manfrotto.jp/

▶ **製品の詳細はP.156をチェック!**

02 LPL
LEDライト モバイル VL-210M

1名様

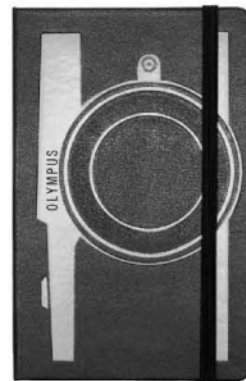
スマホ撮影で
気軽に使える明るい
超小型LEDライト

発光面：約18×33mm
色温度：約6,000K
照度：約600Lx/50cm
調光範囲：100〜35%
大きさ：約46×46×18mm
重さ：約20g

提供：株式会社LPL
http://www.lpl-web.co.jp/

▶ **製品の詳細は P.155をチェック!**

03 オリンパス
MOLESKINE カスタムエディション・ハード カバーノートブック

3名様

グローバルオープンフォトコンテストの
賞品になっているオリジナルノート

大きさ：94×144×16mm（実寸）

提供：オリンパス株式会社
http://olympus-imaging.jp/

※グローバルオープンフォトコンテストの応募期間は2015年11月20日（金）まで。プロ、アマ問わずご応募いただけます

04 ケンコー・トキナー
Cokin PURE EXCELLENCE　UV MC（φ77mm）

高精度な真鍮枠を使用した
紫外線カットフィルター

フィルター径：φ77mm

提供：株式会社ケンコー・トキナー
http://www.kenko-tokina.co.jp/

3名様

05 サンディスク
クルーザーフィット USBフラッシュメモリー 16GB

超小型でじゃまにならない
USBフラッシュドライブ

大きさ：約21.6（W）×14.7（H）×6.9（D） mm（キャップ付き）／重さ：約2.5g（キャップ付き）／システム条件：Windows 7/8/10、Mac OS 10.5以降／互換性：USB 2.0／同梱ソフトウェア：SanDisk SecureAccess Software／製品保証：5年間

提供：サンディスク株式会社　http://www.sandisk.co.jp/

06 レキサー
プロフェッショナル 1066 倍速CFカード（16GB）

最大1,066倍速（160MB/秒）の
読み込み速度で高品質な写真や動画を
素早く記録

読み込み速度：最大1,066倍速（160MB/秒） UDMA 7対応
特典：データ復旧ソフト「Image Rescue」付属

提供：マイクロン ジャパン株式会社　http://jp.lexar.com/

応募要項

応募締切

2015年11月19日（木）

雑誌公正取引競争規約の定めにより、この懸賞に当選された方はこの号のほかの懸賞に入選できない場合があります。

デジタルカメラマガジンでは下記の内容でWebアンケートを実施しています。そちらにお答えいただいた方の中からプレゼント抽選を行います。当選者はデジタルカメラマガジン2016年1月号にて発表いたします。

応募の流れ ※ご応募には「CLUB IMPRESS」への登録が必要です

❶GANREFにアクセス▶▶▶http://ganref.jp/dcm/
❷「読者プレゼント申込」をクリック
❸「プレゼント応募ページへ」をクリック
❹Webアンケートに回答

アンケート内容　ご希望のプレゼント／住所／年齢／都道府県／役職／業種／職種／メインで使っているデジタルカメラの機種名／お使いのフォトレタッチソフトや画像管理ソフト／購入したいカメラ用品／お持ちのパソコンのOS／お持ちのプリンターのメーカー名と機種名／カメラ歴／メールによるお知らせの可否／本誌の記事内容について（［表紙］11月号表紙／［巻頭特別企画］写真家7人のSEVEN SENSES／［巻頭特別企画］キヤノン EOS M10／［巻頭特別企画］タムロン 新SPシリーズ開発者インタビュー／［巻頭特別企画］ソニー α7S II／［特集1］早朝と深夜に撮る写真／［SPECIAL GALLERY］ROAD TO ALASKA／［特集2］ワンランク上の写真表現／［連載］N Rail／［連載］風と木と水が教えてくれたこと／［連載］プロフェッショナルのためのプログラムAUTO／［NEW PRODUCT REVIEW］キヤノン PowerShot G9X／［NEW PRODUCT REVIEW］キヤノン PowerShot G5X／［NEW PRODUCT REVIEW］コシナ ZEISS Milvus／［NEW PRODUCT REVIEW］Zeta Super Slim 液晶保護ガラスの衝撃／［NEW PRODUCT REVIEW］リコーイメージング RICOH THETA S／［NEW PRODUCT REVIEW］エプソン EP-10VA／［連載］四季の風景レッスン／［連載］絶景の星空風景／［連載］ポートレートコラボレーション／［連載］Photoshopレタッチ塾／［新連載］写真で伝えたいこと Season03／［SPECIAL GALLERY］遠い記憶。―memories―／［F1日本GP SPECIAL］Formula 1&F1日本GP SPECIALレポート／フォトコンテスト 11月号選考／「残したいもの」フォトコンテスト／［連載］斎藤先生に聞く 写真のいろは／［連載］写真家に聞きました　最近買って良かったモノ／［連載］伊達淳一の技術のフカボリ!／［連載］ふくだくん通信／［デジカメ新製品情報］デジカメNEWS調査隊／［デジカメ新製品情報］最新売れ筋カメラ・レンズ通信／［デジカメ新製品情報］New Product Report（佐々木啓太）／［連載］ゆきぴゅーのめざせ温泉カメラマン／［連載］Editor's Choice／読者プレゼント／集まれ! DCM写真部／写真展最新情報／［連載］江戸ゆるり坂道散歩／奥付／［特集3］絶対に失敗しない 1：1 ましかく写真の撮り方／［連載］私の写真を変えたLENS／［連載］石井寛子の今月のお気に入り!／［連載］遠い光、―二万年前に夢見た東京―／［連載］Overview Exhibition of Photography／編集後記）／今月号の誌面でいちばんよかった写真／現在気になるデジタルカメラの機種名／これから欲しいレンズの製品名／好きな写真家／好きな被写体／撮影した写真のおもな使用法／本誌を知った理由／今月号を購入した理由／本誌購入の頻度／本誌へのご意見、ご感想

2015年3月選考～2016年2月選考

2015年度 フォトコンテスト 応募要項

2015年度のデジタルカメラマガジンフォトコンテストでは、3つの常設部門と、特集・季節に連動した企画部門を開催します。

応募期間

常設部門

デジタルフォト部門

2016年1月号選考　**2015年10月11日～2015年11月10日**
2016年2月号選考　**2015年11月11日～2015年12月10日**

組写真部門

2016年1月号選考　**2015年9月11日～2015年11月10日**
2016年3月号選考　**2015年11月11日～2016年1月10日**

プリント部門

2016年2月号選考　**2015年10月11日～2015年12月10日**

企画部門

特集連動「早朝と深夜に撮る写真フォトコンテスト」

2016年2月号選考　**2015年10月20日～2015年11月20日**

個性派写真展（お題：「シルエット」）

2016年1月号選考　**2015年10月20日～2015年11月10日**

デジタルフォト部門

選考　毎号掲載

選者：ハービー・山口氏

デジタルカメラで撮影された画像データ。カラー、モノクロは問いません。

組写真部門

選考　奇数月掲載

選者：小林紀晴氏

デジタルカメラで撮影された画像データ。複数枚の組写真。カラー、モノクロは問いません。

プリント部門

選考　偶数月掲載

選者：岡嶋和幸氏

デジタルカメラで撮影された、A3ノビサイズまでのプリント作品。カラー、モノクロ、出力機、用紙は問いません。

※GANREF応募ページ掲載の「応募票」をプリント作品の裏面に貼り付けて郵送してください
※作品は1枚ずつ透明袋（スリーブ）に入れてください

賞金・賞品について

◎常設部門（デジタルフォト部門、組写真部門、プリント部門）、◎特集連動

- 優秀賞：3万円 ● 準優秀賞：1万円
- 入選：Amazonギフト券5千円分 ● 佳作：Amazonギフト券1千円分

◎個性派写真展 ● 採用作品：Amazonギフト券1千円分

※入賞者にはGANREF経由で振込先・送信先を確認するメールをお送りいたします。
3カ月間ご連絡をいただけない場合、賞金・賞品をお渡しできない場合があります
※賞金の振込および送信は掲載号の発売日から約40日以内をめどに処理しております

副賞について

毎月、下記の部門の優秀賞受賞者にはメーカー協賛のもと景品を贈呈いたします

◎デジタルフォト部門

エクストリーム CFカード 16GB

エクストリーム プロ SDHCカード 16GB

提供：サンディスク株式会社

※使用機種によってどちらかを贈呈

◎組写真部門

ラストライト トライグリップ LL LR3628

提供：マンフロット株式会社

※サンライトとソフトシルバーの両面仕様

◎プリント部門

My Passport Ultra Metal Edition

提供：ウエスタンデジタル ジャパン株式会社

※シルバー 1TBモデル

常設部門のポイント制および年間賞

◎デジタルフォト部門／組写真部門／プリント部門

フォトコンポイントは部門ごとに集計され、各入賞者（同一の投稿ネームに限る）に加算されます（ポイント数は優秀賞＝4、準優秀賞＝3、入選＝2、佳作＝1）。各部門の年間でもっともフォトコンポイントの多い方を、年間最優秀賞として2016年3月号で発表。その後、特別ギャラリーにて作品を掲載いたします。企画部門のポイントはありません。

応募規定（共通）

- デジタルフォト部門はデジタルカメラ（スマートフォンなどのモバイル機器を含む）で撮影した写真に限ります。組写真部門とプリント部門は銀塩カメラによる作品も投稿可能です。
- 応募作品は応募者本人が撮影し、著作権を持っている写真に限ります。
- 一般に公募されている雑誌、Web、企業や団体主催のコンテストとの二重投稿や類似作品の応募はご遠慮ください。他コンテストでの落選が確定した作品、応募者本人のWebまたはSNSのMyページなどで公表した作品の投稿は可能です。
- 同一作品は1部門のみへの投稿に限ります。また、同じ号の同じ部門での入賞はひとり1賞までになります。
- 審査は選者と編集部が行います。
- 応募点数は、GANREFのシステム上の制限に沿います。
- **優秀賞の場合、誌面に大きく掲載されることになります。その際、リサイズ前の大きなデータの発送を編集部からメールにてお願いすることがあります。作品のオリジナルデータはなるべく保存しておいてください。**
- プリント部門において、プリント作品の取り扱いには十分注意しますが、万一の事故（紛失、破損など）について主催者はいっさい責任を負いません。
- プリント部門において応募された**プリント作品の返却は行っておりません。**
- **応募作品の著作権は、応募者（撮影者）に帰属します。**
- 被写体の肖像権、著作権などには十分に注意してください。応募者の責任ですべての問題を解決したうえで応募してください。
- **入賞作品について、応募者は、当社のデジタルカメラマガジン記事等出版物、ホームページ、広告、宣伝などで使用する著作権法上の権利について、国内外を問わず、非独占的に使用を当社に許諾するものとし、著作者人格権を行使しないものとします。**
- 応募規定に違反した場合は入賞を取り消すことがあります。
- 審査結果についての問い合わせにはお答えできません。
- 応募された作品は添削の対象となる場合があります。
- 掲載する際は、名前、都道府県名などの情報を掲載します。
- 誌面掲載時の名前はGANREFの表示名とは別に設定できます。ただし、年度内で投稿ネームを変更した場合は合算されません。
- 投稿ネームは、商標や特定の個人の権利を侵害しないものにしてください。
- 人（実在の人物であるか否かを問わず、マンガ、アニメ等のキャラクターを含む）の裸体（性器・アンダーヘア・女性のバストトップなど）を撮影、描写した写真や、暴力的なシーンを撮影、描写した写真は応募できません。
- **本応募要項は、デジタルカメラマガジン誌上で行われた過去のフォトコンテストすべてに適用いたします。不明な点は、GANREF（http://ganref.jp/）の「お問い合わせ」フォームからお問い合わせください。**

GANREF

応募はすべて本誌連動Webサイト「GANREF」から行います

http://ganref.jp/

応募規定違反の作品は審査の対象になりません。応募前にしっかり確認をして、どしどしご応募ください。

作者氏名は本名での記載を推奨します

誌面に掲載する作者の氏名は本名を推奨します。GANREFにニックネームで登録されている方は、［Myページ］→［設定］→［プロフィールの編集］の［誌面掲載時の名前］に掲載時の氏名をご指定ください。ただし本名の記載は強制ではなく、ニックネームでの掲載や本名との併記も可能です。

プリント郵送について

プリント部門の作品の郵送締め切りは偶数月の10日（必着）となります。その日が土日祝日の場合は、その前に編集部に到着するように郵送してください。GANREF上で応募が完了していても、プリント作品が到着しない場合や、プリント作品に応募票がない場合は選考外となりますのでご注意ください。また、GANREF上での応募手続きがないまま応募票の添付されたプリント作品が郵送された場合も選考対象になりますが、GANREFポイントの付与は行われません。応募票の入手方法や郵送先などは次ページをご覧ください。

フォトコンテスト 2015年度累計ポイント

先月号から新年度が開始された、2015年度のデジタルカメラマガジン フォトコンテスト。ここでは各部門の累計ポイントを発表します。左ページの応募要項を参照いただき、自信作をぜひご応募ください。

2015年度フォトコンテスト累計ポイント結果（2015年11月号）

組写真部門
（11月号現在、敬称略）

順位	氏名	都道府県	今月のポイント	トータルポイント
1	高瀬広之<ina-bou>	千葉県	3	7
2	石川賢一	高知県	2	6
2	石井大地	福岡県	1	6
4	中本則昭	兵庫県	4	5
4	求磨川貞喜	岡山県		5
6	清水茂行	千葉県		4
6	円山 貫	神奈川県		4
6	KOSHIN	滋賀県		4
6	デジタルハット	滋賀県		4
6	榎木圭介	大阪府		4
11	池田孝保	滋賀県		3
11	岸 一也	岡山県	1	3
13	本田勝彦	北海道	2	2
13	芝田和彦	静岡県		2
13	角田恒雄<NEONEO>	滋賀県		2
13	田村祐二	滋賀県		2
13	corazon-neo	鳥取県		2
18	岩崎 孝	宮城県		1
18	小澤秀一	秋田県		1
18	加藤 毅	千葉県		1
18	野村 謙	千葉県	1	1
18	村松克則	静岡県		1
18	Girard Inoue	愛知県	1	1
18	KEISUKE IKEDA	愛知県		1
18	壇上純一	愛知県		1
18	prego	兵庫県		1
18	才谷梅太郎<umetaro>	兵庫県		1
18	船橋弘範	岡山県	1	1
18	奈賀寛	徳島県		1
18	田上 徹	熊本県		1
18	下地寅彦	沖縄県		1
18	Nobuyuki Matsumoto	アメリカ		1

プリント部門
（11月号現在、敬称略）

順位	氏名	都道府県	今月のポイント	トータルポイント
1	石川人史	愛知県		11
2	井上幾雄	大分県		10
3	冨永貴則<takabo>	兵庫県		7
4	円山 貫	神奈川県		6
4	Kiyosei Fujikawa	大阪府		6
6	パブ	神奈川県		5
6	田村祐二	滋賀県		5
8	本田勝彦	北海道		4
8	Kuyt	東京都		4
8	中山智月	神奈川県		4
8	角田恒雄<NEONEO>	滋賀県		4
12	林 祐也	北海道		3
12	橋爪 通	神奈川県		3
14	清水茂行	千葉県		2
14	TATSURO	東京都		2
14	ウッチーパパ	東京都		2
14	junichi	愛知県		2
14	角田和子<wakowako>	滋賀県		2
14	岩下昌平	鹿児島県		2
20	夏目冬彦	北海道		1
20	高橋清文	宮城県		1
20	大村俊一	東京都		1
20	Blue sky	東京都		1
20	根岸直人	東京都		1
20	楠見裕治	神奈川県		1
20	高橋邦夫	神奈川県		1
20	山田益夫	神奈川県		1
20	本田節子	神奈川県		1
20	今井保一<iman>	新潟県		1
20	morizo	長野県		1
20	名倉吉康	静岡県		1
20	草島敬子	大阪府		1
20	榎木圭介	大阪府		1
20	求磨川貞喜	岡山県		1

デジタルフォト部門
（11月号現在、敬称略）

順位	氏名	都道府県	今月のポイント	トータルポイント
1	駒村優宇	千葉県		7
1	竹原敬修	長野県	2	7
1	榔田雄一郎	インド	1	7
4	曳地正刀	福島県		6
4	渡辺英也	千葉県	1	6
6	藤田浩史	千葉県		5
6	小向朋恵	東京都	2	5
6	富久浩二	東京都	4	5
6	KOSHIN	滋賀県		5
6	榎木圭介	大阪府		5
6	西川　浩	大阪府	2	5
6	ムラカミ イズミ	広島県	1	5
6	奈賀寛	徳島県		5
6	野口重吉	福岡県		5
15	青山秀行	北海道		4
15	momo-taro	埼玉県	1	4
15	re:snow	東京都		4
15	合田 峻	東京都		4
15	ijneK	神奈川県		4
15	かぶちん	神奈川県		4
15	山内千明<ビリィ>	神奈川県		4
15	石崎卓也	愛知県		4
15	大田政行	愛知県		4
15	堀 邦夫	愛知県		4
15	steelglass	兵庫県		4
15	野中一功	山口県		4
15	井上幾雄	大分県		4
15	ryu@hiro	沖縄県		4
15	下地寅彦	沖縄県		4
30	松本共栄<T.Y.R>	岩手県		3
30	本田厚子	栃木県	1	3
30	山本和世<Kay>	千葉県		3
30	03	東京都	3	3
30	神坐 浩	東京都		3
30	山田悦子	東京都		3
30	INU+	神奈川県		3
30	碧	神奈川県		3
30	鈴木公太	神奈川県	2	3
30	念張浩之	静岡県		3
30	tanpopo	愛知県	3	3
30	いちさなぎ	京都府		3
30	平康 厚	大阪府		3
30	梅津郁朗	兵庫県		3
30	冨永貴則<takabo>	兵庫県		3
30	マーキー	兵庫県		3
30	求磨川貞喜	岡山県		3
30	石村英治	愛媛県		3
30	池田耕一郎<IKEIKECYAN>	福岡県	2	3
30	岩下昌平	鹿児島県		3
30	三四郎	鹿児島県		3
51	Bokuwa	北海道		2
51	snowman	北海道		2
51	本田勝彦	北海道		2
51	小松克伊	茨城県		2
51	isyota	群馬県		2
51	篠原幹彦<in my iMage>	埼玉県		2
51	Nikon	千葉県		2
51	ASURA	東京都		2
51	Kuyt	東京都		2
51	page	東京都		2
51	松尾 徹	東京都		2
51	藤枝則男	東京都		2
51	Jimmy	神奈川県		2
51	Ryosuke Fujii	神奈川県		2
51	円山貫	神奈川県		2
51	瑠衣	神奈川県		2
51	野田友博	富山県		2
51	芝田和彦	静岡県		2
51	Girard Inoue	愛知県		2
51	荒木 弘	愛知県		2
51	坂口龍一郎	愛知県		2
51	田村祐二	滋賀県		2
51	松浦謙悟	京都府		2
51	舘 太加志	大阪府		2
51	hiro13	和歌山県		2
51	corazon-neo	鳥取県		2
51	Kashiwa	福岡県		2
51	阿部礼三	長崎県		2
51	Shinano Murei	香港		2
80	山田 稔	北海道		1
80	高橋清文	宮城県		1
80	Hidekazu	秋田県		1
80	阿部 聡	山形県		1
80	umetarou	福島県		1
80	矢部幸一	福島県		1
80	MICHIKO sama♥	茨城県		1
80	seinin	埼玉県	1	1
80	tatsuya ishikawa	埼玉県		1
80	大野彰久	埼玉県	1	1
80	花輪俊夫	埼玉県		1
80	wat	千葉県		1
80	鮫島康高	千葉県		1
80	高瀬広之<ina-bou>	千葉県		1
80	620user	東京都		1
80	guitarman	東京都		1
80	Kazun	東京都		1
80	tadeen	東京都		1
80	tokyojackal	東京都		1
80	w.aoki	東京都		1
80	カメ30	東京都		1
80	川崎たかし	東京都		1
80	久米原 肇	東京都		1
80	根岸直人	東京都		1
80	根立 昇	東京都		1
80	比嘉一博	東京都		1
80	平泉祐子	東京都		1
80	村田文衛	東京都		1
80	山田圭汰	東京都		1
80	BlackTiger	神奈川県	1	1
80	Crews Control	神奈川県		1
80	赤木敏和	神奈川県		1
80	岡 謙一	神奈川県		1
80	鈴木則之<虚空>	神奈川県		1
80	徳島さゆり<彩璃>	神奈川県		1
80	西村香織	神奈川県		1
80	橋爪 通	神奈川県		1
80	まかだみ庵☆古写堂	神奈川県	1	1
80	宮崎勝宏	神奈川県	1	1
80	櫻井 武	石川県		1
80	齋藤 整	静岡県		1
80	村松克則	静岡県		1
80	nonnno	愛知県		1
80	soide55	愛知県		1
80	池田孝保	滋賀県		1
80	如月 壇	京都府		1
80	shupapa	大阪府		1
80	鬼塚豊氏	大阪府		1
80	西本邦人	大阪府		1
80	ハニカミオヤジ	大阪府		1
80	吉住延也	大阪府		1
80	和田全美	大阪府	1	1
80	HYPO	兵庫県		1
80	prego	兵庫県		1
80	岸口俊樹	兵庫県		1
80	才谷梅太郎	兵庫県		1
80	田中宏幸	兵庫県		1
80	中本則昭	兵庫県		1
80	本間悠斗	兵庫県		1
80	大石英樹	和歌山県		1
80	相賀望弘	岡山県	1	1
80	中田秀裕	岡山県		1
80	西村直也	岡山県		1
80	林田考生	岡山県	1	1
80	三田晃広	広島県		1
80	神園 恵	山口県		1
80	松尾研一	愛媛県		1
80	Akira	福岡県	1	1
80	Dream Cabin	福岡県		1
80	田島邦洋	福岡県		1
80	川浪敏明	佐賀県		1
80	大石賢吾	長崎県		1
80	田上 徹	熊本県		1
80	ミヤザキコハク	熊本県		1
80	伊達眞吾	宮崎県		1
80	辻 晃史	宮崎県		1
80	太田聖児	インド	1	1

2015年度フォトコンテスト プリント部門について

プリント部門　投稿の手順

① GANREF（http://ganref.jp/）の「コンテスト」からコンテスト名を選び、応募規定をご確認後、応募手続きを行います。GANREF登録がない場合、この作業は不要です

② 応募規定に登録されている「応募票」をダウンロードしてプリントし、必要事項を記入します。GANREFを介さない場合は右記のURLを直接入力し、応募票をダウンロードしてください

③ プリントした作品の裏面に記入した応募票を貼り付け、郵送にてお送りください

郵送先

〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビルディング
株式会社インプレス　デジタルカメラマガジン編集部
「フォトコンテスト応募係 プリント部門」

応募票ダウンロード

http://ganref.jp/oubo

郵送先が変更になりました GANREF登録がなくても応募できます。上記URLからまずは応募票ダウンロード！

集まれ! DCM写真部 2015 | 11

迫り来る冬に向かってダイナミックに季節が変化するのが秋ですね。
移ろいゆく季節の中で自分だけの光景をカメラで切り取っていくのは楽しいものです。
目の前の光景に振り回されず、ちょっと個性を出してみてはいかがですか?

お題を決めてみんなで撮る

個性派写真展

今月号のお題は

「映り込み」

映り込みが作り出すちょっと不思議で美しい写真。今回は過去最多900枚以上の応募がありました。なかでも優れたアイデアの写真をご紹介します。

「ついていきたい…」

CoCo（京都府）

ソニー α77 II／タムロン SP AF10-24mm F/3.5-4.5 Di II LD Aspherical [IF]／10mm（15mm相当）／絞り優先AE（F5、1/800秒、+0.3EV）／ISO 500／WB：オート

ショーウインドーの巨大なハイヒールの看板に、街を歩く女性を映り込ませることで、まるで、街中を巨大なハイヒールの女性が歩いているように見せていて、ファンタジックな物語を感じさせます

「仮面」

tuyosi.m（広島県）

シグマ dp2 Quattro／30mm（45mm相当）／マニュアル露出（F3.5、1/125秒）／ISO 100／WB：オート

ミュージアムの床面の映り込みですが、無機質なものに映し込まれることで、人々の個性が失われていくようで、タイトル通りの印象になっています。天地を逆転させた意図がよく伝わる写真です

「天地創造」

鈴木正美（新潟県）

オリンパス E-5／ZUIKO DIGITAL 14-54mm F2.8-3.5／14mm（28mm）／絞り優先AE（F8、1/60秒、−1.7EV）／ISO 200／WB：オート

湖面に映り込む穂高連峰をとらえた写真ですが、氷の張った湖面や落ち葉に降りた霜が良い効果となって、タイトル通り荘厳な印象になっています

「空を見下ろして…」

boss_5th（宮崎県）

ペンタックス K20D／タムロン AF 28-300mm F3.5-6.3 XR Di LD Aspherical [IF] MACRO／39mm（58mm相当）／絞り優先AE（F9、1/100秒、±0EV）／ISO 100／WB：オート

何気ない瞬間ですが、のぞき込む犬の姿により、映り込んだ青空に、写真を見た人の思いを投影できる気がします

1月号のお題は「シルエット」

もともとは切り絵を指す言葉だったシルエットは、今は影が生み出す表現として使われることもしばしば。そんなシルエットを生かした写真を募集します。

募集期間：
10月20日〜11月10日

今さら聞けない
覚えておきたい撮影キーワード

写真・文● 中原一雄

撮影テクニックを読むと出てくるさまざまなキーワード。知ったかぶりや間違った覚え方をしないように、おさらいしておきましょう!

今月のキーワード
『日中シンクロ』

半逆光で普通に撮ると手前が暗く沈むが、日中シンクロすると手前の被写体と背景の露出バランスが釣り合う。プラス補正だけでは背景が白飛びしただろう

日中屋外で逆光気味の撮影では背景に比べて被写体が暗くなってしまうことがよくある。このとき、カメラ側からストロボを発光し被写体を明るくする撮影方法が日中シンクロだ。

うまく日中シンクロを使いこなすコツはマニュアル露出で背景の露出を先に決めることだ。そこから、ストロボをONにして調光補正で手前の被写体の明るさをコントロールしよう。背景と手前の被写体の露出を別に考えながら、バランスを釣り合わせることが大事だ。

なお、一部の外付けストロボを除いて日中シンクロできるシャッタースピードはカメラの同調スピード(1/200秒前後)までである点にも注意しよう。

テクニック ストロボの照射角を狭めて光をスポットライトのように当てる

本来なら花が暗く沈むような撮影条件だが、日中シンクロすることで太陽の光条を白く飛ばしてしまうことなく表現できる。ストロボの照射角を狭めて中央部のみ光を当てて、スポットライトのような効果も狙った

あのフォトコン受賞者に会いたい!

2015年10月号 プリント部門 ―優秀賞― 「Summer」

井上幾雄さん

今回お話をうかがったのは、精力的な応募でプリント部門を中心にフォトコンテスト入選常連者の井上さん。何気ない風景のようで、虚構の世界でもあるような写真が目を引きます。

――写真を始めたきっかけは何でしょうか?
もともとは普通に家族や旅行の写真を撮っていましたが、溺愛していた猫の写真をブログにネコ通信として投稿しはじめるようになり、それが受けたことが写真にのめり込みはじめたきっかけです。簡単にフォトコンテストに応募できるGANREFの存在も知り、深く勉強するようになりました。

――好きな被写体はありますか?
海や川辺で釣り人や子どもたちを撮ることです。被写体の動きが少なく、じっくり構図を取りやすいことが理由の1つですね。また、海や川での撮影は、背景を整理しやすく、かつ、被写体を強調しやすいことも理由です。さらに、水面の反射などで、光と影を生かした表現もできますし、空を見上げれば浮かぶ雲も利用できるので、写真の世界に引き込むための手段が整っていると思います。

――どんなレンズを好んで使われることが多いですか?
50mmの単焦点レンズが好きです。以前は遠近感が強調できる広角レンズが好みでしたが、レンズを1本もってうろうろする場合は、自分の立ち位置で広角的にも使えるため50mmの万能性を感じます。

――受賞作も被写体との程よい距離感が魅力的ですが、ほかにこだわりはありますか?
主に置きピンでタイミングを狙い、撮っていることでしょうか。風景写真にはあまり興味がなく、風景の中にできるだけ人物などの被写体を配置し、日常を非現実的に、哀愁感や郷愁感を出せたらと思っています。

――写真やプリントの面白さとはずばり何でしょうか?
形として残せて、知人や家族に簡単に見せられるところです。さらに、自分自身を写真を通じて表現することで、自分の感性を自分なりに入魂し、死後も形として残せるところに魅力を感じています。今後の目標は、人や動物に対して自分の感じる慈しみが、写真を見ていただく人にまで伝わるショットを撮ることです。

応募要項

お便り
誌面への感想、カメラ、レンズに関する疑問・質問・意見、最近のカメラ生活近況など、みなさんからのお便りを募集します。

写真
「個性派写真展」では、毎号お題を決めて写真を募集します。今回は「シルエット」をテーマにした写真を大募集。応募締め切りは11月10日で、掲載は1月号です。どしどし投稿ください。
写真を掲載した方には…Amazonギフト券1,000円分

応募方法
E-mailの場合▶digitalcamera@impress.co.jp
※Subject(タイトル)は「DCM写真部 ○○○」
・あて先には必ず「個性派写真展」か「お便り」と入れてください
・すべての投稿には、住所・郵便番号・氏名を書いてください
・ペンネームがある場合はわかりやすく書いてください
インターネットからの場合▶ GANREF ガンレフ
投稿ページ…http://ganref.jp/photo_contests

デジタルカメラマガジンからのおしらせ
- 賞金、Amazonギフト券、読者プレゼントの発送時期
PHOTO CONTESTや個性派写真展の賞金、およびAmazonギフト券、読者プレゼントなどの発送は掲載号の発売日から約40日後をめどに処理させていただいております。
- 編集部のTwitterアカウント
@digicame_magをレッツフォロー!
- 本誌Webページをリニューアル!
撮影こぼれ話も掲載中!
http://ganref.jp/dcm/をチェック!

デジタルカメラマガジン2015年9月号
DIGITAL CAMERA MAGAZINE PRESENT 当選者発表

1. ハクバ写真産業「ロープロ ファストパック BP 150 AW II」 駒木謙治(大阪府)
2. ベルボン「Ultra Stick M52」 小谷文則(京都府)
3. ニコン「アクセサリーシューカバー ASC-02 レザーブラック」 佐藤周逸(静岡県)
4. ケンコー・トキナー「スリック スタンドポッド5」 中川貴之(山口県)
5. サンディスク「エクストリーム SDHC UHS-Iカード(16GB)」 南茂昭彦(静岡県)/水谷正彦(愛知県)
6. レキサー「プロフェッショナル 1066倍速CFカード(16GB)」 大森基弘(愛知県)

写真展最新情報 INFORMATION

メーカーギャラリー

10月 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 ／ 11月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

地域	ギャラリー	URL	
札幌	キヤノンギャラリー	http://canon.jp/	井村 淳「ALIVE2～ Great Cats ～」 ／ 津留崎 健「Tamagawa 東京ネイチャー」
札幌	富士フイルムフォトサロン	http://www.fujifilm.co.jp/	ニッコールクラブ ／ 札幌写真研究クラブ 第2回写真展「田園・山峰・渓谷・沼・海」 ／ DANNP展「北の貌 2015」 ／ 第21回北海道野生生物写真コンテスト入賞・入選作品展」 ／ 鈴木啓子と仲間たち「四季への想い」
仙台	キヤノンギャラリー	http://canon.jp/	写真甲子園2015 本戦出場校 作品展 ／ 大浦タケシ「蒼き刻 — Ink Blue Serenity in Tokyo」 ／ HARUKI「遠い記憶。-memories-」～11/24
仙台	富士フイルムフォトサロン	http://www.fujifilm.co.jp/	高城芳治「野鳥四季彩」 ／ もうひとつの福島写真展 ／ 増井 冶「ブナと語る」
銀座	キヤノンギャラリー	http://canon.jp/	大浦タケシ ／ HARUKI「遠い記憶。-memories-」 ／ 村尾昌美「"PICTURES" ～かりそめの一夜～」 ／ 岩本圭介「冬の旅」 ／ 宮川 久「Stroll Around NYC」
銀座	ソニーイメージングギャラリー 銀座 ギャラリー1	http://www.sony.co.jp/	森田貢造「幕が上がれば 演劇集団 円と小劇場公演」 ／ 山本まりこ「言の葉はairy」～12/3
銀座	ソニーイメージングギャラリー 銀座 ギャラリー2	http://www.sony.co.jp/	鹿野 宏「Still×Scapes」 ／ 山本まりこ「言の葉はairy」～12/3
銀座	ニコンサロン	http://www.nikon-image.com/	佐野久里子「In Situ」 ／ 鷲尾倫夫「巡歴の道 オキナワ II」 ／ 菊池東太～12/1
銀座	リコーイメージングスクエア銀座	http://www.ricoh-imaging.co.jp/	「後世に残すベスト・オブ・モノクローム」 ／ 「名もなき者たち2015」～11/29
新宿	エプソンイメージングギャラリー エプサイト	http://www.epson.jp/	関根健太郎「暴水都市」 ／ 永井 勝「遺失物保管所・その他」
新宿	オリンパスギャラリー	http://www.olympus.co.jp/	佐々木啓太 ／ 根本タケシ「能登 空と海と」 ／ 啝「失われた場所 ブラニスフィア」 ／ 石黒健治「不思議の國 Fairy Land」 ／ 第34回 NHK 文化センター青山教室写真講座 写真展
新宿	ニコンサロン	http://www.nikon-image.com/	ベンジー「島へ ～魂のデブリ～」 ／ Juna21 仲田絵美「よすが」 ／ 下平竜矢「星霜連関」 ～11/23
新宿	ニコンサロン bis	http://www.nikon-image.com/	山本孝之「子供の四季」 ／ 佐藤 玲「ATHLETE 私はアスリート」 ／ 高島空太「ざわつき 2015」 ／ 茅野市美術館「寿齢讃歌 —人生のマエストロ—」 ／ 嚢 和子「浅草人間模様」～11/23
新宿	富士フォトギャラリー	http://www.prolab-create.jp/	石塚明克「三波石峡周辺の四季」 ／ 第7回フォトクラブMOMENT写真展／クリエイト主催 公募展「組写真の巻」 ／ 「The Thoroughbred」2015 ／ 第12回 Luna Cosmos 写真展 ／ キヤノンフォトクラブ東京第6 2015年 写真展
新宿	リコーイメージングスクエア新宿 ギャラリーI	http://www.ricoh-imaging.co.jp/	代 政雄「奥武蔵・光の詩」 ／ HASEO「Predators Of The City III ～世界が変わったその後に～」 ／ 全日本写真連盟 東京都本部「第42回 東京都写真展『東京の今』多彩なまち新たな再発見」 ／ はる ～11/30
新宿	リコーイメージングスクエア新宿 ギャラリーII	http://www.ricoh-imaging.co.jp/	川上秋レミイ「MONUMENT」 ／ HASEO「Predators Of The City III ～世界が変わったその後に～」 ／ 全日本写真連盟 東京都本部「第42回 東京都写真展『東京の今』多彩なまち新たな再発見」 ／ フォトユニットながい道～11/23
品川	キヤノンSタワー キヤノンギャラリー S	http://canon.jp/	森本美絵「去りながら」 ／ 上田義彦「Materia2015」～12/12
六本木	フジフイルムスクエア スペース1	http://www.fujifilm.co.jp/	第四回 江口慎一写真楽園作品展「光の森」 ／ 第十九回 AMATERAS展「太陽 月 空 海 大地」 ／ FUJIFILM SQUARE 企画写真展 日本版創刊20周年記念 ナショナル ジオグラフィック「地球の真実」
六本木	フジフイルムスクエア スペース2	http://www.fujifilm.co.jp/	高橋広平 ／ 第十九回 AMATERAS展「太陽 月 空 海 大地」 ／ FUJIFILM SQUARE 企画写真展 日本版創刊20周年記念 ナショナル ジオグラフィック「地球の真実」
名古屋	キヤノンギャラリー	http://canon.jp/	細川 卓「18きっぷ -若者たちの岐路-」 ／ 一般社団法人 日本スポーツプレス協会「The BEST ～日本スポーツプレス協会報道展2015～」 ／ 写真甲子園2015 本戦出場校 作品展 ～11/25
名古屋	富士フイルムフォトサロン	http://www.fujifilm.co.jp/	名古屋ハッセルブラッドフォトクラブ写真展 ／ 鈴木智明写真塾 PHOTO「瞬」写真展 ／ 青山昌弘「北米大陸の息吹」 ／ 高城芳治「野鳥四季彩」 ／ フォト「四季の会」第14回写真展「四季旬彩」
大阪	オリンパスギャラリー	http://www.olympus.co.jp/	一景会「日本の風景」 ／ 写真家 津田洋甫の軌跡 写真展 ／ オリンパスズイコークラブ 第31回 大阪支部 写真展 ／ 佐々木啓太「故郷(ふるさと) 懐かしく感じた場所」
大阪	キヤノンギャラリー	http://canon.jp/	日本スポーツプレス協会 ／ 写真甲子園2015 本戦出場校 作品展 ／ 中西裕人「Stavros アトスの修道士」 ／ 第15回日本報道写真連盟 関西本部センバツ展 ／ 松本徳彦「芸能生活60年 水谷八重子の足跡」
大阪	ニコンサロン	http://www.nikon-image.com/	全日本写真展2015 ／ 有元伸也「Tokyo Debugger」 ／ ニコン フォトコンテスト 2014−2015 受賞作品展 ／ 鈴木既五郎「グローバリゼーション、その具体的現場の記録及び社会構造の或る断面の可視化」 ／ Juna21 飯沼珠実「FROM LE CORBUSIER TO MAEKAWA」
大阪	ニコンサロン bis	http://www.nikon-image.com/	村上坂一 ／ 中塚史子「真経津鏡」 ／ 中塚八男「しじま」 ／ 読売写真クラブ 第20回読売写真クラブ西日本選抜展] ／ Juna21 山本雅紀「山本家」
大阪	富士フイルムフォトサロン スペース1	http://www.fujifilm.co.jp/	清水 薫 春夏秋冬「鉄路の季節」 ／ 【写真家たちの新しい物語】松本紀生「アラスカ原野行」 ／ あらたひでひろ写真研究会 20周年記念夢浪漫写真展 ／ 片山 茂「北近畿の四季」 ／ 2015 関西女性フォトグループ 写真展
大阪	富士フイルムフォトサロン スペース2	http://www.fujifilm.co.jp/	朝日カルチャーセンター佐納教室写真作品展 ／ ネイチャーフォトクラブ「一会(いちえ)」第10回写真展「心の時季(とき)」 ／ 増井 治「ブナと語る」 ／ 写楽会写真展 ／ 2015 関西女性フォトグループ 写真展
福岡	キヤノンギャラリー	http://canon.jp/	南雲暁彦「BRASIL」 ／ 写真甲子園2015 本戦出場校 作品展
福岡	富士フイルムフォトサロン	http://www.fujifilm.co.jp/	放浪するセルゲイK・作品展 ／ 増田哲子&俊次写真展「写真の力」 ／ 第36回山岳写真の会「白い峰」写真展 第1部 ／ 第36回山岳写真の会「白い峰」写真展 第2部

ピックアップギャラリー

10月 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 ／ 11月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

地域	ギャラリー	URL	
東京	Bright Photo Salon	http://www.jcop.jp/wp/gallery/	HARUKI「Automóviles Americanos from CUBA CUBA CUBA」
東京	EIZOガレリア銀座	http://www.eizo.co.jp/galleria/ginza/	佐藤倫子「SG50☆」
東京	ESPACE KUU	http://taisho-kuu.tokyo/	大西みつぐ×ジェレミー・ステラ「INTERSECTING VISIONS 東京 交差するふたりの視点」～12/25
東京	スタイケントーキョー	http://www.steichentokyo.com/	内藤 明「in the wind」

根本タケシ写真展「能登 空と海と」

GALLERY

オリンパスギャラリー東京／10月23日〜10月28日

　50年以上前、能登半島を徒歩で一周した経験は根本氏の胸に深く刻まれている。その後、病気で左半身に麻痺が残ったが、復帰後初の展覧会のテーマも能登だった。重い機材は持てなくなったが、背中を押してくれたのがオリンパス OM-D。今回は、能登作品の一里塚として、発病前、発病後の作品を混在して展示。病からの復帰を目指す人たちへの道しるべとして、また、能登で胸に刻まれたものを吐き出すための発表だ。

©根本タケシ

HASEO写真展「Predators Of The City Ⅲ 〜世界が変わったその後に〜」

GALLERY

リコーイメージングスクエア新宿／10月28日〜11月9日

　100や1000の言葉で話すことよりも、1枚の写真で、世界が変わる想いを伝えたい。そんなテーマで撮影された今回の写真展は、62名のスタッフと、34人のモデルで作られた個人のレベルをはるかに凌駕する驚異的に豪華な大作の作品群。美しいものを自己の感性で昇華し、独特の感性で作り上げられた世界観は、CGや合成を一切使用せずすべて本物で構成されている。

©HASEO

上田義彦写真展「Materia2015」

GALLERY

キヤノンギャラリー S ／11月14日〜12月12日

　「Materia」というのはラテン語で「生命を生む力」という意味。このラテン語に出合ったことで、上田氏はこれまで漠然としていた写真の定義がはっきりと形を持つようになったという。約30年にわたり写真を通じて地球上の生命の根源について考察を続け巡礼の旅を続けてきた上田氏の最新写真展となる本展では、インドネシアとパタゴニアで撮影した新作を中心に「生命を生む力」がテーマの作品約20点が展示される。

©上田義彦

日本版創刊20周年記念 ナショナル ジオグラフィック「地球の真実」

GALLERY

フジフイルムスクエア／10月30日〜11月18日

　第一線の写真家によるダイナミックな写真とともに地球上のさまざまな事象を綿密に取材した記事が届く写真雑誌ナショナル ジオグラフィック。日本版は今年で創刊20周年を迎えた。本展ではナショナル ジオグラフィックが所有する約1,100万点に及ぶ膨大な写真コレクションから、選りすぐりの傑作写真約100点を展示。圧倒的スケールの大自然や野生動物の生態、探検家の活動記録など地球の真実に迫る写真を堪能できる。

タイタニック号の発見（1991 年）、北大西洋 エモリー・クリストフ/National Geographic Creative

HARUKI写真展「Automoviles Americanos from CUBA CUBA CUBA」

GALLERY

Briht Photo Salon ／10月30日〜11月12日

　キューバで目を引くクラシックカー。半世紀以上もアメリカと国交断絶されたキューバの人たちだが、彼らはキューバ革命以前に輸入された1940〜1960年頃のアメリカ製の車に今も修理を繰り返しながら乗り続けている。塗装を変えて新車のようにピカピカな車、ボロボロになり歴史を物語る車とその模様はさまざまだが、今でも現役で走り回るクラシックカーからたしかに垣間見えるのは、20世紀半ばの活気ある古き良き時代だ。

©HARUKI

佐藤倫子写真展「SG 50☆」

GALLERY

EIZOガレリア銀座／10月28日〜11月7日

　シンガポールは今年で建国50周年を迎える。SINGAPORE 50（SG 50）という文字を掲げ盛り上がり、ポジティブなパワーで包み込まれているこの国で、佐藤氏はそのパワーを感じ取りながら撮り歩いた。ミックスカルチャーならではの独特の中間色で創られた街の中を、直感を効かせながら、俯瞰的に楽しみながら、写真で切り取っていく。時間の流れとともに微妙に視点の変化を重ねる自分自身を感じながら。

©佐藤倫子

犬と網タイツ

BOOK

森山大道／月曜社（3,500円＋税）

　森山大道氏の完全撮りおろし写真集は、作者初の日付入りで撮影順に写真が配列された構成となっている。森山氏の日常の視線にふと止まった、都市の片隅で人目を引くことなくひっそりとたたずむ、見過ごされても仕方のないようなものたちが写されている。掲載される写真は、全点が縦位置のモノクロ写真292点。なお、タイトル題字は森山氏自身によってレタリングされたものとなっている。ちなみに、写真集には犬の写真も、網タイツの写真も収録されていない。

ニッポンの星、月、夜の絶景

山梨将典／パイインターナショナル（1,900円＋税）

　近年は夜の自然風景の撮影をライフワークとしている山梨氏の最新写真集が、『ニッポンの星、月、夜の絶景』だ。そびえ立つ山々、海岸や湖、高原、棚田など、日本には美しい自然風景が数多くあるが、それらの多様な自然風景の中には、日が落ちた後、静かな夜更けや夜明けなどの夜の時間しか見せてくれないさらなる絶景が潜んでいる。星や月など夜だけの被写体とともに写される、今まで知らなかったロマンチックな自然風景の数々を堪能してほしい。

日本坂道学会会長
山野 勝と巡る

文•山野 勝　写真•郡川正次

江戸ゆるり坂道散歩

第5回
市ヶ谷
（新宿区）

東京都心部は意外に坂が多い。今も昔もそこには同じ坂があり、人々の営みが脈々と受け継がれている。坂の名の由来や歴史に触れながら、カメラ片手にぶらぶら散歩。江戸の風情を感じながらのスナップもまた一興。

坂上の人形浄瑠璃の
芝居小屋が名前の由来

浄瑠璃坂

JR市ヶ谷駅から市ヶ谷橋を渡って外堀を横断すると外堀通りに出る。右折して次の信号を左折すると左内坂の上りになるが、ひとまず左折して市谷亀岡八幡宮に 用語解説 寄ることにする。1本目を右折すると、急峻な市谷八幡男坂が見えてくる。左側の緩やかな坂が女坂だ。

元の道に引き返し、左内坂を上っていく。坂名は市谷田町一帯を開発した草創名主の島田左内の名に因る。一直線に堂々と上る姿は美しい。8代目左内は狂歌師・大田南畝と親交のあった粋人だった。坂上を進み、防衛省左内門を右に折れると安藤坂の緩やかな下り。右側に旗本・安藤氏の屋敷があった。そのまま進むと中根坂に入る。左側に旗本・中根氏が居を構えていた。かつてはV字型の急坂だったが、今は谷間に橋が架けられたので形状が変化した。

中根坂の入口の変則十字路を右折して進み、1本目を右折すると、長延寺坂の上り。坂上に長延寺があった。坂下を直進し、外堀通りに出たら左折、1本目を左折すると浄瑠璃坂の上りになる。坂名の由来は、坂上に操り人形浄瑠璃の芝居小屋があったからとか、近くの光円寺の本尊が薬師如来（仏教の浄瑠璃世界の教主）だったからとか諸説ある。この坂は「浄瑠璃坂の仇討」 用語解説 で有名だ。

⑯永井荷風が『日和下駄』の中で見事な風景を絶賛している逢坂。もともとは「大坂」と書かれた

奈良時代の悲恋の伝承で
"大坂"から変わった

逢坂

浄瑠璃坂を上り、突きあたりを左折すると芥坂の下り。昔はゴミの捨て場があった。この辺りの道は複雑だ。芥坂上を左折し、突きあたりを左、右折する。左側の大日本印刷松柏寮の塀に「浄瑠璃坂の仇討跡」の説明板がある。さらに進み、次を左折すると鼠坂の下り。細くて狭い坂の意。この坂を下ると、先の中根坂の道筋に出る。

鼠坂の坂上に戻り、右、左折を2度くり返すと、鰻坂の坂上に出る。坂は牛込中央通りを横切ってさらに上っていく。途中で左、右折すると坂上に出る。このような形状が、鰻がだらりと寝そべっている姿に似ているのが坂名の由来だ。この辺りは江戸時代、幕府の納戸方同心の組屋

⑩操り人形浄瑠璃の芝居小屋があったという説をはじめ、坂名の由来が諸説さまざまある浄瑠璃坂。1672年の仇討で有名になった
❷市ヶ谷駅からほど近い、少し奥まった位置にある市谷亀岡八幡宮。63段ある男坂の階段は非常に急峻で迫力がある
❹寛永期に市谷田町一帯を開発した島田左内という名主から名付けられた左内坂。島田家は明治まで一帯の名主であった
❾明暦の大火（1957年）を契機に、4代将軍・徳川家綱によって設置された定火消（じょうびけし）の屋敷跡。ソニーミュージックのすぐ隣りだ

用語解説

□ 市谷亀岡八幡宮
この神社は文明10年（1478年）、太田道灌によって鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を勧請して創建されたという。「鶴」に対して「亀」と称したもので長寿を願っている。銅鳥居には寄進者442人の名前が刻まれていて興味深い

⑭坂の形状が鰻が寝そべっているように延びていることから名付けられた鰻坂

敷があったところ。将軍の調度品を納入する役職で、支払いの担当は払方といった。現在も納戸町、払方町の名が残っている。

鰻坂の坂上を右折すると突きあたりになる。この左右の道が歌坂だ。「ウタ」とはアイヌ語の「ウタ」や「ウトウ」からきている説もある。突端とか出崎を意味するが、この坂も出崎のように見えたのだろう。

歌坂を上り、突きあたりを左、右折して進むと逢坂の頂上に出る。緩やかに湾曲しながら下る急坂だ。この名坂は昔は「大坂」といったが、悲恋の伝承 用語解説 から逢坂に変わっている。

中国の梅の名所から徳川秀忠が命名した 庾嶺坂（ゆれいざか）

逢坂を下っていく。再び外堀通りに出たら左折、1本目を左折すると庾嶺坂の上り。江戸時代初期、一帯は美しい梅林だった。ここを訪れた2代将軍・徳川秀忠が、中国の梅の名所・大庾嶺に擬して命名したという。石垣と緑が美しい名坂だ。

坂上の神楽坂若宮八幡神社の先を左、右折すると新坂の上りになる。邸宅の間を一直線に駆け上る。享保16年（1731年）、信濃（長野県）高島藩・諏訪安芸守（3万石）の広大な屋敷を割って、新しく造られたので新坂という。坂上の突きあたりを右折し、3本目を右折して進むと、右手に光照寺 用語解説 がある。この前の坂を地蔵坂という。坂名は光照寺の子安地蔵に因む。

坂を下ると神楽坂の大通り。神楽坂の坂名の由来は、坂の途中にあった穴八幡の御旅所で神楽を奏したからとか、若宮八幡の神楽の音が聞こえたからと諸説ある。

神楽坂を飯田橋方面に下り、本多横丁の通りを左折すると三年坂の下りになる。この坂で転ぶと3年以内に死ぬという俗説が坂名の由来。三年坂の中程の十字路を右折して進むと軽子坂の下り。軽籠（縄で編んだモッコ）に荷物を入れて運ぶ労務者（軽子という）がこの辺りに住んでいたのが坂名の由来だ。坂を下っていくと飯田橋駅に着く。

おすすめ散歩ルート

神楽坂

本多横丁

牛込城跡

新坂

神楽坂若宮八幡神社

善国寺の石虎

便々館湖鯉鮒の墓

軽子坂周辺

芥坂

堀兼の井

長延寺坂

START 市ヶ谷駅—1.市谷八幡男坂—2.市谷亀岡八幡宮—3.市谷八幡女坂—4.左内坂—5.長泰寺—6.安藤坂—7.中根坂—8.長延寺坂—9.定火消屋敷跡—10.浄瑠璃坂—11.芥坂—12.浄瑠璃坂の仇討跡—13.鼠坂—14.鰻坂—15.歌坂—16.逢坂—17.堀兼の井—18.庾嶺坂—19.神楽坂若宮八幡神社—20.新坂—21.地蔵坂—22.光照寺（牛込城跡・便々館湖鯉鮒の墓・諸国旅人供養碑）—23.神楽坂—24.善国寺（毘沙門天像・石虎）—25.三年坂（本多横丁）—26.軽子坂—GOAL 飯田橋駅

⑱梅林の名所として知られた中国の大庾嶺から2代将軍・徳川秀忠が命名したという庾嶺坂。唯念坂、行人坂、幽霊坂など、多くの別名を持つ

浄瑠璃坂の仇討

事件は寛文12年（1672年）2月2日に起こった。その4年前、下野（栃木県）宇都宮藩主・奥平忠昌の葬儀で、2人の家老が口論となり刃傷沙汰に発展。切腹した家老の子が、もう1人の家老を潜伏先で襲い、本懐を遂げた

逢坂の伝承

奈良時代、武蔵国の国司として当地に赴任した小野美作吾（おののみさご）がさねかずらという名の娘と恋に落ちた。その後、さねかずらは、都に帰還して没した美作吾の霊とこの坂で再会し、入水自殺したという伝承がある

光照寺

光照寺一帯には、戦国時代の領主・牛込氏の居城があった。墓地には出羽（山形県）松山藩主・酒井家の歴代墓や、旅籠（はたご）で没した旅人を弔った諸国旅人供養碑、狂歌師・便々館湖鯉鮒（べんべんかんこりう）の墓がある

山野 勝（やまのまさる）：1943年広島県生まれ。坂道研究家。早稲田大学政経学部新聞学科卒。講談社常務取締役の時に、『タモリのTOKYO坂道美学入門』の企画プロデュースを行う。その後、講談社コミッククリエイト代表取締役社長を経て現在はフリーとなり、朝日カルチャーセンター、NHK文化センターなどの「坂道講座」の講師を務める。日本坂道学会会長（副会長はタモリ氏）。著書に、『江戸と東京の坂』『古地図で歩く江戸と東京の坂』など

デジタルカメラマガジン

2015年10月20日発売

2015年12月号は 11月20日(金)発売

次回予告

内容は変更することがあります。ご了承ください。

[特集1]

好評につき第2弾! 50ページ総力大特集

冬の絶景写真

この冬、一度は訪れてみたい
冬の絶景ガイド

— 日本ベストセレクション 100 —

[特集2]

ポートレート写真をもっと楽しく撮りたい!!

コスプレ写真の撮り方

デジタルカメラマガジン
MOOK&書籍シリーズ ラインアップ予定

キヤノン
EOS 5Ds&
5Ds R完全ガイド
好評発売中
2,000円+税

リコーイメージング
PENTAX
K-3 Ⅱ完全ガイド
好評発売中
2,000円+税

すずちゃんの
はじめての
カメラとレンズ
10月23日発売予定
1,600円+税

今後も続々とラインアップ

ニコン NIKKORレンズ FANBOOK ……… 11月19日
RICOH THETA S Perfect Guide ……… 11月下旬予定

AD INDEX

STAFF

AD	平岡和之(ビーワークス)
デザイン	関 光志/荒牧春香/久米雄次郎/廣谷 汐/須磨裕子/春原卓也(ビーワークス)
写真撮影	加藤丈博
用紙	第一紙業株式会社
印刷製本	共立印刷株式会社
生産管理	籔田 武
広告営業	株式会社インプレス
広告部	清水栄二/高橋伸行/田中真一郎/野原大輔/五十嵐敦子
出版営業	伯田 敦/吉田和彦/丸岡重之/岩織康子/岩本琢磨/飯沼昭教
制作進行	島村正人
編集協力	荒田淳子/山崎理佳
編集	牧浦裕介
デスク	武間俊樹/白石由佳
副編集長	上田大輔/小谷輝之
編集長	福島 晃

発行人●土田米一
編集人●小川 亨
発行所●株式会社インプレス
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
http://book.impress.co.jp/
販売●株式会社インプレス　出版営業統括部
TEL 03-6837-4635
広告●株式会社インプレス　営業統括部
TEL 03-6837-4631
http://ad.impress.co.jp/
インプレスカスタマーセンター
TEL 03-6837-5016　FAX 03-6837-5023
info@impress.co.jp

内容に対する質問は、インプレスカスタマーまでメールにてお問い合わせください

雑誌コード　16453-11

絶対に失敗しない

ましかく写真の撮り方

1:1

ちょっぴりおしゃれで新鮮な世界が楽しめる

最近、写真系SNSで流行しているましかくの写真。縦横の比率が同じで、世界をきゅっと詰め込んだかわいらしさが特徴。はじめにましかく写真の効果、次に人気写真家によるテクニックを紹介しよう。

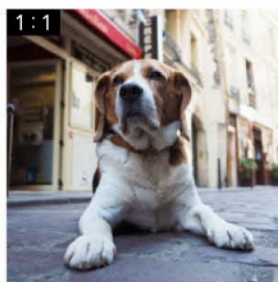
写真・文●藤田一咲、中井精也、大和田 良、tsukao

不思議・かわいい 1：1 ましかく 写真の魅力

写真・文●藤田一咲

1：1(ましかく)は3：2と何が違うの？

ましかく写真とは、写真の縦横比が3:2の一般的な写真とは違い、1:1比率の写真のこと。最近では、インスタグラムやFacebookにアップされる写真でもよく知られるようになり、すっかり人気が定着したアスペクト比の写真だ。

ましかく写真の魅力とは何か？ まず、その縦長でも横長でもない正方形のアスペクト比の画面がかもし出す新鮮さ。そして、フィルムで撮ったようなレトロ感。さまざまなフィルター効果などとの相性の良さが生み出すトイカメラのような描写のかわいらしさや不思議議感。その独特な比率のおかげで同じ写真でも違う写真のように見える特徴がある。当然、撮り方や効果も3:2とは違うので、1:1写真を効果的に見せられる方法を解説しよう。

1：1の効果

ましかくの画面は3:2とは縦横比が異なる1:1。3:2のように、横や縦に長い画面を生かした表現とは違い、縦や横の意識から解放される。トイフォトなどフィルター効果との相性も良く、ましかくならではの表現、独特な印象の写真になる

3：2の効果

カメラでは現在主流のアスペクト比。35mm判を元にしたカメラで多く採用され、もっとも見慣れたフォーマット。縦位置、横位置にすることでさまざまな効果を生み出すことができる

ましかく写真を上手に作る方法

ましかく写真の作り方は「撮影時」と「撮影後」に作る2つの方法がある。撮影時に作る場合、カメラのアスペクト比をあらかじめ「1:1」に設定して撮影をする。最近のデジタル一眼カメラの多くには1:1アスペクトが搭載されている。設定するとライブビュー画面が1:1で表示される。この方法はましかくな画面や構図に慣れていないと、少しむずかしく感じるだろう。

もう1つの撮影後に作る方法は、すでに撮影した写真をましかくにトリミングする。これがもっとも簡単なましかく写真の作り方だ。

ましかく写真初心者は、とりあえず縦長や横長の画面で撮った写真をパソコンやカメラでましかくにトリミングして1:1の感覚を磨いてから、次にカメラの設定でましかく写真に挑戦するのが良いだろう。

◆ 撮影時にアスペクト比を設定する

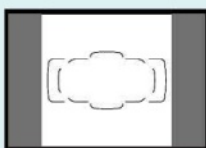
ライブビューで表示すると、スルー画が1：1になる。見ながら撮れるのでイメージしやすいのが特徴

◆ 撮影後にトリミングする

モデル●Tommy

Photoshopなどのソフトでトリミングする。細かい調整ができるので最初はこの方法で構図を学ぼう

光学ファインダーで1：1が確認できる機種もある

1:1はライブビューとの相性は良いが、ファインダー表示はというと一部の機種でのみ対応している。キヤノンのEOS 5Dsが完全対応しており、撮影外はマスクされるので分かりやすい。1:1ガイドがない機種は比率が近い格子線を参考にして撮影すると良いだろう

キヤノン EOS 5Ds

1：1アスペクトが設定でき、撮影されない部分はマスクで表示される

ニコン D810

1：1に近い5:4アスペクトがある。ファインダー内に格子線が表示される

カメラでトリミングできる機種もある

パソコンを使わなくてもカメラで1：1のトリミングができる。1:1で撮影できないカメラでも、画像編集モードでは1:1 トリミングに対応している機種もある。撮影後にイメージをつかむのにも役立つ機能だ

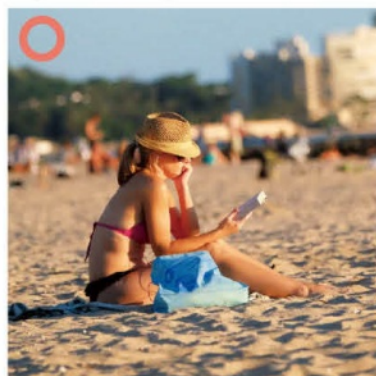
画面はD800だが、同じように画像編集画面でトリミングできる機種もある

ましかく写真を撮るときの3つのコツ

POINT 1 フレーミングにこだわる

ましかくは特異なアスペクト比であるだけに、絵作りではフレーミングがとても重要になる。つまり、ましかくは構図の取り方しだいで印象が大きく変わってくる。基本的なフレーミングは、被写体を画面中央に大きく配置する日の丸構図だ。左右上下の空間のバランスが良くなり、安定感が出る。写真を見る人の視線を自然に画面中央に誘導でき、主題や撮影意図を伝えやすい。

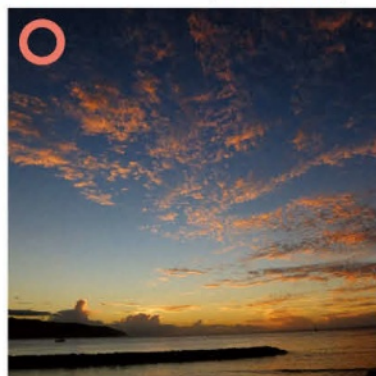
また、画面を縦や横に均等に3つに分割する3分割法を利用し、作例のように被写体の占める面積によって主題をより強く主張できたり、広さや高さなどの画面効果を演出することも可能だ。

◆ 日の丸構図で大きく写す

ましかく写真の王道というべき、日の丸構図。この構図のポイントは被写体の大きさ。なるべく大きく見せると、被写体を注目させることができる

◆ 余白を作るときは 3分割構図

縦横の比率が同じましかくでは画面内に空間を作ることが難しい。ただ単に空間を開けると間が開いてつまらない写真になってしまう。そこで3分割構図を意識して被写体を配置しよう。被写体がメインで背景も見せたいときは2/3のところに、背景を見せたいときは被写体を1/3のところに置くと良い

POINT 2 画面効果は背景でつける

◆ 水平線を下にして 高さを出す

画面を横に3分割する地平線などのラインで高さを表現できる。例えば画面下1/3に地平線を持ってくると、それより上にあるものの高さが表現できる。画面を中途半端に分割すると高さの表現は難しい。

◆ 斜めから撮影して 奥行きを出す

ましかくでは、日の丸構図で撮ることが多いため、被写体と正面から向き合う構図になり奥行きの乏しい表現になりがちだ。画面を横切るラインを傾けるように撮るだけでパースがつき、奥行きの表現が簡単にできる。

POINT 3 レンズは標準域が使いやすい

ましかくで使いやすい画角は標準域だ。というのは、広角では周囲が余分に写り込み被写体が小さくなりがちになる。アップにすると余計なパースがついてストレートに感じられない。望遠では被写体が画面いっぱいになり、圧縮感はあるものの、背景がぼけすぎて周囲の様子が損なわれてしまうことがある。

◆ 人物

◆ スナップ

中井精也

世界を箱庭のように閉じ込めてゆるさを表現する

ましかく写真は、上下左右の長さに差がないフレームで切り撮ることで、風景が構図から広がろうという力を抑え、まるで箱庭のように、写っている世界に見る人の視線を集中させる力がある。だからこそ僕は、奥行き感がでないように被写体と正対して撮影することを基本にしている。ましかく写真は、完成した構図をただましかくにトリミングすればいいというものではない。最初から正方形の世界を意識した構図を作らなければ、完成度の高い写真にはならないのだ。

ソニー α7R II／FE 70-200mm F4 G OSS／128mm／絞り優先AE(F4、1/1,000秒、+1.3EV)／ISO 640／WB：太陽光

1 縦位置写真をトリミング

一部のカメラを除き、ましかく構図のまま撮影することはできないので、撮影にはコツが必要だ。僕はまず縦位置の構図を作ることで、ましかく写真の左右の幅を固定し、上下の不要な空間を撮影後にトリミングしている

2 正対して必要な要素だけを画面に入れる

これが撮影現場。電柱や鉄橋など構図に入れたくない要素をカットし、踏切と正対することで、左右の広がりがでないようにしている。まずは縦位置で横幅を決めてしまうことで、ましかくの構図を想像しやすくなるのだ

POINT

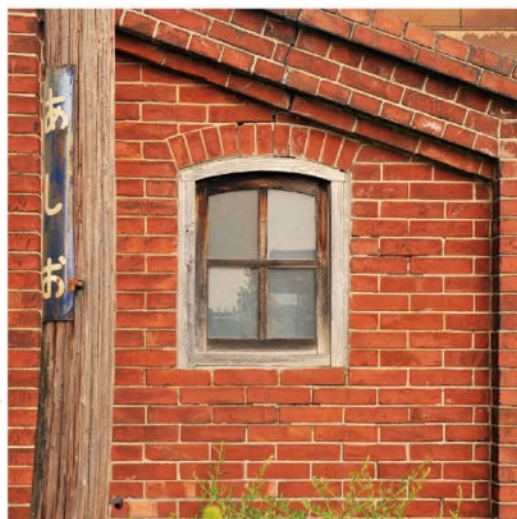
子どもたちの通学路にあるかわいい踏切。この映画のセットのような踏切を、箱庭のように表現したかった。列車よりも子どもたちが目立つような構図にすることを心がけた

POINT

「ましかく」で「正対」して「モノクロ」という要素をプラスすれば、どんなものも作品ぽく写る。この写真もまさにそのテクニックを使っている。モノクロにすることで形により目がいきやすくなる

POINT

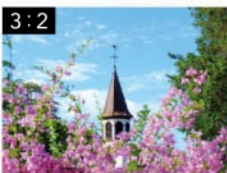
ましかく写真は、通常では御法度とされている「日の丸構図」との相性が良くなる。ここではやはりレンガ倉庫と正対し、キーとなる窓を日の丸位置に置くことで強調している

富士フイルム XQ1／25.6mm（100mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/110秒、+1.7EV）／ISO 100／WB：晴天（R−9、B+3）

POINT

日の丸構図で左右を対称になるように撮り、フィルター効果を加えてトイカメラ風に。ましかく画面にシンメトリーとフィルターの効果で、夢のような印象に仕上げた

青い空をバックにピンクの花の咲く木々の向こうに見えた教会。主題の教会をより注目させるため、カメラのアスペクト比を1:1に設定し、ファインダー内の中央に教会の塔を配置。左右の空間がバランス良くシンメトリーになるようにフレーミングした。イメージを大きく変えるためにプラスの露出補正をして画面全体をハイキー気味に明るくし、ホワイトバランスの変更やフィルター効果を加える。美しいリアルな光景を、トイカメラぽい優しくかわいらしさの溢れるメルヘンチックな世界に表現した。

1 主題となる被写体を画面の中心に置く

ここでの主題は教会である。ましかくの王道構図である日の丸構図を使い、上下左右のバランスを見ながら教会を画面中央に大きく配置した。

左の3：2写真では右に大きく入っている緑をカットして、教会のイメージを強くしている

2 フィルターを使ってトイカメラ風にする

より自分の表現したい世界に近づけるため、色の補正を行う。ホワイトバランスの微調整で青みをプラスし、さらにフィルターのトイカメラで周辺を落とす。左のようにノーマルのままでは幻想的にはならない

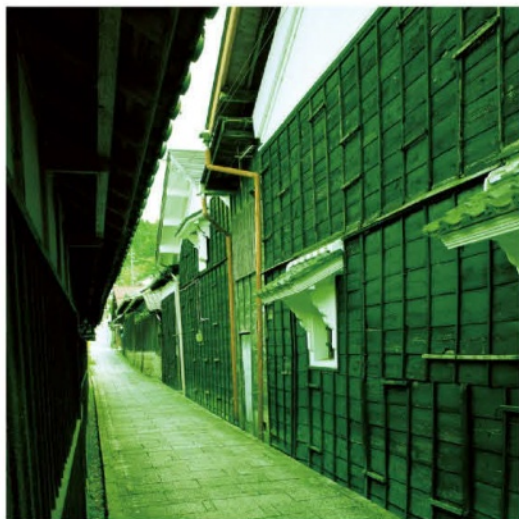
藤田一咲

色補正とフィルターで夢の中のような幻想的な雰囲気に

POINT

画面を横切る地平線などのラインの傾きに消失点を加えるとダイナミックな奥行きのある表現が可能になる。フィルターで画面全体を緑にすることで現実とは違う、思い出の中の通りを表現できる

POINT

ましかくは日の丸構図が基本だが、面白みがかける場合には画面を傾けてみよう。その場合のコツは思い切り画面を傾けること。中途半端に傾けても効果は薄いので、大胆にするのが良い

POINT

周辺にピントを合わせた植物を配置し、中心部は**ボケによる描写を用いて抜けを作ることで立体感を出す。**葉に対して真上から撮影し、グラフィカルなイメージに仕上げた

中心にボケを使った抜けを作り、周辺に葉がリズミカルに表れるような構図で撮影した。植物に向けて俯瞰気味に撮影することで、グラフィカルなとらえ方ができる。絞り込むと密度がある硬質的な表現になるが、このシーンではそれぞれの葉の距離の差を生かして浅い被写界深度を利用した表現を行った。フレーミングはファインダー内に格子線を表示することで1:1の比率をシミュレーションしている。葉の緑を深く表すために露出は若干アンダーに撮影し、現像時にコントラストを調整した。

1 スクエアに近い格子線を表示する

後からのトリミングを考えるために格子線を表示し、1：1の比率で画面を構成する。特に横はどれくらいで切れるのかを判断する。被写体の端をどこまで入れるのか、どの位置で切るのかを考える

2 角度を付けずフラットな構図で撮る

植物に対して真上から俯瞰気味に撮影を行うことで、葉の広がりや重なりをとらえることができる。スクエアの比率に対して平面的でフラットな構成を行いつつ、被写界深度を浅くしてボケを使いリズミカルな構図を意識した

大和田良

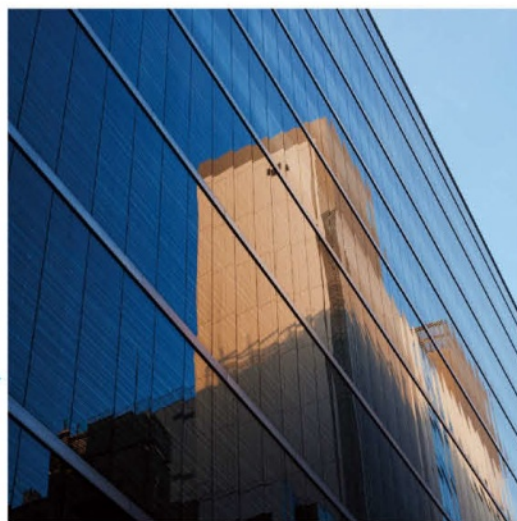
俯瞰とボケを上手く使い万華鏡のような表現をする

POINT

F11まで絞り込み、**パンフォーカスで撮影して硬質なイメージの再現**を目指した。構図としては中心を意識し、複雑に絡み合う電線を斜め方向に配置している

POINT

斜めの線を使って画面にリズムを持たせ、色と線を強調するため露出はアンダー気味に撮影した。構図は縦位置での撮影をイメージし、上方向への画面の流れを意識している

tsukao 奥に走っていく主題に注目させて画面にヌケを作る

エストニア、キフヌ島。この島ではブリキの箱と車輪をあとで取ってつけたような手作り感あふれるサイドカー付きのバイクがたまに走っている。パンフレットなどにはおばあちゃんがサイドカーで疾走している写真が載っていたりするが、向かってきたおじいちゃんの横には犬がちょこんと乗っていた。林と青空、道をバランス良く配置。木々の緑と青空、白い道の中、赤いサイドカーが映えるような色使いに。あまり欲張って要素を入れこまないこと。主題は1つ。ましかく写真では欲張ってはいけない。

1 たくさんある要素から取捨選択をする

道ばかりではつまらないので、青空と林を入れる。右斜めに道を入れて、走り去って行く感じを出す。アップにすると世界が狭くなり、気持ち良さがでない。右端に自転車が入らないようにバランス良くトリミングする

アップ

トリミング前

2 画面を青くして爽やかさを出す

主題以外の色を入れずに画面内の色はシンプルにする。オートWBでは少し赤かったので晴天に変更して、木々や林の色をきれいに出す。少し青みがかった感じの方が、爽やかな空気感を出せる

オートWB

POINT
人工の色を赤いサイドカーのみにして、主題に目が行くようにする。ましかくでは**シンプルな構図と色に抑えて、欲張らないこと**

リコーイメージング PENTAX Q ／02 STANDARD ZOOM ／10.5mm（50mm相当）／シャッター優先AE（F7.1、1/125秒、±0EV）／ ISO 125／ WB：晴天

POINT
村の小さなお祭り。**要素がたくさんある場合には色味を統一すること**。ここでは赤と黄色と花柄。要素が多くても色味が少ないとバラバラした印象にならない

POINT
良い天気の中、気持良さそうに牧草を食む牛たち。**逆光でまぶしさと気持ち良さを表現**、手前に花を入れることで穏やかさ、のんびり感、かわいさが出る。主題はどん、と真ん中に入れる

私の写真を変えたLENS

第15回 ｜ 別所隆弘

1.

3.

写真を撮ろうと思って中古のカメラを買ったのが私の写真生活の始まりである。このカメラは3回中2回しかまともに撮れないという代物で、ベストショットを撮り逃す悔しさばかりが募った。しばらくこのカメラを使っていたが、地元の大きな花火を撮影したとき、花火のタイミングを逃し、さらに撮れたカットも半分以上見切れていて「ちゃんとシャッターが切れるカメラとなんでも収められる広いレンズが欲しい」と痛切に感じた。そして手に入れたのがニコンのD800とAF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G EDである。私にとってAF-S

1. ニコン D800／AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED／17mm／マニュアル露出(F8、6秒)／ISO 100／WB：オート

京都大覚寺の広沢池は、美しい紅葉と心経宝塔、そして鏡のような湖面で有名だ。湖面に反射する美しい紅葉と宝塔。その場に行けば誰もが息をのむこの姿をどう写せばいいか池の前でしばし悩むことになる

2. ニコン D800／AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED／22mm／絞り優先AE(F8、5秒、+0.3EV)／ISO 100／WB：オート

京都の景色はその独特の美学が自然の中にさえにじみ出ている。毘沙門堂はその好例だ。天蓋のような紅葉と、赤い落葉の絨毯が見事な「構図」を作っている。あとはそのパースをどれだけ意識できるかが勝負だ

3. ニコン D810／AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED／14mm／絞り優先AE(F2.8、1/15秒、±0EV)／ISO 160／WB：オート

祇園祭の訪れとともに、京都に暑い夏がやってくる。京都特有の狭い道路に、山鉾がところせましと並べられている。電線をかいくぐって、まるで夜空へと飛び上がろうとしているかのように撮影した

別所隆弘（べっしょたかひろ）

1976年滋賀県生まれ。東京カメラ部10選2014。同志社大学文学研究科博士後期過程退学。現在は同志社大学等で教員を務める傍ら、風景写真を中心に展示や出版を行う。写真展に「東京カメラ部2015写真展 0.0045%の奇跡 〜2億人が選んだ10枚」など。
https://www.facebook.com/takk.bulkington.9

写真に奇跡の魔法をかけてくれるレンズ

NIKKOR 14-24mm f/2.8G EDというレンズとの出合いは必然だったといえる。広大な画角をカバーしつつ、細部に至るまで切れ味の鋭い大口径の広角レンズはこれしかないと私は思っていたのだ。

当時も今も評価の高いこのレンズに対して私が一番気に入っている部分は、常にフォトグラファーに思考をうながす点だ。超広角レンズは、その性質上、寄って撮ったときと引いて撮ったときの写真の見え方がほかのレンズ以上に劇的に変わる。パースの効果が強く、ほとんど魔法のように写真が変化する。寄れば被写体は歪みながら大きくなり、引けばその遠さは思ったよりずっと遠くなる。その「距離の魔法」は、考えなしにシャッターを切るとつまらない写真を大量に作り出すことになるが、ごくまれに神さまが微笑んでくれたときには、驚くような魔法を写真の中の風景に与えてくれる。思考の先に待っている「魔法」がかかる瞬間を求めて、私はこのレンズをいつも持ち歩いている。流行りの自撮りも、このレンズなら自分と友だちと背景のすべてを入れてくれるので重宝する。

滋賀と京都の境のあたりに住んでいる私にとって、このレンズを持っている意味合いはとても大きいものだ。特に京都の風景は、古人が考えた「パース」で構成された、いわば人工的な自然にあふれた世界だといえる。そのパースの効果を最大限に引き出すために、このレンズが必須になってくる。3枚の写真はそれぞれに見せたい被写体を、強調された距離の中に置くことでよりドラマチックな姿を見せてくれた。現実のようで現実とはちょっと違う魔法がかかった写真だと思っている。

ニコン

AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED

発売日 2007年11月　実勢価格 235,000円前後

レンズ構成：11群14枚　絞り羽根枚数：9枚（円形）　開放絞り：F2.8　最小絞り：F22
最短撮影距離：0.28m　フィルター径：取り付け不可　大きさ：約φ98×131.5mm　重さ：約970g

EOS 5D Mark Ⅲのリアルユーザーでもある石井さん。
写真家魚住誠一さん主宰の写真イベント
「ポートレート専科」に参加するなど、
ポートレートを撮影することも多いとか。
今月はポートレートレンズとして大人気の1本を試す。

Hiroko's favorite

キヤノン

EF50mm F1.8 STM

SPEC

- レンズ構成：5群6枚
- 絞り羽根枚数：7枚
- 開放絞り：F1.8
- 最小絞り：F22
- 最短撮影距離：0.35m
- フィルター径：φ49mm
- 大きさ：約φ69.2×39.3mm
- 重さ：約160g
- 実勢価格：15,600円前後

EOS 5D Mark Ⅲとの相性はバッチリ

大口径レンズはやっぱりフルサイズで撮影してこそ！ ということで、愛用のEOS 5D Mark Ⅲで撮影してきました。小型レンズだとフットワークが軽くなります

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF50mm F1.8 STM ／50mm ／マニュアル露出（F1.8、1/125秒）／ISO 1250／ WB：オート

大きなボケと50mmならではの距離感で、かわいらしい表情が引き立ちます

Point ❶

前モデルは1990年の発売

25年ぶりのリニューアル

EF50mm F1.8 STM

EF50mm F1.8 Ⅱ

実は私、先代モデルのEF50mm F1.8 Ⅱを愛用していました。明るい、コンパクト、リーズナブル……なのに描写がきれい。まさかの4拍子が揃った、EF神レンズのリニューアルはうれしいです！

Point ❷

7枚羽根と円形絞りを採用した

きれいな玉ボケ

絞り羽根は5枚から7枚になり、さらに円形絞りが採用されたことで、木漏れ日やイルミネーションなどの光の玉ボケがより滑らかな円形になりました。上品なきらめきは見ていて心地が良いですね

Point ❸

被写体に一歩踏み込む！

35cmの最短撮影距離

撮影距離の短縮により、お料理写真やテーブルフォトで本領を発揮！ カフェのテーブルに座ってちょうどお皿の上にピントが合うくらいの絶妙な距離で撮影でき、マクロレンズに近いエアリー感も味わえます

ワーキングディスタンスの差に前モデルのとの違いを実感

　私が初めて手にした単焦点レンズは、前モデルのEF50mm F1.8 Ⅱでした。自分の足で被写体へ近づくと被写体との距離感がダイレクトに表れて、写真の楽しさを教えてくれたレンズです。そんなレンズがリニューアルされたと聞いて、使える日を楽しみにしていました。

　早速、新旧の見た目の違いに注目してみました。マウント部分は金属素材になり、レンズの質感も私のカメラ、EOS 5D Mark Ⅲとよく馴染み、お上品な佇まい。重さは少々重くなったとのことですが、EOS 5D Mark Ⅲに装着すると、その差はさほど感じませんでした。

　50mmは使い慣れた画角だったので、いつもと違う景色を撮るべく、谷根千エリアでお散歩スナップに出かけました。この日は猛暑で、外を歩くだけで汗だく……何度も涼みにカフェへ入って、アイスコーヒーをオーダー。1枚撮ってみるかとカメラを構えたところ……え!? 後退せずしてピントが合う！

1

3

4

2

5

1
キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF50mm F1.8 STM ／50mm ／マニュアル露出(F2、1/250秒)／ISO 640／ WB：オート
白いカーテンのそばは、優しい光が差し込む絶好のポートレートスポット。ぐっと近づけば赤ちゃんでもレンズが気になってこちらを見つめてくれますよ

2
キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF50mm F1.8 STM ／50mm ／マニュアル露出(F4、1/320秒)／ISO 400／ WB：オート
おしゃれなカフェが集まる谷中はカメラ女子にもおすすめの散策エリア。外観に注目していると、偶然レトロなバスが通過! 昭和ムードを際立たせてくれました

3
キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF50mm F1.8 STM ／50mm ／マニュアル露出(F2、1/200秒)／ ISO 400／ WB：オート
35cmの最短撮影距離はテーブルフォトが快適。厳しい夏の日差しを、喫茶店の中から美しいきらめきに表現。ロケ中の休憩は心のリセットにも必要不可欠です

4
キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF50mm F1.8 STM ／50mm ／マニュアル露出(F5、1/250秒)／ ISO 200／ WB：オート
ガラスに自分を写り込ませて"チェックイン"した感じをお届け。お店の方に「撮ってもいいですか?」のひと声をかければ、落ち着いて撮影が楽しめます

5
キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF50mm F1.8 STM ／50mm ／マニュアル露出(F5、1/200秒)／ ISO 640／ WB：オート
雑貨屋さんのディスプレイを撮影。全部を見せるとごちゃついてしまうので、絞り値のボケで調整しました。ビー玉のキラキラと木のぬくもりが瞳に優しい印象です

従来モデルから約－10.2cmとなったワーキングディスタンスの変化を体感した瞬間でした。接近戦の撮影が大好きな私がよくぶち当たっていた、近づきたいのに近づけない……そんなジレンマとも、もうおさらばです！ 単焦点の明るい標準レンズといえば、背景ぼけぼけのポートレート。というイメージでしたが、室内でのテーブルフォトでもその威力は発揮できます。見た目も機能面でも、カメラ女子が首から下げるにぴったりなレンズ！ 仮に人物の撮影で35cmまで寄ると、モデルの呼吸を感じるほどドキドキする近さで、撮影者との関係性を表現するのにも最適です。独身の頃は友達やモデルを撮影することが多かった私ですが、これからは被写体に主人や娘もプラスして、このレンズで家族の姿を長い年月で綴っていきたいです。娘が反抗期に突入した頃が楽しみ♪(笑)

写したい被写体にこれでもかとかぶりつき、「どや！」とアピール。写真にインパクトを与えられるのはもちろん、浅い被写界深度を活かして背景をきれいにぼかせるので、どんな被写体もあなたの意のままに写し出してくれるレンズです。

石井寛子(いしいひろこ)：タレント。1984年生まれ。2009年から本格的にデジタル一眼レフをはじめる。アプリソムリエとしても活躍中。http://ameblo.jp/ishiihiroko/

N= 35° 69′ 13″
E=139° 62′ 55″
Alt=42.5m

✳

遠い光、

── 二万年前に夢見た東京 ──

Location 04

わずか60年前、阿佐ヶ谷住宅は広大な田園だった

善福寺池を源とする善福寺川は地図の上で杉並区を北西から南東へ斜めに、時々かなり大きく蛇行しながら横切っている。

1950年発行の地図を見れば、驚くことに川沿いのかなりの部分が田んぼだったことがわかる。それが70年代の地図ではその形跡はほとんど見当たらなくなり、細い川として描かれている。すでにこの頃までにコンクリートで固められたのだろう。高度成長期、東京の人口増加と共に急激に住宅地化が進んでいったからだ。それでも数箇所、明らかに田んぼの記号が残っているから逆に驚きもする。

阿佐ヶ谷住宅もその一角にある。テラスハウスと4階建程度の低層の集合住宅からなる住宅地で、かつてモダンな建築として有名だった。やがてテラスハウスがレトロという認識に変わり、やはり注目を集めた(現在、再開発のため取り壊し中)。50年発行の地図で阿佐ヶ谷住宅辺りを注意深く見れば、かなり大きな田園だったことがわかる。つまり、そっくり住宅地になったのだ。

桜の季節に私は川岸に立ち、そう大昔ではない時代に思いをはせた。でも、この辺りが田んぼだったことを想像するのはたやすいことではない。田植えや稲刈りをしている人の姿など、ここからはほど遠い。その頃の風景を知っている人などいるのだろうか。いや、よくよく考えてみれば60年ほど前のことなのだから、実際にこの辺りで田植えをしていたおじいさんがひょっこり現れても不思議ではない。

金属の壁がずっと続いている。内側がどうなっているかは見えないが、向こう側では巨大な穴が掘られている。深さは27m、直径60mのまん丸の穴。台風や集中豪雨で川が氾濫したとき､川の水を逃すためだ。35,000㎥の水が貯められるという。完成すると何ごともなかったようにフタがされて、元の野球場となるはずだ。

水は意思を持っている。遠い記憶を忘れることがない。かつて田んぼが広がっていた時代、台風のたびに田んぼは水浸しになってしまっただろう。それでも、そのことにより高台の家々は被害を免れたはずだ。いまは、その水が逃れる道を失った。だから、桜の花の下で、人知れず深い穴が掘られている。

小林紀晴

こばやしきせい：1968年長野県生まれ。東京工芸大学短期学部写真科卒業後、新聞社にカメラマンとして入社。1995年『ASIAN JAPANESE』でデビュー。1997年『DAYS ASIA』で日本写真協会新人賞受賞。『days new york』『SUWA』『父の感触』『十七歳』など著書多数。最新作に『メモワール 写真家・古屋誠一との二〇年』、写真集『KEMONOMICHIi』がある

Exhibition of Photography

OVERVIEW

写真展を振り返って

8×10で撮られた30年前のNYがデジタルプリントで今に蘇る

田中長徳 Chotoku Tanaka

たなか　ちょうとく：1947年東京都生まれ。日本大学芸術学部写真学科在学中の1969年、銀座ニコンサロンにて史上最年少(当時)で個展「TODAY TOKYO」を開催。日本デザインセンター勤務を経てフリーへ。1973年から7年間ウィーンに住み、日本人写真家の巡廻展「NEUE FOTOGRAFIE AUS JAPAN」に参加、欧州を巡廻。文化庁派遣芸術家としてMOMA(ニューヨーク近代美術館)にてアメリカの現代写真を研究した経歴を持つ。東京、ニューヨーク、ベルリンなどで個展を開催する傍らカメラ評論にも筆をふるい、『銘機礼賛』をはじめとする著書でライカブーム、クラシックカメラブームの火付け役となる。古今東西のカメラについてのコラムは、現在も多くの愛読者を得ている。http://chotoku.cocolog-nifty.com/

ISLAND GALLERY
2015年9月19日(土)〜2015年10月2日(金)
東京都中央区京橋1-5-5 B1

New York 1983／8×10

写真・文・HARUKI

　東京駅からほど近いギャラリー、地下への階段を下りていくと、そこには約30年前にニューヨークで撮影されたプリント作品が30点、等間隔で展示されている。軽妙洒脱(けいみょうしゃだつ)なエッセイなどでチョートクさんとして広く知られる人気写真家の田中長徳さんの8×10による作品だ。大学卒業と同時に広告制作会社で3年間勤務後にオーストリア・ウィーンで婦人とともに若き日を過ごした田中長徳さん。次に向かった先が文化庁の「派遣芸術家在外研修員」という長ったらしい名称の招聘(しょうへい)制度で約１年間滞在したアメリカのニューヨークだった。長徳さんは、ニューヨークという場所は現実には存在していなくて映画や小説世界の中だけのフィクションの街だと思い込んでいたと笑った。

　ニューヨーク滞在中の1年間で撮影した8×10フィルムはおよそ450カット。しかし帰国後、展覧会などの目的で貸し出したままになってしまうなどして、そのほとんどが行方不明となってしまったという。だが、その一部が2年前、カメラ雑誌のハトロ用紙に包まれたままで自宅の隅から出てきた。その数はわずか30カット。だが、ネガフィルムのコンディションは良く、当時のままの姿で残っていた。

　今回の展示は、この偶然にも残っていた30カットによる展示。すべてデジタルからのプリントで、デジタル化の作業はIsland Galleyのディレクター石島さんが担当した。シグマのdp3 Quattroで8×10ネガを複写して、SPPを使ってRAW現像(モノクロ化)、そこからさらにPhotoshopで調整を行った。プリントはCANSONのインクジェットペーパー（バライタ）に出力された。

　毎日のように大型カメラのディアドルフを担いでマンハッタンの街を歩き回った若き日の長徳さんの青春の日々が、そこには写し出されていた。

　大型カメラで撮影された写真というのは物理的機能性からして、そのほとんどが精緻さを追求した建築物や風景写真といった動きが少ない写真が多い中、1983年のチョートク・ニューヨークは画面に人物が写っていなくても僕の目には懐かしき時代に生きてきたニューヨーカーたちの上質なスナップショットのように感じられた。

from STAFF —— *An Editor's Postscript*

牧浦裕介 Yusuke Makiura

▶ 富士フイルム X-T1

周囲では空前の結婚ラッシュ。それも、関西の友人ばかりが結婚するので、9月から11月までまさかの3カ月連続で結婚式のため大阪に行くという予定に。 先日、 その1回目に行きました。RICOH THETAを持参して、面白い結婚式写真を撮れるように画策したのですが（その模様はP.166で）、結果的には友人夫妻にかなり気に入ってもらえて大満足。撮って、相手に喜んでもらうというのは、写真の楽しさの根源的なものの1つだとあらためて感じました。

上田大輔 Daisuke Ueda

▶ キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ

久々にF1日本GPに行きました。高校生のときにセナ、プロストで一大F1ブームがおき、僕はそれからF1に興味をもって見ていました。佐藤琢磨の大ファンで、2002年ごろから鈴鹿に通うことに。今までは見るだけでしたが、今回は撮ることもしました。現地でレースを見ているとぶっちゃけ途中で飽きますが、撮るのは全然飽きませんね。流し撮りは下手なので、成功するとすごく嬉しかったです。腕のなさを機材でカバーしたいので、来年は一脚+EOS 7D Mark Ⅱで挑戦したいです。

白石由佳 Yuka Shiroishi

▶ キヤノン EOS 6D

早起きと夜更かしは三文の徳。みんなが寝ているときに撮るからこそ、みんなが「いいね!」してくれる写真が撮れるのかもしれません。今月号の特集「早朝と深夜に撮る写真」はいかがでしたでしょうか。ドラマチックな時間は短く、貴重なチャンスは絶対にモノにしたいものです。そのためには、事前準備がなによりも大事。今月の特集がお役に立てたならうれしいです。現在、受け付け中の「早朝と深夜に撮る写真」フォトコンテストにもぜひご応募ください!

小谷輝之 Teruyuki Kotani

▶ ニコン AF-S NIKKOR 200-500mm f/5.6E ED VR

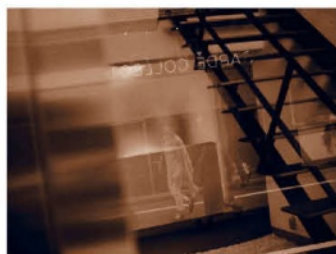
発売されたばかりのAF-S NIKKOR 200-500mm f/5.6E ED VRを携えて、めいっこの運動会撮影に出かけました。想像していたほど重たくはなく、D750に装着した感じも良好。これで500mmまで狙えるなら、文句なしに"買い"だろうと思いました。この新レンズを含めて、全44本のニッコールレンズを網羅したムック『ニコンNIKKOR レンズ FANBOOK』は、11月中旬に発売予定です。海外で撮影した美しい作例をぜひご堪能ください。

島村正人 Masato Shimamura

▶ パナソニック LUMIX GX8

久しぶりに昔いた会社の近くを歩きました。まだスマートフォンがなかった当時、お目当てのお店を探すのは雑誌で読んだ記事の記憶と、己のハートのみでした。映画やドラマにもよく出てきたお店や、路地も随分と変わっていました。あるドラマで有名な「東急渋谷一号踏切」も東横線の地下化によりただの路地になっていて、ちょっと寂しい気分です（涙）。今、思うとそのドラマもスマートフォンがある現在では違ったストーリーになるのでしょう。 今では約束の変更も突然に（笑）

武間俊樹 Toshiki Takema

▶ オリンパス OM-D E-M1

この間、写真部の活動で久々に先生を招いた講座を行いました。今回は佐々木啓太さんに教わる「映り込み」。以前本誌の特集で扱い、身近な場所で写真の楽しみ方が広がる良い内容だなと感じていて、やっと実現しました! アートフィルターはジェントルセピア。映り込みは要素がごちゃごちゃしやすいので、画面を整理しやすい中望遠レンズがオススメとのこと。レンズや設定は極力変えず、しばらく我慢して使っていると新しい発見があるそうです。

福島 晃 Akira Fukushima

▶ キヤノン EF11-24mm F4L USM

誌面でもお伝えしたようにF1のイベントをレポートするために鈴鹿サーキットへ向かった。F1を見るために鈴鹿に出かけるのは実に5年ぶり。片山右京がティレルで活躍していた1996年までは、友人と一緒に車で出かけたことを思い出す。今回のイベントを体験して、あの当時にEOS 7D Mark ⅡとEF100-400mm（2型）があったら、すごく楽しかったことだろうと懐古した。フィルムカメラで撮ったTyrrell 022はブレブレだったことだけが今でも僕の脳裏に焼き付いている。